島田池遺跡
鷭貫遺跡

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅷ

本文編（第1分冊）

平成9（1997）年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

島田池遺跡
鵜貫遺跡

一般国道9号安来道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅷ

本文編（第1分冊）

平成9（1997）年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道 9 号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、一般国道 9 号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても道路予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会のご協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成 5 ～ 7 年度に実施した遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のために広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成 9 年 3 月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所所長

大　石　龍太郎

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成４年度から、一般国道９号安来道路建設予定地内（西地区）に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このほど報告書第Ⅷ集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、東出雲町出雲郷に所在する島田池遺跡及び鷸貫遺跡での調査成果を取りまとめたものです。この調査では、出雲地方でも最大規模を誇る横穴墓群や、燈明石の付いた家形石棺等の大きな発見がありました。この地域は、古代出雲の中枢部である意宇平野の東端にあたり、この地域のみならず出雲地方全体の歴史を解明していくうえでも貴重な資料になるものと思われます。

おわりに、調査にあたりご協力いただきました建設省松江国道工事事務所、東出雲町教育委員会をはじめ関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成９年３月

島根県教育委員会教育長

清　原　茂　治

例　言

1、本書は、建設省中国地方建設局松江工事事務所の委託を受けて、島根県教育委員会が平成５～７年度にかけて実施した、一般国道９号安来道路建設予定地内（西地区）埋蔵文化財発掘調査のうち、島田池遺跡・鷂貫遺跡の調査報告書である。

2、平成４年度から着手した「安来道路 2-2 工区」（安来市荒島町～八束郡東出雲町出雲郷）を便宜上「安来道路西地区」と呼称している。

3、調査組織は次のとおりである。

［事務局］

平成５年度　広沢卓嗣（文化課課長）　勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）　山根成二（文化課課長補佐）　久家儀夫（同課長補佐）　工藤直樹（同企画調整係主事）　田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）　有田實（同嘱託）

平成６年度　広沢卓嗣（文化課長）　勝部昭（埋蔵文化財調査センター長）　野村純一（文化課課長補佐）　佐伯善治（同課長補佐）　工藤直樹（同企画調整係主事）

平成７年度　勝部昭（文化財課課長）　宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）　森山洋光（同課長補佐）　佐伯善治（同課長補佐）　渋谷昌宏（同企画調整係主事）

平成８年度　勝部昭（文化財課課長）　宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）　森山洋光（同課長補佐）　古崎蔵治（同課長補佐）　川原和人（同主幹・調査第２係長）　渋谷昌宏（同企画調整係主事）

［調査員］

平成５年度　宮沢明久（同主幹・調査第一係長）　原田敏照（同主事）　林嘉彦（同臨時職員）

平成６年度　宮沢明久（同主幹・調査第一係長）　原田敏照（同主事）　勝部智明（同主事）
藤原尚幸(同教諭兼主事)　生田司子（同臨時職員）　高尾明浩（研修員）

平成７年度　宮沢明久（同主幹・調査第一係長）　原田敏照（同主事）　中川寧（同主事）　安部清志（同教諭兼主事）　生田司子（同臨時職員）

平成８年度　原田敏照（同主事）　藤原尚幸（同教諭兼文化財保護主事）

なお、遺構・遺物の図化については、調査員の他に以下のものが行なった。

柳浦俊一（同文化財保護主事）　林健亮（同主事）　椿真治（同主事）　深田浩（同主事）　田中史生（同主事）　東森晋（同主事）　植田良司（同文化財保護主事）　梶田勝造（同主事）亀井彰子（同講師兼主事）　大塚充（同臨時職員）　田中強志（同臨時職員）　松近正巳（同臨時職員）　大西憲和（同臨時職員）沙魚川聡子（同臨時職員）　中岡宏樹（同臨時職員）　上河淳浩（同臨時職員）　松尾充明（京都大学学生）　森田直子（㈱ワールド航測コンサルタント）

［調査指導者］

池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）　田中義昭（島根大学法文学部教授）　渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）　井上晃孝（鳥取大学医学部助教授）　井上貴央（鳥取大学医学部

教授）　村上久和（大分県教育委員会）　菱田哲郎（京都府立大学文学部助教授）　和田晴吾（立命舘大学文学部教授）　徳岡隆夫（島根大学理学部教授）　大西郁夫（島根大学理学部教授）

［遺物整理］

菅井国江　高木由佳　荒川あかね　笠井文恵　堀江五十鈴　山本千草　田原まり子　小原里香　内海紀子　中島美穂子　玉木順子　松野美小恵　多久和登紀子　影山光子　瀬川恭子　佐々木順子　広田和子　陶山佳代　金森千恵子

4、発掘作業（発掘作業員雇用・測量発注・重機借り上げ・プレハブハウス借り上げ・発掘用具調達など）については、建設省中国地方建設局・社団法人中国建設弘済会・島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から㈳中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

［現場担当］　布村幹夫（現場事務所長）　木村昌義（技術員）　小川剛史（技術員）

［事務担当］　与倉明子　高木由佳　高崎益美　加藤道恵

［発掘作業員］　西谷節子　森本鶴吉　荒川清子　高麗玉子　植松カヅエ　玉川敏子　石倉徳郎　中村昇　吉野信子　北垣澄子　高麗寿子　佐藤弘子　引野美津恵　勝部京子　田中武子　福島初枝　石本早苗　石倉キクエ　安部美恵子　三島政子　掛田ヨシエ　引野キミヨ　小原本衛　福寄ヒロエ　森脇リエ子　小松憲吾　佐藤弘　須山武道　昌子昇　生馬文子　三澤キミ子　上田安子　懸田スエ子　石橋徳夫　近藤静代　加藤ヨシ子　石倉ハルミ　秦民枝　引野温　石原哲朗　小原美枝子　吾郷貞男　阿武忠治　石田宏　石倉義雄　前島春枝　野々内縫子　川崎清　石原隆代　小竹益子　小竹沙代子　田中助一　石原巽　三島幸　田川博之　安田正夫　井口清　井口トミ子　沼田幸夫　加藤八重子　加藤英夫　青山忠夫　稲田和子　石原範子　田原信　宇津実　永田孝一　野津利夫　田部茂　田部八重子　田渕春男　石倉春枝　坂根栄　吉儀傳

5、調査にあたっては、以下の方々から有益な助言を頂いた。記して、感謝の意を表したい。

山本清（島根大学名誉教授）　新納泉（岡山大学文学部助教授）　置田雅昭（天理大学文学部教授）　池上悟（立正大学文学部助教授）　村上隆（奈良国立文化財研究所）　小高幸男（君津郡市文化財センター）　田中良之（九州大学教授）　西原崇浩（君津郡市文化財センター）　宮代栄一（朝日新聞東京本社学芸部）　三宅博士（和鋼博物館）　寺村光晴（和光女子大学教授）　近野正幸（神奈川県埋蔵文化財センター）　松本昌久（長生郡市文化財センター）　白石太一郎（国立歴史民俗博物館教授）　大谷晃二（八雲立つ風土記の丘）　高木挙二（熊本県宇土市教育委員会）　稲田健一（茨城県ひたちなか市教育委員会）　西野保（茨城県常陸太田市教育委員会）　鴨志田篤二（茨城県ひたちなか市教育委員会）　村上勇（広島県立美術館）　梅木謙一（松山市生涯学習振興財団）

〈写真撮影〉牛島茂（奈良国立文化財研究所）

6、本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＢ－掘立柱建物跡　ＳＤ－溝状遺構　ＳＫ－土抗　ＳＸ－性格不明遺構　Ｐ－ピット

ＳＴ－テラス状遺構

7、挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を指す。

8、本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院のものを使用し、「調査区位置図」「トレンチ配置図」は、建設省松江工事事務所のものを浄書して使用した。

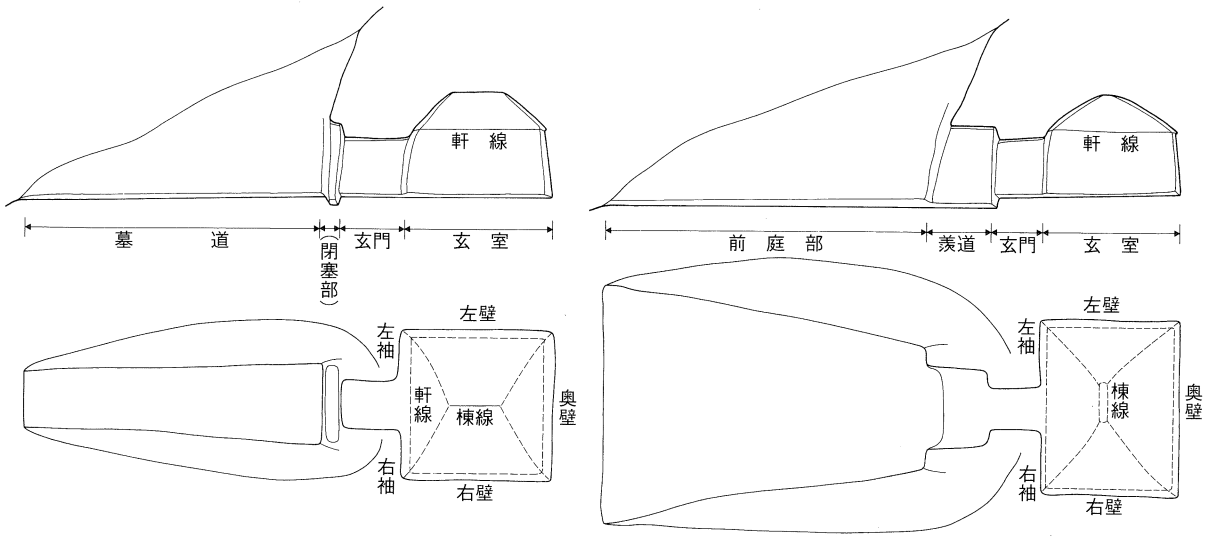
9、本書の挿図では、基本的に、縮尺を遺構1/60、遺物出土状況1/30、また遺物では須恵器1/3、(大形品は1/4、1/6)、鉄製品1/2、1/4、2/3、玉類と耳環を1/1に統一して載せた。

10、本書の作成は、調査及び遺物整理に携わったものが分担して作図・執筆し、集団討議を行なって編集した。執筆は原田、丹羽野裕（文化財保護主事）、中川、藤原が行い、分担は本文目次に示すとおりである。

11、本遺跡出土の人骨ほか自然科学分野からの分析・鑑定を次の方々にお願いした。
人骨の取り上げ及び鑑定　井上晃孝（鳥取大学医学部助教授）　井上貴央（鳥取大学医学部教授）
東出雲町鷂貫遺跡地層分析　中村唯史（島根大学地球資源環境学教室）

12、出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

13、本書では、検出した横穴墓の各部については第１図のようにしている。



第１図　横穴墓模式図と各部名称

本　文　目　次

本文編（第 1 分冊）

第１章　調査に至る経緯と経過……（藤原尚幸）……　1

第２章　位置と環境……（藤原尚幸）……　2

第３章　調査の概要……（原田敏照）……　6
　第１節　島田池遺跡……　6
　第２節　鷸貫遺跡……　11

第４章　島田池遺跡の調査
　第１節　１区の調査……（丹羽野裕）……　12
　第２節　２区の調査……（原田敏照）……108
　第３節　３、４区の調査……（原田敏照）……126
　第４節　５区の調査……（原田敏照）……242

本文編（第 2 分冊）

　第５節　６区の調査……（原田敏照）……　1
　第６節　７区の調査……（原田敏照）……135
　第７節　８区の調査……（中川　寧）……155
　第８節　調査の成果と課題……（原田敏照）……184

第５章　鷸貫遺跡の調査……（原田敏照）……234
　第１節　遺構と遺物……235
　第２節　調査の成果と課題……248

第６章自然科学分析
　第１節　島田池遺跡１、４調査区出土の人骨について……（井上晃孝）……252
　第２節　鷸貫遺跡の層序と古環境……（中村　唯）……275

第１章　調査に至る経緯と経過

昭和47年、建設省松江国道工事事務所から県教育委員会あてに国道9号線バイパス建設の基本資料作成のため、安来市吉佐町から松江市乃白町に至る30.3㎞区間における埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて県教育委員会では昭和47年と昭和48年にこの区間の分布調査を実施した。

その後、昭和61年になると安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9㎞区間が「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には、既に部分供用を行なっている「米子道路」と「松江道路」を接続する延長18.7㎞の高規格幹線道路（自動車専用道路）の「安来道路」に計画変更された。この変更に伴い昭和62年度と63年度に再度分布調査を実施し、中央部（１－２、２－１工区）では平成元年度から発掘調査を開始した、「西地区」（２－２工区）では平成4年度から八束郡東出雲町内において発掘調査を開始し、平成4年に鷸貫遺跡と島田池遺跡のトレンチ調査を行なった。平成5年度は安来市内で５遺跡、東出雲町内で５遺跡について発掘調査を実施した。

当初鷸貫遺跡の調査は、平成６年度の予定であったが安来市の担当の班は調査が予定より早く進んだため調査規模・期間などを検討した結果、繰り上げて実施されることになった。平成５年10月４日に耕作土の除去に着手し、12月８日に現場作業を終了をした。

また、島田池遺跡は、平成６年４月13日から翌平成７年１月23日、同４月12日から翌平成８年２月８日にかけて、２ヵ年にわたって発掘作業が行なわれた。

発　掘　調　査　工　程　表

遺跡名	作業内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
鷸貫遺跡	全面調査							―	―	―			
平成５年	整　　理							―	―	―	―	―	―
島田池遺跡	全面調査	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―		
平成６年	整　　理	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
島田池遺跡	全面調査	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	
平成７年	整　　理	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―
平成８年	整　　理	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―

第２章　位置と環境

一般国道９号安来道路建設予定地となっている八束郡東出雲町は、島根県の東部に位置し、西は松江市、東は安来市に接しており、近年、事業所の誘致等の産業育成や住宅地建設等の定住政策の成果により、人口の増加がめざましい。地形的には、南に京羅木山をはじめとする山々が連なり、北には中海が広がり、平地は中海に面した北側と南の山々から派生する尾根が形成するいくつかの谷に存在する。現在の湖岸線は、揖屋干拓地を除き、約6000～5000年前のいわゆる「縄文海進」の後、縄文晩期（約3000～2400年前）に湖岸線が海側に退いて形成されたものと考えられる。また、東出雲町の西端部には中海に注ぐ意宇川が流れ、その両側に広がる意宇平野は、今日出雲地方において有数な穀倉地帯である。意宇平野には、出雲国府・出雲国分寺などが置かれ、古代出雲の政治の中心地として栄えたところである。今回調査を実施した島田池遺跡は東出雲町の西部の標高30m前後の丘陵尾根上に位置している。同一丘陵の北端には、大木権現山古墳群、谷を挟んだ東側丘陵には寺床遺跡が存在している。鷸貫遺跡は島田池遺跡の西300mほどの水田中に立地している。いずれの遺跡とも意宇平野の東端に位置し、古代山陰道に推定されている地域周辺で、古くから交通の重要な役割を果たしてきた地域の遺跡である。

本年度調査遺跡の報告にあたり、以下、時代ごとに周辺の遺跡について述べておく。

〈縄文時代〉

縄文時代の遺跡としては、前期から晩期の土器が出雲郷の竹の花上遺跡から、晩期の土器が春日遺跡からと、数は多くはないが意宇川周辺で中海に面した地域から出土している。

〈弥生時代〉

この時代の遺跡としては、寺床遺跡、春日遺跡、古城山遺跡、阿太加夜神社境内遺跡、布田遺跡、夫敷遺跡が挙げることができる。寺床遺跡では、前・中期の竪穴住居跡が確認されている。布田遺跡は島根県下では稀な低地性集落であり、夫敷遺跡では水田跡が見つかっている。さらに現在の武内神社に所蔵されている伝竹矢出土細形銅剣は意宇平野内から発見されたものといわれ、水田技術や青銅器文化を受け入れた弥生集落の存在を思いおこさせる。

〈古墳時代〉

古墳時代に入るとこの地域は数多くの古墳が造営される。前期古墳としては、鏡などの豊富な副葬品をもち礫床構造で二段掘りの墓壙の中には割竹形木棺がおかれていた寺床１号墳、舶載の内行花文鏡が出土した古城山２号墳、中期には、箱式石棺が検出された大木権現２号墳、地山岩盤を船形に穿って造られた主体部をもつ大草岩舟古墳、意宇平野南部の丘陵には西百塚・東百塚古墳群といった大規模な群集墳が形成される。後期になると石棺式石室をもつ栗坪古墳群、家形石棺や陶棺を出土した渋山池古墳群、家形石棺と石床、形象埴輪が出土した島田１号墳、内部の天井が四注式家形を呈する内馬池横穴群、古城山横穴群、意宇平野南部では獅噛環頭大刀が出土した御崎山古墳、人物埴輪が出土した岩屋後古墳、整美な家形の形態を残す安部谷横穴群の存在が知られている。

また、古墳以外にも、玉作工房跡が発見された勝負遺跡、住居跡として原ノ前遺跡、渋山池遺跡、栗

坪遺跡、須恵器の窯跡として後谷遺跡が確認されている。

〈奈良～平安時代〉

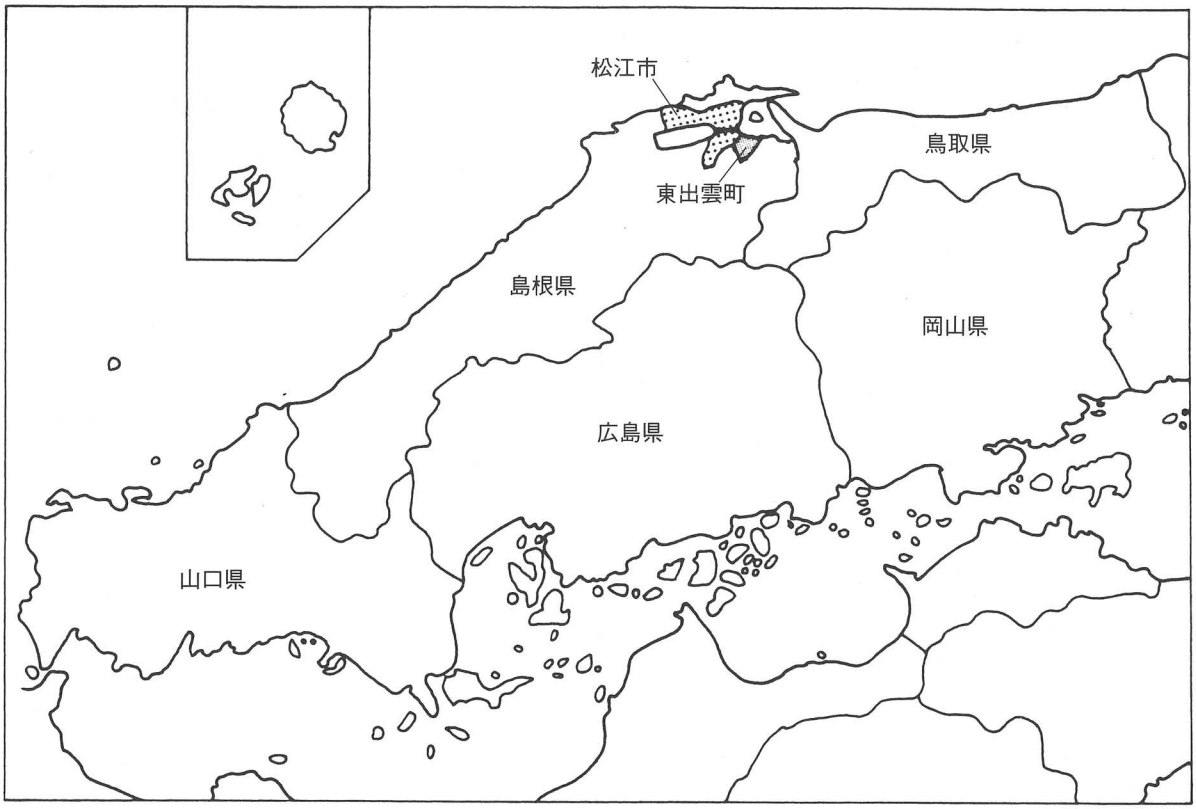
意宇平野の意宇川沿いには、現在でも古代に条里制が敷かれていたことを推定することができる。また、上述したように出雲国府、出雲国分寺などの跡が確認され、この地域は古代出雲の政治的中心地であった。近年の調査により、平安時代の住居跡が原ノ前遺跡、渋山池遺跡において確認された。

〈鎌倉～室町時代〉

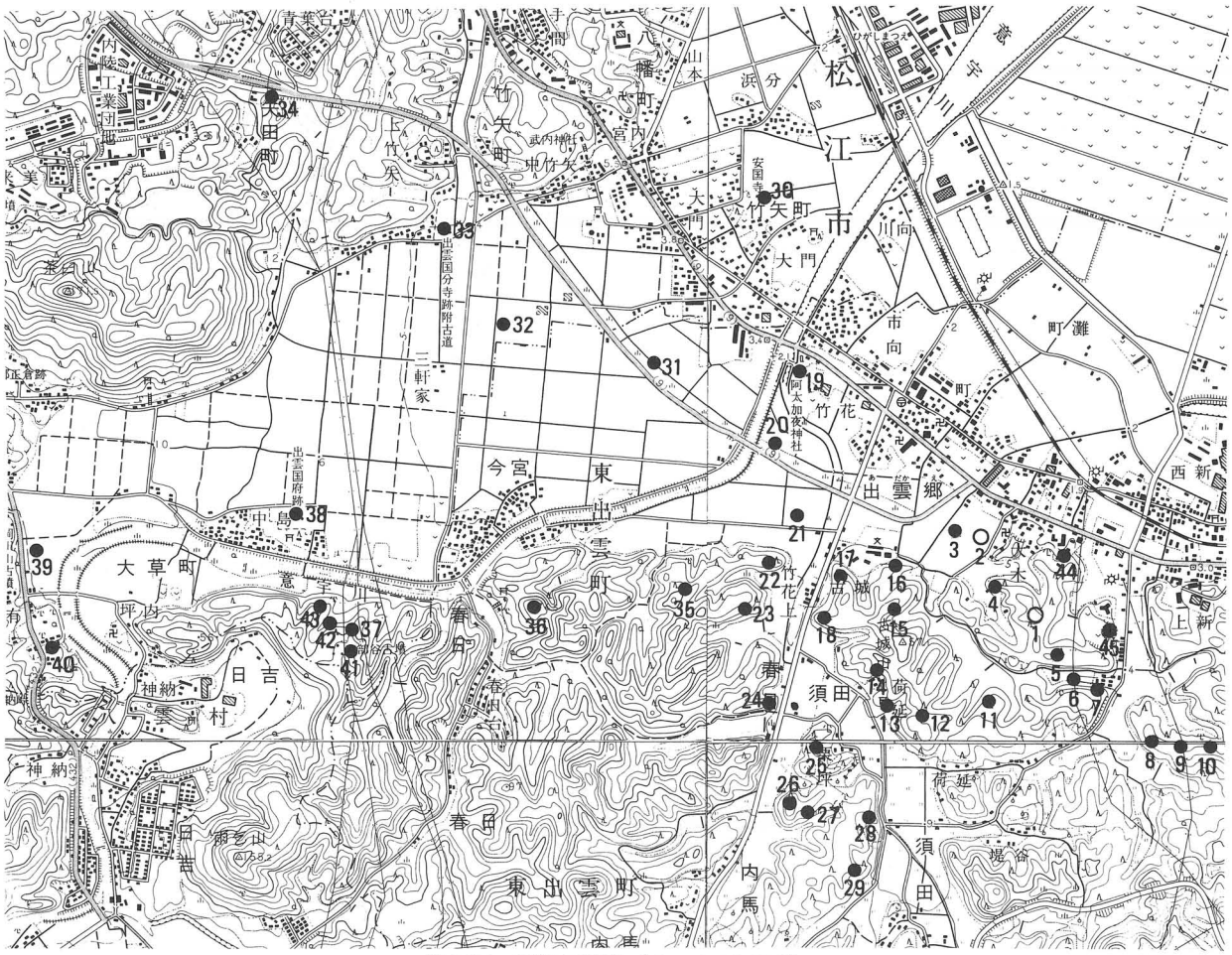
中世の山城としては、春日城跡、古城山城跡、京羅木山城跡、福良城跡が知られている。春日城は下河原氏の居城であったが、尼子氏との激しい攻防を繰り広げた末、落城したと記録されている。現在でも本丸・出丸・空堀が残っている。古城山城は砦として利用されていたと考えられ、当時の井戸や郭が残されている。京羅木山城跡からは、広瀬町の月山富田城を一望することができ、毛利氏が尼子氏を攻める際に重要な城であったと考えられる。福良城尼子氏の家臣である作間左衣衛門入道の居城であったが、この城も尼子氏と毛利氏との重要な攻防戦の地になっている。

参考文献

島根県教育委員会
『一般国道９号安来道路建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区Ⅰ』1993.3
同委員会
『一般国道９号（安来道路）建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1993.3
東出雲町教育委員会
『東出雲町の遺跡』1988.3
島根県教育委員会
『国道９号線バイパス建設予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ（夫敷遺跡）』1989.3



第 2 図　東出雲町・松江市の位置



第3図　周辺の遺跡（S＝1：3,000）

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種別	摘要
1	島田池遺跡	東出雲町揖屋	古墳、住居跡	古墳19基、横穴墓37穴、堀立柱建物跡７棟、燈明石付家形石棺、象嵌入り大刀、玉類、子持壺、須恵器、土師器など
2	鷭貫遺跡	東出雲町出雲郷	散布地	弥生土器、縄文土器、須恵器、土師器など
3	恵比須遺跡	東出雲町出雲郷	散布地	
4	岸尾遺跡	東出雲町出雲郷	散布地	須恵器片
5	島田遺跡	東出雲町揖屋	古墳	横穴墓、古墳、埴輪
6	長廻遺跡	東出雲町揖屋	散布地	
7	長廻古墳群	東出雲町揖屋	古墳	
8	渋山池古墳群	東出雲町揖屋	古墳	燈明石付家形石棺、胸棺、須恵器、土師器
9	渋山池遺跡	東出雲町揖屋	集落地	堀立柱建物跡、須恵器、土師器
10	原ノ前遺跡	東出雲町揖屋	集落地	須恵器
11	大畑遺跡	東出雲町揖屋	散布地	須恵器片
12	後谷窯跡	東出雲町揖屋	窯跡	
13	荷延古墳群	東出雲町須田	古墳群	須恵器
14	須田神社境内遺跡	東出雲町須田	住居跡	須恵器、土師器
15	古城山古墳群	東出雲町出雲郷	古墳群	古墳２基
16	古城山横穴群	東出雲町出雲郷	横穴群	６穴以上
17	古城山城跡	東出雲町出雲郷	城跡	山城
18	竹の花上遺跡	東出雲町出雲郷	散布地	縄文土器、弥生土器
19	阿太加夜神社境内遺跡	東出雲町出雲郷	集落跡	
20	意宇平野条里制遺構	東出雲町出雲郷	条里制跡制	
21	春日遺跡	東出雲町出雲郷	散布地	須恵器、土師器、陶磁器、石製品
22	鳥越古墳	東出雲町出雲郷	古墳	方墳
23	以下谷池岸岸遺跡	東出雲町出雲郷	散布地	土師器、須恵器
24	以下古墳	東出雲町出雲郷	古墳	方墳
25	栗坪遺跡	東出雲町須田	古墳	円墳、方墳、前方後円墳
26	城山城跡	東出雲町内馬	条跡	山城
27	内馬横穴群墓	東出雲町内馬	横穴	２穴、四注式家形、須恵器、子持壺片
28	栗坪井跡	東出雲町須田	住居跡	
29	戸田屋敷横穴群	東出雲町須田	横穴	四注式
30	安国寺古墓	松江市八幡町	古墳	伝京極高次宝篋印塔
31	夫敷遺跡	東出雲町出雲郷	水田跡	須恵器、土師器、木製品
32	布田遺跡	松江市竹矢町	集落跡	漆塗り土器、勾玉、土師器
33	出雲国分寺跡附古道	松江市竹矢町	寺院跡他	南門、中門、金堂、講堂、僧坊、瓦類、鉄製品
34	平所遺跡	松江市矢田町	住居跡	竪穴式住居跡、玉作工房跡、埴輪窯跡、埴輪（人、馬、鹿）
35	姫津古墳群	東出雲町出雲郷	古墳	円墳、方墳、前方後円墳
36	春日古墳群	東出雲町春日	城跡	山城
37	大草岩船古墳	松江市大草	古墳	舟形石棺、埴輪、須恵器
38	出雲国府跡	松江市大草	国府跡	須恵器、土師器、瓦、和鏡、銅印、木簡、墨書土器、条里跡
39	岩屋跡古墳	松江市大草	古墳	石棺式石室、人物埴輪、円筒埴輪、須恵器
40	御崎山古墳	松江市大草	古墳	前方後円墳、横穴式石室、横口式家形石棺、獅噛環頭大刀、須恵器
41	安部谷横穴群	松江市大草	横穴	８穴以上
42	東百塚古墳群	松江市大草	古墳	64基以上、円墳、方墳、鍬先、埴輪
43	西百塚古墳群	松江市大草	古墳	42基以上
44	大木権現山古墳群	東出雲町出雲郷	古墳	箱式石棺、三連櫛、須恵器、土師器
45	寺床遺跡	東出雲町揖屋	古墳、住居跡	斜縁二神二獣鏡、鉄剣、円筒埴輪、土師器、須恵器

第 3 章　調査の概要

第 1 節　島田池遺跡

（立　　地） 島田池遺跡は、八束郡東出雲町出雲郷字岸尾、揖屋字島田他に所在する。遺跡の立地は、現在の中海の海岸線から約2㎞程南へ入った標高約25～35mの丘陵に位置し、西側には意宇平野を、北側には中海を望み、眺望の良好な場所である。

（調査経過） 当遺跡は、1987年度～1988年度に実施した分布調査で確認され、1992年度及び1993年度のトレンチ調査の成果に基づき、1994年度から1995年度本格的な発掘調査を実施した。なお、1994年度の本調査の実施段階において、工事対称地の伐採を全面的に行い、それによって、古墳以外の遺構の存在する可能性が高まった。よって、それまで「島田池古墳群」と呼称していたものを「島田池遺跡」と遺跡の名称を改め、約 2 万㎡を調査対称面積とした。また、本調査に当たって遺跡を 8 つの調査区に分けて発掘をおこなった。

1994年度の調査は、4 月13日から開始した。まず、1 区の尾根及び斜面の調査とトレンチ調査を実施していない 2 、8 区の遺構の有無の確認をおこない、その結果、掘立柱建物跡による集落跡の存在を確認した。その後、調査を行う中で、遺跡内に存在する横穴墓が予想以上の大規模なものである可能性が出てきたため、全調査区内の丘陵斜面について重機による表土掘削を実施し、横穴墓総数の確認を行った。その結果、大部分が未盗掘で遺存状況の良好な横穴墓を34穴確認した。この時点で、調査期間を 1 年としていたものを 2 年に延長し、当年度は、4 区（横穴墓他）、5 区（古墳群）、7 区（古墳群）の調査を行うことにし、1995年の 1 月23日に発掘調査を終了した。

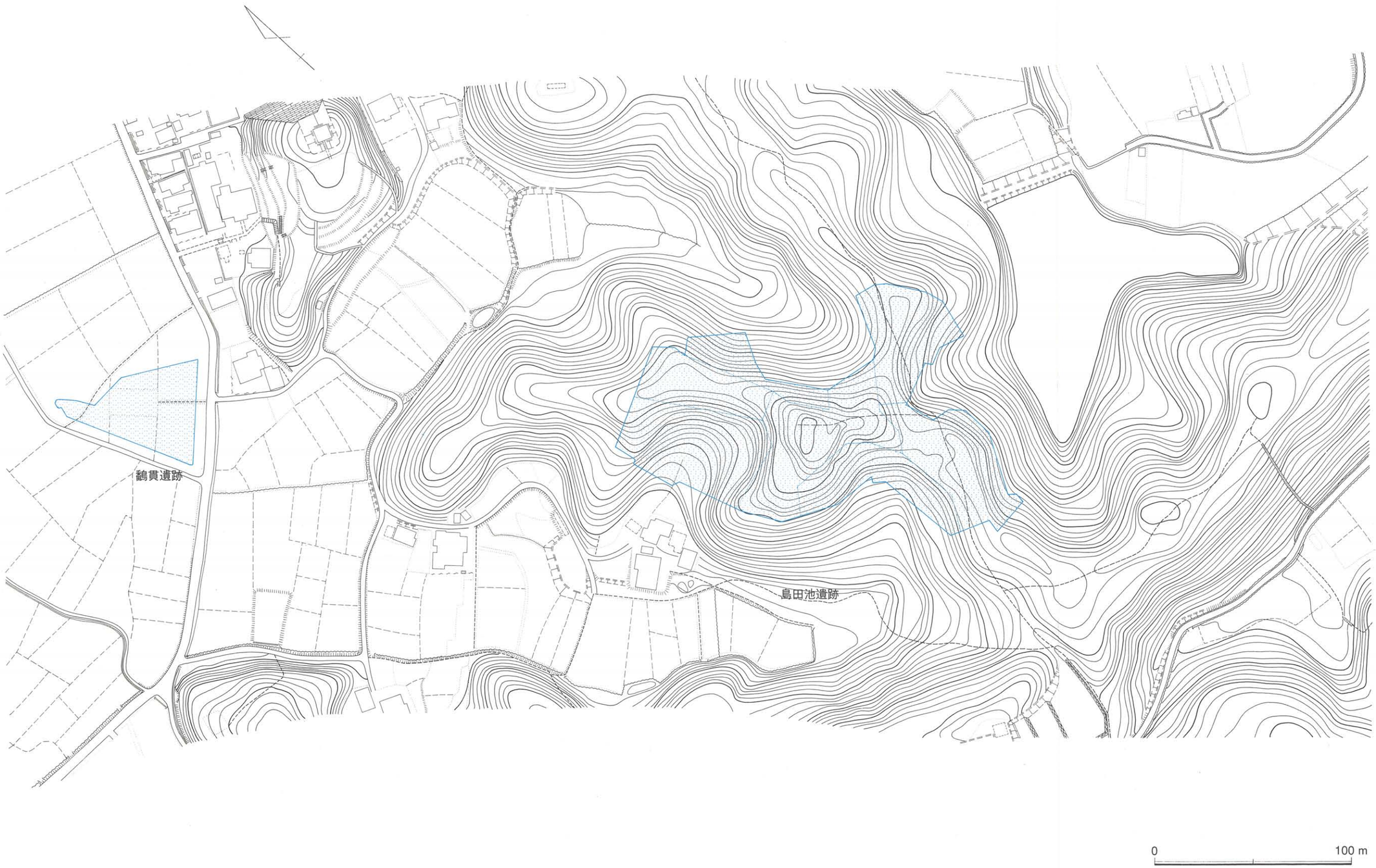
1995年度の調査は、4 月12日から調査を開始した。当年度は、2 区（集落跡）、6 区（横穴墓）、8 区（集落跡）を調査し、また、1 区、5 区の古墳の墳丘盛土の立ち割り等をおこなった。なお、3 区については、横穴墓の存在を推定していたが、重機による表土掘削の結果、遺構の存在が確認されなかった。調査は、6 区で横穴墓の土層の剥ぎ取り等を行い、翌年の 2 月 8 日に終了した。

また、本調査時においては、年度ごとに数度の調査指導を受け、また、多数の方々に現地で有益な指導、助言を受けた。

（検出遺構） 調査は便宜上、8 つの調査区に分けて行い、それぞれ 1 区～ 8 区と呼んだ。以下、調査区内で検出した遺構、出土遺物について概略を述べる。

1 区－調査区東端の標高25m程の尾根とその南側斜面に相当する。基本的に、表土から人力により掘削し遺構検出をおこなった。横穴墓、古墳（後背墳丘）、古道を検出し、古墳時代中期から中世頃までの遺構を確認している。特に横穴墓群は、遺跡内で最も有力な被葬者が埋葬されていた支群であった。1 号横穴墓では、県内で 4 例目となる灯明石付家形石棺と多量の須恵器を検出した。2 号横穴墓では、水晶製の三輪玉付大刀、象嵌円頭大刀が出土し、上方尾根部には、前方後方形の後背墳丘の存在を確認した。

2 区－東面する谷部のやや緩斜面の標高16～20m付近に相当する。奈良時代後半頃の加工段等及び須恵器、土師器を検出している。



第４図　島田池遺跡・鶴貫遺跡周辺地形図（Ｓ＝１：2,000）

3 区ー南側に延びる標高22m以下の丘陵斜面に相当し、22.5m以上を 4 区としている。横穴墓の存在を推定していたが、重機による表土除去後、地山を検出した時点で、遺構、遺物は見つからなかった。

4 区ー南側に延びる丘陵の尾根と西面する斜面に相当し、斜面の下方部分については、3 区として別の調査区とした。遺構は、横穴墓、古墳（後背墳丘）、古墓、古道を検出した。横穴墓は、殆どのものが 6 世紀後半に築造したものであった。

5 区ー遺跡の中央部の標高35m程の尾根と北西斜面の上方に相当する。古墳（後背墳丘）、横穴墓、掘立柱建物跡を検出した。古墳は、殆どのものが下方斜面（6 区）の横穴墓を主体部とするもので、周溝からは、多数の須恵器甕片が出土し、墳丘は前方後方形、方形を呈している。また、掘立柱建物跡は、平安時代後半と考えられ、その立地と遺構から特殊な性格をもつものであると考えられ、さらに、須恵器と八稜鏡を埋納した土壙を検出している。

6 区ー標高30m付近の南西に面した斜面に相当し、横穴墓等を検出している。横穴墓は、14穴確認し、基本的に 3 穴程で小支群を成すものであり、それぞれ世代墓的に連続するものであった。

7 区ー北西に延びる標高27～30mの尾根上に相当し、古墳時代中期と考えられる古墳群を検出した。ほとんどの古墳主体部では、遺物の副葬は認められなかったが、1 号墳からは鉄鏃が出土している。

8 区ー西面する谷の標高12m付近の緩斜面に相当し、加工段及び掘立柱建物跡等を検出している。遺構から奈良時代後半の集落の存在が明らかになったが、出土遺物に鉄鉢形須恵器、円面硯、灯明皿が認められることから特殊な性格をもつ建物の存在する可能性が指摘されている。

（調査方法） 以上述べてきたような過程を経て、多数の遺構、遺物を検出したが、ここでは、その遺構の調査方法、特に横穴墓に関して述べたい。

横穴墓は、築造途中のものを含めると総数37穴検出している。それらは、1 区、5 区で検出したもの以外は、重機によって表土掘削をおこない検出している。

検出後の前庭部埋土の調査では、基本的に縦断、横断のベルトを残し、土層観察を行ないながら掘り下げた。また、調査当初で検出した 1 区の横穴墓において、前庭部埋土から多数の遺物が出土し、さらに、それらは基本的に一定の層位面から出土していることが判明した。よって、出土遺物については、その平面的及び立面的な位置を記録しながら取り上げた。なお、遺物の中で、完形品がまとまって同一面から出土したものについては、その出土状態を図化してから取り上げることとした。その結果、前庭部埋土の黒色土からは、須恵器甕類が出土し、それ以下の層位からは、蓋坏等の甕以外の器種が出土していることが確認された。

前庭部埋土の調査終了後には、新たに主軸を設定し直し、閉塞石、玄室内の調査をおこない、完掘後には、遺構の図化を行なった。なお、遺構の図化で、立面図については、左右がほぼ同一なものに関しては、遺存状態が良好な面を一面だけ図化ている。

以上の調査によって、前庭部埋土の観察及び遺物の出土状況から、埋葬（追葬）面について凡その推測が可能な情報を得た。そして、今回の報告に当たり、土層図及び遺物出土状況について写真等から再確認を行ない、埋葬面についての解釈は、以下のように考えた。

埋土では、暗褐色系の土で軟らかい層がいくつか存在する。それらを 1 回埋葬に伴う墓道（前庭部）の埋め戻し土の最上層付近と考え、次の埋葬までの地表面に相当し、腐食（風化）している状況のも

島田池遺跡遺構一覧表

区	遺構名	時　期	備　　考
1	1号墳	5世紀後半	
	2号墳	6世紀後半	後背墳丘(1-2)
	3号墳	6世紀後半	後背墳丘(1-2)
	調査以外	不明	
	1号横穴墓	7世紀前半	燈明石付家形石棺
	2号横穴墓	6世紀後半	三輪王、象嵌大刀、大刀
	3-A号横穴墓	7世紀前半	子持壺
	3-B号横穴墓	7世紀前半	須恵器床
	3-C号横穴墓	7世紀前半	大刀
	SX03	6世紀後半	
	SX04	6世紀後半	
	古道	6世紀後半	4区の方向にかけて5基
2	SK01	縄文時代	落し穴
	SK02	8世紀後半～9世紀	
	SK03	8世紀後半～9世紀	
	SK04	8世紀後半～9世紀	
	SK05	8世紀後半～9世紀	
	SB01	8世紀後半～9世紀	
	SB02	8世紀後半～9世紀	
	SB03	8世紀後半～9世紀	
	SB04	8世紀後半～9世紀	
	SB05	8世紀後半～9世紀	
4	1号墳	6世紀後半	後背墳丘(4-9)
	2号墳	6世紀代	後背墳丘(4-11か12)
	3号墳	6世紀代	後背墳丘(4-15)
	4号墳	6世紀後半	後背墳丘(4-16か12)
	ST01	6世紀後半	1号墳テラス？
	4号横穴墓	6世紀後半	線刻壁画
	5号横穴墓	7世紀前半	
	6号横穴墓	6世紀後半	大刀
	7号横穴墓	6世機後半	
	8号横穴墓	6世紀後半	
	9号横穴墓	6世紀後半	
	10号横穴墓	6世紀後半	
	11号横穴墓	6世紀後半	
	12号横穴墓	6世紀後半	

区	遺構名	時　期	備　　考
4	13号横穴墓	不明	
	14号横穴墓	6世紀後半	
	15号横穴墓	6世紀後半	
	16号横穴墓	6世紀後半	大刀
	17号横穴墓	6世紀後半	大刀
	SK01	不明	
	SK02	16世紀代	火葬墓
	SK03	16世紀代	土葬墓
5	1号墳	不明	
	2号墳	6世紀後半	後背墳丘(6-7)
	3号墳	5世紀代	後世に後背墳丘で改変か
	4号墳	7世紀前半	後背墳丘(6-5)
	5号墳	7世紀前半	後背墳丘(6-12)
	6号墳	7世紀前半	後背墳丘(6-8)
	7号墳	6世紀後半	後背墳丘(6-6)
	8号墳	不明	溝のみ検出
	9号墳	不明	後背墳丘(5-1)
	10号墳	6世紀後半?	箱式石棺
	1号横穴墓	6世紀後半	大刀
	2号横穴墓	6世紀後半	ガラス小玉
	3号横穴	不明	製造途中
	4号横穴	不明	
	5号横穴	不明	製造途中
	SB01	12世紀～13世紀	
	SK01	不明	
	SK02	12世紀代	八稜鏡
	SK03	12世紀～13世紀	
	SK04	不明	
	SK05	不明	
	SK06	不明	
	SK07	不明	
	SK08	不明	
	SK09	不明	
	SK10	6世紀後半	
	SX01	不明	
6	1号横穴墓	6世紀後半	

区	遺構名	時　期	備　　考
6	2号横穴墓	7世紀前半	
	3号横穴墓	不明	
	4号横穴墓	7世紀前半	削り出し屍床
	5号横穴墓	7世紀前半	削り出し屍床、大刀
	6号横穴墓	6世紀後半	
	7号横穴墓	6世紀後半	大刀
	8号横穴墓	6世紀後半	
	9号横穴墓	7世紀前半	石床
	10号横穴墓	6世紀後半	大刀、玉類
	11号横穴墓	7世紀前半	
	12号横穴墓	6世紀後半	
	13号横穴墓	6世紀後半	
	14号横穴墓	6世紀後半	大刀
	15号横穴	不明	
	ST01	不明	打製石斧
	SD01	不明	古墳溝
	SD02	不明	古墳溝
	SD03	不明	古墳溝
	SD04	不明	古墳溝
	SD05	不明	古墳溝
7	1号墳	5世紀代	鉄鏃
	2号墳	5世紀代	
	3号墳	5世紀代	
	4号墳	5世紀代	
	5号墳	5世紀代	
8	SB01	8世紀後半～9世紀	
	SB02	8世紀後半～9世紀	
	SB03	8世紀後半～9世紀	
	SK01	弥生中期後葉	土壙墓
	SK02	8世紀後半～9世紀	鉄滓
	SD01	8世紀後半～9世紀	SB03にともなう
	SX01	8世紀後半～9世紀	円面硯
	段状遺構1	弥生中期後葉	
	段状遺構2	8世紀～9世紀	
	段状遺構3	8世紀～9世紀	
	段状遺構4	8世紀～9世紀	

のと解釈した。そして、その上面及びそれを削り込むラインを埋葬（追葬）面と考えた。なお、遺物の出土層位面についても、土層から想定する埋葬面と一致するものが多かった。また、腐食土層が認められない層位面でも遺物が出土している。これについては、腐食土が完全に埋葬時の掘削によって除去された可能性も考えられることから、とりあえず埋葬面として解釈している。

さて、現地調査で出土した遺物の整理で、特に多数出土した須恵器甕の接合については、横穴墓間で接合する例が近年報告されていることから、支群（調査区）ごとに試みた。その結果、その接合関係は多数の横穴墓で認められた。また、距離的に離れた横穴墓間でも接合する事実が確認でき、接合関係については、全横穴墓間を対称として行なう必要となったが、時間的な理由で不十分な調査で終わっている。なお、その成果については、第 8 章にまとめて報告している。

出土した甕以外の須恵器、土師器、金属器、玉類等については、その固体数を把握した後、図化可能なものは全て図化し掲載する方針としたが、一部事情により掲載しなかったものが存在している。また、横穴墓以外の遺構出土遺物についても個体数を把握し、可能な限り図化し掲載している。

なお、横穴墓出土の須恵器について本報告では、大谷晃二による分類編年案を使用している。（大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」1994 年 『島根考古学会誌』第 11 集）

第 2 節　鷸貫遺跡

（立　　地） 鷸貫遺跡は、八束郡東出雲町出雲郷深田に所在する。遺跡の立地は、現在の中海の海岸線から約 2　程陸地にはいった標高 2 m の水田に位置し、意宇平野の東端にあたる。

（調査経過） 遺跡は、1987年度～1988年度に実施した分布調査で確認され、1992年度のトレンチ調査の成果に基づき、1993年度に本格的な発掘調査を実施した。調査は水田部の 3 千㎡を対称とし、期間は10月 4 日に水田耕作土の除去から着手し、12月 8 日に現地での調査を終了した。

（調査方法） 調査は、トレンチ調査で確認した黄褐色砂層上面の耕作土については、重機によって除去し、また周縁部には排水用の溝を掘削してから精査をおこなった。また、10m ごとのメッシュを組み、精査は、それを基に設定した調査区ごとに実施した。その結果、黄褐色砂層の後背にできた湿地を確認し、またその下層には、青灰色を呈す砂層を検出した。この砂層の性格については、島根大学理学部の徳岡隆夫、大西郁夫氏の両氏に指導を受けた。

遺物の取り上げは、後背湿地出土の木製品は、その出土状態を図化した後におこない、その他の遺物は層位でおこなった。また、遺跡の北側で検出した自然河道出土のものは、その出土位置を記録した後に取り上げをおこなった。

（検出遺構・遺物） 検出した遺構は、少数で弥生時代前期の土壙 2 基だけであるが、自然流路と遺跡内の堆積層から、古環境について重要なデータを得ることができた。また、出土遺物は、主として縄文時代後期～晩期の土器、弥生時代中期の土器の外に、玉作関連遺物、木製品、陶磁器が見られた。全体として弥生時代後期～平安時代にかけての遺物は、ほとんど出土しなかった。

第４章　島田池遺跡の調査

第１節　１区の調査

概　　要　本調査区は、遺跡の存在する丘陵部が北側に向かって延びる部分に相当し、調査は尾根部分と南面する斜面ついておこなった。また、遺跡の中で、最初に調査をおこなった区である。また、遺構の一部は、92年度のトレンチ調査及び調査前の地形測量等で想定されるものであった。調査は、遺構の有無について未確認の部分である西側の平坦面と斜面にトレンチを入れることから始まり、斜面では遺構の無いことを確認した後に、１号墳の調査からおこなった。

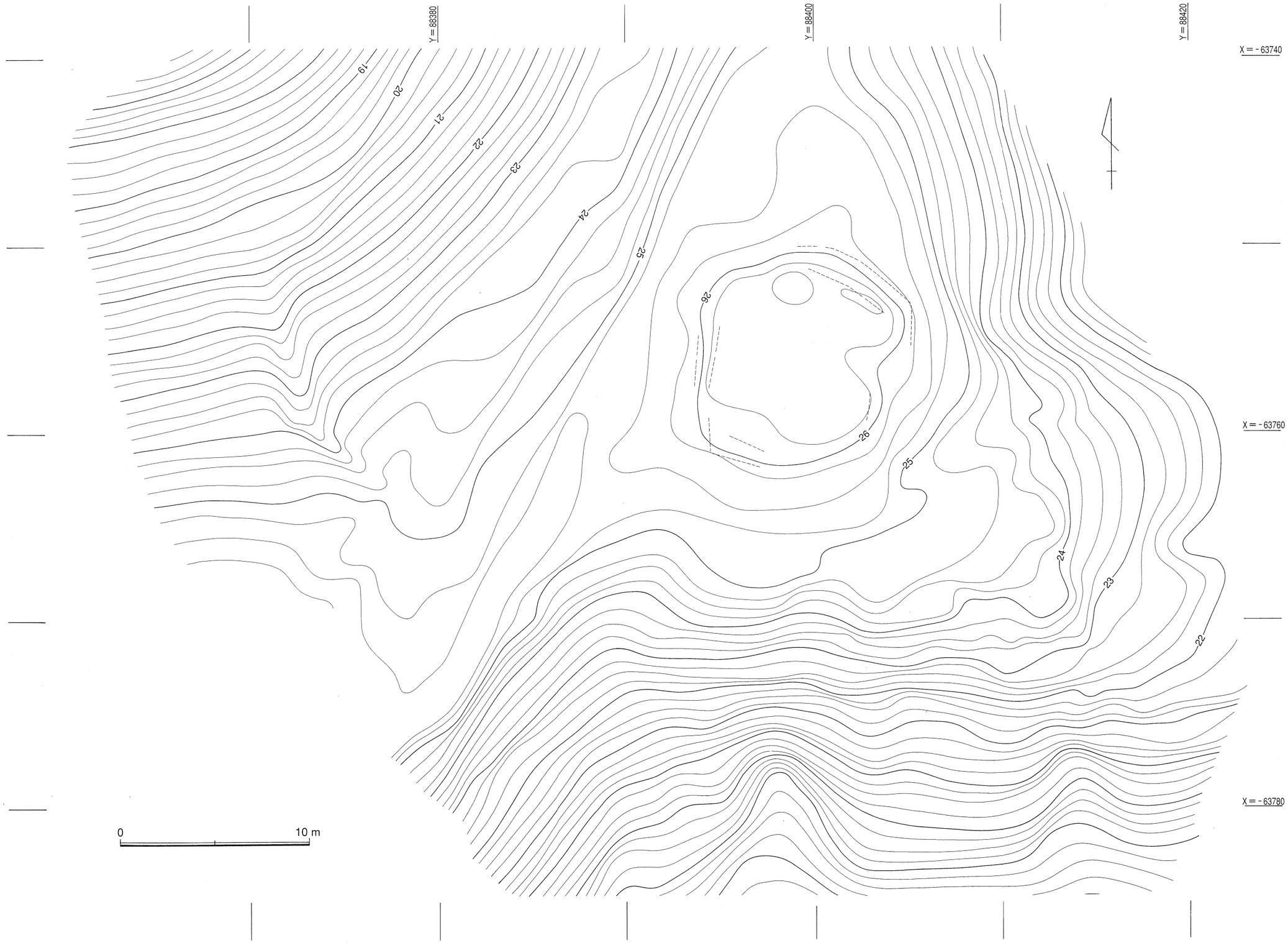
１号墳は、主軸に沿った東西、南北の２方向のベルトを十字に設定した後、さらに下方斜面に存在している可能性が高い横穴墓との関係を確認するために、南北方向のベルトをもう１本追加しておこなった。調査開始後まもなくで表土下で地山を確認し、また、南側で溝を検出した。当初この溝については、１号墳に伴うものと考えていたが、後に２号墳に伴うことが判明した。１号墳の調査が進む中で、東側斜面の調査区の端において、横穴墓の前庭部の一部を検出した。これは、調査区外にも広がるものであり、調査範囲の変更の必要も考えられたが、工事による掘削に直接関わらない地点であることから、一部の調査で中止し、埋め戻している。

１号墳の調査と並行して、斜面についても調査を開始した。斜面の調査は、トレンチで確認した横穴墓（２号横穴墓）の主軸と考えられる場所にベルトを設定し、また、東西にも地表面が落ち込んだ部分が認められることから、それぞれ１本ずつ合計２本のベルトを設定し、人力により表土の除去からおこなった。こうして、横穴墓３基の存在が明らかになったが、この地山検出段階で、後の２号墳に伴う墳丘盛土の斜面側の大部分を除去していたことが判明した。盛土下の旧表土部分を２号横穴墓の墓道に堆積した黒色土とを誤認した結果であるが、貴重な情報を失うこととなった。また、３号横穴墓上方で須恵器甕片が多数出土するテラス状遺構を検出し、ＳＸ０３と呼称していたが、後に２号墳の墳裾として加工された可能性が高いものと考えた。

斜面部分で遺構の検出をおこなう中で、２号墳の存在が明らかになり、その周溝の形態等から前方後方形を呈す墳丘を持つ可能性が考えられるようになった。そこで、新たに主軸を設定し墳丘の検出をおこない、墳丘盛土の調査については、次年度の95年度に行なうこととした。また、横穴墓についても１号横穴墓は、工事対称の境界付近であることから、掘削が及ばない範囲で工事が実施されることを確認し、95年度調査終了後に土嚢により全体を埋め戻した。

西側の平坦部については、調査開始時に南北に走る溝状遺構を検出していたことから、それに直交する東西方向のベルトを任意に設定して調査した。その結果、長期間にわたり使用された古道を検出した。

以上に述べたような調査方法で、試行錯誤を繰返しながら調査を行ない検出した遺構について、詳細を順をおって説明したい。



第５図　島田池遺跡１区調査前測量図（Ｓ＝１：200）

(1)古　墳

[1 号墳]

1 号墳の位置と調査前の状況（第 4 図、5 図）　島田池遺跡の中で最高所にあたる 5 区の尾根頂上部（標高35m強）から北に向かって尾根が伸びている。この尾根からさらに東（島田池方向）方向に尾根が派生する基点にあたる部分の頂上部に 1 号墳は存在する。標高は約26mで、西側から入ってくる谷の谷頭付近にあたるうえ、北側の平野方向の眺望もよく利く格好の立地条件といえる。

この部分は、2 本の尾根が交差する地点にあたることから頂上部に比較的広い平坦面が広がり、その中央に11m×12m、高さ 1 m前後の方墳状の高まりが調査前から確認されていた。その周囲には平坦面が広がっており、古墳による造成がかなり為されたと推測されたが、西側には後世の道が通じておりその撹乱も予想された。

墳　　丘（第 6 図、7 図）　調査の結果、墳丘はその西側を後世の道により、南側から東側にかけてを 1 号墳の後に築成された 2 号墳の周溝により裾部分をかなり削り取られていた。よって墳丘裾の原形を止めるのは北側と南西隅の一部のみで、その形や規模の詳細を知ることは出来なかった。ただ残存している北側裾部分のラインが湾曲していることや、南西隅部分が角を為していないことから、円墳であったものと考えられる。規模は残存部分では直接計測は出来ないが、径11～12m前後であったと推測される。

高さは現況で 1 m弱、現在残存している裾部分は地山を削りだして形成しており、北側には浅いながらも幅 2 m前後の周溝状のくぼみが検出されている。周溝は現状で深さ10～20㎝で、底には10㎝前後の厚さで暗褐色土が堆積し、その上には黒色土が堆積していた。墳丘に盛土は全く認められなかった。墳頂部は 8 ～ 9 mと全体の規模に比して非常に広い平坦面を為しており、これは墳頂部が大きく削平を受けた結果と推測している。

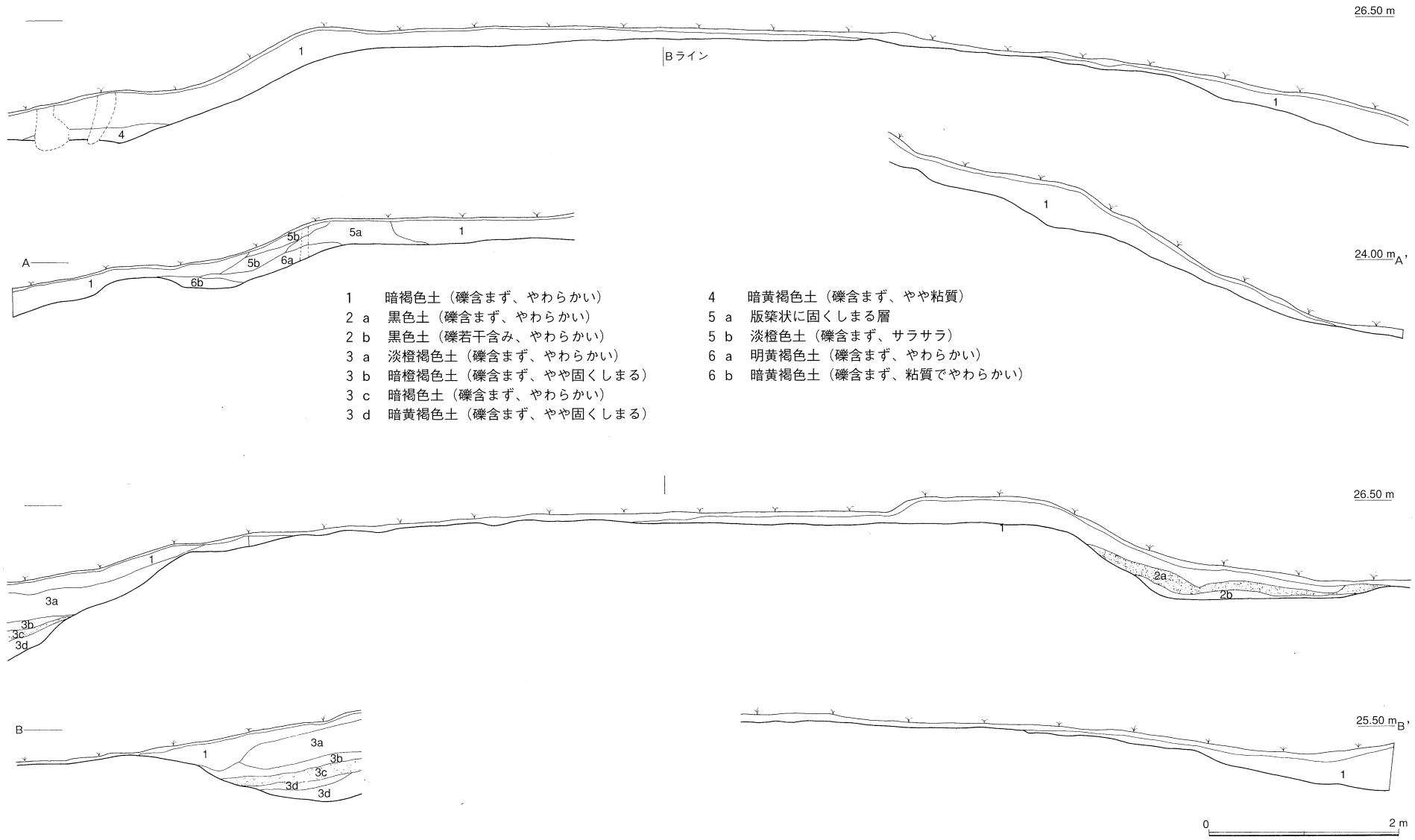
主 体 部　墳頂部に主体部は検出することが出来なかったが、これも削平を受けた結果であろう。この墳頂部の削平の原因については、調査では明らかにすることは出来なかった。

墳丘遺物出土状況（第 8 図）　墳丘北側の周溝内より、須恵器、土師器が出土した。周溝残存部の西側（尾根の最高レベル付近）からは須恵器有蓋高坏が、東端付近からは須恵器有蓋高坏の蓋が出土、さらにその蓋の西側からは土師器の坏 7 点が集中して伏せた状態で出土した。これらの遺物は全て周溝の底からやや浮いた状態で出土しており、2b 層暗褐色土（第 6 図）のほぼ上面に置かれていたものと考えられる。

遺　　物（第 9 図）　須恵器 2 点、土師器 7 点が出土している。1 は須恵器有蓋高坏の蓋である。口縁部内面には段が見られ、天井と口縁部の境も明瞭に作り出している。2 は須恵器有蓋高坏である。坏部は失われているが、短い脚部外面には単位が粗なカキメを施し、3 方向に方形のスカシを設けている。この 2 点がセットになるかどうかは不明だが、やや蓋の方が径が大きい感があり、セットとはならない可能性が高いと考えられる。

土師器はいずれも底が丸く、浅いボール状を呈す坏である。いずれも器壁の風化が著しく、丹彩の有無等は不明である。

古墳の時期　遺物の時期は、須恵器が大谷編年出雲 1 期でも比較的新しい時期、陶邑編年でいうＴＫ47に併行する時期と考えられる。この須恵器は 1 号墳に伴うものと考えられるので、この古墳の時期

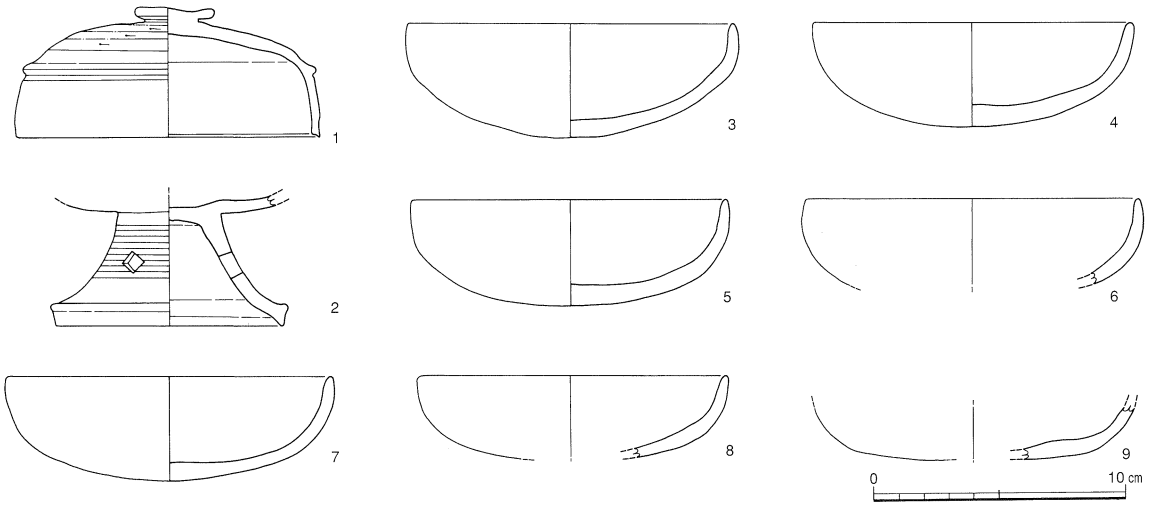


第６図　１区１号墳土層図（Ｓ =1：60）

第７図　１区調査後測量図－２号墳墳丘検出時－（Ｓ＝１：200）

はおよそ 5 世紀末頃と考えて大過ないものと考えられる。

第8図　1区1号墳遺物出土状況（S＝1：100、1：15）



第９図　１区１号墳出土土器実測図（Ｓ＝１：３）

［２号墳］

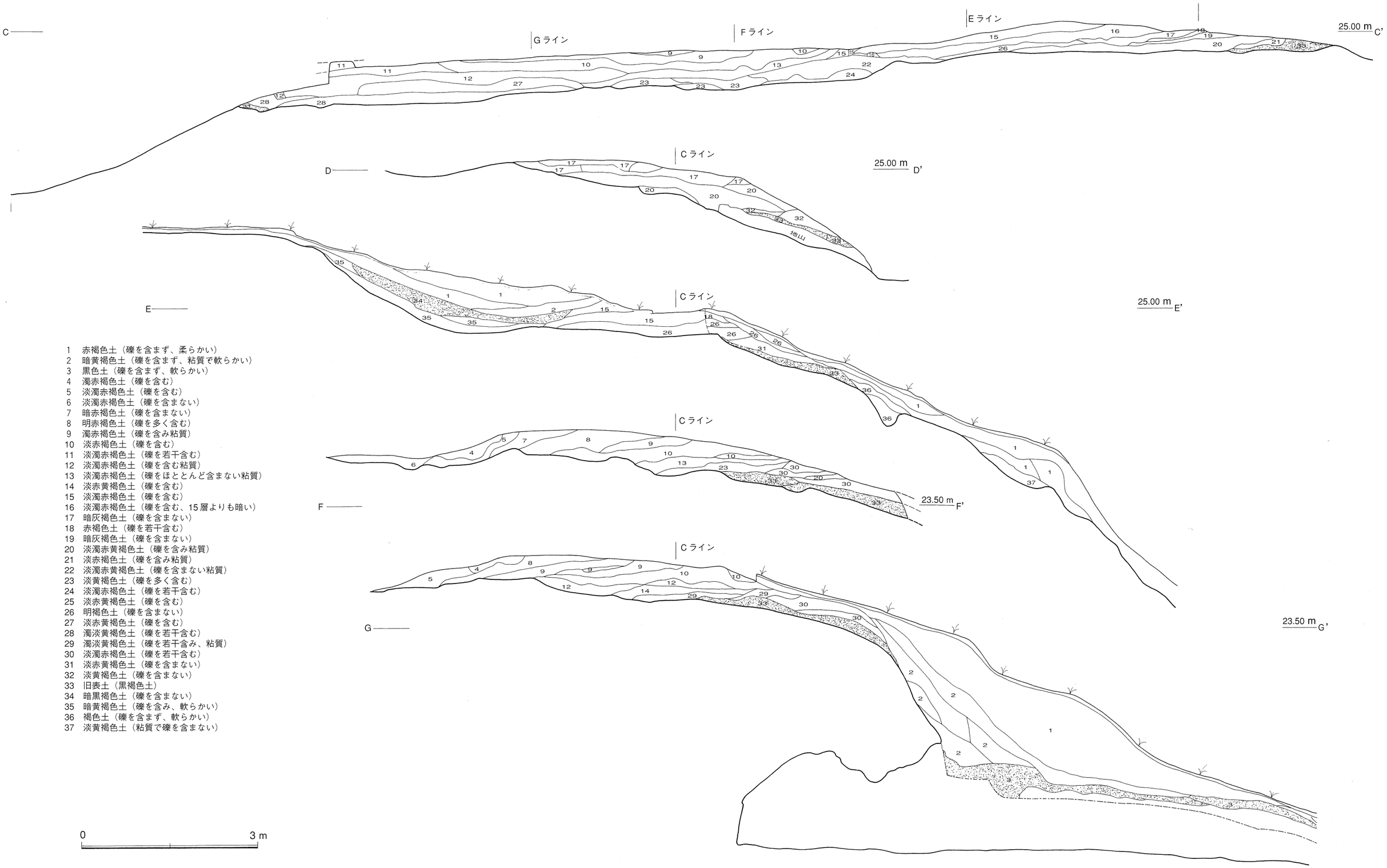
２号墳の位置と調査前の状況（第５図、７図）　２号墳は、前に述べた１号墳の南側に隣接して斜面に半分せり出すような形で検出された。調査前は１号墳の南側には明瞭な墳丘状の高まりは認められなかったが、１号墳の東側に東西方向に走る溝状の落ち込みが認められ、これが結果的に２号墳の後方部北側の溝を反映した地形であった。

墳　　丘（第７図、11図）　墳丘は、北側（上方の１号墳側）に周溝状の溝を掘り込んで区切り、南側（斜面下方側）の一部には斜面を削り込んで平坦面を形成し、裾としている。この溝や平坦面に区切られた内部には、そうした切り土によって生じた土砂を盛土して墳丘を形作っているようである。検出された墳丘を一見すると、長さ20m前後の細長い長方形を呈しているようにも見える。しかし詳細に観察すると、溝や平坦面で形作られた裾の形状は単なる長方形ではなく、微妙に変化して一定の形を呈しているのがわかる。

まず背後の１号墳側（北側）の溝は、東半は東西方向にまっすぐ伸びているがほぼ中央付近で１ｍばかり南側に折れ曲がっている。さらに西側に向かって4.5mばかりは再びまっすぐ伸びた後、外方に開いているのがわかる。外方に開いた先端は南側に屈曲して西側の墳端につながっていく。

一方斜面下方側の西半には平坦面（テラス）が作り出されている。このテラスは、検出時の幅１ｍ前後で９ｍばかり東西方向に伸びている。このテラスの西端は北側に屈曲して大きく削り込まれており、この位置は西側の墳裾位置にほぼ対応する。また東端は逆に南側（斜面下方側）に屈曲して先端は流出している。後に詳述するが、このテラスからは大量に須恵器甕片や土師器が出土し、それらが背後の北側の溝から出土したものと接合するものもあることから、このテラスが古墳の南側を画するために形成されたものである可能性が極めて高い。なおテラスの南側（下方）にはベルトの観察で盛土状の堆積が見られ、墳丘築造時にはもう少し幅が広かったものと推測される。

さて以上のような墳丘北側の溝と南側のテラスのあり方を合わせて墳丘全体を眺めると、北側溝が中央付近で偏曲して南側に入り込む箇所と、テラスが南側に折れ曲がる箇所はほぼ対応した位置にあたることがわかる。これをくびれ部と解釈すると、溝がまっすぐ伸びる東半側が後方部、溝が西端近くになって外方に開くのは前方部の形状と理解することもでき、合理的に説明が出来る。とするならば、２号墳は長さ20m前後、前方部先端幅が約8.5m、くびれ部幅が約６ｍの前方後方墳と考えるこ



1　赤褐色土（礫を含まず、柔らかい）
2　暗黄褐色土（礫を含まず、粘質で軟らかい）
3　黒色土（礫を含まず、軟らかい）
4　濁赤褐色土（礫を含む）
5　淡濁赤褐色土（礫を含む）
6　淡濁赤褐色土（礫を含まない）
7　暗赤褐色土（礫を含まない）
8　明赤褐色土（礫を多く含む）
9　濁赤褐色土（礫を含み粘質）
10　淡赤褐色土（礫を含む）
11　淡濁赤褐色土（礫を若干含む）
12　淡濁赤褐色土（礫を含む粘質）
13　淡濁赤褐色土（礫をほととんど含まない粘質）
14　淡赤黄褐色土（礫を含む）
15　淡濁赤褐色土（礫を含む）
16　淡濁赤褐色土（礫を含む、15層よりも暗い）
17　暗灰褐色土（礫を含まない）
18　赤褐色土（礫を若干含む）
19　暗灰褐色土（礫を含まない）
20　淡濁赤黄褐色土（礫を含み粘質）
21　淡赤褐色土（礫を含み粘質）
22　淡濁赤黄褐色土（礫を含まない粘質）
23　淡黄褐色土（礫を多く含む）
24　淡濁赤褐色土（礫を若干含む）
25　淡赤黄褐色土（礫を含む）
26　明褐色土（礫を含まない）
27　淡赤黄褐色土（礫を含む）
28　濁淡黄褐色土（礫を若干含む）
29　濁淡黄褐色土（礫を若干含み、粘質）
30　淡濁赤褐色土（礫を若干含む）
31　淡赤黄褐色土（礫を含まない）
32　淡黄褐色土（礫を含まない）
33　旧表土（黒褐色土）
34　暗黒褐色土（礫を含まない）
35　暗黄褐色土（礫を含み、軟らかい）
36　褐色土（礫を含まず、軟らかい）
37　淡黄褐色土（粘質で礫を含まない）

第10図　1区2号墳墳丘土層（S＝1：60）

とが出来る。

ただ 2 号墳は、斜面下方側に異様に寄せてせり出すように作られているため、全体的にいびつな感は否めない。平面的に見ると長さに比して幅が狭く細長く見えるのは当然として、特にいびつさが目立つのは立面的に見た場合である。長軸方向では、自然地形の高低に規定されて前方部側が約 1 m裾位置が高い。短軸方向は自然の斜面の高低差が反映されることからさらに裾レベルの高低差は著しくなり、前方部で 2 m近く南側の裾が低くなっている。よって前方部西側の裾は幅に比して高低差がありすぎるため、北側溝からの裾ラインと南側テラスの裾ラインは直接つながっていない。

盛土は墳丘の全面に施されており、多いところでは盛土の深さが80 ㎝になる。しかし上面の削平や流出も考えられることから、本来はもう少し高く盛られていた可能性が高い。一部には旧表土と考えられる黒色土も認められることから、溝やテラスを除いては大きく地形の改変は行っていないと考えられる。

長軸土層（第10図最上段）を見ると、自然地形が低い後方部側にまず土砂を盛り、その後前方部側を盛ったことがうかがえるが、後方部と前方部の間に明確な盛土築成の時期差を認めることはできない。横断土層を見ると、基本的には斜面の低い側にまず土砂を盛り、なるべく水平に土砂を盛ろうとしていることがうががえる。墳丘盛土の南側の範囲は南側テラスの地山の立ち上がりと一致しており、この点もこのテラスが墳裾を区切るためのものであることを傍証している。北側の溝の堆積土は、当然の事ながら盛土の上にかぶさって堆積している。

遺物出土状況（第12図） 墳丘北側の溝内や南側のテラスを中心に、数多くの須恵器片、土師器片が出土した。その大部分は個体別にまとまった出土状態ではなく、意図的に破砕されたとも考えられるような状態であった。その証拠に、2 号墳で出土した須恵器甕片が南側下方で検出された横穴墓（1 号・2 号・3 号横穴墓）の前庭で出土した甕や玄室床面に敷かれた「須恵器床」の一部と接合したり、中には離れた 6 区 4 号横穴墓の玄室内須恵器床と接合した例（第341図の甕）があることがあげられる。下方の横穴墓の前庭部との接合例だけならば、本来 2 号墳のものであった破片が流出したり、何らかの理由で混入したりする可能性もあるが、玄室内の須恵器床との接合の事実は明らかに破砕した上で何らかの理由で双方に破片を置いたものと考えざるを得ない。

2 号墳からは須恵器甕15個体をはじめとして多くの遺物が出土した。その出土位置を概観すると、墳裾周辺部から基本的にはまんべんなく出土しているが、細かく見ると粗密があることがわかる。後方部の北側ではややくびれ部寄りの位置から集中して須恵器甕片が出土しており、その周囲は比較的まばらである。後方部の東側はわずかに須恵器甕片が出土しているのみであるが、これは墳丘そのものもかなり流出していることから本来存在していたものの流出してしまった可能性もある。北側のくびれ部から前方部にかけて、そして前方部の西側にかけては取り立てて大きな粗密はなく出土している。前方部の南側では、テラスの約5.5mの間に集中して須恵器甕片が出土し、ほぼ中央付近からは土師器の甕と坏蓋 1 点が、完形でほぼ据わった状態で並んで出土している。また南側くびれ部付近も集中して須恵器甕片が出土した。

これらの遺物がどのような経緯を経て墳丘周辺にばら撒かれたかを推測することは難しい。ただ個々の遺物のあり方はバラェティに富んでいる。大甕の接合状況を見ると、墳丘の様々な場所から出土した個体、一定の場所で集中した出土した個体、墳丘だけでなく下方の横穴墓出土のものと接合する個体（個別の 1 穴と接合する個体もあれば、複数の横穴墓と接合する個体もある。）、下方の横穴墓

第11図　1区2号墳測量図ー墳丘盛土除去後ー（S＝1：200）

に限らず離れた横穴墓とも接合する個体など様々である。もちろん先に述べた前方部南側テラスの土師器甕と須恵器坏蓋の状況も異なったあり方の一つである。それぞれのありようで異なった意味を持っていたのであろう。

2号墳墳丘出土遺物（第15図）　須恵器大甕については、横穴墓との接合関係もあるので後に一括して述べたい。大甕以外の須恵器では、坏、壺類などがあるが、全てが2号墳に伴うものとは考えられない。例えば1、2、5などは新しい時期のもので後の混入の可能性が高い。また3の短頸壺はあるいは1号墳に伴っていたものが、2号墳築造時にその一部を削り取った際に混ざった遺物の可能性がある。10、11は前方部南側テラスで出土したものである。

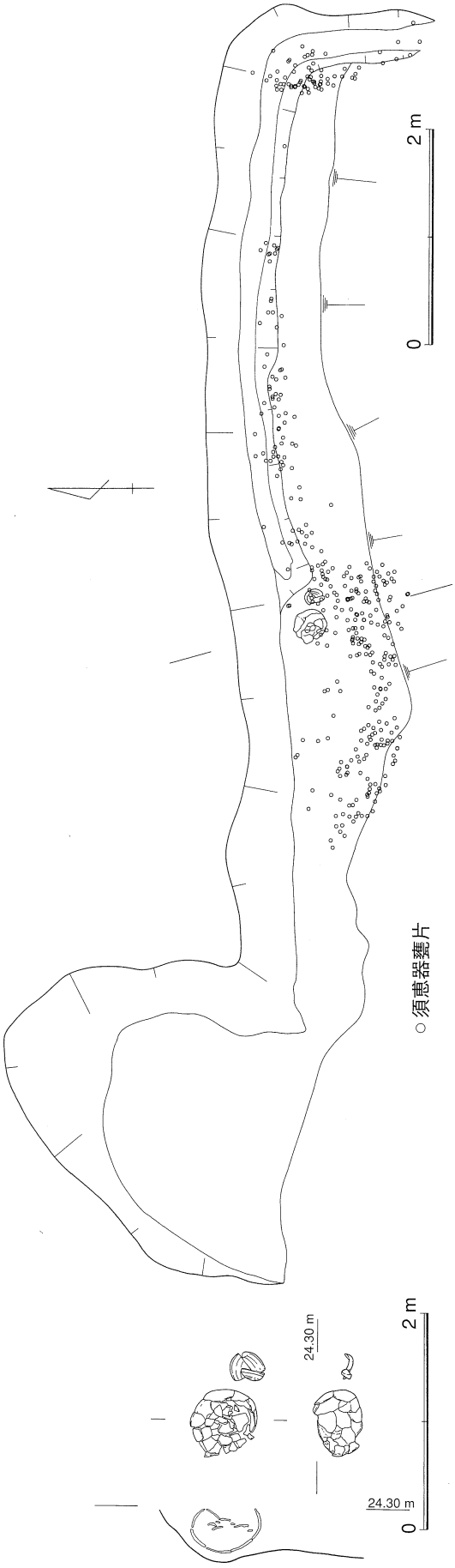
主体部　2号墳墳丘上においては、主体部あるいは主体部の痕跡と考えられる遺構は全く検出することは出来なかった。主体部が流出してしまった可能性も全く否定することは出来ないが、盛土が一定程度確認出来ることや、横穴式石室があってしかるべき時期や規模であることから、本来的に墳丘上には主体部は存在しなかったものと考えた方が自然である。ここでは次のような理由で、南側下方に存在する横穴墓がこの古墳の主体部であると判断した。

(1)墳丘が異様なほど斜面側に寄せて築造されていること。

　前にも述べたように、2号墳の墳丘は半分斜面にせり出すように築かれており、その結果南側の裾と北側の裾で大幅な段差を生じさせたほどである。

(2)後方部の直下に潜り込むように2号横穴墓が穿たれていること。

　2号墳の南側下方には1～3号横穴墓が検出されているが、その中でも特に2号横穴墓は斜面の奥に入り込んで作られている。これは後方部の直下に玄室を設けようとした結果とも考えられる。



第12図　1区2号墳南側テラス遺物出土状況
（S＝1：60、1：30）

第13図　1区2、3号墳須恵器出土状況（S＝1：100）

2 号横穴墓だけでなく、くびれ部下方にある 3 号横穴墓も 2 号墳に伴う横穴墓である可能性ももちろんある。

(3) 2 号墳墳丘出土の須恵器大甕片が、下方の横穴墓前庭や玄室内の須恵器床の甕片と接合すること。

2 号墳墳丘で行われた祭祀が、下方の横穴墓と同時期に行われ、しかも両者が密接に結び付いていることを示している。

さらに近年の調査により、主体部として横穴墓を持つ前方後方墳、前方後円墳の例が散見されはじめ、当地方においては決して特殊な事例ではないことも上方の墳丘と下方の横穴墓を結び付ける一つの材料である。

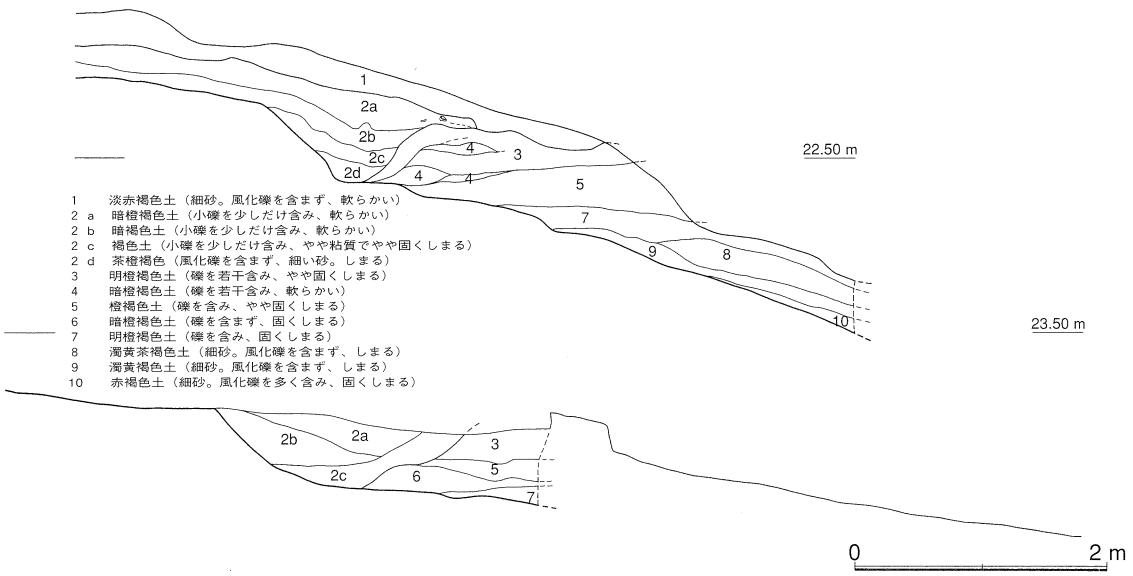
[3 号墳]

3 号墳の位置と調査前の状況（第 5 図） 2 号墳の東側に、2 号墳の後方部とほとんど重なるような形で検出された古墳である。調査前は古墳と認識できるような高まりはなかった。

墳　　丘（第14図） 2 号墳と同様、背後に周溝状の溝を切って盛土をして築成しており、斜面側に迫り出すように寄せて築かれている。調査区外に続くため全体の調査を行っていないが、溝の形が一度くびれを形成するように屈曲しており、やはり前方後方墳であった可能性が高い。規模は不明だが、2 号墳よりは小形である。

盛土は確認できた部分で80㎝程度の深さはあり、斜面下方に向かってかなり盛られていたものと推測される。溝は後方部北側では 4 m近い広いものだが、前方部北側では1.2m前後と狭くなっている。これは 2 号墳の後方部との重複を避けるためかも知れない。あるいは 2 号墳の後方部南東コーナーと溝を共有していると理解することも可能かも知れない。

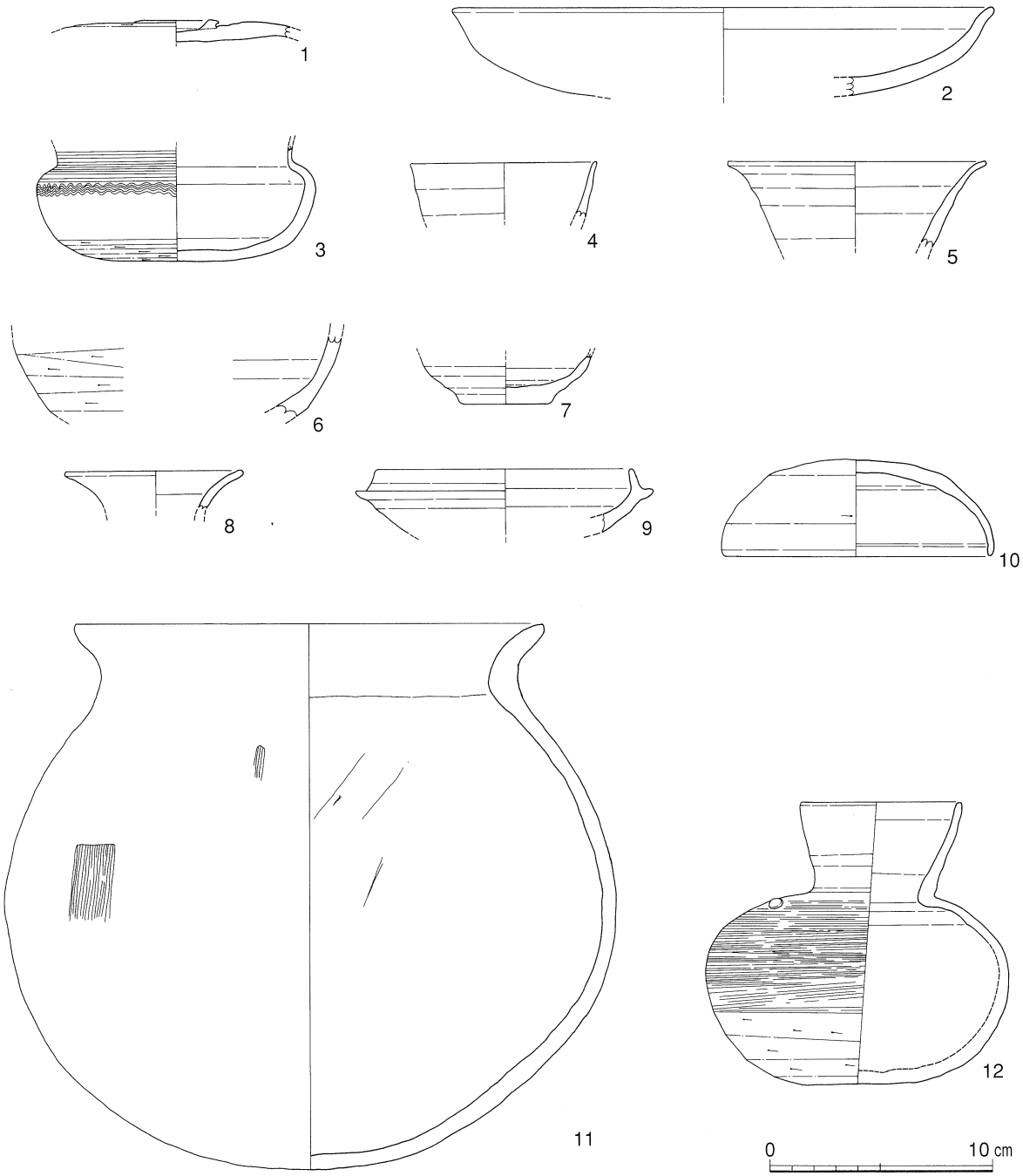
遺物出土状況（第13図） 周溝内より、須恵器甕を中心として多くの遺物が出土している。周溝内の全体に散らばって出土しているが、特にくびれ相当部付近に集中しているのがうかがえる。また周溝でもより墳丘寄りから多く出土しており、墳丘上から流出したか、あるいは投じた結果である可能性もある。この甕の一部には、下方の 1 号横穴墓や 2 号横穴墓、2 号墳出土の甕と接合するものがある。ただ前方部が 2 号墳と一部重なり合っているため、厳密な接合関係とは言えない。甕以外では、



第14図　1区3号墳土層図（S＝1：60）

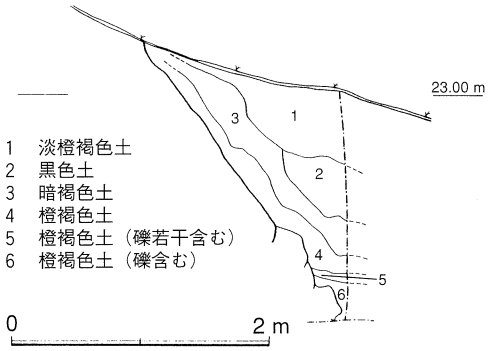
後方部北側の周溝内より須恵器平瓶（第13図 2）が 1 点出土している。

主 体 部　墳丘全域の調査を行っていないため、主体部の有無については不明と言わざるを得ない。ただ後方部の過半は調査しており、その限りでは主体部は全く検出されなかった。墳丘のあり方は先の述べた 2 号墳の状況とよく似ており、2 号墳と全く同じ理由で南側下方の横穴墓が主体部であると考えている。後方部の南側下方は調査区外だが、表面観察においても横穴墓前庭らしき落ち込みを明瞭に認めることが出来る。また前方部下方に検出された 1 号横穴墓も、3 号墳の主体部の一つと考えることもできるかもしれない。



第15図　1区2・3号墳出土土器実測図（S＝1：30）

(2)横穴墓



第16図　1区調査区外横穴墓前庭部土層実測図
（S＝1：60）

1区では南側斜面で3穴、東側斜面で1穴の計4穴の横穴墓が検出された。南側斜面の横穴墓は3穴がほぼ等間隔で並んで検出されたが、一直線状には並ばない。中央の2号横穴墓が斜面の奥に入り込んでレベルも高い位置に作られているためで、平面的にも立面的にも2号横穴墓を頂点とする二等辺三角形を描くような配置となっている。なお前の古墳の項で述べたように、2号横穴墓は2号墳の後方部直下に、3号横穴墓は2号墳くびれ部～前方部の下方に、1号横穴墓は3号墳前方部の下方にあたる。また1号横穴墓の東にはさらに横穴墓が続いて存在しているものと考えられる。

[調査区外横穴墓]

位　　置（第7図）　1号墳の東側斜面、ちょうど北に伸びる尾根と東に派生する尾根に挟まれた谷の谷頭にあたる部分から検出された。

調査状況（第16図）　1号墳北東側の裾外の平坦面から自然の斜面の勾配に移行してまもなく、斜面が急激に落ち込んでいく部分が検出された。調査区の端にあたるためわずか一部しか調査できなかったものの、玄門らしき遺構や閉塞石の一部と推測される石が検出されている上、堆積土の中に、横穴墓前庭部に特有の黒褐色土が認められることから、この落ち込みは横穴墓に前庭部と考えられる。須恵器等は出土していないため、時期は不明である。

[1号横穴墓]

位　　置（第7図）　1号横穴墓は、1区南側斜面の調査区東端で検出された。前述した3号墳の前方部のほぼ直下にあたり、玄室の位置は3号墳墳丘の下にまで達している。開口レベルは床面で16.5m前後で、3号墳のおよそ6m下方にあたる。西側には2号横穴墓、3号横穴墓が隣接して存在しており、東側の調査区外にも続いて横穴墓が存在してる可能性が強い。わずかに東にずれた南方向（S－12°－E）に開口している。

前 庭 部（第17図）　前庭部はその一部が調査区外にかかっているため、未調査の部分もあるが、ほぼ全容を推測できる。床面の平面形は羨門側から前方に向かって次第に「ハ」字形に幅を広げていく形態を呈し、羨門側で幅1.48m、前端部の幅は不明だが現状のまま開いていくとすれば5.5m前後に達すると推測される。

長さは9m以上に達する長大なもので、奥壁の高さは現状で5m近くにもなる。床面はわずかながら前方に向かって傾斜しており、前端部からおよそ2mほど奥の床面にはわずかながら段が設けられている。側壁は場所によっては垂直に近い急角度で掘り込まれている。

羨道・玄門（第17図）　羨道は床面が前庭部よりも一段高く段差を設けており、長さが1.5m前後、幅が玄門寄りで1.25m、前庭寄りの最も狭い部分で1m前後を測る。高さは天井部がかなり崩落しているため不明瞭だが、左側壁の上部に天井部との界線がわずかながら残存しており、その部分で1.15mを

測る。この界線の存在から天井部はほぼ平らであった可能性が高く、羨道部の立面観は長方形を呈していたものと考えられる。

玄門は長さが床面で0.7m、幅が１m前後で、高さは羨道同様不明瞭だが、左側壁の天井部との界線の痕跡で測れば0.8m前後となる。床面は羨道部は若干前方に向かって傾斜しているが、玄門から奥はほぼ水平である。

玄　　室（第17図）　玄室は床面での平面規模が、奥行き2.65～2.8m、幅が2.95～３mとほぼ正方形に近い横長の長方形を呈す。四壁は全体的に崩落や風化などによる傷みが激しく詳細は不明瞭であるが、わずかに内傾するもののほぼ垂直に立ち上がる。壁と天井の界線（軒線）の有無については明らかな部分が少ないが、奥壁にわずかながらその痕跡を認めることが出来る。天井は平入りの寄棟家形で、いわゆる整正家形を呈する。棟線の長さは0.5mと短く、床面からの高さは1.6mを測る。

閉 塞 石（第19図）　玄門の前面で、凝灰岩の切石および角礫による閉塞装置が検出された。閉塞は基本的に２枚の長方形の板状切石を並べて行っている。左側の上下２枚の切石は本来１枚であったものが割れてずれたものである。この２枚は基本的には閉塞時の状況から大きく動かされてはいないと判断される。前面に散乱して検出された角礫は、この２枚の石の隙間を埋めるように使用されたものであろう。羨道から玄室にかけてかなり高い位置から角礫が２点出土しているのは、後次の侵入の際に外された礫であろうか。

石　　棺（第18図）　玄室の奥壁に平行して家形石棺が１基、置かれていた。白色の凝灰岩の切石を組み合わせた横口式石棺で、前面には石床を設け、その前面両側には「灯明台石」を置いた特殊な形態である。両側石、奥壁はそれぞれ１枚の切石で構成し、その間に５枚の長方形の切石を並べて床としている。奥壁は長さ1.8mの大形の石、側石も厚さが20㎝以上とかなり厚い石を用いており、両側石の内面には３～５㎝の深さでアーチ上の抉込みが施されている。

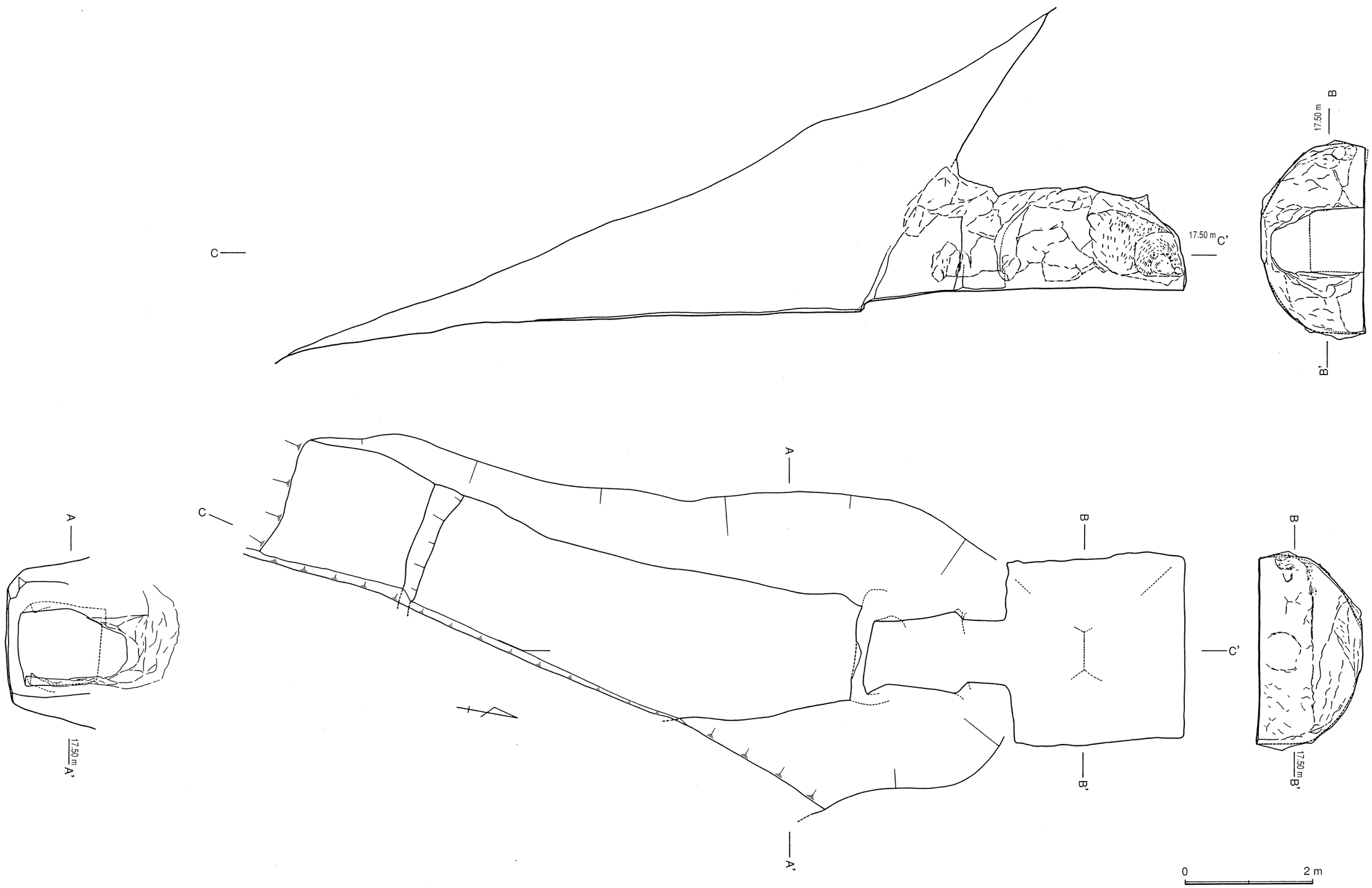
床石の前面に接して、石床の床石が同様に５枚の長方形の切石を用いて並べられ、側石の前面には石床の側石がやはり接して置かれている。石床の床石の上には石棺と石床をしきる仕障が４個の角柱状の切石により設けられている。さらに天井石は石床の側石の上に載っていることからも、石棺と石床は一体的に組み立てられたことがわかる。

石床側石の前面にはそれぞれ円柱状の「灯明石」が立てられている。石床側石はその前面が「L」字形に切り込まれているのは灯明石を目立たすための所作であった可能性もある。灯明石は高さがともに40㎝前後で、側面を立て方向に細かく面取りすることによって横断面を直径18～20㎝の円形に近く仕上げている。上面には１辺10～18㎝の隅丸方形のくぼみが穿たれている。また右側石の裏側には小形の角礫２個、左側石の裏には50㎝内外のやや大形の石が置かれているが、これは側石の内側への傾斜を防ぐためのものであろう。

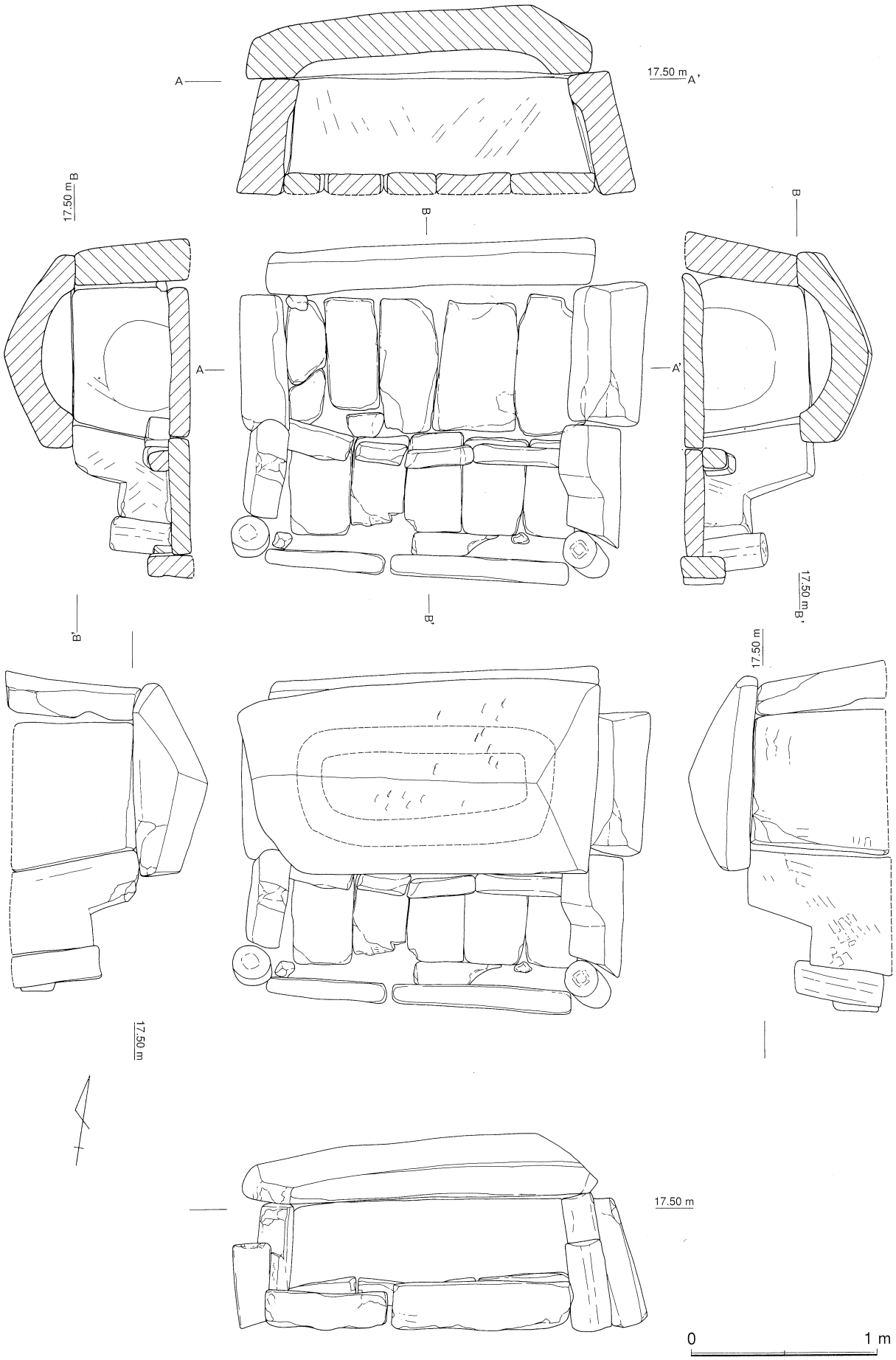
灯明台石の間の前面にはさらに短冊状の切石２枚により仕障が設けられており、床石との間に生じた隙間には小形の石をさらにつめたようであるが、調査時には一部しか残っていなかった。

石棺の法量は、棺身の幅が2.2m、石床部の幅が2.04m、奥行きは棺身を石棺と石床の間の仕障までとすれば1.2m、石床までを含めた全体の奥行きは1.8mとなる。棺身の高さは0.73mを測る。

天井石は長さ1.92m、幅は右壁側で1.03m、左壁側で0.94mと右側がやや広い。外面は明瞭に棟線を表現しており、右短辺側は寄棟を表現して斜めに加工されているが、左短辺側は切妻状にカットされている。内面は深さ15㎝と明瞭に蒲鉾形に抉り込んでいる。天井石の高さは左側壁側に向かって高く



第17図　1区1号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）



第18図　1区1号横穴墓玄室内検出家形石棺実測図（S＝1：30）

なっており、最大で34㎝、棺身と合わせると1.05ｍを測る。

土層堆積状況（第21図）　前庭部は完全に土砂で埋まっており、上方の流土をの除いては当時の埋土の状況が残り、追葬時等の侵入の状況を観察することが出来た。最初の追葬面は床面直上の９層上で、羨道の段差と同一平面で続いている。この面の上から前庭部で多くの遺物が出土しており、大規模に祭祀を行ったことがうかがえる。

次の追葬面（２次）が８層上である。上層の８a層はやや黒みかかった暗褐色土でよく締まっている。これらの層は羨道付近から閉塞石に向かって下がっており、土砂を掘り込んで侵入したことがうかがえる。閉塞石はこの層の上に載っており、この段階で最終的に閉塞されたものと考えられる。

その上の７d層もよく締まった層で、わずかながら羨門付近から下っており、表面に腐食土層が認められることから侵入時（３次）の面を示すものかも知れない。７d層上面が４次の侵入面であろう。７a層が黒色系の土砂で須恵器を出土する。この層を切るように羨道から玄門に向けて土砂を掘り込んで侵入した形跡がある。

７層上が５次の侵入時の面で、６a層は須恵器を多く含む黒色土である。その上の６a層上が最終的な侵入面であろう。上面に腐食土（５a層）と目される土の堆積が認められる。４次の侵入以降は、基本的に閉塞石の大きな移動はなく、羨道天井の崩落もしくは意図的な破壊による空間を利用して侵入したものと推測される。

玄室内にも多くの土砂が堆積していたが、大部分は流入土であろう。

遺物出土状況（第19、22図）　前庭部および玄室内より多くの遺物が出土している。前庭部では、9a層上から須恵器が大きく２群に分かれて出土している。ひとつは羨門から２ｍほど前方の左側壁沿いとその周辺で、壁際に平瓶３点、堤瓶３点、直口壺２点、長脚高坏２点、低脚高坏２点、有蓋高坏１点が集中して置かれ、その周辺に平瓶１点、堤瓶１点、直口壺３点、長脚高坏３点が散在して出土している。

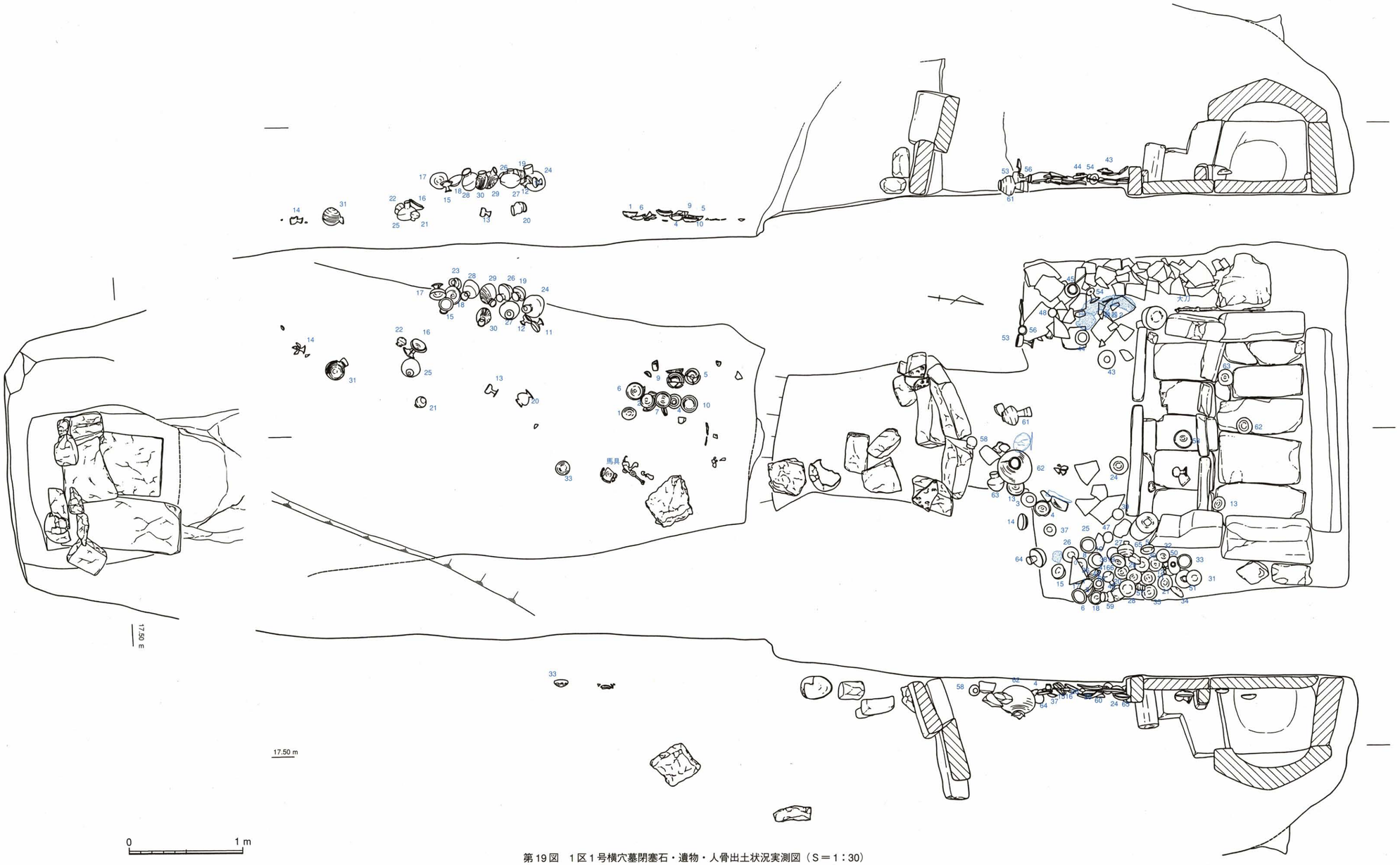
もう一群は羨門前50㎝ほどの左側壁寄りから、蓋坏類が集中して出土している。蓋・杯身それぞれ５点づつで基本的に同形式５セットと考えて良いだろう。そのやや右前方に１セットの蓋坏が出土しているが、これは若干浮いた位置であり後に動かされたものかもしれない。蓋坏群から約50㎝右（東）には同様に８層上から馬具が一塊となって出土した。また羨門正面の前方からは鉄製刀子と鉄鏃が出土している。

そのほか６a層を中心に多くの甕片を中心とした遺物が出土している。これらの層位を越えて接合するものも多く、掘削、埋め戻しの繰り返しの中でかなりの移動を受けているようである。

羨道では、右壁沿いの床面上から土師器甕が１点出土している。前庭部の６a層、７d層内よりこの土師器と接合する破片が出土しており、後の侵入時に破壊されて持ち出されたものと考えられる。

玄室からも多くの遺物が出土している。それらは大きく次の４群に分けることが出来る。１石棺・石床内出土遺物、２右側壁沿い出土遺物、３左側壁沿い出土遺物、４玄門付近出土遺物。１は、石棺内から大谷編年５期の蓋坏蓋が３点、石床上から土師器坏（45）と大谷編年７期の甕(55）が出土したのみである。なお石棺の左外側には、支えの角礫にもたれかけるように大刀が出土している。

２の右壁沿いには、石床右から前壁付近に須恵器が集中して検出された。大谷５～６期の蓋坏類34個（５期27個、７期７個）が集中して置かれ、それらの間に低脚高坏２点が奥壁寄りに、平瓶２点、堤瓶１点、壺類４点が中央から前壁にかけて置かれていた。これらは時期差が認められることか



第19図　1区1号横穴墓閉塞石・遺物・人骨出土状況実測図（S＝1：30）

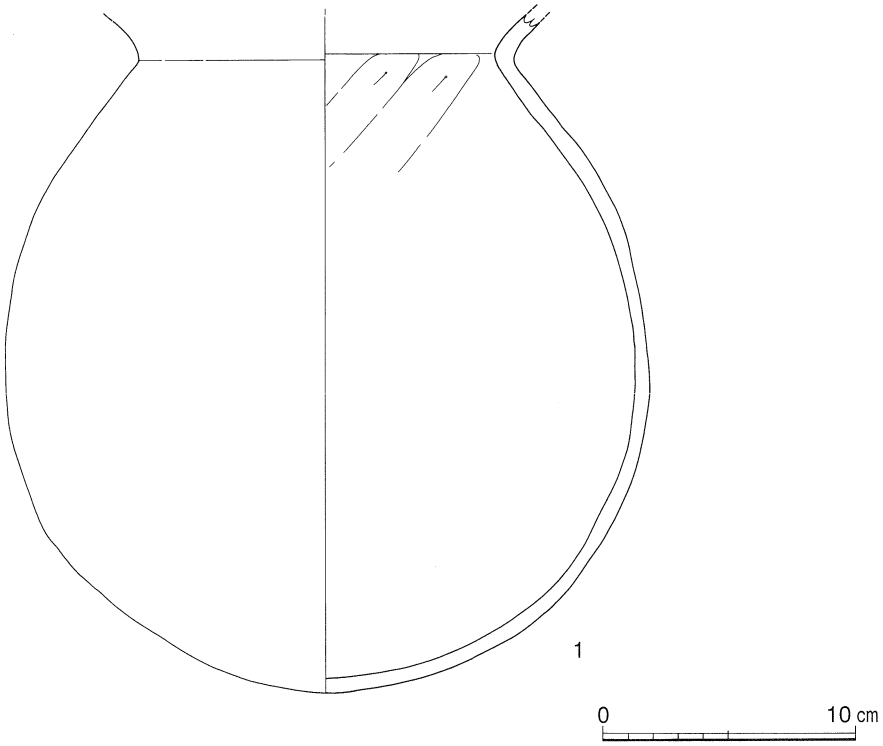
ら追葬時にこの場所にまとめられたものであろう。

3の左壁沿いには2と同様の範囲である石床左から前壁にかけて須恵器甕の破片が敷き詰められ、その上に大谷7期の杯身2点、蓋1点、5期の高坏、瑕が各1点、低脚付き椀と壺の蓋1点が散在的に置かれていた。2と同様複数時期にわたっており、追葬時に再配置された可能性が高い。

4の玄門付近には大谷編年5期の蓋3点、杯身1点、平瓶が2点、大谷編年6～7期の長頸壷2点、小形直口壺1点がかたまって出土している。付近には小角礫があり、頭骨と四肢骨が大形平瓶に接して検出されている。

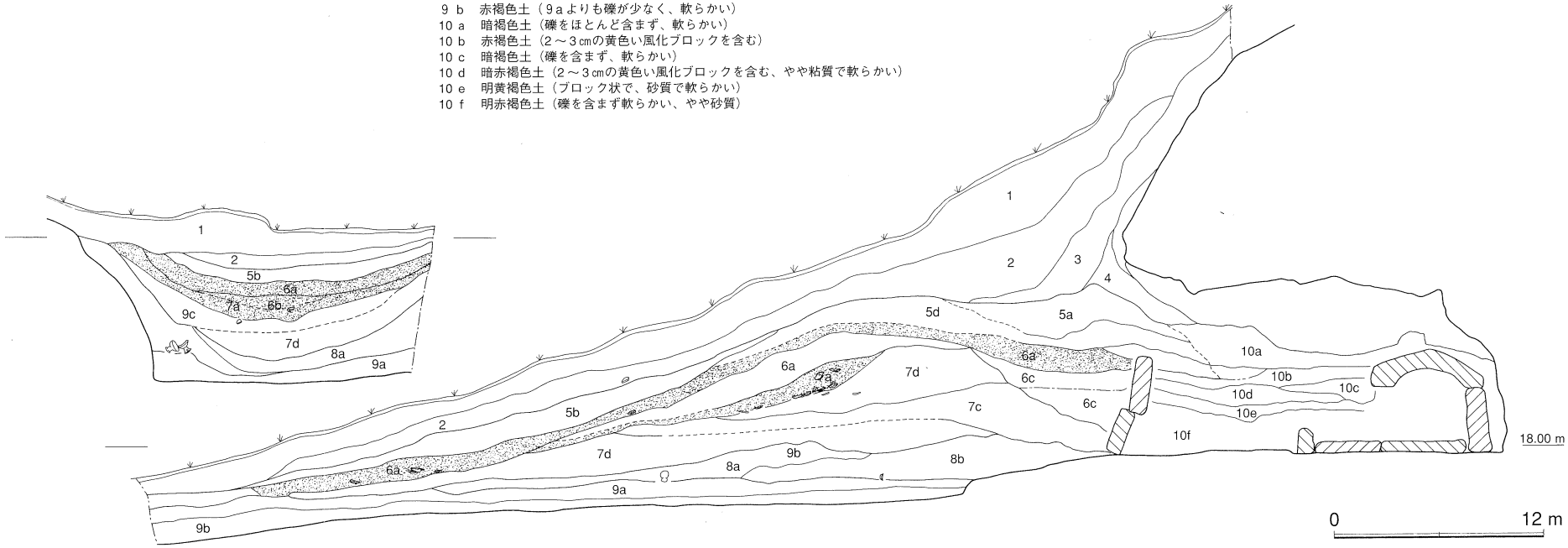
出土遺物（第23図～30図）　土器類の詳細は観察表を付しているのでそちらを参照いただきたい。時期は大谷編年5期～7期で、5期の築造後かなり長期間使用されていたようである。

第29図は鉄製品である。1は鉄製の鍔と鉏をもつ大刀である。2は長頸鏃、3は刀子である。4、5は鞦である。破損が著しく全形は不明だが、4は、およその形態は推測可能である。輪金と脚は別造りで脚は先端が欠損している。輪金は脚との接合部から直線的に伸び、屈曲して左右に張り出す形でT字形の刺金は伴わない。座金具は透かし彫りのある4弁の花弁をかたどっている。6は轡である。鏡板を持たず、銜と引手が直接連結している。

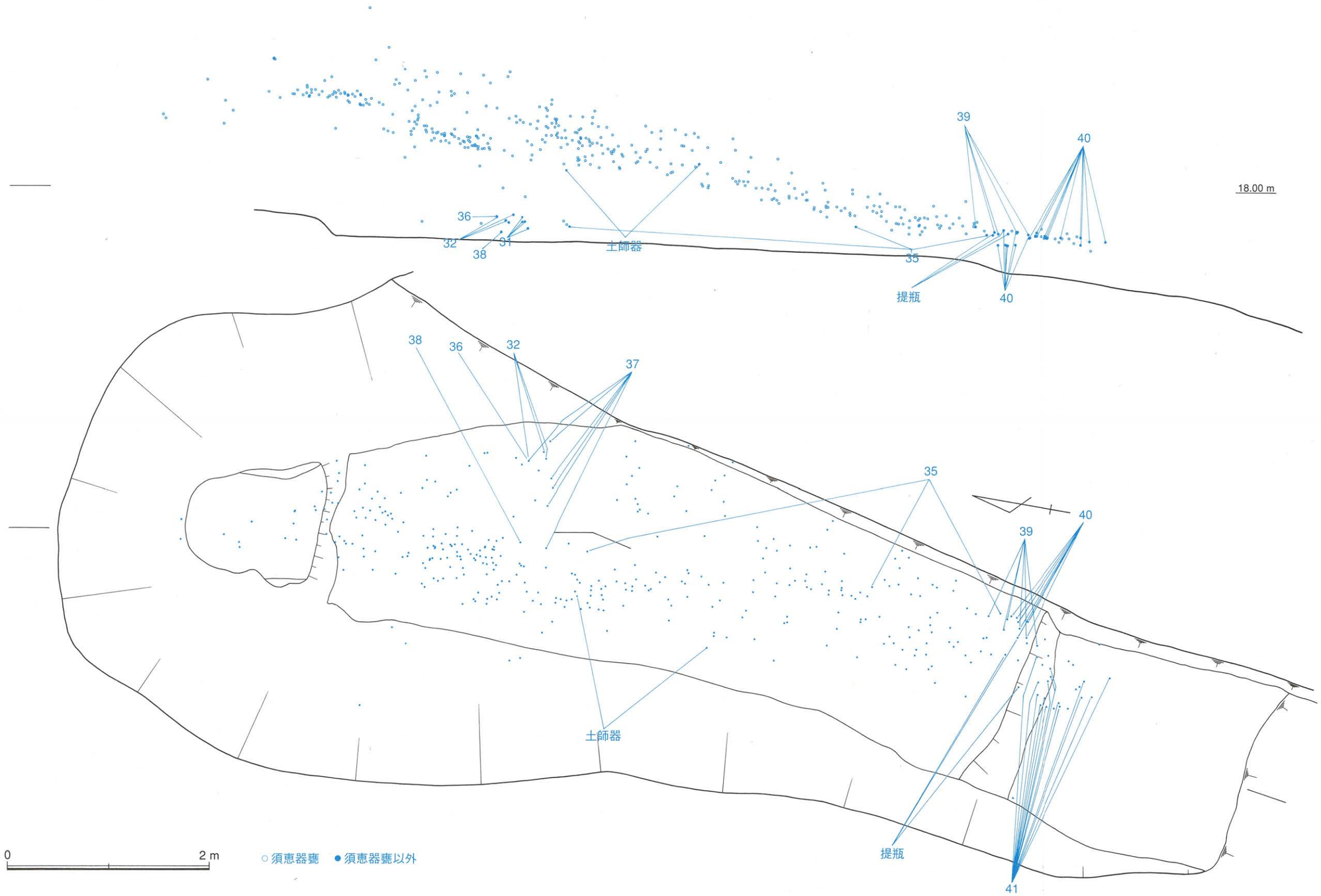


第20図　1区1号横穴墓閉塞石付近出土土師器実測図（S =1：3）

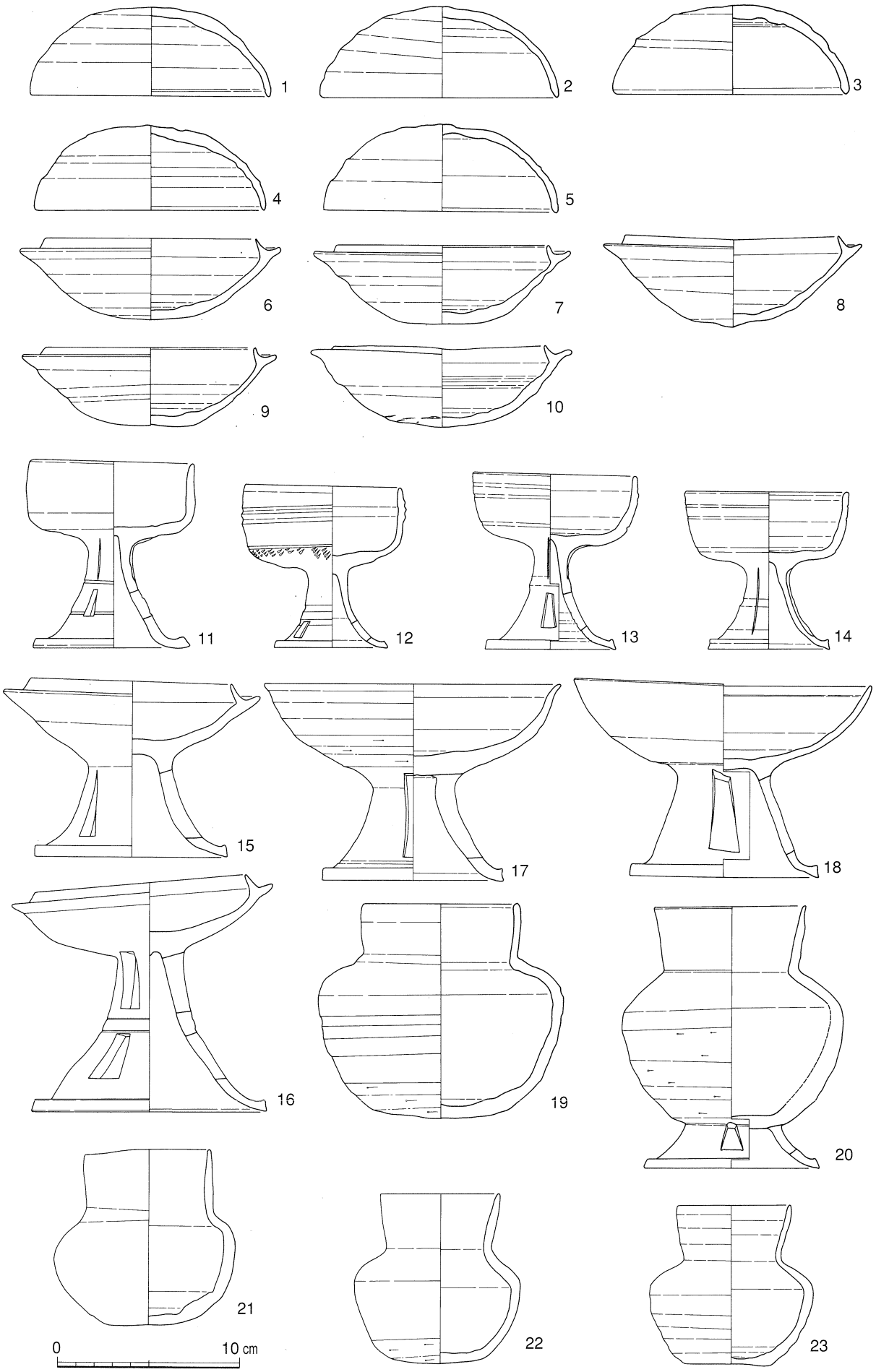
1　黄褐色土（礫を含まず、軟らかい）
2　赤褐色土（礫を含まず、ひきしまっている）
3　黄褐色土（礫を含まず、ひきしまっている）
4　赤褐色土（礫を含まず、ぼそぼそしている）
5 a　暗赤褐色土（礫をほとんど含まず、軟らかい）
5 b　暗黄褐色土（礫をほとんど含まず、ひきしまっている）
6 a　黒色土（礫をほとんど含まず、軟らかい）
6 b　暗褐色土（礫を含まず、軟らかい）
6 c　暗黄褐色土（礫を含まず、やや粘質）
7 a　暗褐色土（大きく分ければ 6 a だが、より黒っぽい）
7 b　黄褐色土（礫をほとんど含まず、ひきしまっている）
7 c　黄褐色土（0.5 ～ 3 ㎝の白・黄色の礫を非常に多く含み、ひきしまっている）
7 d　黄褐色土（0.5 ～ 3 ㎝の白・黄色の礫を非常に多く含み、ひきしまっている）
8 a　暗褐色土（礫をほとんど含まず、やや粘質でひきしまっている）
8 b　暗褐色土（礫をほとんど含まず軟らかい、やや汚い）
9 a　赤褐色土（5 ㎝程度の赤の礫を多く含み、真赤で砂質で軟らかい）
9 b　赤褐色土（ 9 a よりも礫が少なく、軟らかい）
10 a　暗褐色土（礫をほとんど含まず、軟らかい）
10 b　赤褐色土（2 ～ 3 ㎝の黄色い風化ブロックを含む）
10 c　暗褐色土（礫を含まず、軟らかい）
10 d　暗赤褐色土（2 ～ 3 ㎝の黄色い風化ブロックを含む、やや粘質で軟らかい）
10 e　明黄褐色土（ブロック状で、砂質で軟らかい）
10 f　明赤褐色土（礫を含まず軟らかい、やや砂質）



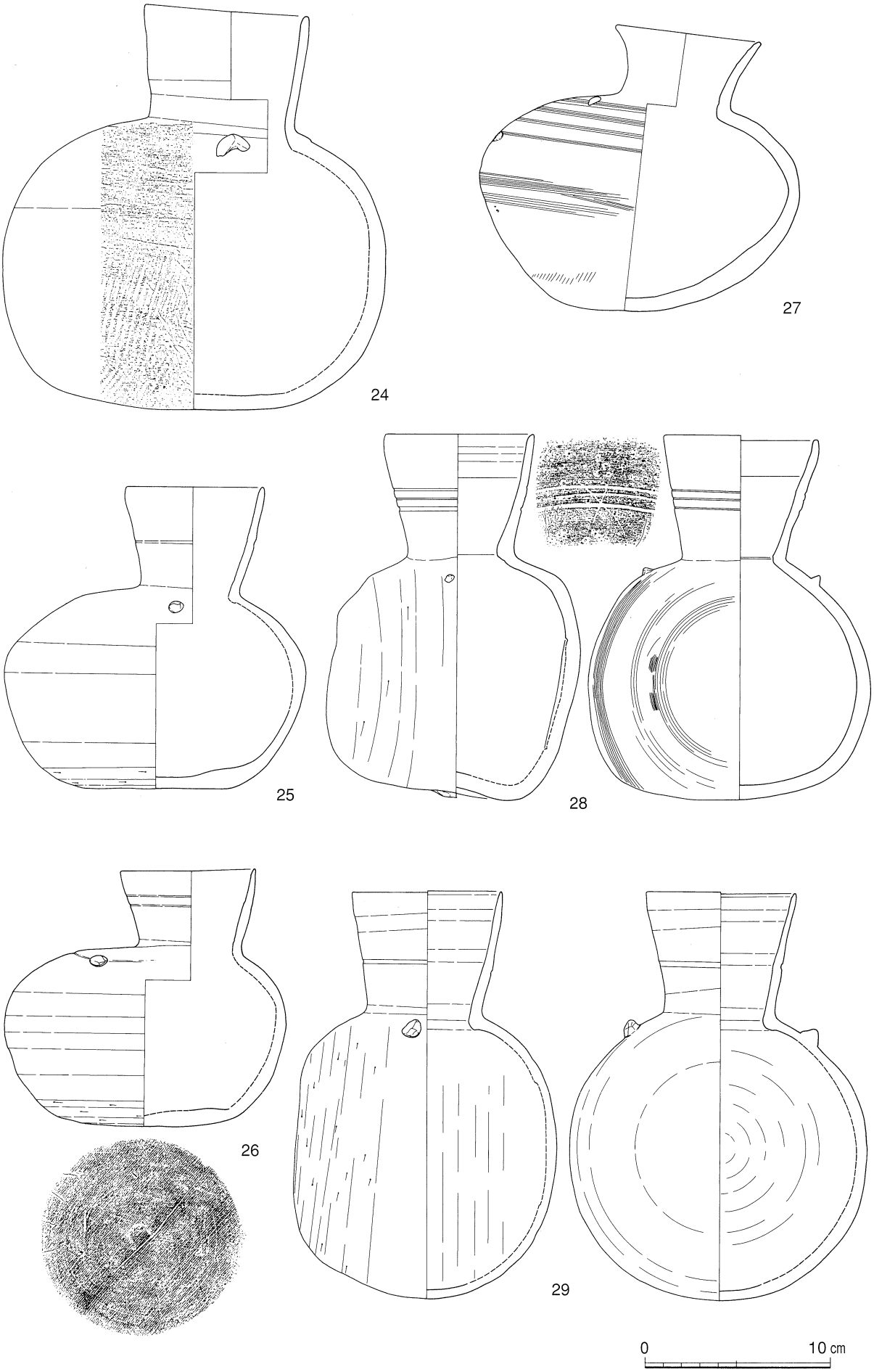
第21図　1区1号横穴墓土層実測図（S＝1：60）



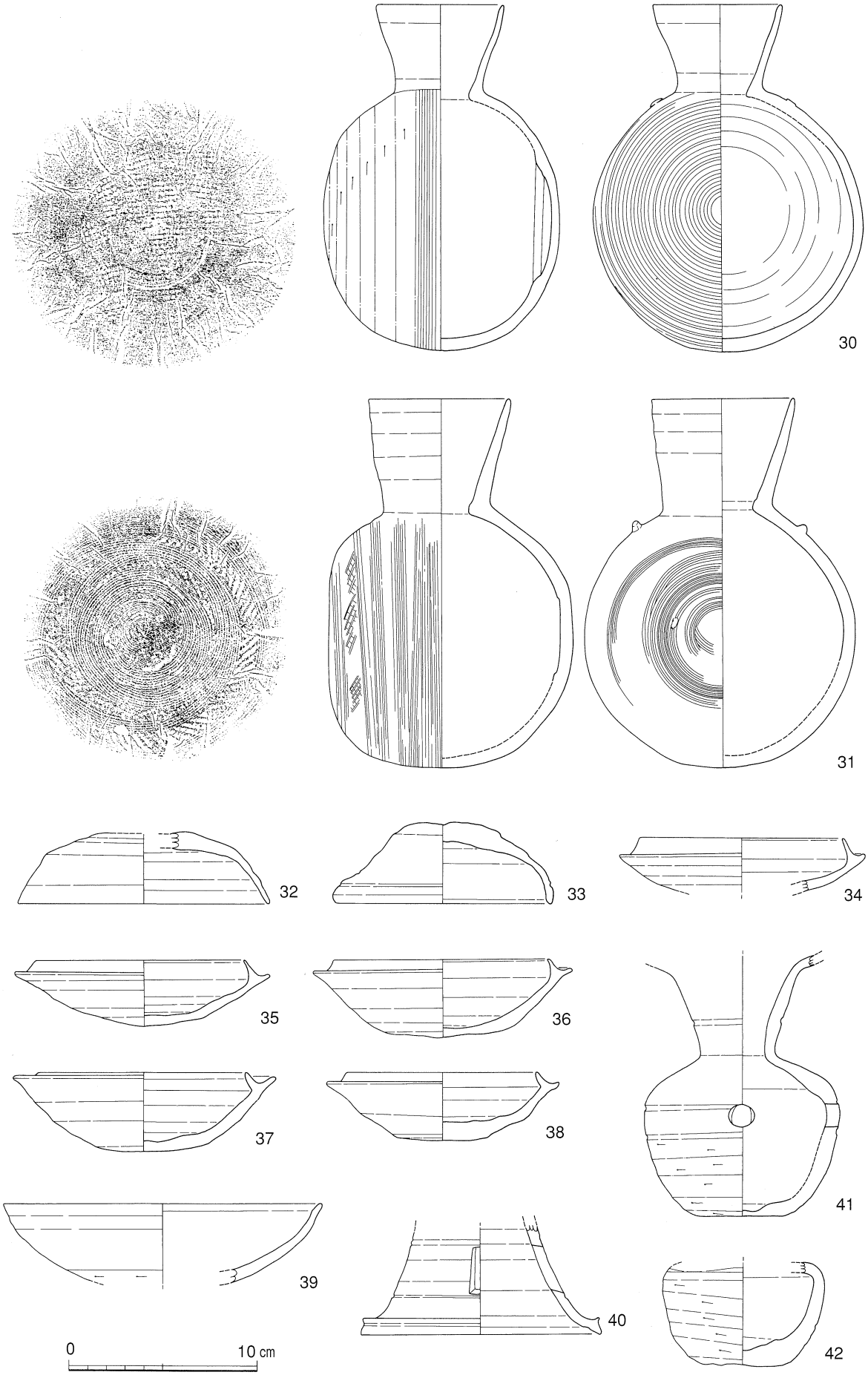
第22図　1区1号横穴墓前庭部遺物出土状況実測図（S＝1：40）



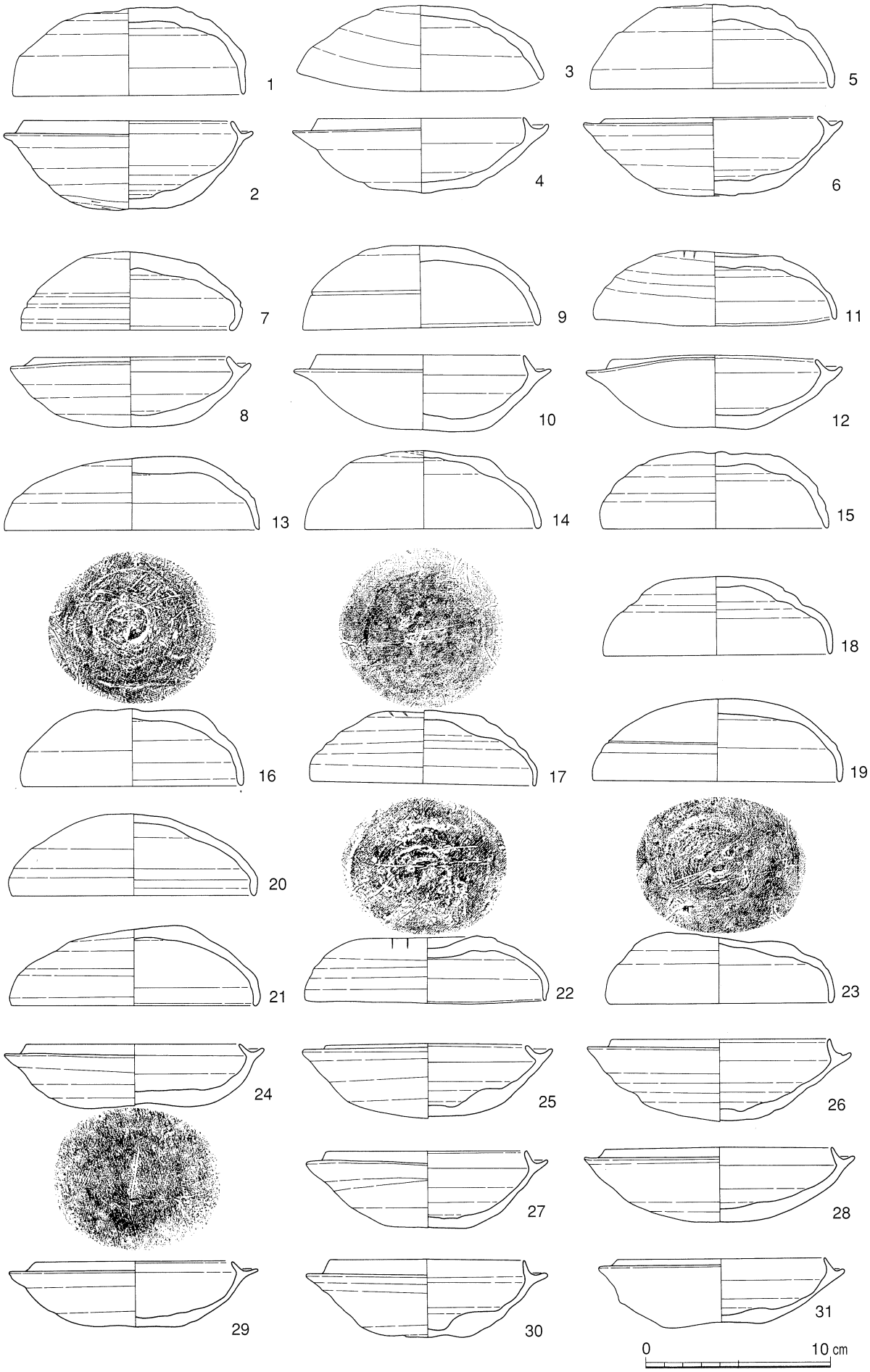
第23図　1区1号横穴墓前前庭部出土須恵器実測図(1)（S＝1：3）



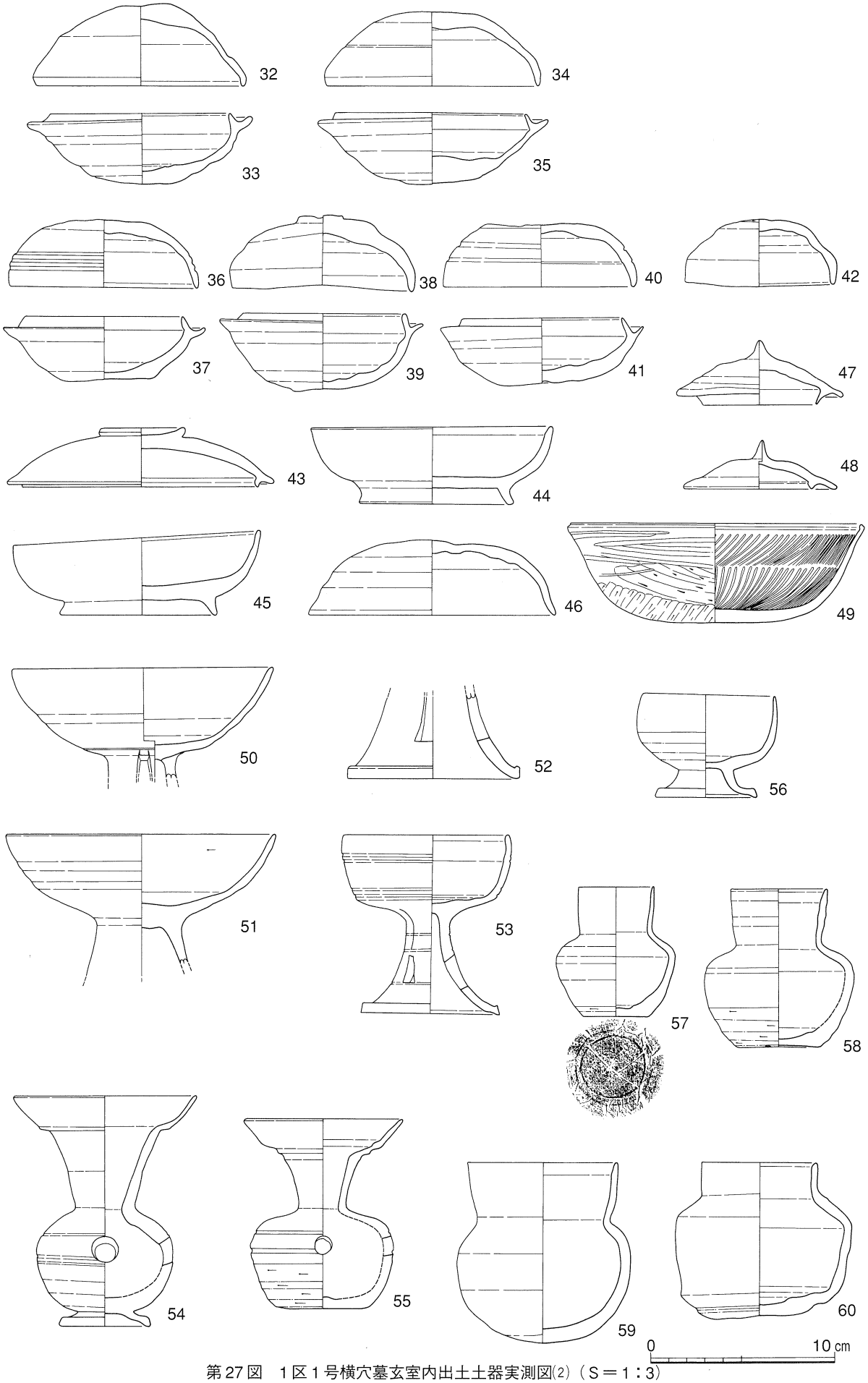
第24図　1区1号横穴墓前庭部出土須恵器実測図(2)（S＝1：3）



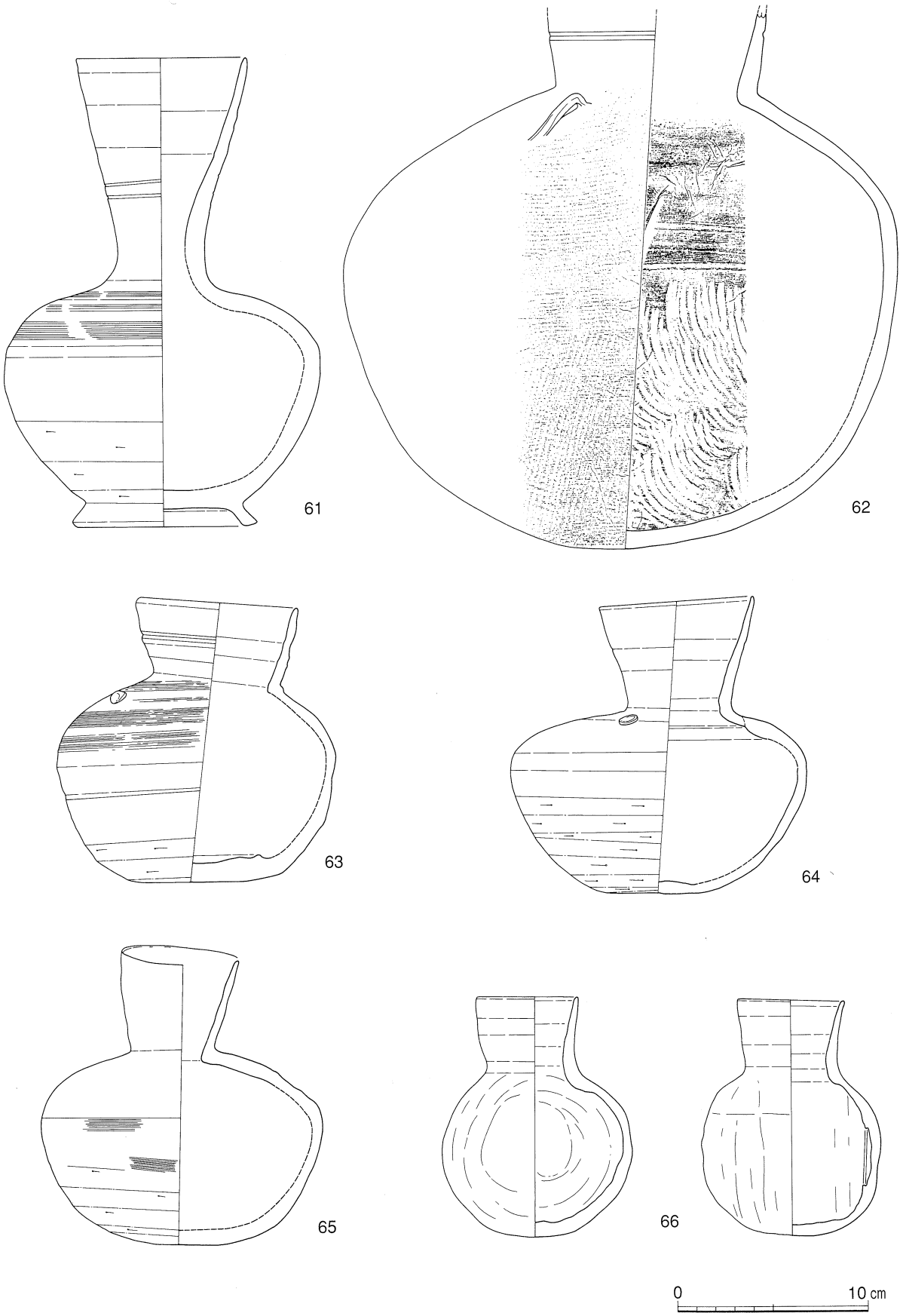
第25図　1区1号横穴墓前庭部出土須恵器実測図(3)（S＝1：3）



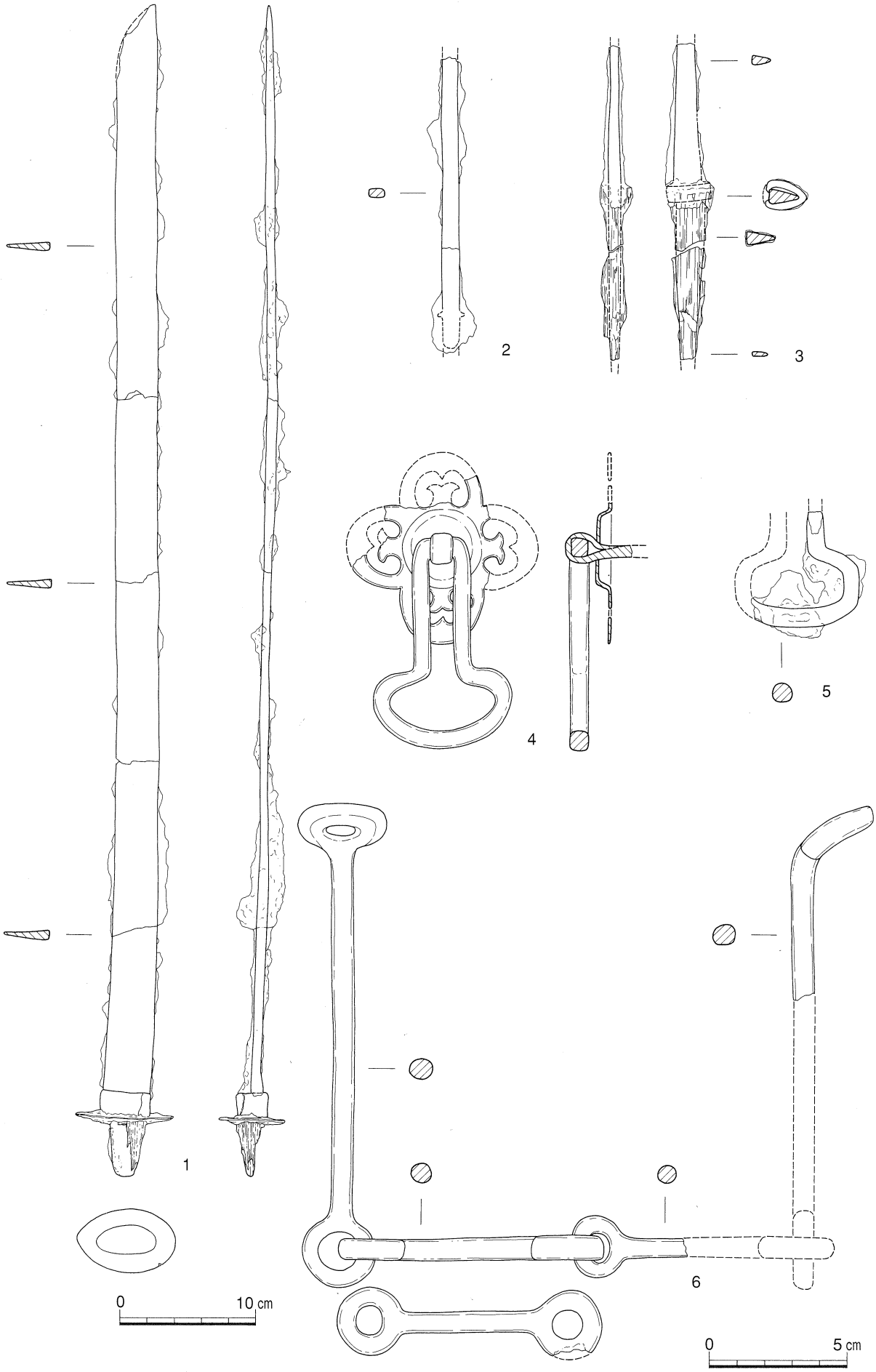
第26図　1区1号横穴墓玄室内出土土器実測図(1)（S＝1：3）



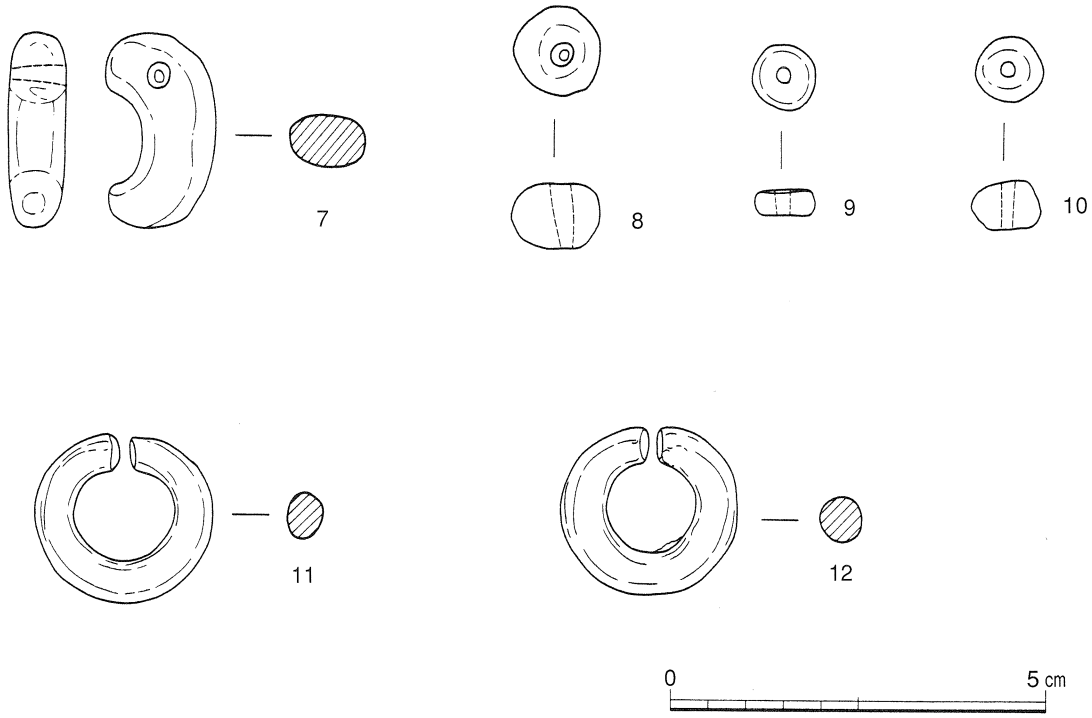
第27図　1区1号横穴墓玄室内出土土器実測図(2)（S＝1：3）



第28図　1区1号横穴墓玄室内出土土器実測図(3)（S＝1：3）



第29図　1区1号横穴墓出土鉄器実測図（S＝1：4、1：2）



第30図　1区1号横穴墓出土玉類・耳環実測図（S＝1：1）

[2 号横穴墓]

位　　置（第 7 図）　1 号横穴墓の西側に隣接して、より斜面の奥に入って 2 m程高い位置で検出された横穴墓である。2 号墳の後方部の直下に当たるところに玄室があり、古墳の項で述べたように、2 号墳の主体部と考えられる。

墓　　道（第31図）　玄門前面で大きく広がらず、狭長な墓道の形態をとどめる前庭である。長さが7.75m、幅が玄門前面の床面で1.8m、最も狭い部分で0.88m、高さは奥壁部分で現状2.9mを測る。床面は水平に近いが、前方にゆくに従って次第に傾斜がついてくる。

墓道の中央やや前方の左側壁付近に、上端で長さ2.28m、幅 1 m前後、深さ1.6mの土壙が検出された。この土壙は 2 号横穴墓墓道が埋め戻された後に掘り込まれた（第34図横断土層）もので、床面付近ではオーバーハング状に広がり、北側に向かっては坑道状を呈してさらに奥に続いている。時期、性格は不明である。

玄　　門（第31図）　かなり崩壊しているが、羨道を持たず、玄門のみで玄室と墓道を繋ぐ形態を残している。長さが1.6m、幅が0.85～1.15mで、玄室側が広い。高さは不明であるが、90㎝前後となるであろう。天井形態も不明だが、左壁にわずかながら側壁と天井の境の稜線が観察されることから、天井は平らで正面観が台形を呈するものと推測される。

玄　　室（第31図）　平面の規模が奥行き2.06～2.15m、幅が2.45mと正方形に近い横長の長方形の平面形を呈す。四壁はわずかに内傾しながらもほぼ垂直に立ち上がり、床から高さ70㎝前後付近で奥に削り込んで幅 5㎝前後の面を造り、「軒線」を表現している。天井は平入りの家形で、いわゆる整正家形の玄室である。高さは天井部付近が崩落して正確には不明だが、1.6m前後となる。床面はほぼ水平である。

閉塞装置（第32図）　玄門前面に、凝灰岩製の切石が検出された。高さ1.26m、幅１m、厚さ0.26mを測る厚い１枚石で、約30°の角度で墓道側に傾いた形で検出されている。後の追葬等に伴う侵入時に傾けられたのであろう。１枚石の前後に角礫が数個見られるが、これは侵入の際に石の上面付近を破壊した破片の可能性もある。

この１枚石の下の床面には、この石を受けるための溝が刻まれている。

土層堆積状況（第34図）　墓道に堆積した土層を見ると、１号横穴墓と同様に少なくとも６回の侵入の痕跡と考えられる玄門方向に傾斜する土層のカット面を見ることが出来る。最初の追葬面と考えられるのが７層上面である。この面からは次に詳述するように多くの須恵器が出土している。　この上に堆積している６層が第２次の整地層と考えられ、その上の第３次整地層と考えられる５層が斜めにカットされて侵入した様子がうかがえる。さらにその上には３度にわたって堆積した後に同様にカットされた土層（３・４層）を観察することが出来る。その上は最終的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物出土状況（第33図、32図）　墓道では前端（南端）に近い部分（後に土壙が掘られた近辺）の14層上面付近から須恵器が集中して出土した。最も南側の群は坏蓋７点、杯身７点が一部重なりあって置かれていた（１群）。その北側には、ややレベルの低い位置から杯身と坏蓋１点づつがバラバラの状態で出土（２群）、さらにその北側には低脚高坏１点と杯身１点が割れた状態で出土した（３群）。一群は蓋坏ばかりで割れたものもあるが基本的には完形出土である。２群は高低差もあり、意図的に破砕した可能性が高い。近接して出土しているがあり方が異なっており興味深い。

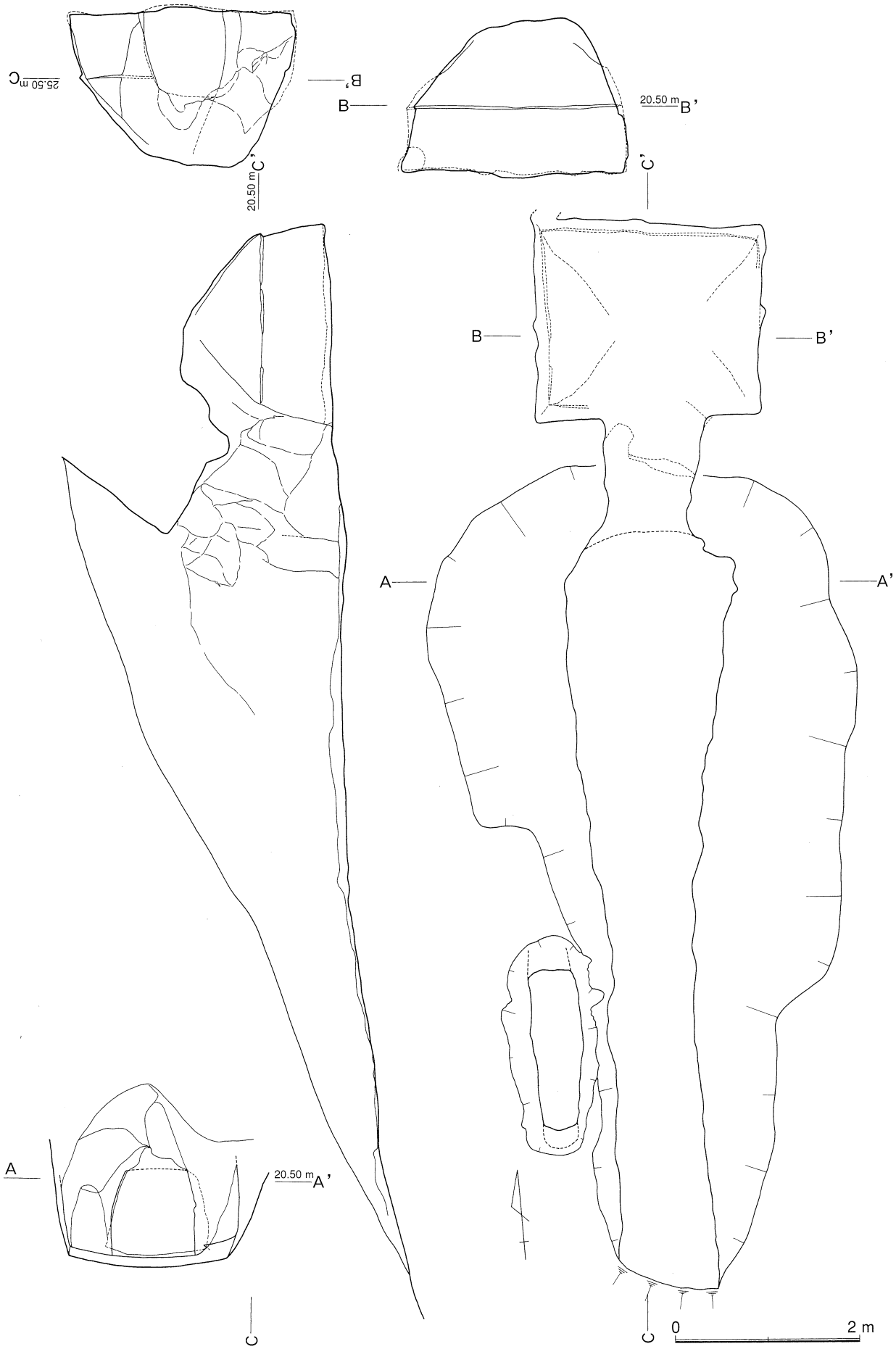
これらの遺物は基本的に大谷編年出雲４期のものであるが、蓋坏には新古の２相が認められる。古相の須恵器は２群のバラバラになった２点（１・２）と１群の北寄りの４点（３～６）である。古相の遺物が比較的まとまった位置で出土していることに意味があるかも知れない。

玄室内の遺物出土状況を見ると、玄門の側壁あたりで縦に３分割して右袖、中央、左袖の大きく３群に分けて考えることが出来る。

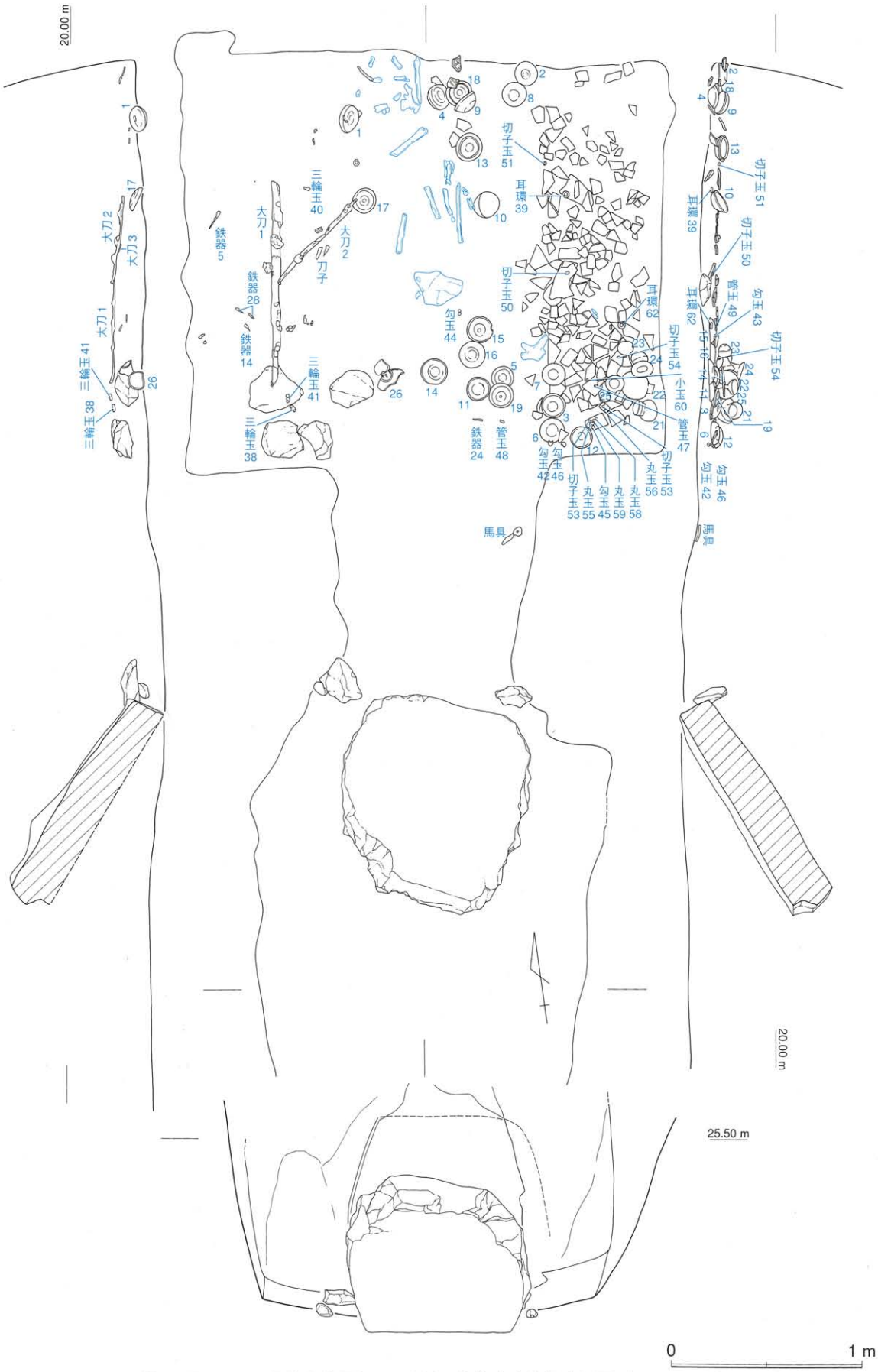
右袖では須恵器甕片を敷き詰めて須恵器床としており、その範囲はおよそ長さ1.7m、幅0.5m前後の長方形を呈している。玄門右側壁に接する須恵器床のコーナーには大谷編年出雲４期新相の蓋４点を縁辺に沿わせて並べている。また右側壁際には甕２点、堤瓶１点、直口壺１点、高坏１点が集中して置かれていた。また玉類がかなり多く出土している。特に前壁寄りからは集中して出土しており、頭位は前壁側であった可能性が高い。ただ少量ながらも奥壁側からも玉は出土しており、後の侵入時に動かされている可能性が高い。これは２点出土している耳環が離れて出土していることからも肯首される。須恵器床上からは人骨も散在的ながら出土している。以上のような遺物出土状況から、右袖部分には１体が埋葬されていた可能性が高い。

中央部からは、玄門寄りと奥壁寄りに須恵器がかたまり、わずかながら鉄器や玉類も出土している。玄門寄りには、左袖に寄って大谷編年出雲４期古相の高坏が倒立状態で出土し、その右側には出雲４期新相の蓋坏類８点（２セット４点は上下重なっている。）が出土している。奥壁寄りには蓋坏類７点が出土しているが、出雲４期の古相のものと新相のものが混在している。これらのの須恵器の左側の奥壁沿いには人骨がまとまって出土し、また中央付近位は四肢骨が方向を揃えるようにして出土している。

左袖では前壁寄りに角礫が４点置かれており、棺台の可能性もある。その角礫のひとつに柄を載せ



第31図　1区2号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）



第32図　1区2号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）

て大形の大刀が横穴墓の中軸と同方向に置かれていた。大刀の柄付近と切先の右手、さらに大刀の下2ヶ所からは水晶製の三輪玉が計5点出土しており、この大刀の装具であったと考えられる。ちなみに三輪玉はもう1点、上方の2号墳後方部墳頂からも出土している。さて大刀の中央付近に柄を載せて、円頭大刀が斜め奥壁方向に向いて出土した。切先は須恵器坏の上にかかっている。円頭部は本来の位置からずれて出土している。そして周囲からは鉄鏃を中心とした鉄器が出土している。左袖にも少なくとも1体が埋葬され、その横に大刀が置かれたと考えられる。玄門からは馬具轡が出土した。

以上の状況を見ると、右袖からは武器類は出土せず玉類が多く出土し、左袖からは玉類は出土せず武器類が多く出土するという特徴が見えてくる。あるいは男女の差を反映しているのかも知れない。

出土遺物（第35図～41図）　出土遺物の詳細については観察表を付しているので、ここでは大ざっぱな特徴を記すにとどめる。須恵器は大きくは大谷編年出雲4期の古相、同期新相、5期の3時期のものが出土しており、少なくとも2度の追葬があったことがうかがえる。1点のみであるが、かなり新しい遺物（24）があり、追葬とは別の意味の侵入があった可能性を示している。

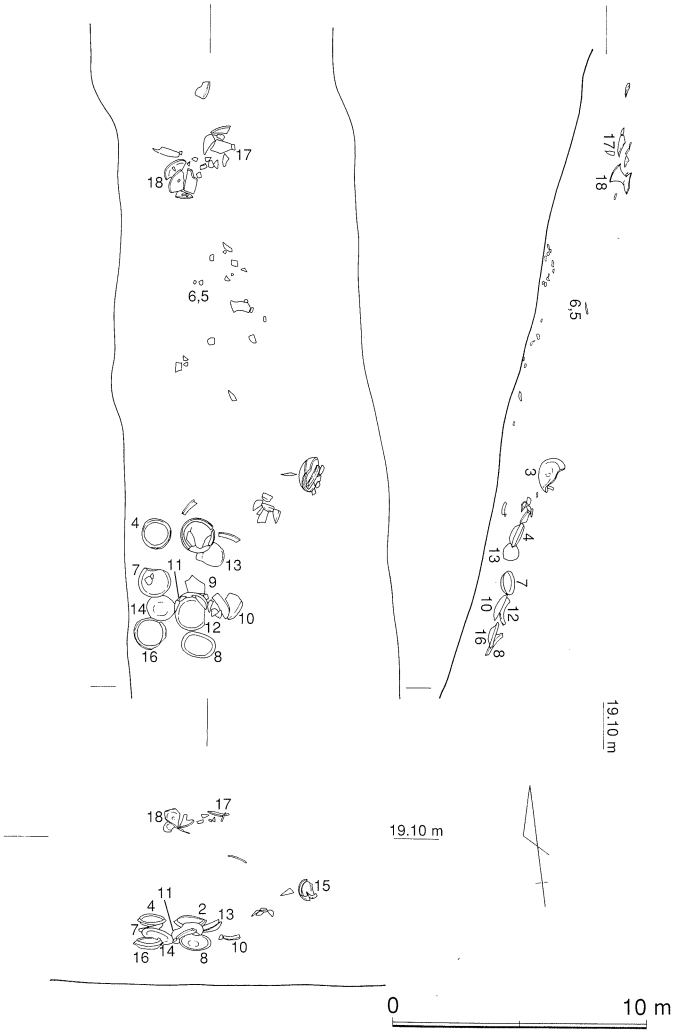
第38図は馬具である。1～3は絞具と考えられる。4～6は木芯鐙の吊金具と考えられる破片である。3ヶ所の鋲で鐙と接合していたものである。7は立聞として絞具を造り付けたいわゆる絞具造り環状鏡板を持つ轡である。引手と銜、鏡板は一緒に連結されている。

第39図は玉類である。メノウ製の勾玉5個、碧玉製管玉3個、水晶製切子玉が5個の他小玉が7個出土している。

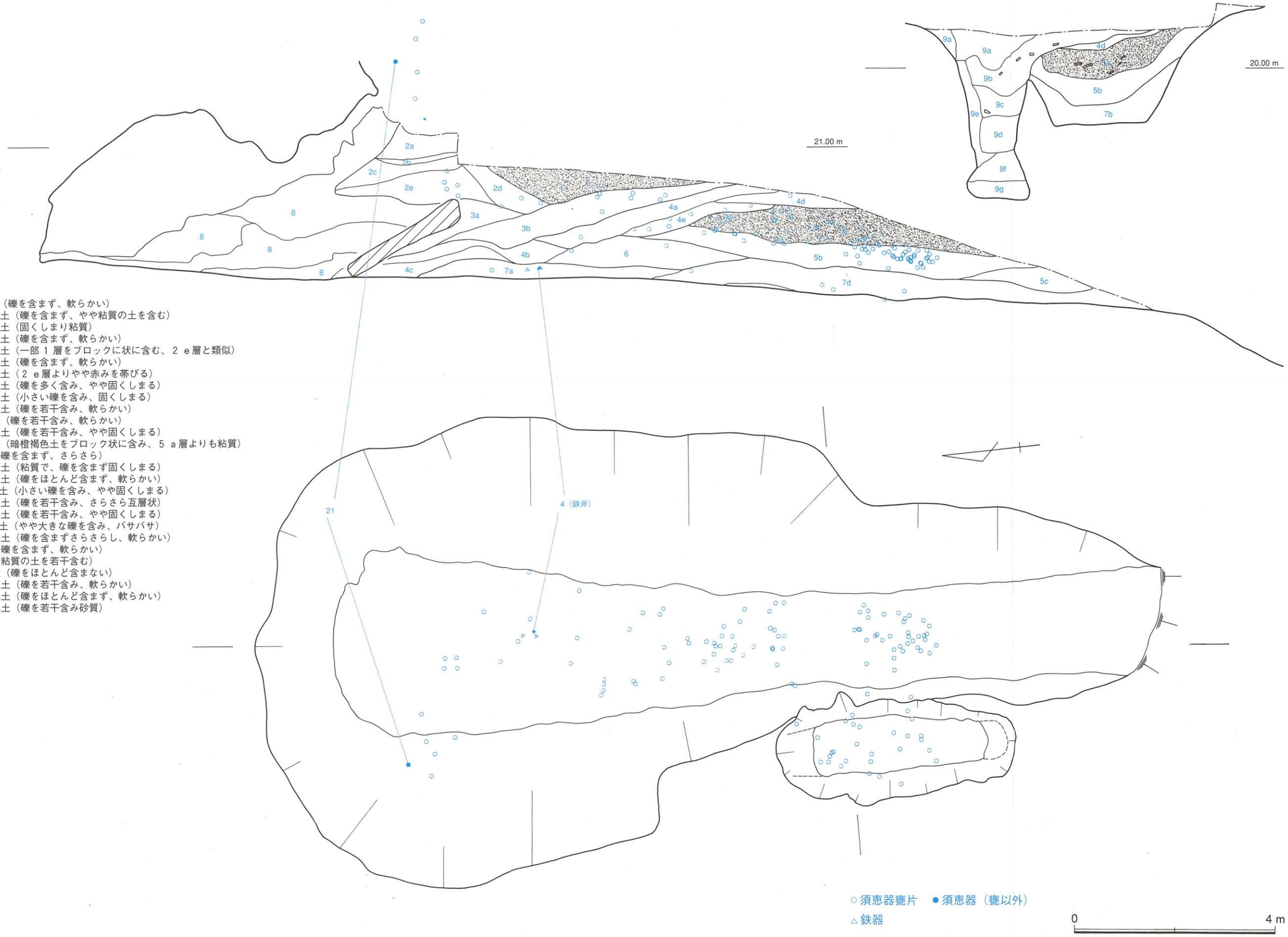
第41図は武器、工具類である。1は全長106㎝を測る大形の大刀である。茎には3本の鋲があり、関の根元付近には抉りが見られる。墳丘上を含めて6個出土した水晶製三輪玉は、この大刀に装着されていた装具の可能性が高い。

2は全長61㎝の円頭大刀である。両関とみられ、茎尻は曲線を呈し、目釘は1ヶ所に認められる。柄頭は鉄製でハート状と蕨手状の文様を組み合わせたような銀象嵌が認められる。柄木には目釘で固定していたものと考えられ、柄の周りを樹皮状の紐を巻いていた痕跡が見られる。鉏の部分には、やはり銀象嵌が見られる。表裏に偏平な「ハート」形を、側面には2ヶ所に円文を施している。

鉄鏃はいずれも長頸鏃で、少なくとも9個体は確認できる。両刃のもの、片刃のものの双方がある。刀子、鉄斧は1個体づつ出土している。刀子は両関で、茎



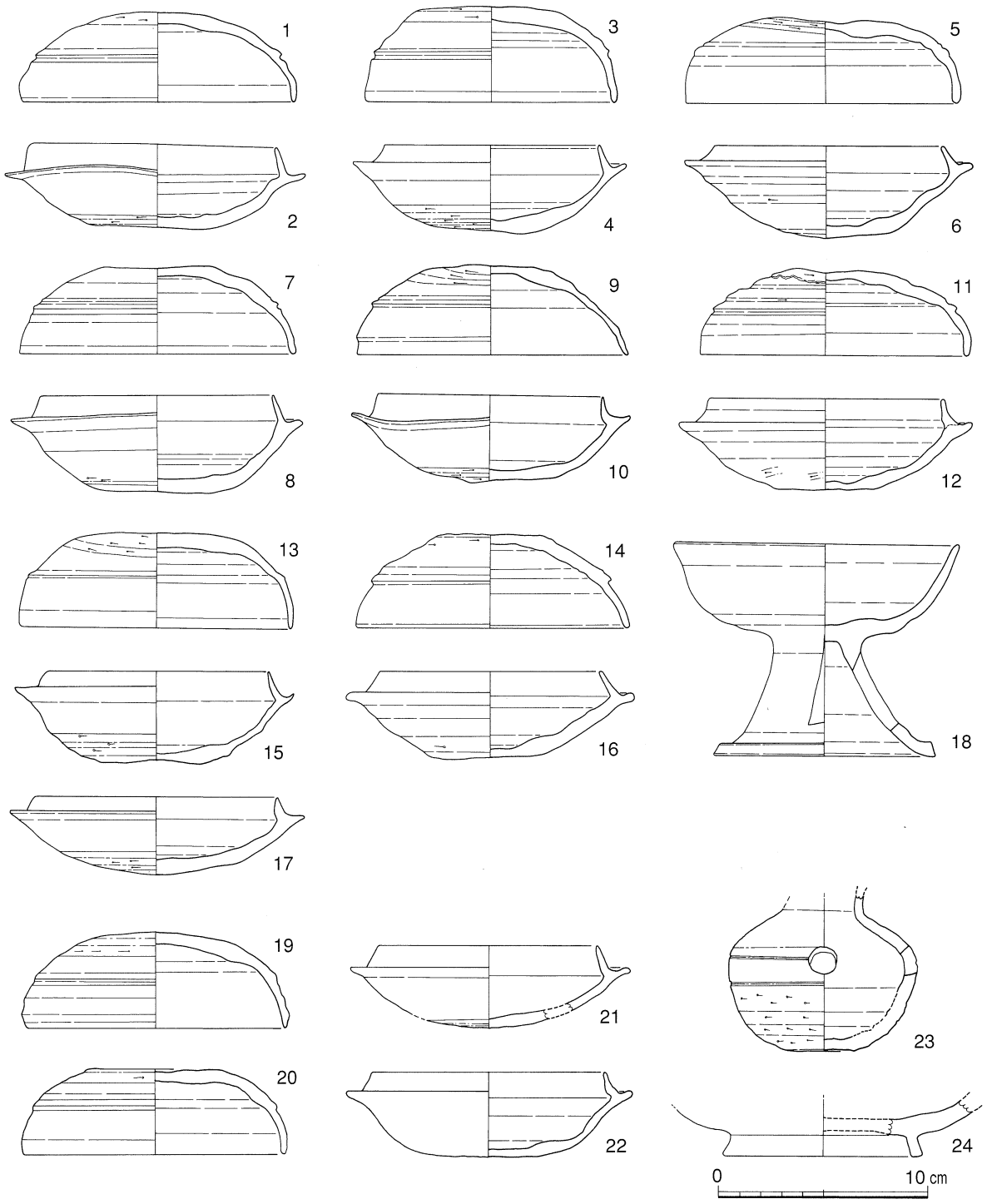
第33図　1区2号横穴墓墓道須恵器出土状況実測図（S＝1：30）



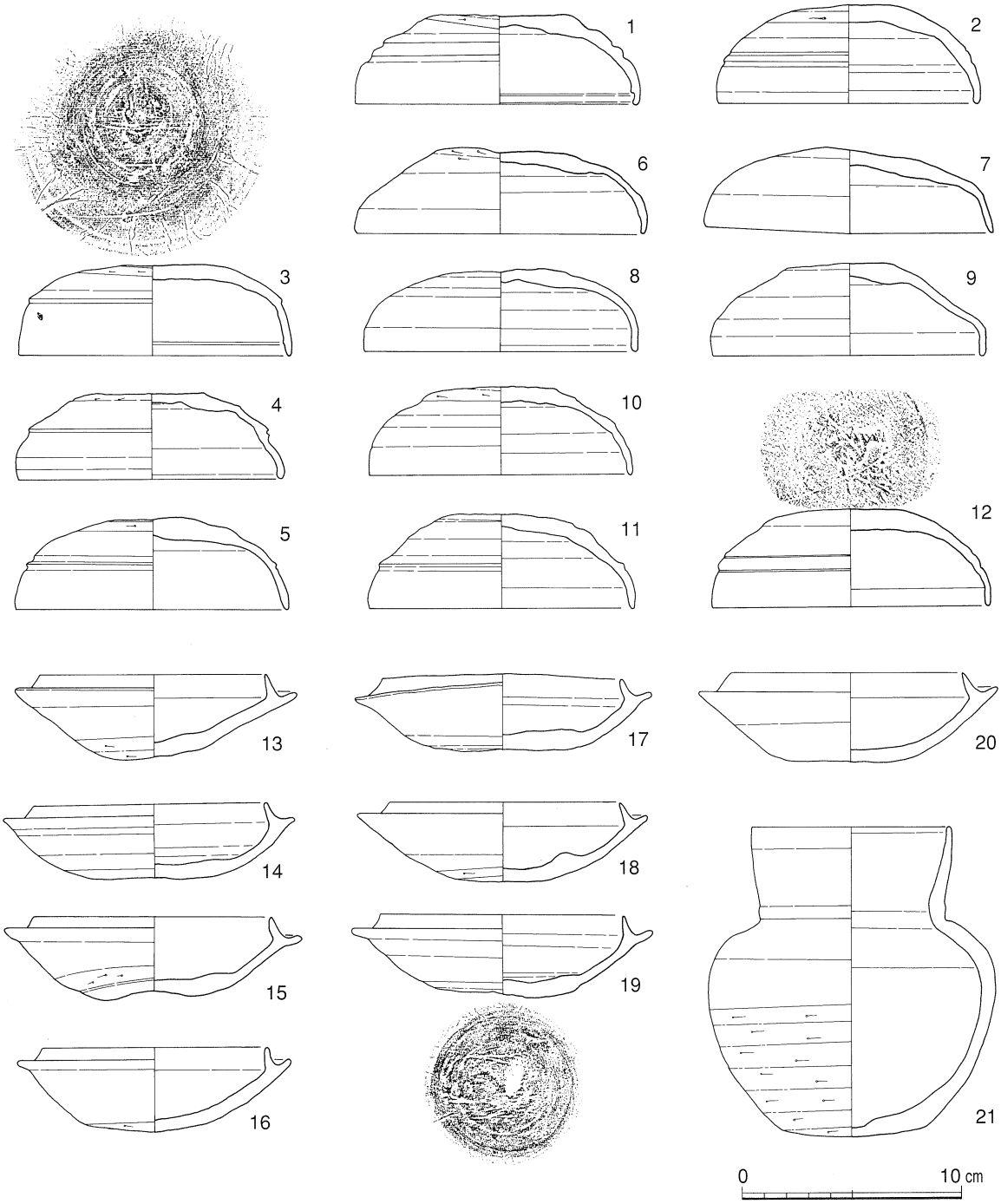
1　暗褐色土（礫を含まず、軟らかい）
2 a　暗橙褐色土（礫を含まず、やや粘質の土を含む）
2 b　褐色粘質土（固くしまり粘質）
2 c　暗橙褐色土（礫を含まず、軟らかい）
2 d　暗橙褐色土（一部 1 層をブロックに状に含む、2 e 層と類似）
2 e　暗橙褐色土（礫を含まず、軟らかい）
3 a　暗橙褐色土（2 e 層よりやや赤みを帯びる）
3 b　暗赤褐色土（礫を多く含み、やや固くしまる）
4 a　暗赤褐色土（小さい礫を含み、固くしまる）
4 b　暗黄褐色土（礫を若干含み、軟らかい）
4 c　黄褐色土（礫を若干含み、軟らかい）
4 d　暗赤褐色土（礫を若干含み、やや固くしまる）
4 e　暗褐色土（暗橙褐色土をブロック状に含み、5 a 層よりも粘質）
5 a　黒色土（礫を含まず、さらさら）
5 b　暗黄褐色土（粘質で、礫を含まず固くしまる）
5 c　暗赤褐色土（礫をほとんど含まず、軟らかい）
6　暗赤褐色土（小さい礫を含み、やや固くしまる）
7 a　暗橙褐色土（礫を若干含み、さらさら互層状）
7 b　暗赤褐色土（礫を若干含み、やや固くしまる）
8　暗橙褐色土（やや大きな礫を含み、バサバサ）
9 a　暗黄褐色土（礫を含まずさらさらし、軟らかい）
9 b　黒色土（礫を含まず、軟らかい）
9 c　黒色土（粘質の土を若干含む）
9 d　暗褐色土（礫をほとんど含まない）
9 e　暗赤褐色土（礫を若干含み、軟らかい）
9 f　暗赤褐色土（礫をほとんど含まず、軟らかい）
9 g　暗赤褐色土（礫を若干含み砂質）

第 34 図　1 区 2 号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）

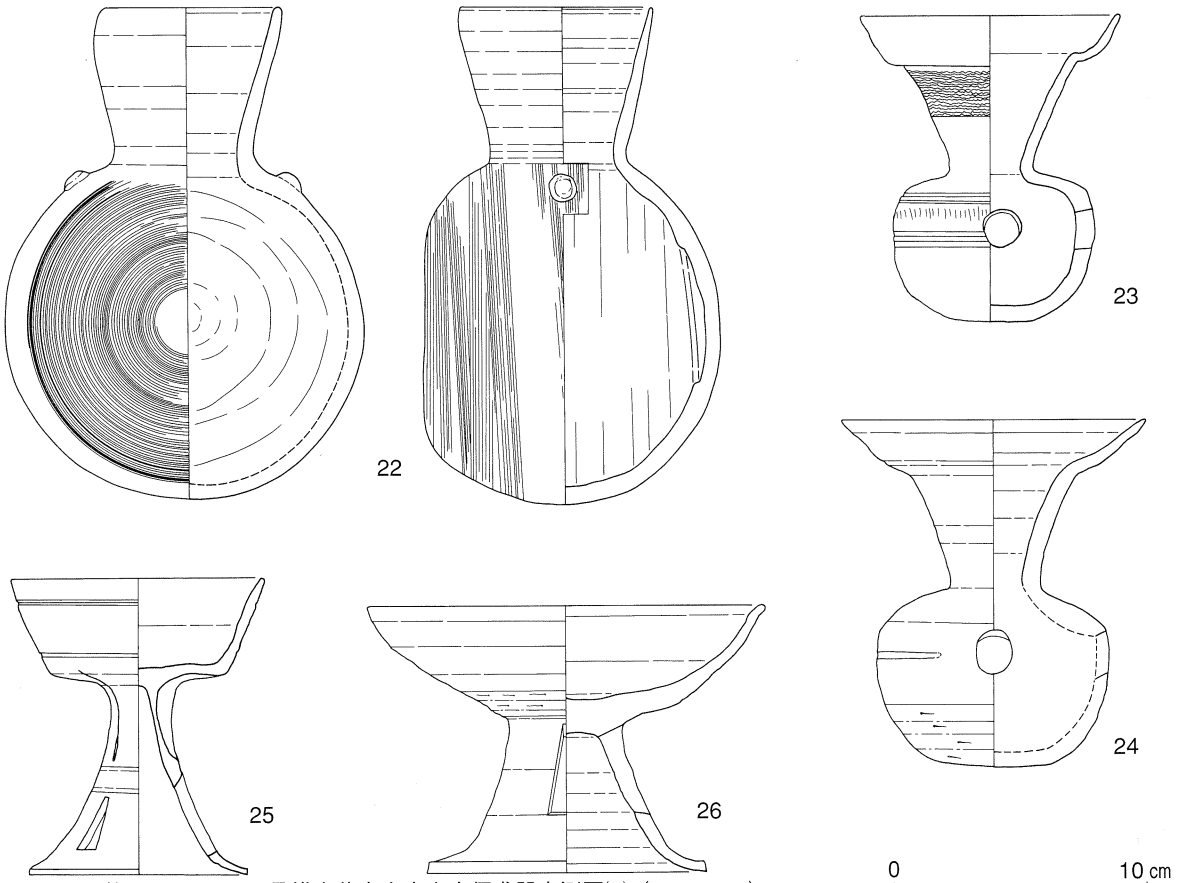
には木質が残っている。鉄斧は袋部が横断面長方形で折り返しは完全に密着しており、縦断面はほぼ左右対称である。肩部はわずかに張り出し、全体的に細長い。



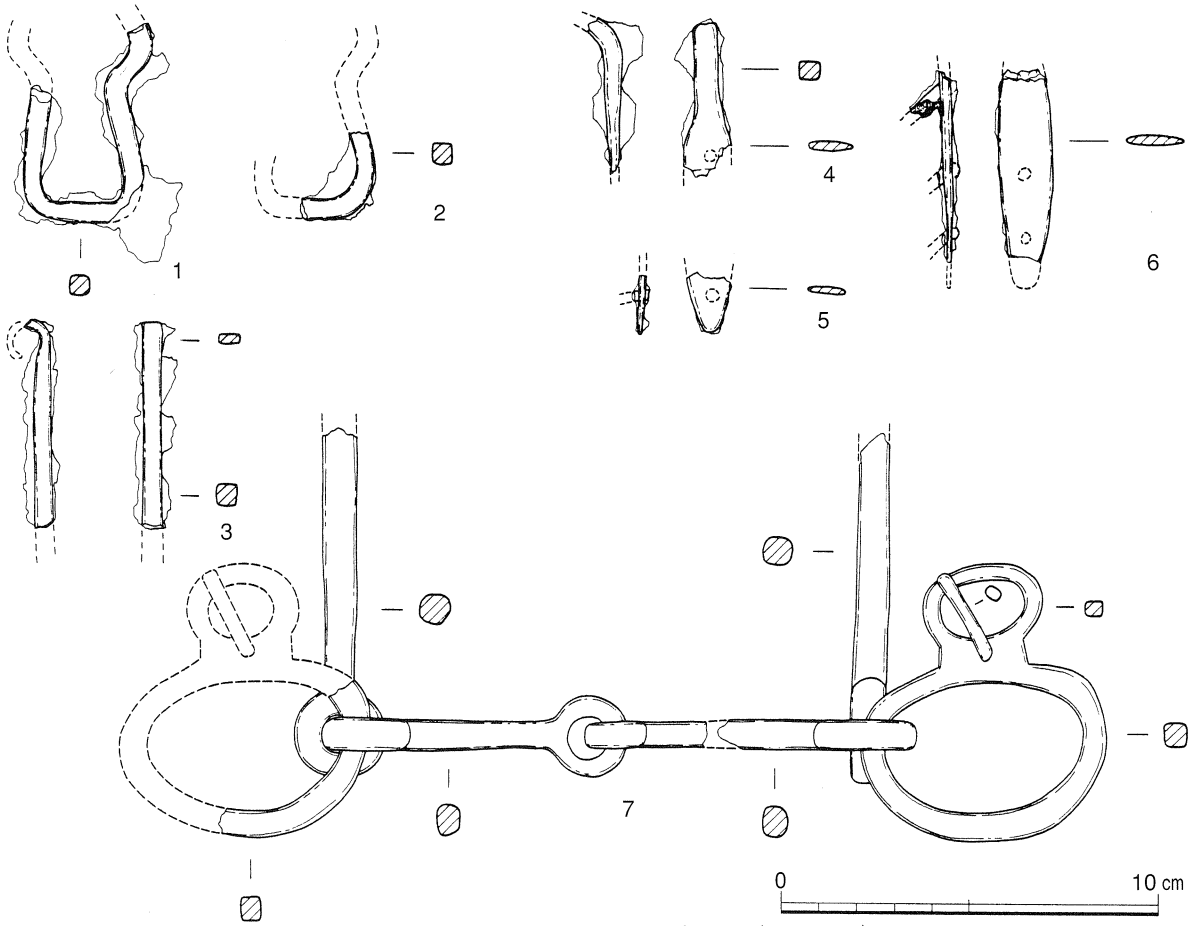
第35図　1区2号横穴墓　墓道出土須恵器実測図（S＝1：3）



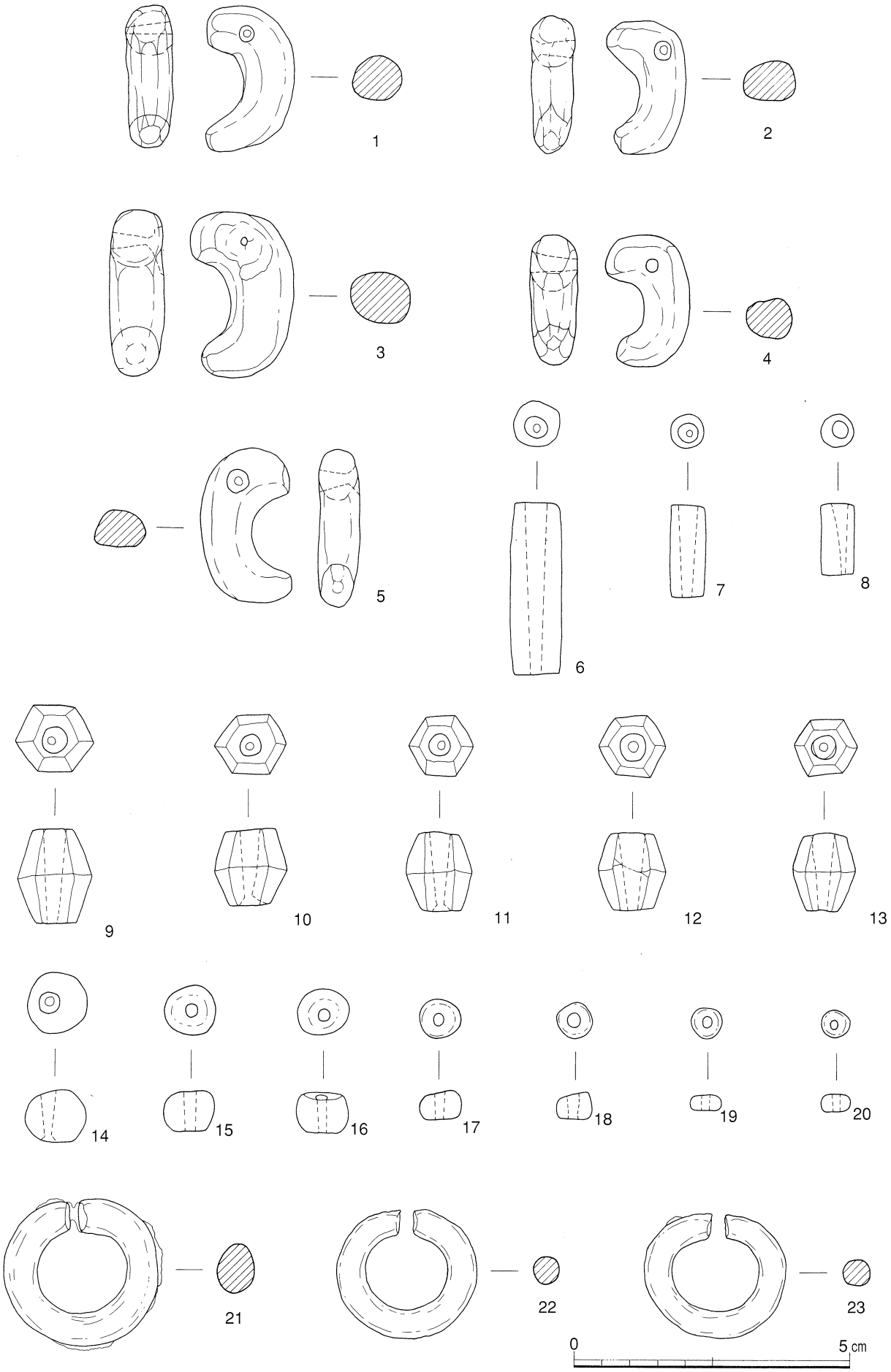
第36図　1区2号横穴墓玄室内出土須恵器実測図(1)（S＝1：3）



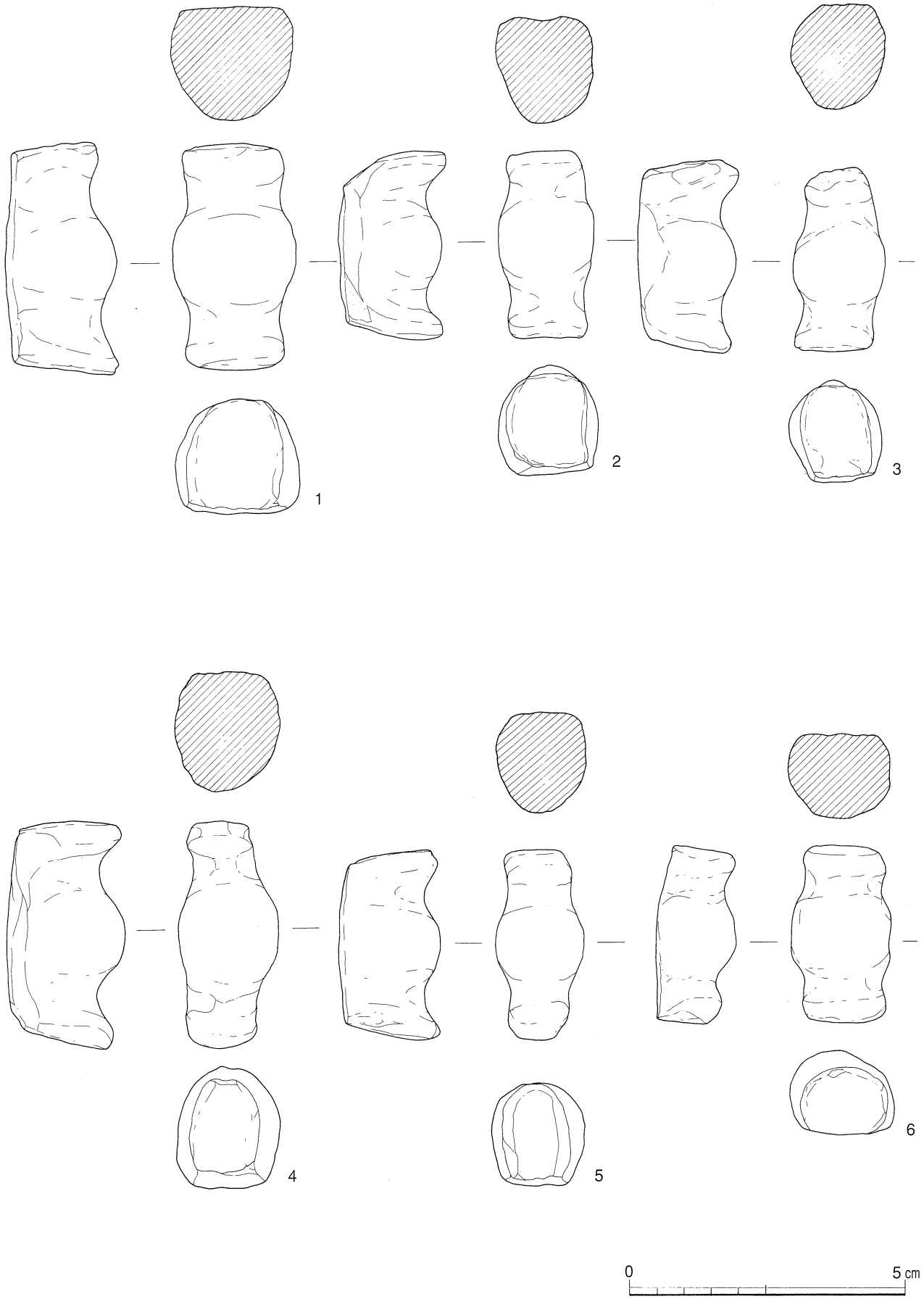
第37図　1区2号横穴墓玄室内出土須恵器実測図(2)（S＝1：3）



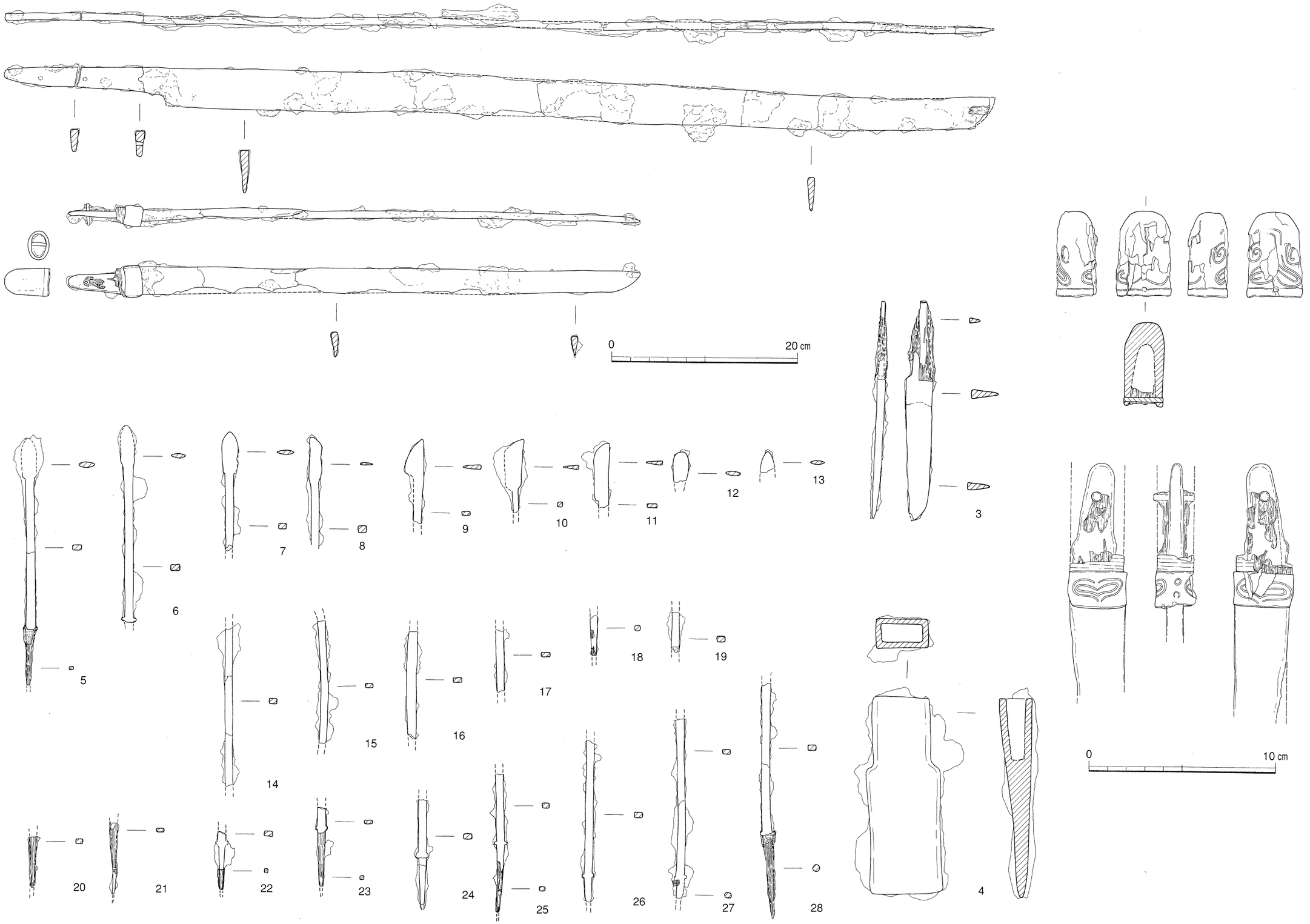
第38図　1区2号横穴墓出土馬具実測図（S＝1：2）



第39図　1区1号横穴墓出土玉類・耳環実測図（S＝1：1）



第40図　1区2号横穴墓・2号墳出土三輪玉実測図（S＝1：1）

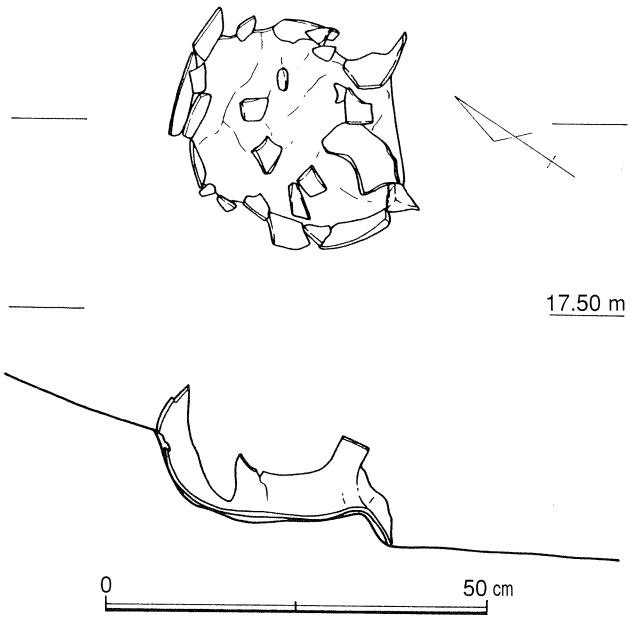


第41図　1区2号横穴墓出土鉄器実測図（S＝1：4、1：2）

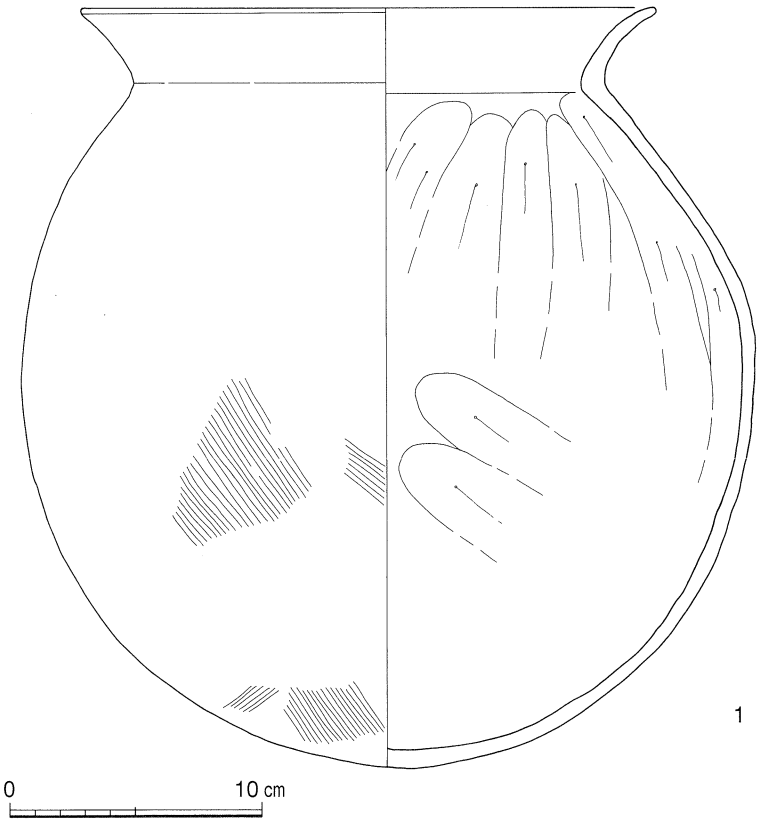
［ＳＸ０４］（第42、43図）

２号横穴墓の前庭の下方約３ｍの地点で、土師器甕が１点、口縁部を下方に向けて出土した。据えた状態での上半部は既に失われており、下面が曲線を呈した地山に密着した状態で検出されている。小規模な土壙の底に置かれたものと推測される。

この土師器の性格は不明であるが、安来市岩屋口北遺跡の調査で、横穴墓の前庭部下方の地山上に須恵器を置く例が検出されており、同様の性格のものの可能性がある。そうであれば横穴墓に伴うこととなり、何らかの祭祀にかかわる遺構かも知れない。土師器はほぼ円形の胴部に外反する単純口縁が付くもので、その特徴は横穴墓と同時期と考えて矛盾はない。



第42図　１区SX04土師器出土状況実測図（Ｓ＝１：10）



第43図　１区SX04出土土師器実測図（Ｓ＝１：3）

[3 号横穴墓]

位　　置（第 7 図）　2 号横穴墓の西側約 5 m、2 号墳のくびれ部から前方部にかけてのほぼ直下に当たる地点で 3 号横穴墓は検出された。床面の高さは 2 号横穴墓よりもおよそ 2 m低く標高約16.5mと、1 号横穴墓とほぼ同様のレベルに開口している。1 号、2 号、3 号の各横穴墓は、平面的に見ても立面的に見ても 2 号横穴墓を頂点とする 2 等辺三角形を呈すように配置されている。その位置関係や、前庭部の須恵器甕片と古墳裾部出土の須恵器甕片の接合関係から、2 号横穴墓と同様 3 号横穴墓も、2 号墳に伴う主体部と考えられる。

3 号横穴墓全体の構造（第44図）　3 号横穴墓は 1 つの前庭部を共有して 3 穴の横穴墓が開口する特殊な構造をとっている。しかも安来平野によく見られるような大形の前庭部を共有して各々平行して開口するのではない。通常通り前庭部の奥壁に 1 穴開口、他の 2 穴は両側壁にそれぞれ開口するという当地方では珍しい構造である。それでも右側壁に開口する横穴墓は小形不定形で、類似した例はあるが、左側壁に開口する横穴墓は通例の横穴墓と同様の規模、構造を取っており、このような例は出雲地方では極めて珍しいと言える。

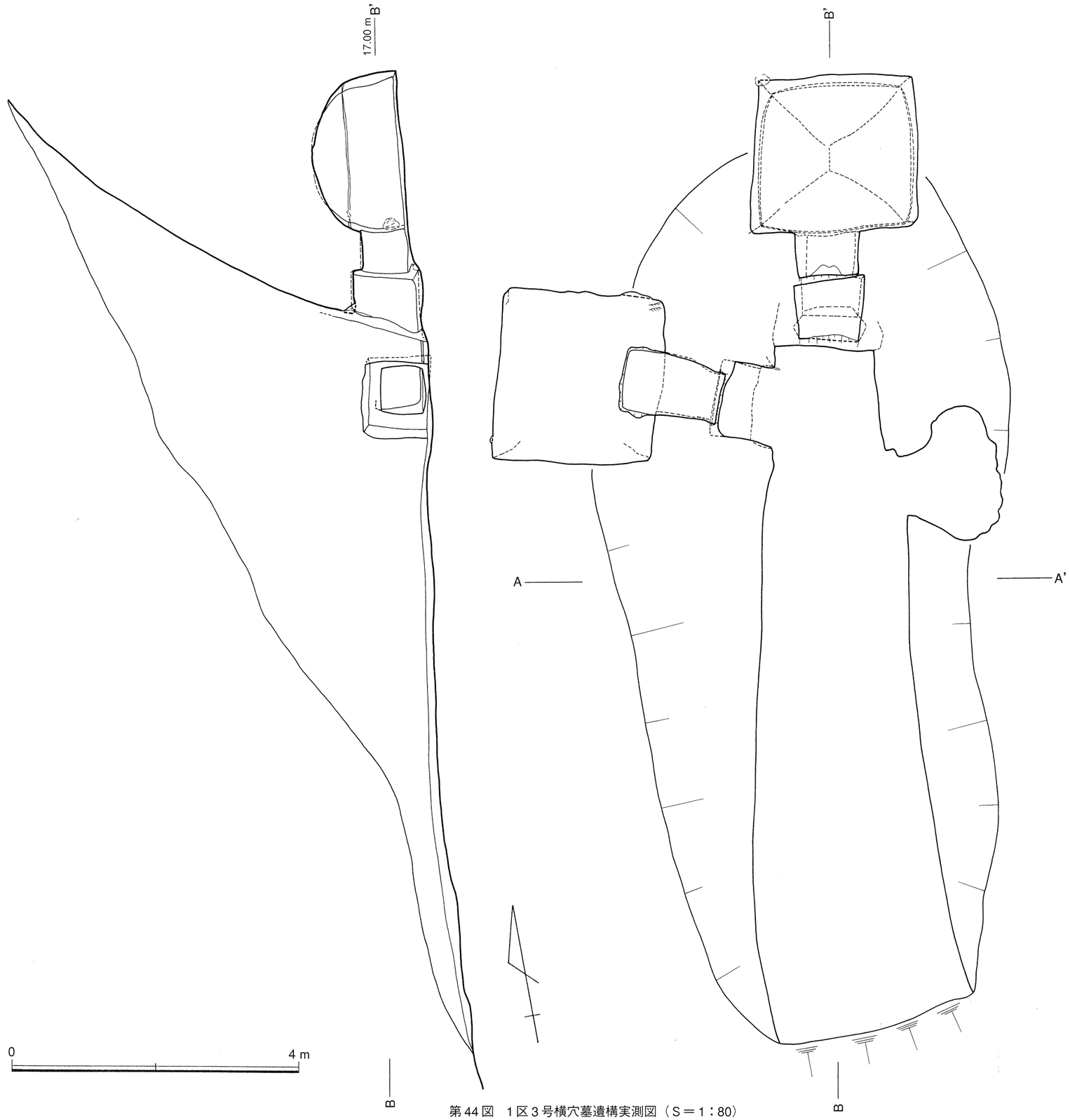
ここでは右（東）側壁に開口する小形の横穴墓を 3 －A号横穴墓、左（西）側壁に開口する横穴墓を 3 －B号横穴墓、正面（奥壁）に開口する横穴墓を 3 －C号横穴墓と呼称することとする。以下、まず共有する前庭部と、そこに堆積した土砂の状況、前庭部の遺物出土状況を述べた後、各A、B、C横穴墓について順次述べていきたい。

前 庭 部（第44図）　前庭部は長さが9.8m、幅が羨門側で1.4m、先端側で2.2mと、幅が余り広くなく細長い墓道の形態に近いものである。ただ前方に向かってわずかづつではあるが幅を広げている。側壁、奥壁はは60°前後の急角度で掘り込まれており、高さは奥壁部分の現状で5.7mと非常に深く掘り込まれている。

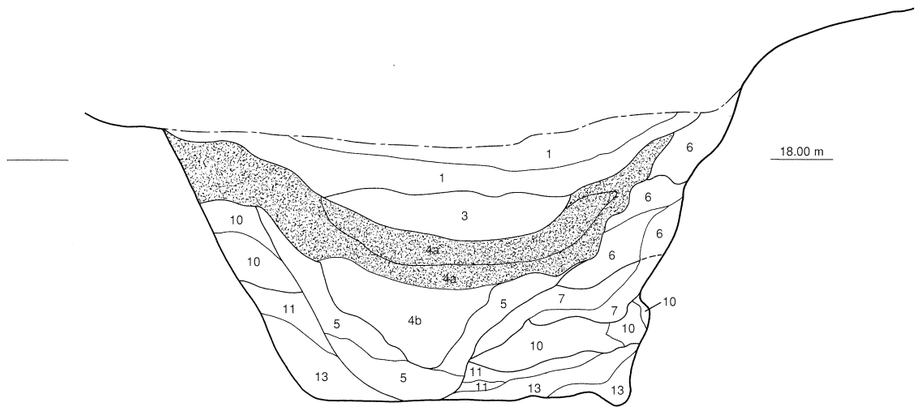
前庭部土層堆積状況（第44図）　前庭部は土砂で埋め尽くされ、その観察により追葬等の侵入の痕跡を見ることができる。まずこれらの土層は大きく 3 つの層群に分けることができる。1 つは追葬等による侵入の度に形成された埋土や堆積土で「1 群」と呼ぶ。第45図縦断土層 4 層～15層にあたり、厚いところでは床面から 1 mの厚さで堆積している。2 つめは最終的な侵入の後に埋められた土砂で羨道の前面に三角形状に堆積している。縦断土層 2 層～ 3 層が対応し、「2 群」と呼ぶ。最後はこれら 2 群の土層の上に堆積している土砂で「3 群」と呼ぶ。

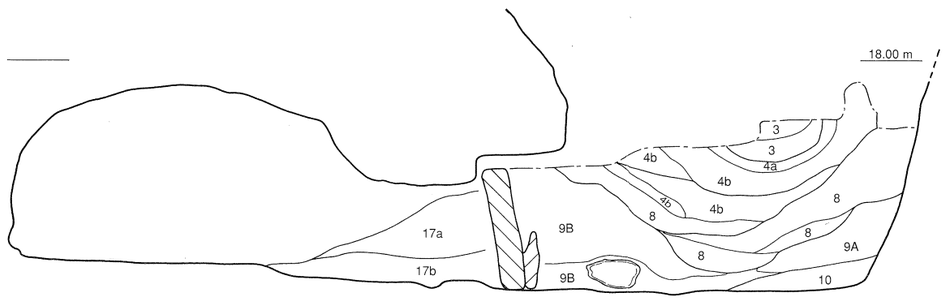
「1 群」は、また 2 つの層群に分けることが出来る。一つは床面上に順次水平に近い状態で堆積している層で、横断土層 6 、7 、10～13層に対応する。もう一つはそれらの層を大きく切り込んだ後に堆積した層で、横断土層 4 層～ 5 層に対応する。前者の水平に近い層は互層状に堆積しており、さらに 4 分割できる。それらの各面が追葬面であるのか前庭を埋める際の工程の差であるのかを判断するのは難しいが、ここでは追葬面と理解し 4 度の侵入があったと考えておきたい。後者の層群は明らかに前庭が埋まった後に再び掘り込まれた際に形成された層である。この層も最下面の 5 層下面、5 層上、4 層上の 3 つの面があり、それぞれ 5 次、6 次、7 次の侵入痕となる。各面の下には腐食土層らしき黒ずんだ層が認められるが、特に 7 次面の下面の 4 層は顕著な黒色土で、遺物も多く出土している。

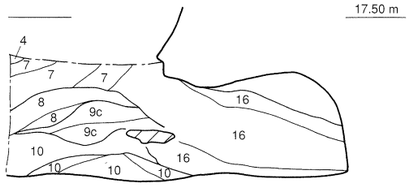
「1 群」土層に見られる侵入が 3 穴のどの横穴墓に対応するかについては、少なくとも 3 －B横穴墓は地山直上に閉塞石が置かれて動かされた形跡がないことから、大部分が 3 －C横穴墓に対応する



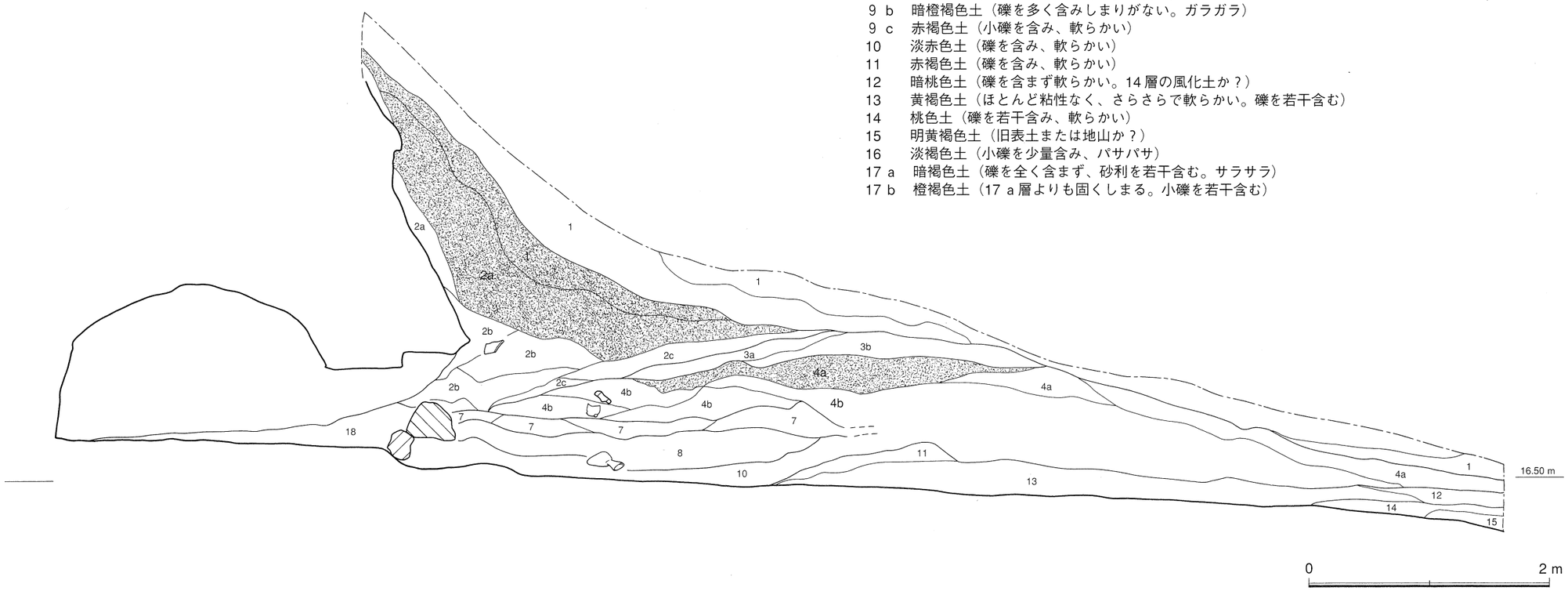
第44図　1区3号横穴墓遺構実測図（S＝1：80）



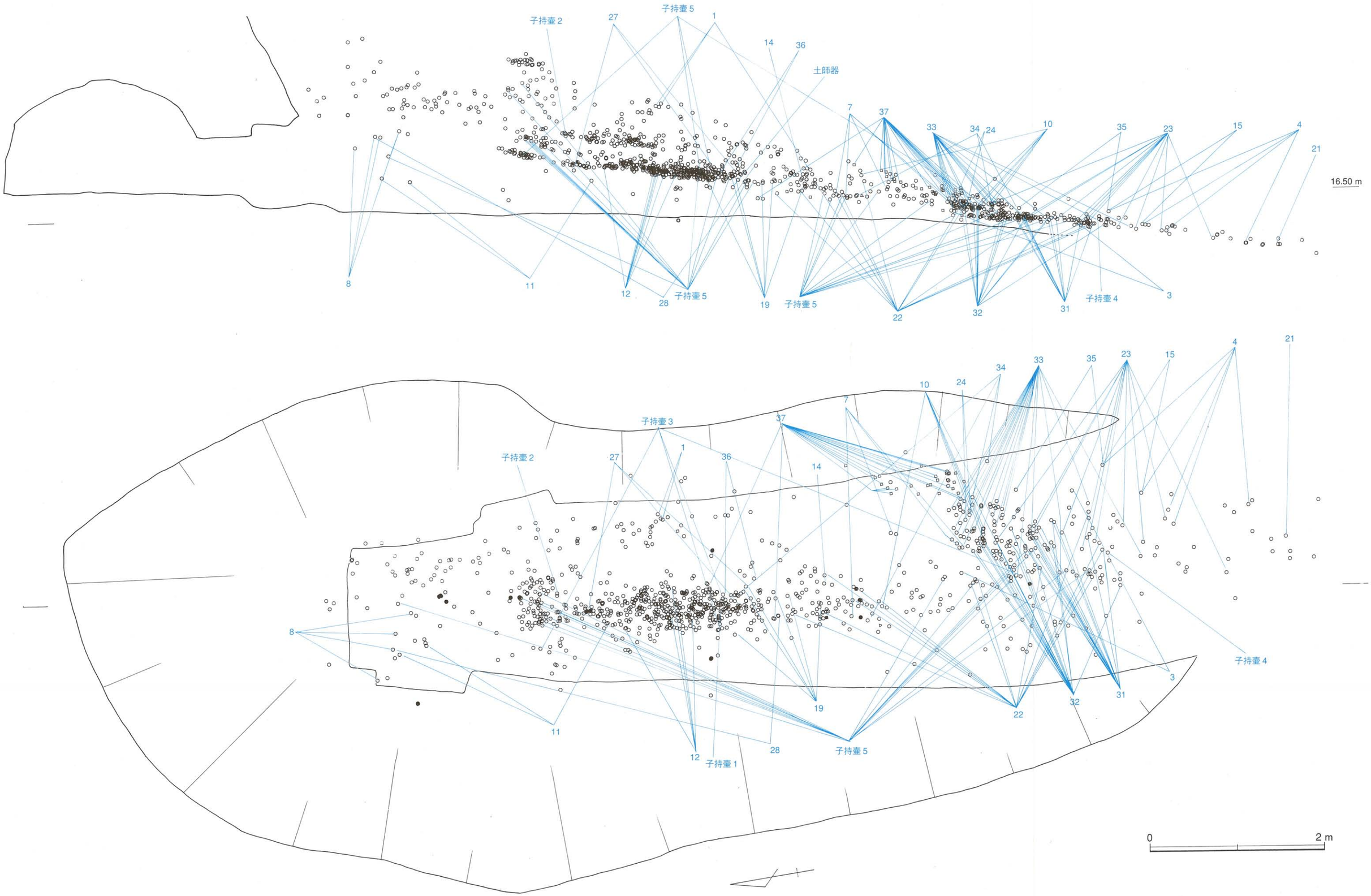




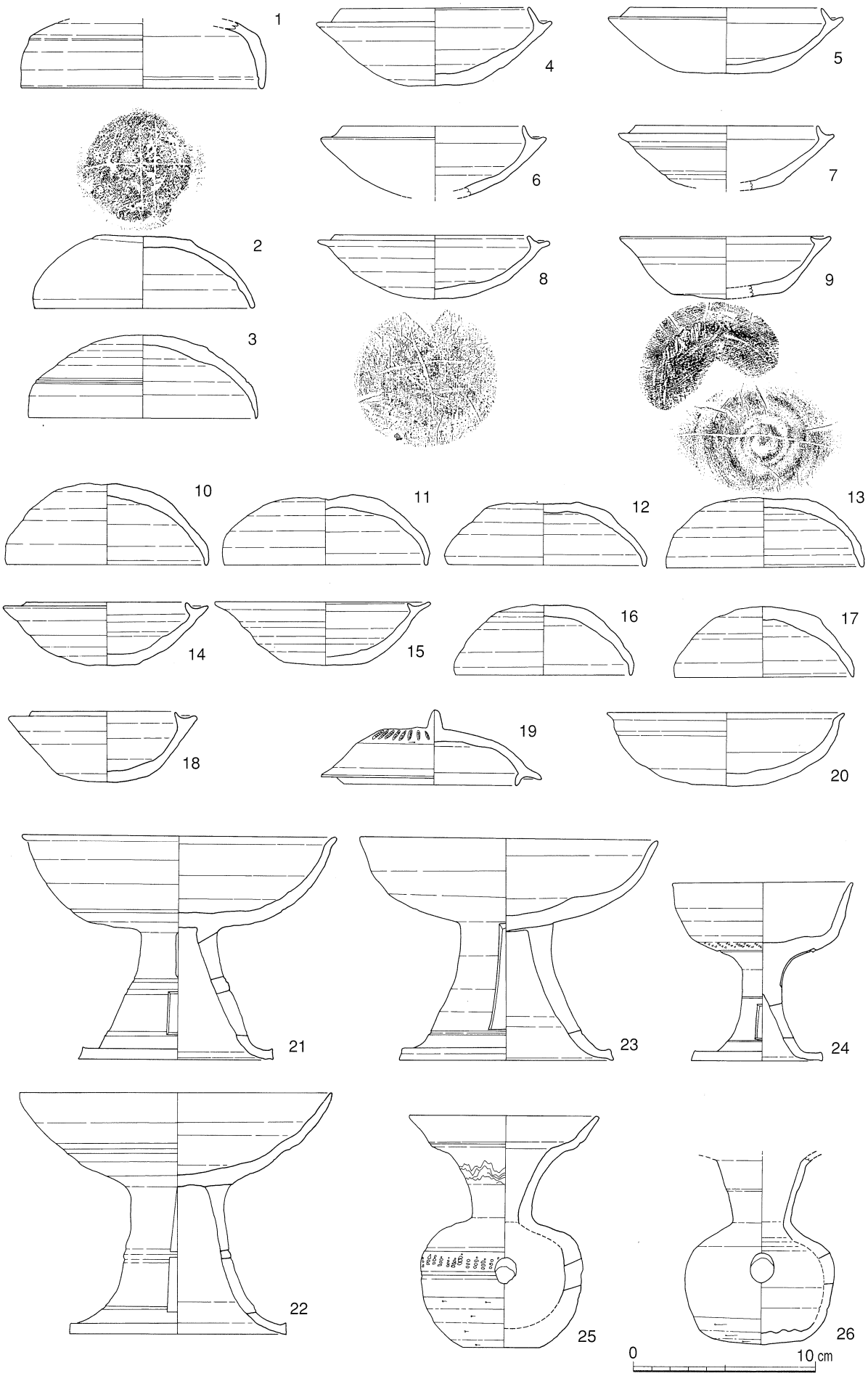
1　暗褐色土（礫を全く含まず、軟らかい）
2 a　黒色土（礫をほとんど含まず、粘質で軟らかい）
2 b　暗褐色土（礫を全く含まない。パサパサ）
2 c　橙褐色土（礫を含み、やや固くしまる）
3　暗橙褐色土（下層の黒色土を含み、やや固くしまる）
4 a　黒色土（礫を若干含み、やや粘質で固くしまる。黒部分はサラサラ）
4 b　暗橙褐色土（粘性あり、他より暗い。礫を多く含み固い）
5　赤褐色土（小礫を多量に含み、固くしまる）
6　黄褐色土（礫を含まず、軟らかい）
7　暗橙褐色土（小礫を含み、固くしまる）
8　暗橙褐色土（他より赤みがあり、礫を含みやや固くしまる）
9 a　黄褐色土（しまりがなく、礫を多く含む）
9 b　暗橙褐色土（礫を多く含みしまりがない。ガラガラ）
9 c　赤褐色土（小礫を含み、軟らかい）
10　淡赤色土（礫を含み、軟らかい）
11　赤褐色土（礫を含み、軟らかい）
12　暗桃色土（礫を含まず軟らかい。14層の風化土か？）
13　黄褐色土（ほとんど粘性なく、さらさらで軟らかい。礫を若干含む）
14　桃色土（礫を若干含み、軟らかい）
15　明黄褐色土（旧表土または地山か？）
16　淡褐色土（小礫を少量含み、パサパサ）
17 a　暗褐色土（礫を全く含まず、砂利を若干含む。サラサラ）
17 b　橙褐色土（17 a 層よりも固くしまる。小礫を若干含む）



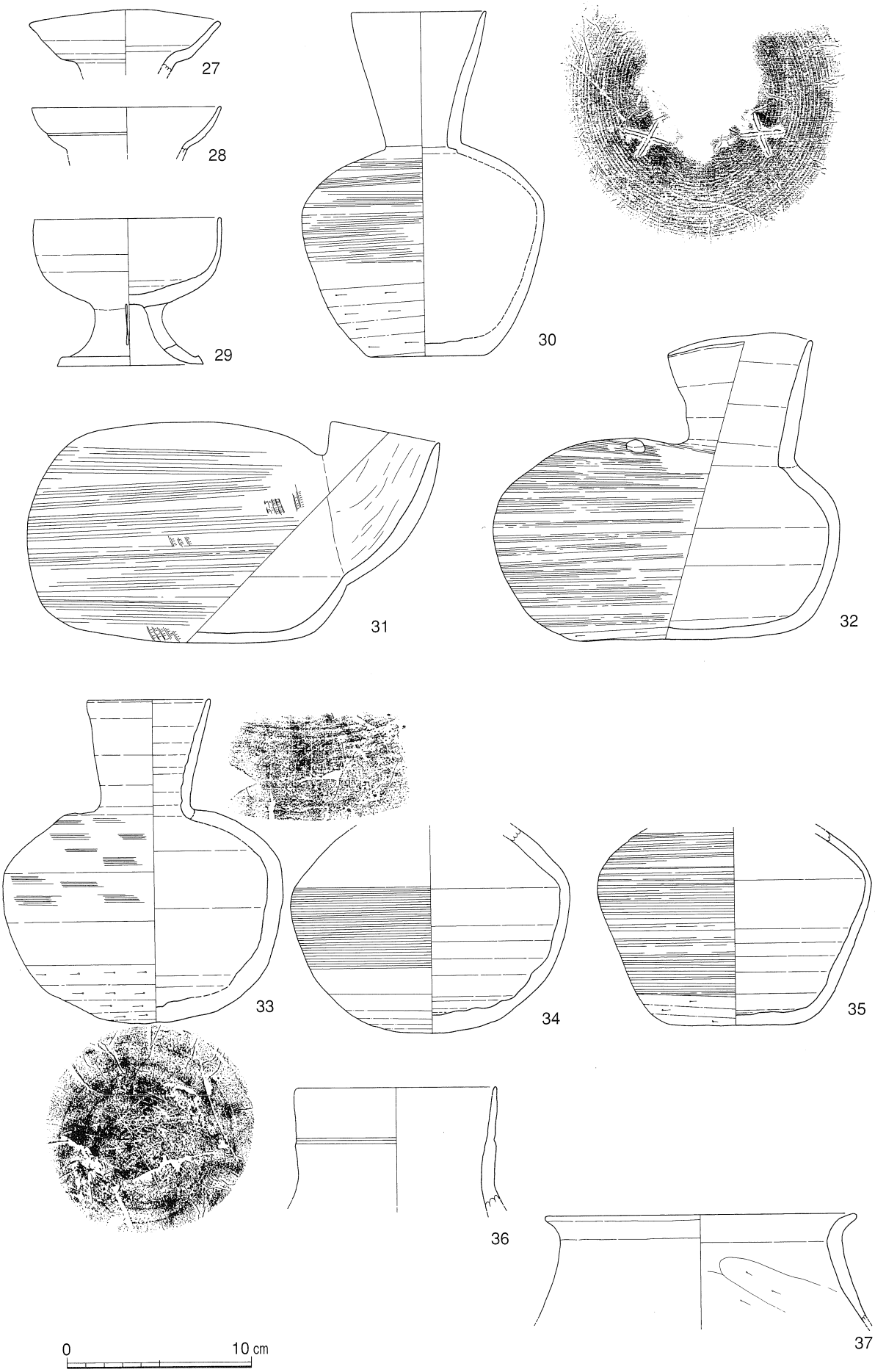
第45図　1区3号横穴墓土層実測図（S＝1：40）



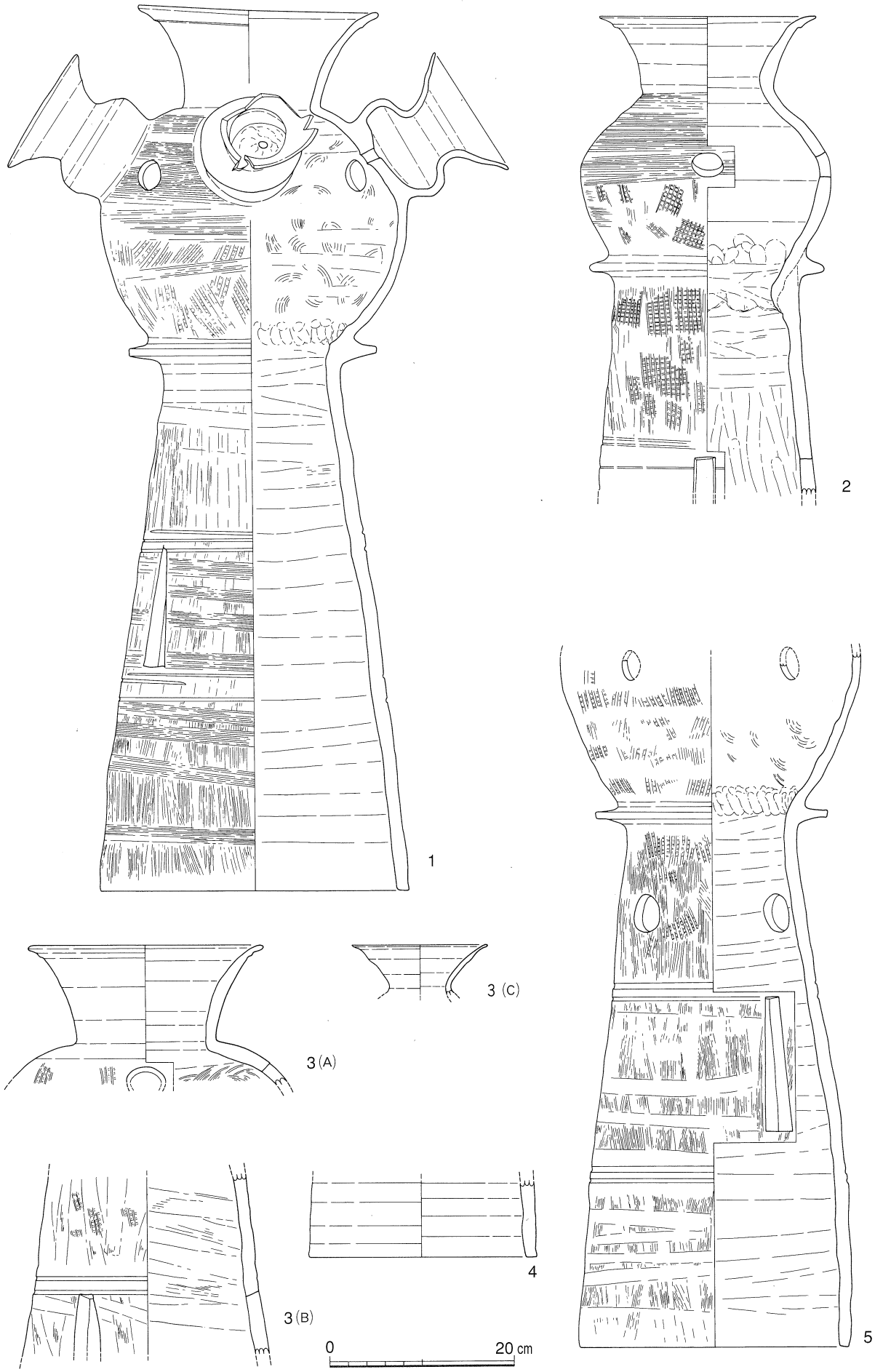
第46図　1区3号横穴墓前庭遺物出土状況実測図（S＝1：40）



第47図　1区3号横穴墓前庭部出土土器実測図(1)（S＝1：3）



第48図　1区3号横穴墓前庭部出土土器実測図(2)（S＝1：3）



第49図　1区3号横穴墓前庭部出土子持壷実測図（S＝1：4）

可能性が高い。「3群」は最上面の流土とその下の黒色土に分かれる。黒色土はいわゆる腐食土の可能性もある。

前庭遺物出土状況（第45図）　前庭部からは黒色土である4a層中を中心に数多くの須恵器を中心とした遺物が出土した。平面的には前庭部全域から出土しているが、特に中央部付近に集中している。須恵器の器種は甕の他、蓋坏類20個体以上、高坏5個体、瑳4個体、壺4個体以上、平瓶2個体の他土師器もあり、中央付近からは鉄斧も出土している。

これらの須恵器の多くは破片となって散乱し、かなり離れて出土した破片が接合することから破砕された可能性もある。後で述べるように時期差もあることから、3－C号横穴墓の玄室から掻き出された遺物の可能性もある。

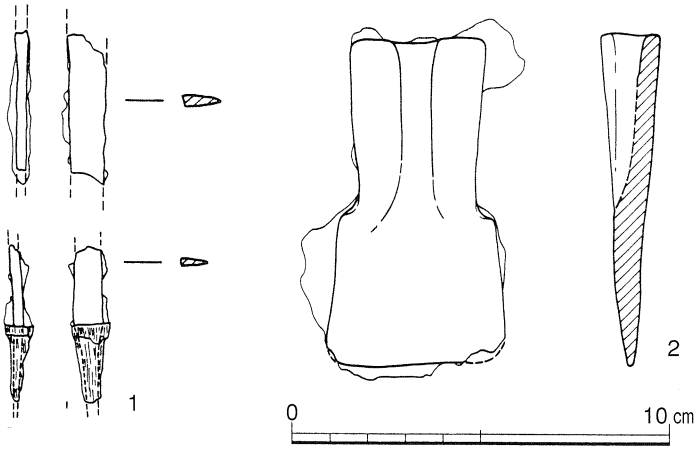
一方5次侵入の上面（横断5層下面）には4個体以上の須恵器子持ち壺が置かれていた。1点（第49図1）は前庭のほぼ中央に完形で置かれていたが、その他はその前方から破片で出土した。

遺　　物（第47図～49図）　遺物の詳細は観察表を付しているので大要だけを記す。須恵器の時期は大谷編年出雲4期～6期に併行するが、4期の遺物破片1個のみでしかも流入土内出土であることから、横穴墓の造営時期は出雲5期と考えている。子持壺は全形がわかるのは第49図1のみであるが、基本的な特徴は共通している。口径部は次第に外反してゆき、端部外面にはわずかに段を設ける。子壺は4個で親壺と脚部は貫通しているが、境には鍔状の突帯を付けている。脚部は下方に向かって単純に開く形態である。

写真1　子持壷・甕　調査状況

3 －A号横穴墓（第51図）

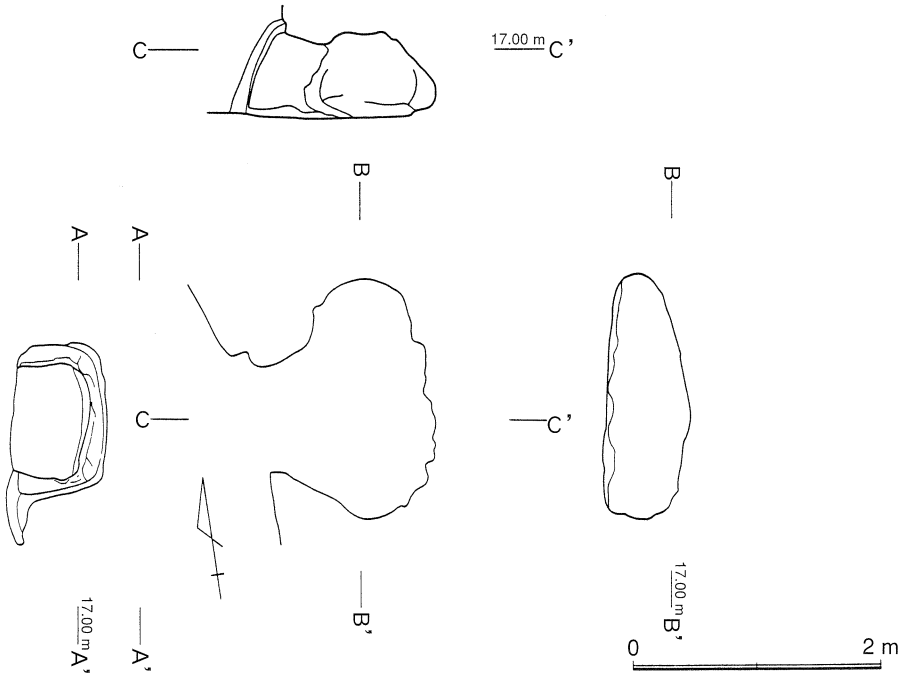
3 号横穴墓前庭部の奥壁から約1.3m前方の右壁に穿たれた小形の横穴墓で、N－82°－Wとほぼ東向きに開口する。玄門の正面観は丸みを帯びた横長の長方形で、幅0.9m、高さ0.55mを測る。玄門の外側には幅15㎝前後、奥行き10㎝前後の抉り込みがめぐっている。閉塞用の木蓋等を受けるための施設であろう。玄門の中央付近に、床面から約20㎝浮いた状態で角礫が1個検出されたが、これは木蓋を支えるためのものであった可能性がある。玄門の長さは、玄室との境が不明瞭ではあるが40～50㎝前後と考えられる。



第50図　1区3－A号横穴墓玄室内及び前庭部出土鉄器実測図（S＝1：2）

玄室は幅1.9m、奥行き0.9mの不正な長円形を呈す。四壁から天井にかけては界線がなく丸天井を呈し、高さは0.68mと低い。

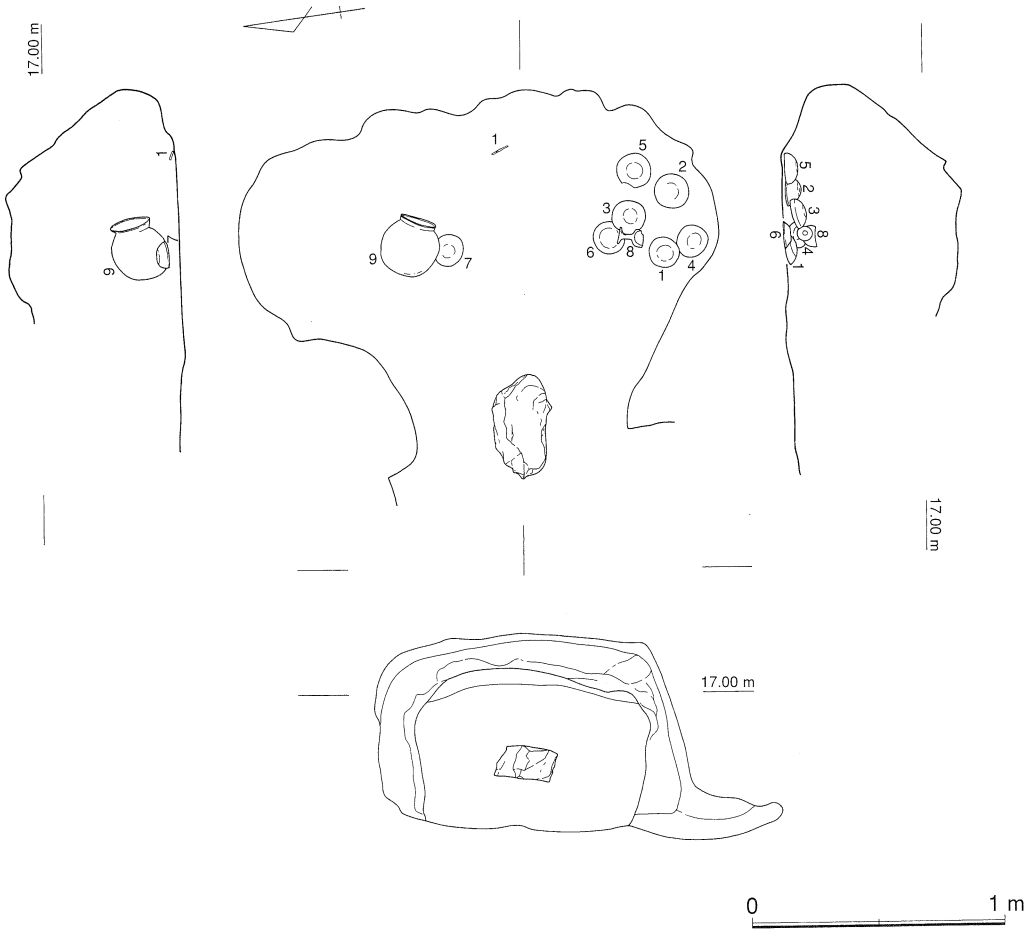
土層堆積状況（第45図）　玄門から前庭部にかけて、土饅頭状に土層の高まりを見ることが出来る。これは木蓋が腐朽した後に浸入した土砂を、追葬等の後の侵入時に玄室内より掻き出した土と考えるのが自然であろう。この高まりには4つの面が認められるが、これが4回の侵入なのか掻き出しの過程の結果なのかは不明だが、玄門付近で検出された角礫が木蓋の押さえであるならば、この石が載る10、16層上面は明らかに追葬面となる。3－C号横穴墓の追葬との前後関係は明確ではない。



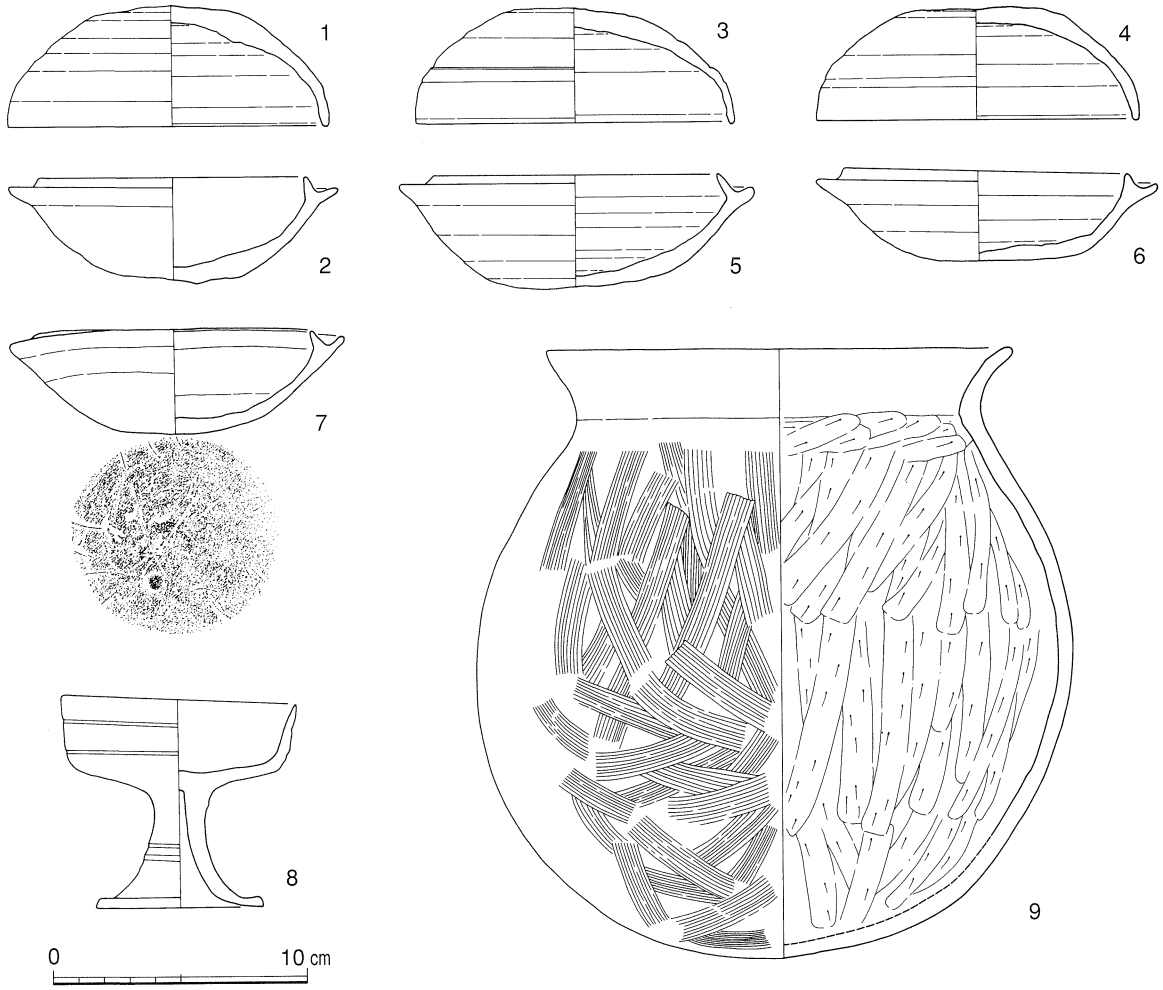
第51図　1区3－A号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

遺物出土状況（第52図）　玄室内の右壁際で、須恵器蓋 3 点、杯身 3 点がいずれも伏せた状態で、小形の高坏が 2 点の蓋坏の上に載った状態でそれぞれ出土した。また中央やや左壁寄りからは杯身 1 点が伏せた状態で、土師器甕が横倒しになった状態で出土した。一方中央奥壁沿いには鉄製刀子が 1 本出土した。

遺　　物（第53図）　須恵器蓋坏は、いずれもヘラケズリは見られず、大谷編年出雲 5 期に併行するものである。



第52図　1区3－A号横穴墓閉塞石・遺物出土状況実測図（S＝1：30）



第53図　1区3－A号横穴墓玄室内出土土器実測図（S＝1：3）

3 －B号横穴墓（第54図）

3 号横穴墓共有前庭の奥壁からすぐの左側壁に穿たれた横穴墓でS－70°－Eと西方向からやや南に振った方向に開口する。

羨道・玄門（第54図）　玄門の前に短いながらも羨道が付いており、石棺式石室形（意宇型）の形態となっている。羨道部は長さ1.08m、幅1.08m、高さ0.88mを測る。天井はほぼ平らで、よって横断面は横長の長方形を呈す。

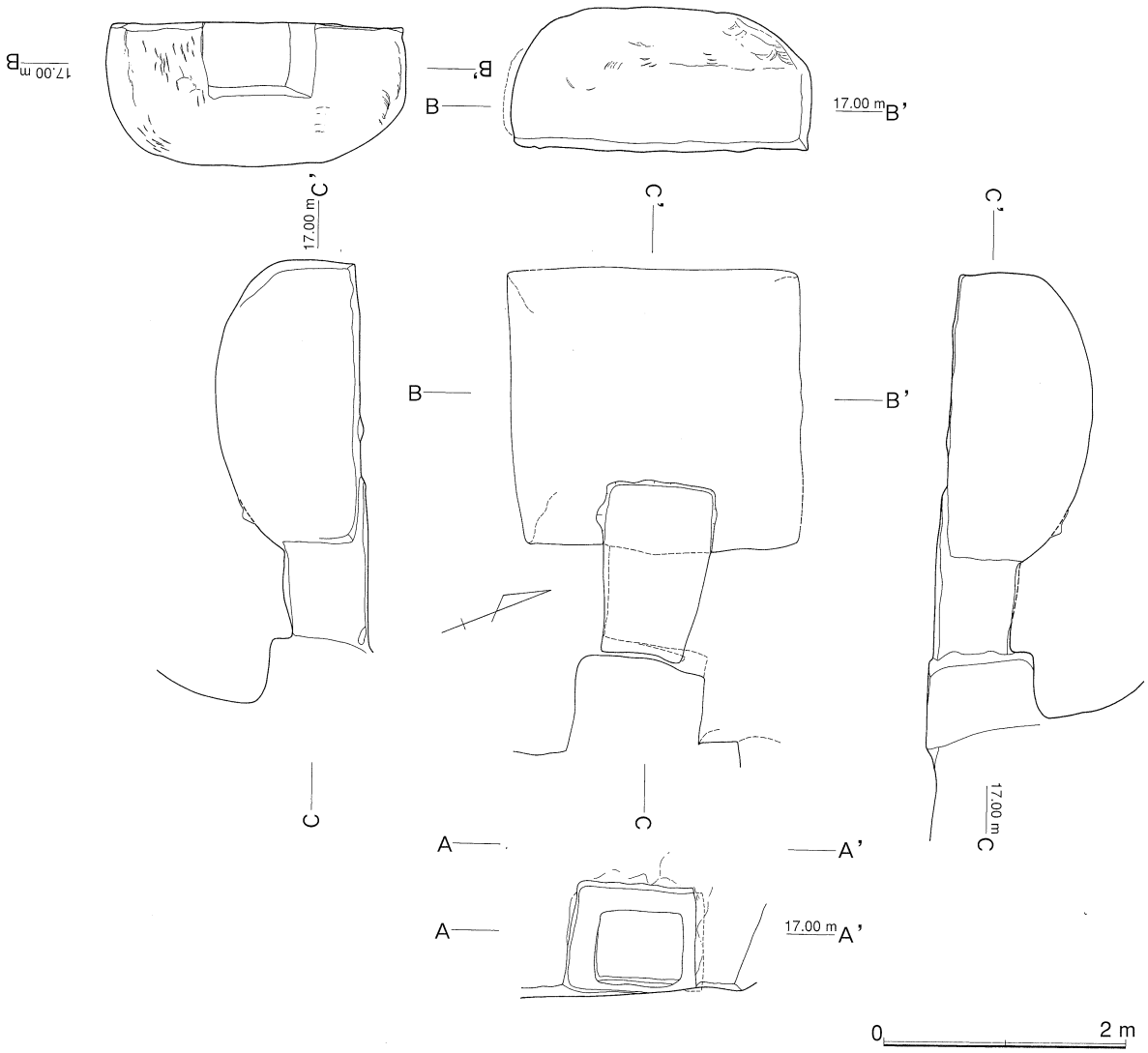
玄門は長さ0.9m、幅は玄室側が0.9m、羨道側が0.7mを測り、玄室に向かって広がる平面形を呈す。高さは0.65mで、天井は平らである。横断面は羨道と同様に横長の長方形を呈す。床面は羨道との間に高さ 5㎝内外の段を設けている。

玄　　室（第54図）　玄室は床面での規模が奥行き2.3m、幅が前壁側で2.25m、奥壁側で2.4mとほぼ正方形の平面形である。四壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面から高さ60㎝前後のところで屈曲して天井部に至る。壁と天井の境は、奥壁にはわずかながらも界線を表現したと思われるラインを観察することが出来るが、他の壁では界線は認められない。天井の形態は丸天井であるが、四壁の境の稜線から斜行する棟線がわずかながら伸びており、整正家形を指向した玄室といえるだろう。高さは1.2mを測る。床面には、玄門から連続してL字形に一段低い部分が設けられている。

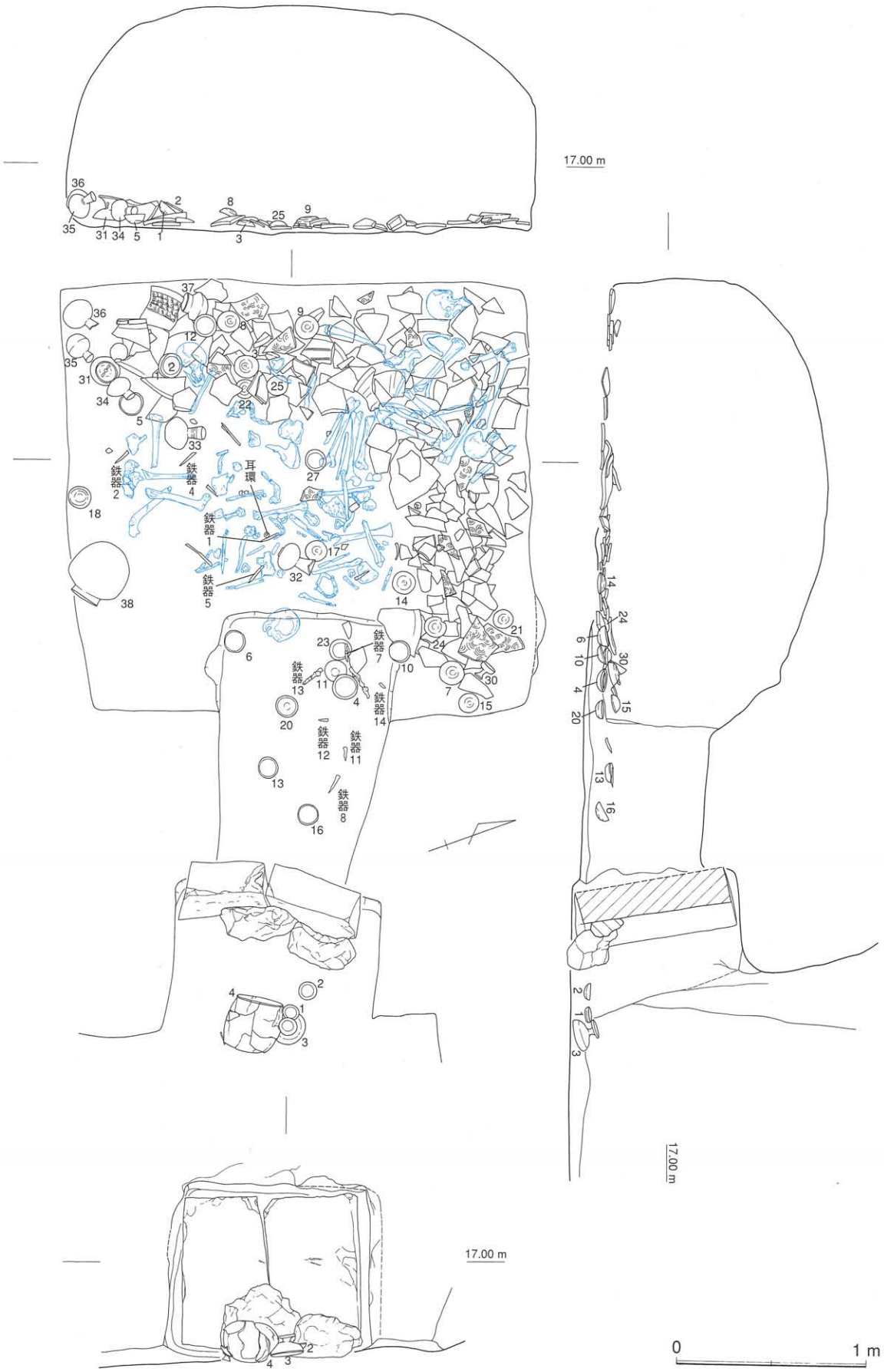
閉塞装置（第55図）　玄門の前面に、二枚の大形の切石を組み合わせた閉塞装置が検出された。この二枚の切石は凝灰岩製で、ほぼ同形同大である。ともに上辺と下辺の長さが若干違う台形で、左右で上下を逆転させて組み合わせることによって隙間をほとんどなくしている。高さも羨道の高さとほぼ一致しており、横穴墓の形態と合わせて丁寧に加工されたことがうかがえる。閉塞石の高さは78～80㎝、厚さは二石とも17㎝前後、幅は二石合わせて94㎝を測る。この石はほぼ地山直上に置かれており、前庭部が埋められる前には完全に閉塞され、その後の侵入はなかったことになる。

切石の前面からは、やや大形の角礫が二個検出された。この角礫は二枚の切石が前方に倒れるのを防ぐための押さえとして置かれたものであろう。

遺物出土状況（第55図）　羨道部の閉塞石の前面から、土師器甕１個体、須恵器高坏１個体、蓋坏１セットが出土した。土師器はほぼ床面直上に横倒しになって、須恵器はやや床から浮いており、高坏は伏せて、蓋坏はともに内面を上にして置かれていた。最終閉塞後の何らかの祭祀に使われたものであろうか。



第54図　１区３－Ｂ号横穴墓遺構実測図（Ｓ＝１：60）



第55図　1区3－B号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図（S =1：30）

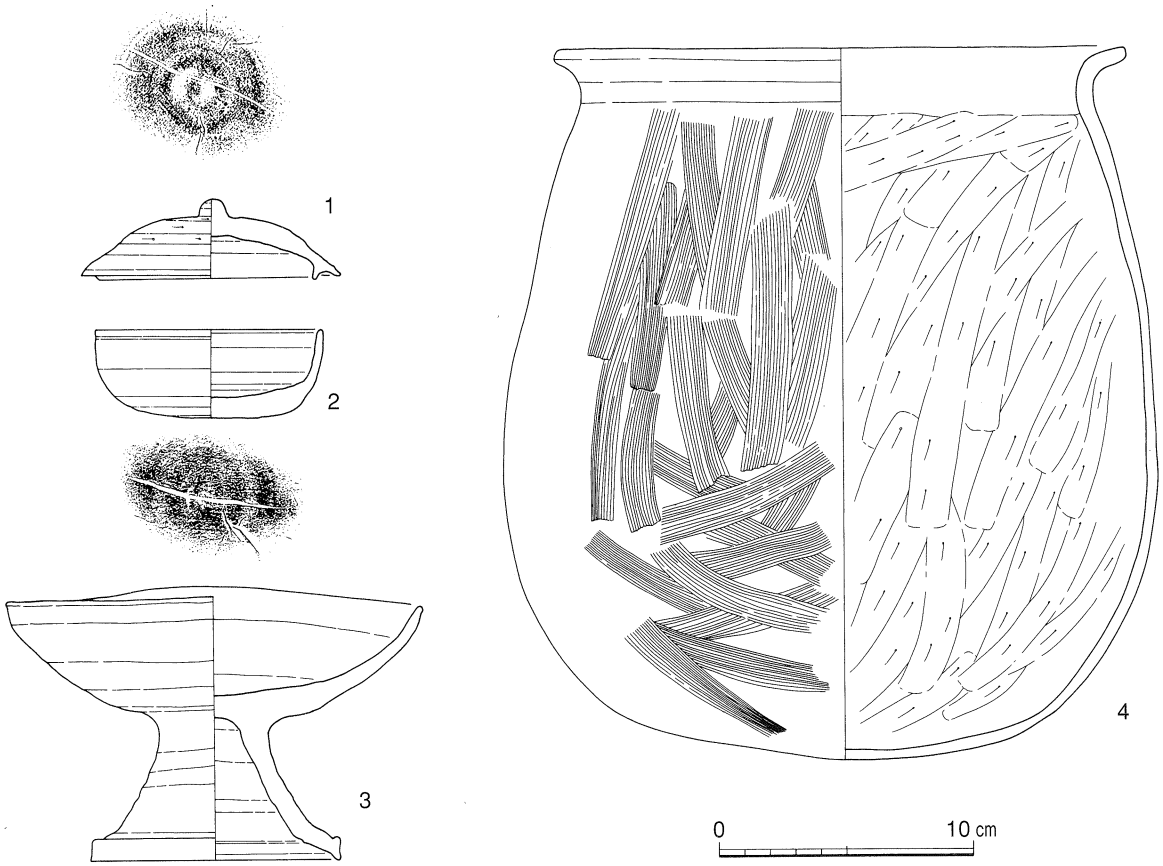
玄門から玄室の一段低い部分からは、須恵器蓋坏 7 個体と鉄器が出土している。須恵器蓋坏は床面から浮いて出土しており、また大谷編年 5 期のものと 6 期の小形のものが混在していることから、原位置から動かされたものの可能性が高い。鉄器は釘が数点散乱し、鑿状製品が玄室に入った部分から出土している。

玄室内は、右袖から奥壁沿いにかけて、L字形に須恵器甕片が敷き詰められている。須恵器床の幅はおよそ 60 ～ 70㎝で、右袖部分は大部分が胴部片であるが、奥壁沿いには口頸部の破片もかなり混じっている。右袖の前壁側と奥壁沿いの左側壁側にはそれぞれ25　前後の隙間（須恵器甕片のない部分）が見られる。

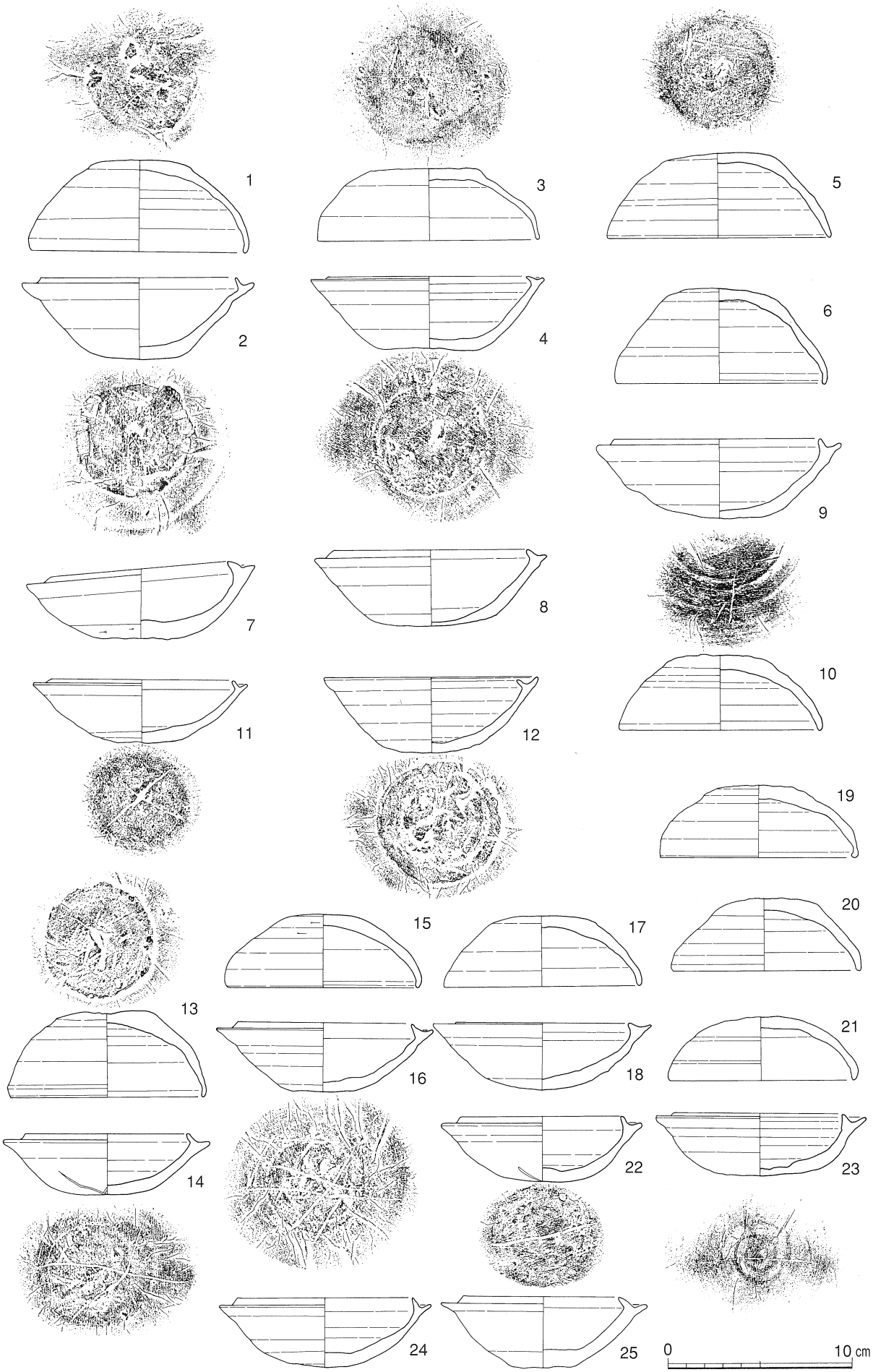
玄室内の遺物は大きく 3 ブロックに分かれて出土している。ひとつは右袖の須恵器床の前壁寄り、で「1 群」とする。もう一つは奥壁沿いの須恵器床の左半で「2 群」とする。最後は須恵器床のない中央部から左壁沿いにかけてで「3 群」とする。

「1 群」は右袖の前壁寄りに、須恵器蓋坏 6 個体と高坏 1 個体が散在的に出土している。蓋坏は大谷編年出雲 6 期の蓋にはつまみのないタイプが中心だが、5 期のものも 1 点含まれる。高坏は転倒している。

「2 群」は須恵器床上のものと左側壁沿いの須恵器床の切れた部分から出土したものの 2 つに分けることが出来る。前者の須恵器床上からは蓋坏が 7 点と短頸壺 1 点が散在的に出土している。蓋坏は大谷編年出雲 5 期と 6 期の古相、新相のものが混在している。また須恵器床の下に潜り込んでいる個体もある。後者の左壁沿いからは須恵器蓋 1 個体、平瓶 3 個体、高坏 1 点、丹塗りで暗文のある土



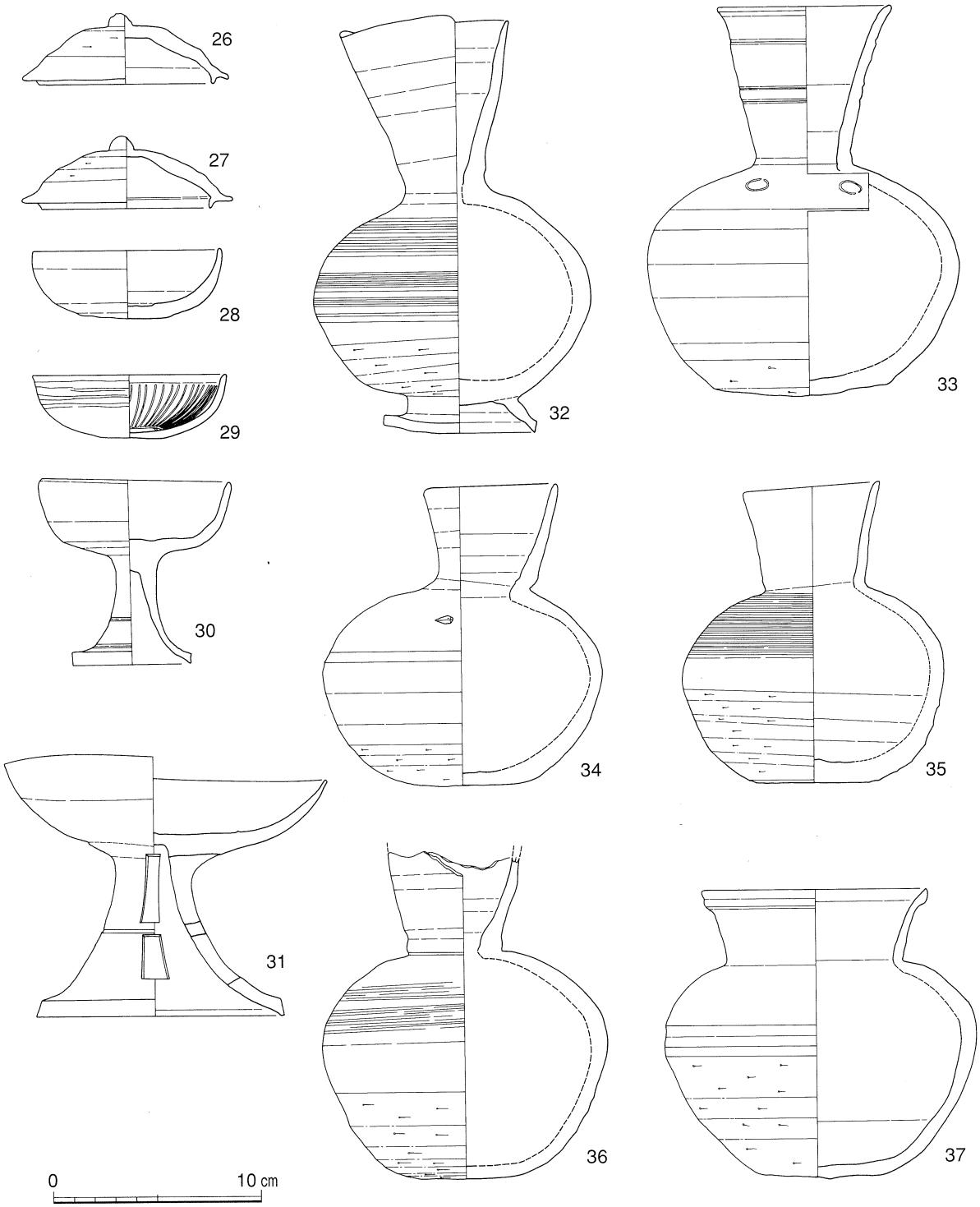
第 56 図　1 区 3－B 号横穴墓閉塞石付近出土土器実測図（S＝1：30）



第57図　1区3－B号横穴墓玄室内出土土器実測図(1)（S＝1：3）

師器碗が1個体が比較的集中して出土している。土師器碗は伏せて、高坏は倒立状態で伏せて置かれ、平瓶3点はいずれも口縁を対角線方向に向けて横倒しになって出土している。使用状態と反対の状態での設置と言え、平瓶の方向性と合わせて何らかの意図を持った配置を思わせる。ちなみに羨道部の閉塞石前面の遺物のあり方とも似ている。

「3群」は須恵器床の空閑地に須恵器蓋坏3個体、長頸壷2個体、甕1個体と鉄器が散在して出土している。須恵器床寄りで出土した長頸壷（33）は「2群」のうち左側壁寄りの遺物群が若干移動



第58図　1区3－B横穴墓玄室内出土土器状況実測図(2)（S＝1：3）

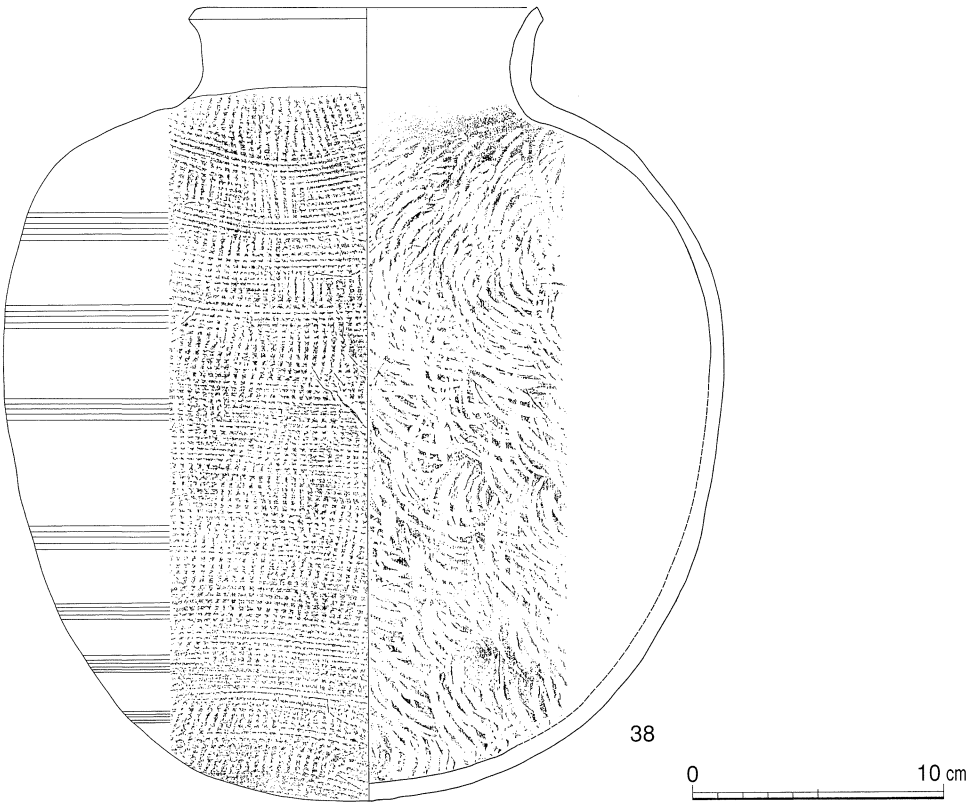
したもののように見える。また須恵器床上で出土した杯身とセットになると考えられる蓋（27）もあり、「1 群」「2 群」から移動させられた遺物も含まれているだろう。長頸壷、甕はいずれも横倒しの状態で出土している。鉄器は釘と刀子で、鉄釘は玄門出土のものも合わせて須恵器床上からは全く出土していない。鉄釘が木棺の部材の接合に使われたものなら、須恵器床のない空閑地に木棺が据えられていた可能性が強いといえよう。

人骨出土状況（第55図） 数多くの人骨が出土したが、人体の並びを残すものはなく、いずれも移動を受けている。頭骨は 4 個確認され、少なくとも 4 体以上の埋葬があったことは確実である。四肢骨は一見バラバラだが、一定の方向性も見受けられ、何らかの意味を持って意図的に整理されたものかも知れない。

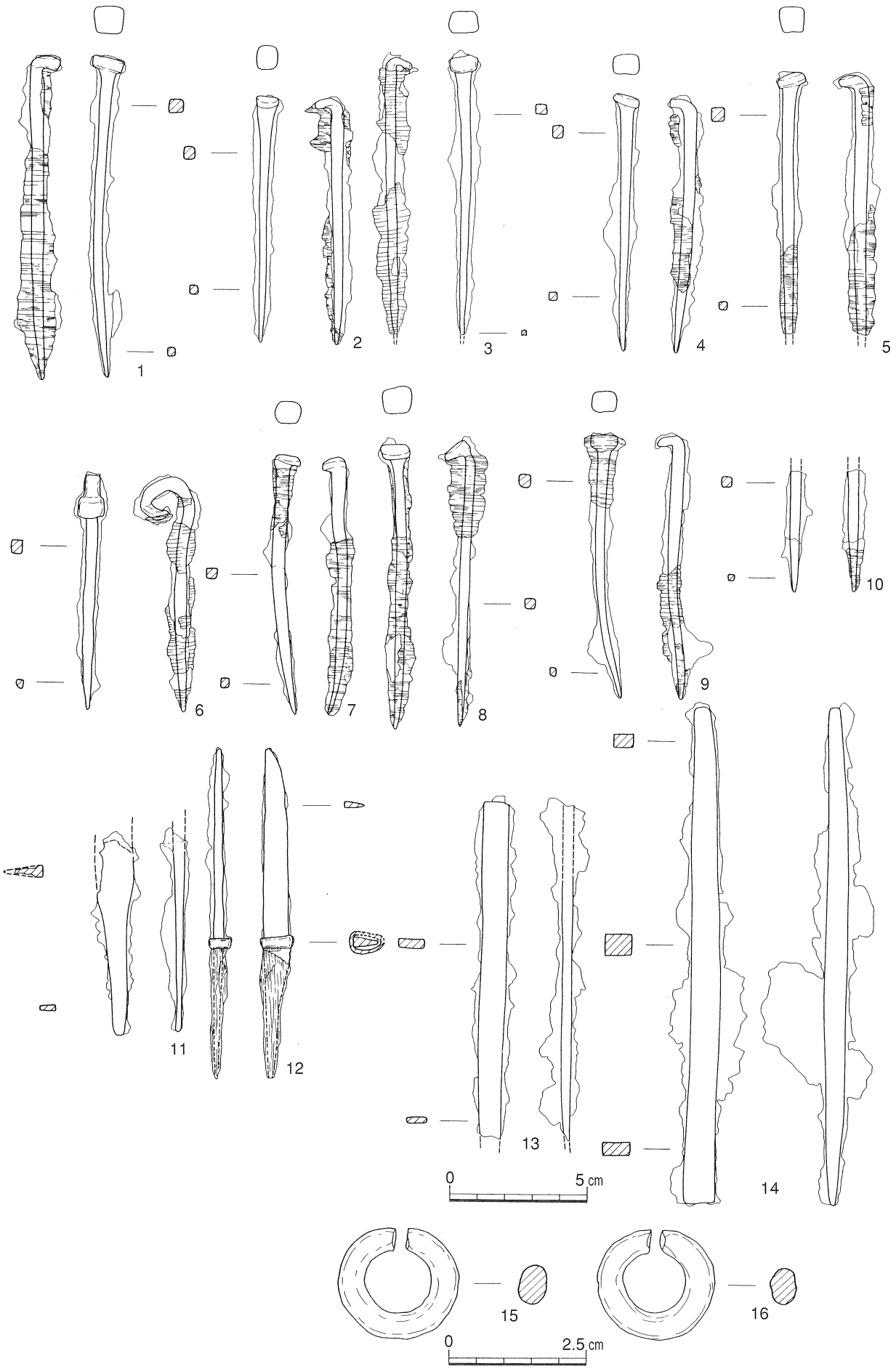
3 －B号横穴墓出土遺物（第56～60図） 第56図は閉塞石の前面で出土した遺物である。土師器甕は、この時期にしては珍しい長胴気味の胴部を持ち、底は偏平である。須恵器は大谷編年出雲 6 期の新相で、この遺物が 3 －B横穴墓の最終閉塞の時期を示している可能性が高い。とすれば、前庭部土層に現れた 3 －C横穴墓への度重なる侵入はこの時期以降ということになる。

玄室内出土の須恵器（第57図～59図）は大谷編年出雲 5 期～ 6 期新相までを含んでいる。築造期は出土中最古の須恵器である出雲 5 期の可能性が高い。土師器碗（第58図29）は、丹塗りで内面に放射状の暗文が施されており、畿内産と考えられる。

鉄釘は10本出土しており、いずれも頭部を折曲げている。長さは 9 ～11.5㎝と比較的長い。第60図13と14は鑿であろうか。



第59図　1区3－B号横穴墓玄室内出土甕実測図（S＝1：3）



第60図　1区3－B号横穴墓玄室内出土鉄器・耳環実測図（S＝1：2、1：1）

[3 －C号横穴墓]

3 号横穴墓前庭部の奥壁に穿たれた横穴墓である。前庭を共有する 3 穴のうちで本来的な位置に存在する横穴墓といって良いだろう。S－ 8 ° －Wとほぼ南向きに開口している。

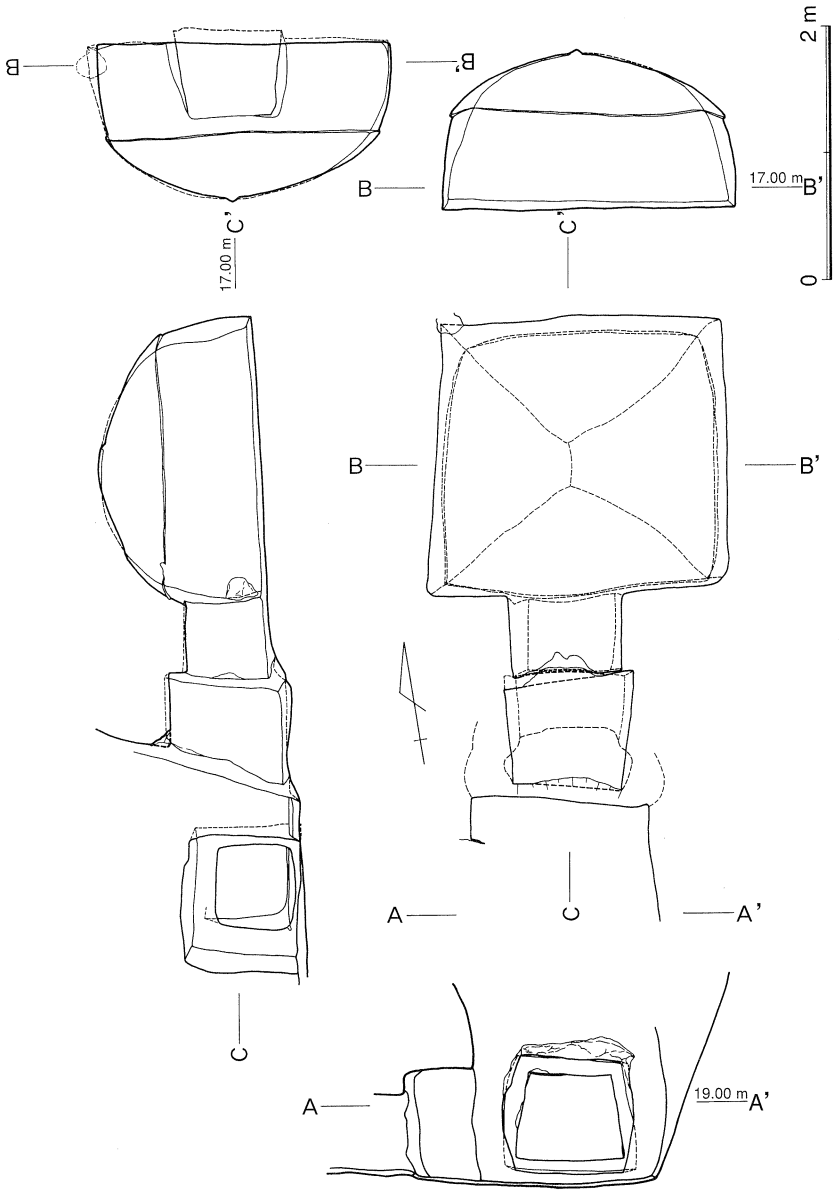
羨道・玄門（第 61 図） 玄門の前方に羨道が付く石棺式石室と同様の構造を持つ。羨道は前庭より床面が一段高く、長さ 0.97m、幅が床面で 1.04m、天井で 0.8m、高さが 0.95m を測る。天井は平らで、横断面形は上辺がやや短い台形である。

玄門は羨道よりもさらに一段床面が高くなっており、長さ 0.65m、床面幅 0.88m、天井幅 0.65m、高さ 0.7m を測る。横断面形は整った台形を呈する。

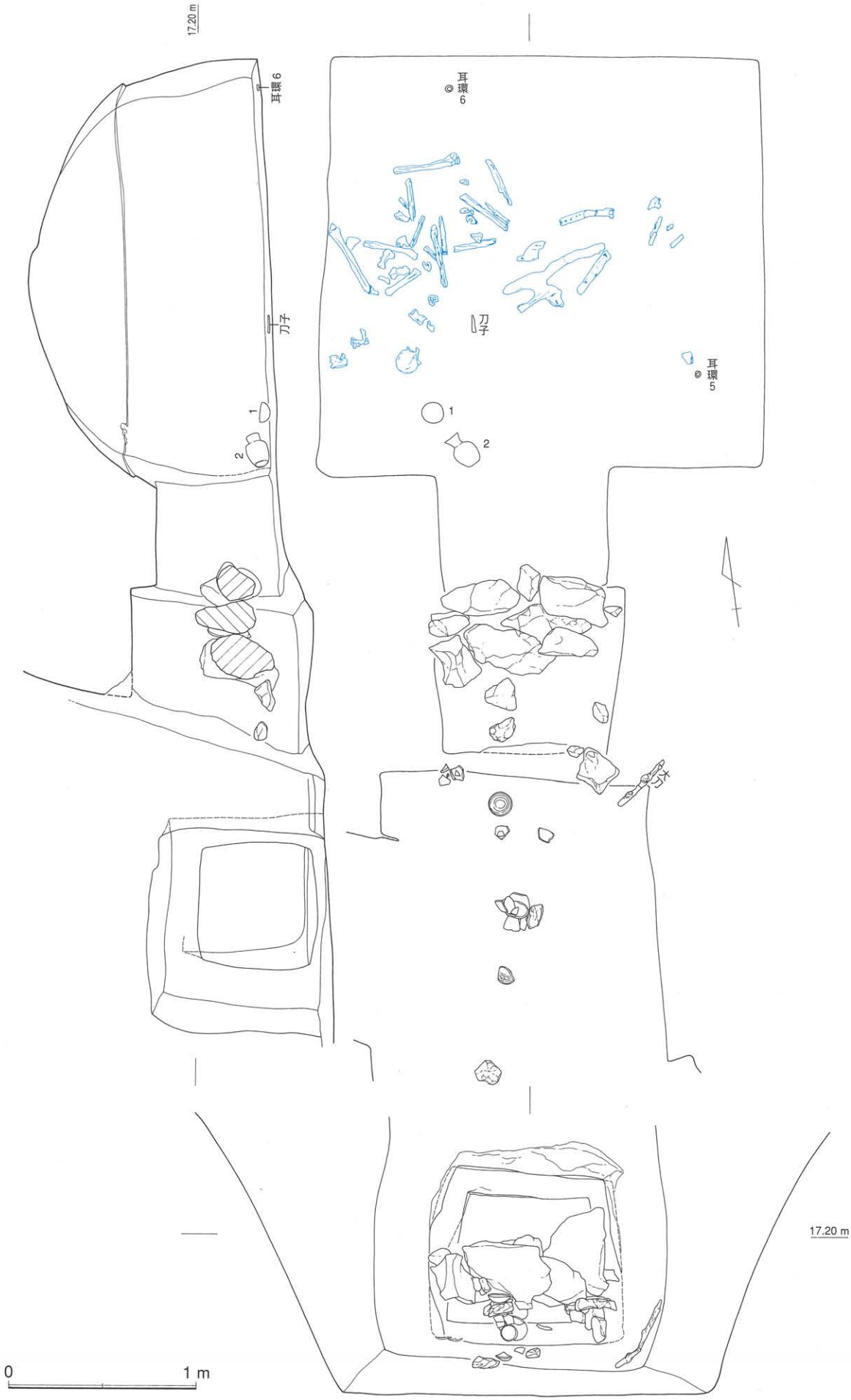
玄　　室（第 61 図） 床面の規模は奥行き 2.4m、幅が羨道側で 2.35m、奥壁側で 2.2m とわずかに縦長ながらもほぼ正方形を呈している。四壁はわずかに内傾して立ち上がり、床面から 70㎝前後のところで外側にくり込んで狭い面を作り出すことにより天井部との界線を表現している。天井は妻入りの四注式で、棟幅は 34㎝と短い。比較的整った整正家形型式といえる。

閉 塞 石（第62図） 玄門の前面に、大小十数個の礫による閉塞装置が検出された。これらの礫の大部分は床面から浮いて縦断土層 10 層（第 45 図）の上に載っている。しかも天井との間は隙間があり、前面に転げ落ちた状態の礫も多いことから、礫の大部分は追葬時に閉塞として用いられ、しかもその後の侵入時に上半を外して前面に落とした状態と考えることが出来る。ただ、床面と玄門前面の段に密着した礫も存在する（第45図縦断土層）ことから、早い段階から礫を用いて閉塞していたことも間違いないであろう。

遺物出土状況（第62図） 羨道の前面には須恵器蓋坏と長頸壷が、前庭部奥壁と右壁のコーナーに立てかけるように大刀が出



第 61 図　1 区 3－C 号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）



第62図　1区3－C号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）

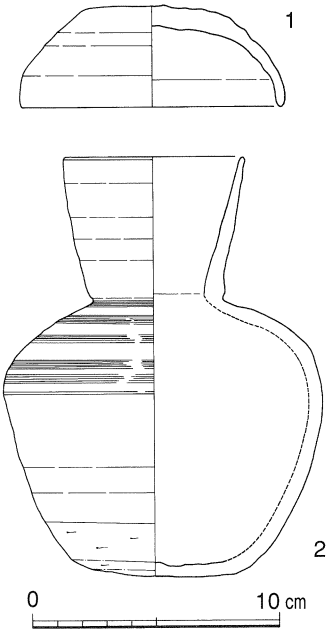
土している。

玄室内からは須恵器蓋 1 個体と長頸壷 1 個体、鉄製刀子 1、用途不明鉄製品 2、耳環 2 しか出土していない。前述したように度重なる侵入時に、前庭に掻き出された遺物が多いことも考えられる。

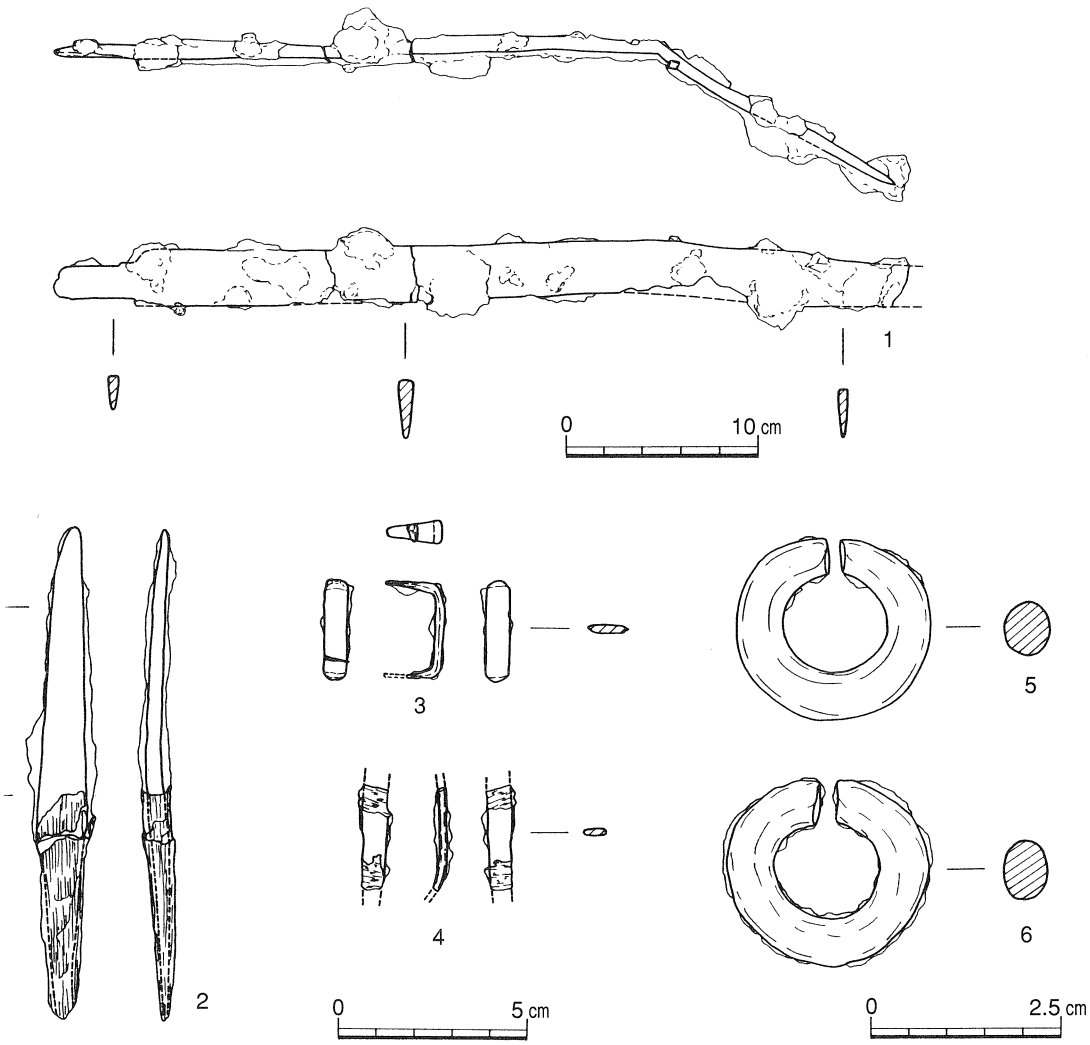
人骨は玄室中央左壁寄りを中心に出土している。2 体以上の人骨が明らかに後の移動を受けている。

遺　物（第 63. 64 図）　前庭部出土の大刀（64-1）は、茎が欠損し刀身部が「く」字形に折り曲げられている。刀子（64-2）は刀身にも木質が認められ、鞘に入っていたものであろう。3 は鎹状に両端が折れ曲がった薄い鉄製品で、用途は不明である。4 も同様の製品であろうか。耳環 2 個はほぼ同形同大であることからセットであろう。

須恵器は大谷編年出雲 5 期に併行するものであり、前庭部出土のものも合わせてみても、築造期は 5 期と考えて問題ないであろう。



第 63 図　1 区 3－C 号横穴墓玄室内出土須恵器実測図（S＝1：3）



第 64 図　1 区 3－C 号横穴墓出土鉄器・耳環実測図（S＝1：4、1：2、1：1）

(3)古　道

古道は、調査後の測量図（第７図）から分かるように、調査区の西側で、南北に走る溝状を呈すものものが２条以上認められ、また１、２号墳のすぐ西側の平坦面も古道として加工されたものと考えられる。さらに任意に設定したベルトの土層（第67図）からは版築状に叩き締められたものが確認できる。以下それぞれの古道について説明したいが、溝状のものについては、調査区端で検出したものをＢ（第65.66図）とし、その東で検出したものをＡ（第65.66図）として、また版築状の盛土で構成されたものをＣとして述べることとしたい。

［古　道Ａ］（第65図）

北側の溝状で砂利を敷くもの、南側のピットで構成されるもの、溝状で砂利とピットが存在するものの３つに分けて考えられるものである。本来は、別時期である可能性が高いが、一括している。

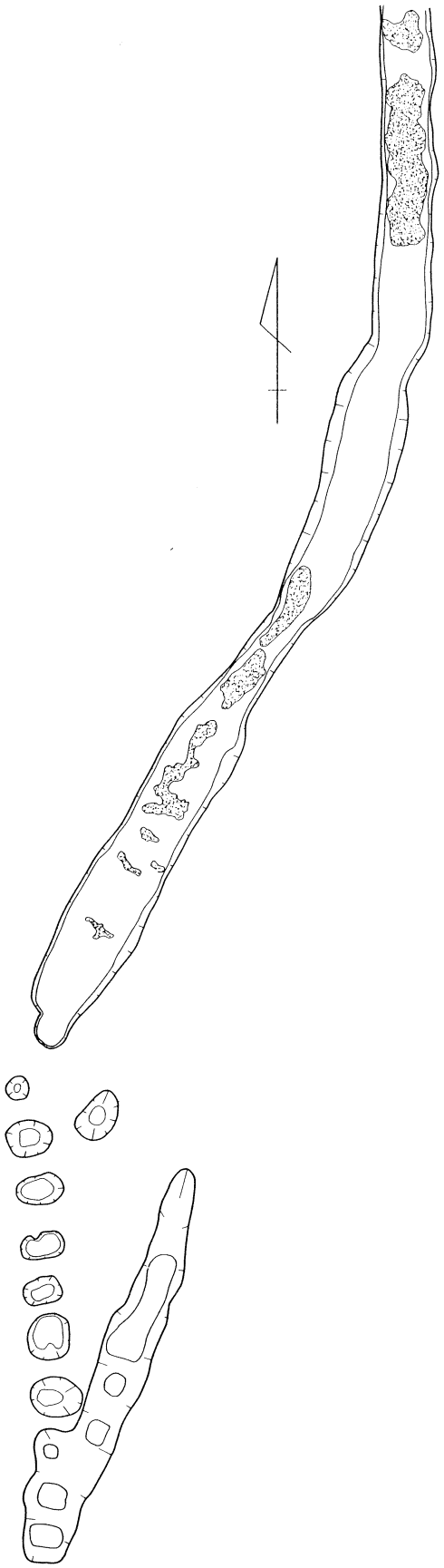
北側のものは全長13mを測り、幅0.8m程の溝状を呈し、深さは0.2m程であり、砂利を敷いた部分が認められる。南側の２つは南端で重複したもので、やや西側に向かうものは、径0.45mの浅いピットを検出している。一方やや東側に向かうものは、幅0.5mの浅い溝にピットと砂利を敷いた部分を検出した。また、土層（第67図４）でも確認できるように溝が埋没した上部に新たに版築状の盛土を施した古道Ｃが存在している。

［古　道Ｂ］（第65図）

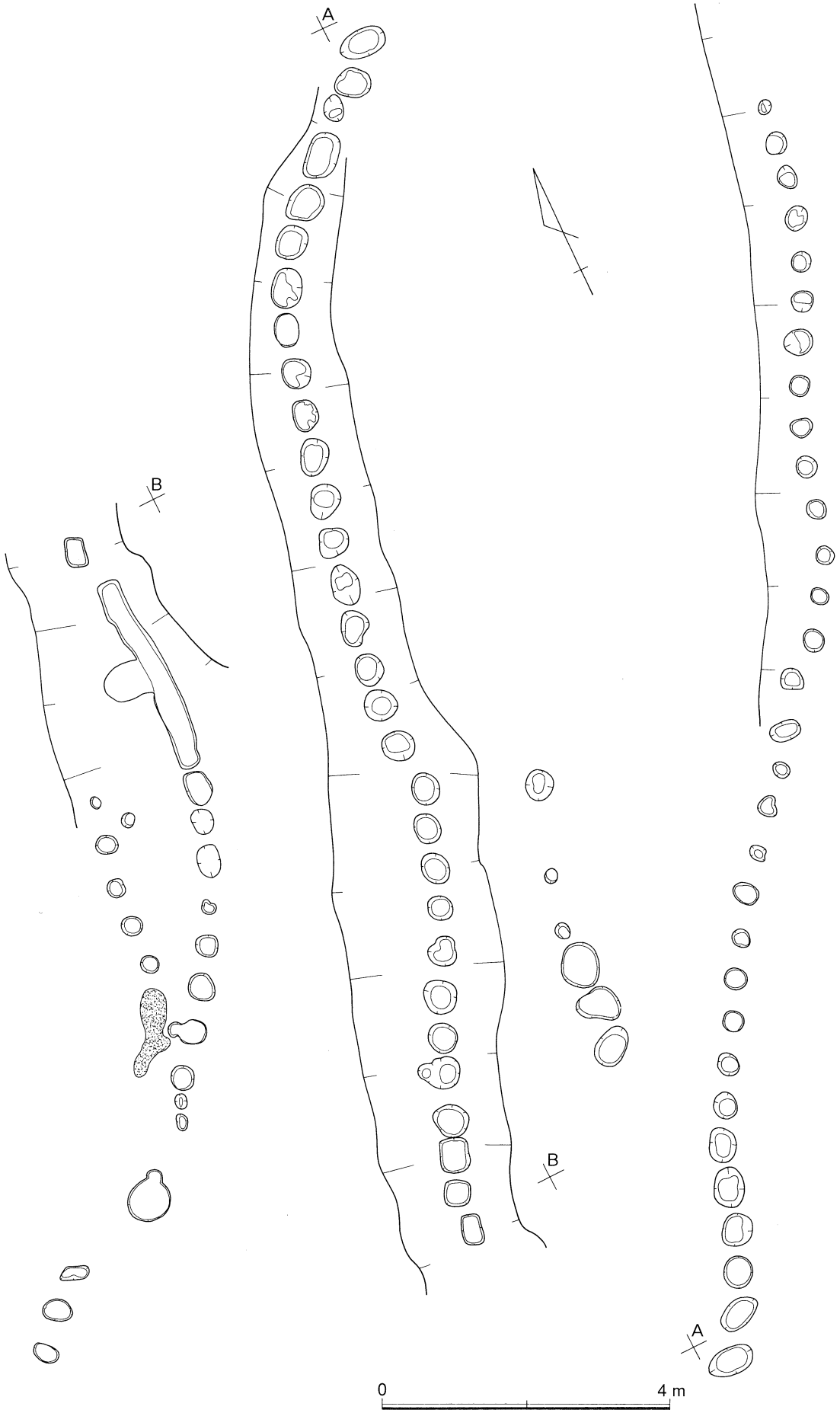
全長44ｍを測り、幅1.4ｍ程の溝の底に浅いピットを穿つものである。ピットは径0.4～0.5mで、底には砂利と須恵器甕の小片が敷かれたものであり、ピット間の距離は凡そ0.2mを測るものである。また、南側では土層断面（第67図４）から分かるように、新古の２つの溝が切り合った状況が確認できている。

［古　道Ｃ］（第67図１～４）

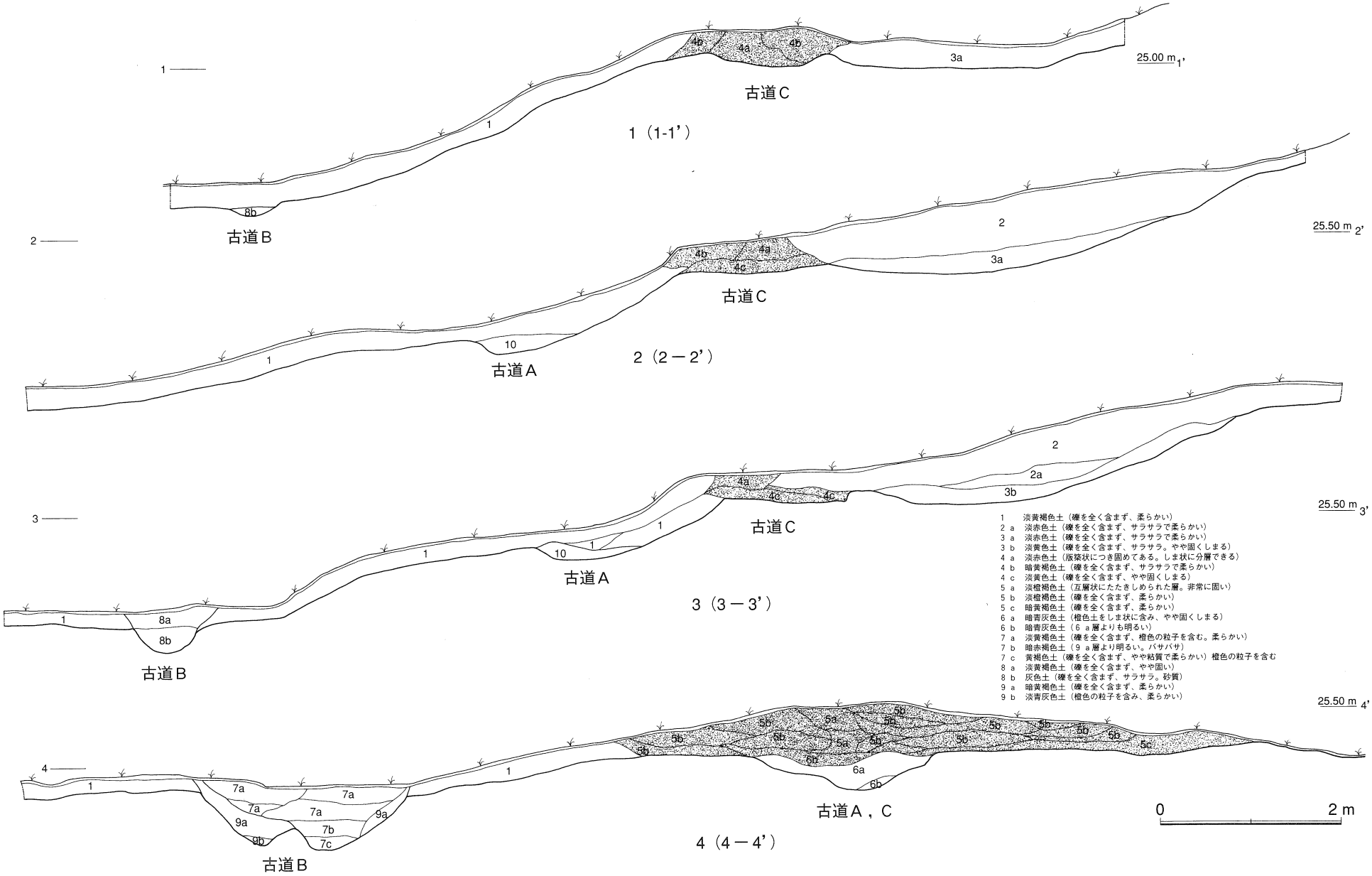
土層断面で詳細を確認したものであり、版築状の盛土によって作られたものである。なお、この上面は、調査



第65図　１区古道実測図(1)（Ｓ＝１：80）



第66図　1区古道実測図(2)（S＝1：80）



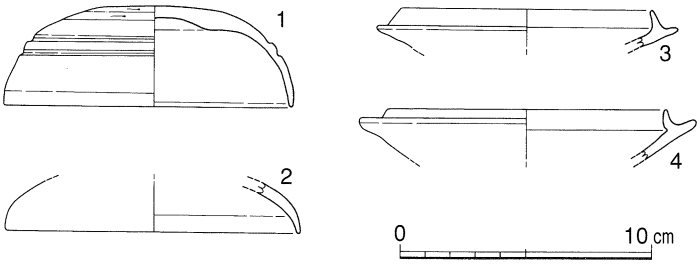
第67図　1区古道横断土層実測図（S＝1：60）

前から山道として機能していたものであり、また北側の調査区外にも続くものである。

盛土は、中心部分が版築状に非常に硬く叩き締められ、その周辺は、やや軟らかい土層であった。盛土は第67図－ 4 で確認した状況では、幅 7 m程、高さ 1.8mに及ぶものであった。

[古道関連遺物]（第68図）

古道調査時の版築状の盛土除去過程で、いくつかの須恵器が出土している。ほとんどのものは、小片で実態が不明なものが多いが、図化可能なものが 4 点存在していた。出土層位は、須恵器蓋（1、2）が盛土下の旧表土から出土し、須恵器坏身（3、4）は盛土中から出土している。この中で 1 は、ほぼ完形に近いものであった。これらの出土須恵器の時期は、大谷 4 期と考えられ、盛土で構成された古道の時期は、少なくとも 4 期以降と推定することができる。



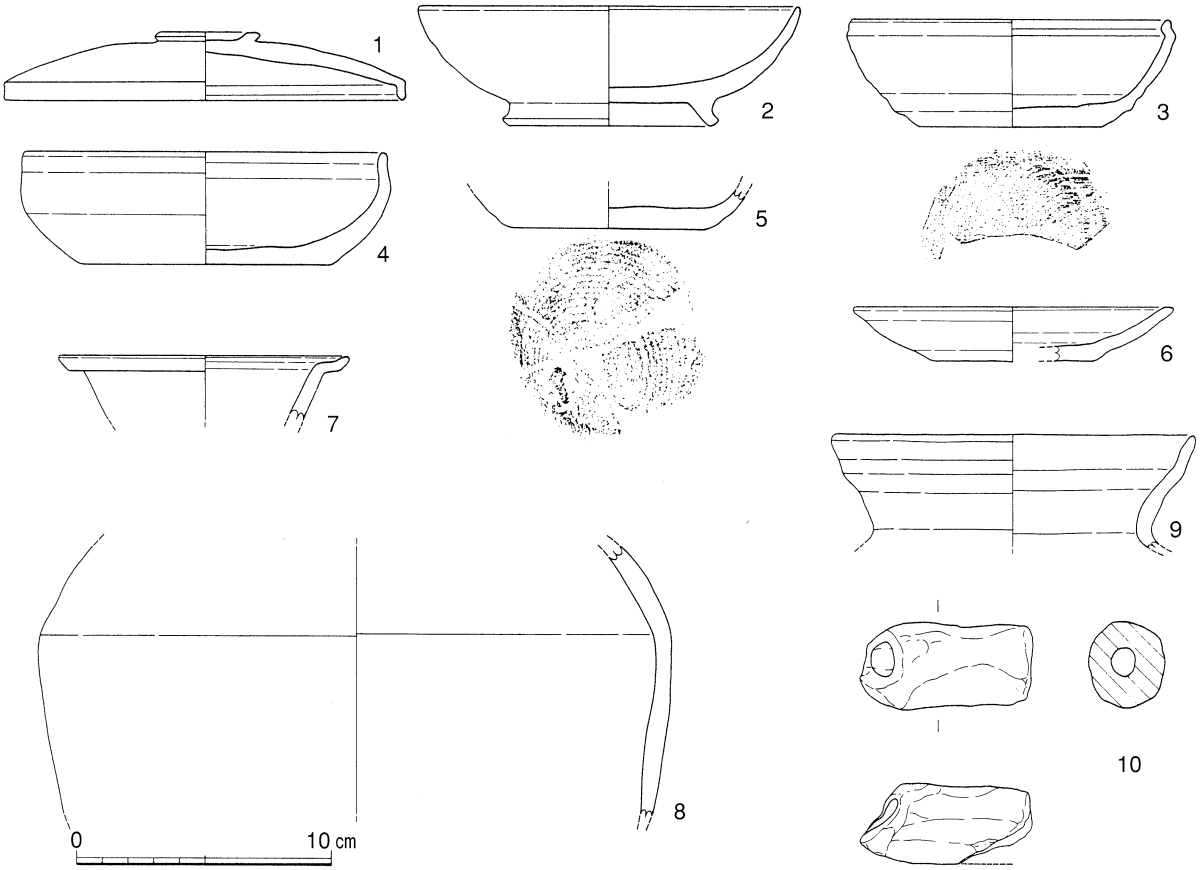
第68図　1区古道出土須恵器実測図（S＝1：3）

[時　　期]

出土須恵器で大谷 4 期に属するものが認められる点、溝内のピットに須恵器甕の小片を砂利状に使用している点から 6 世紀後半以降のものであることは間違いないが、時期を明確にはできなかった。

(4)遺構外出土遺物（第69.70図）

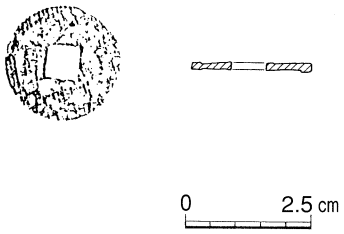
本調査区では、遺構に伴わない遺物がいくつか出土している。すべて尾根部の表土除去時に出土しているものである。第69図の 1 ～ 5 、 7 、 8 は、須恵器で 7 世紀後半～ 8 世紀代にかけてのもの



第69図　1区遺構外出土遺物実測図（S＝1：3）

である。また、6 は、2 号墳の周溝付近で出土した土師器で、底部には回転糸切りが認められるもので、9 世紀以降のものとしてと考えられる。10は、中空の土製品で性格不明のものである。

第70図の古銭は、肉眼では詳細が分からないものであったが、X線撮影によって「寛永通寶」であることが判明したものである。



第70図　1区遺構外出土古銭（S＝2：3）

(5)小　結

本調査区では、古墳（後背墳丘）、横穴墓、古道を検出し、その中には貴重な事例をいくつか含むものであった。以下調査の成果と問題点について整理しておきたい。

[古　　墳]

1号墳は、墳裾から畿内のＴＫ47（註1）並行と考えられる須恵器が出土している。この須恵器で有蓋高坏は、脚部に方形の透しを施したもので、出雲地方では、これまで出土例が確認されていないものであった。この時期の出雲地方の同器種のものには、長方形透しを施すものが主流であり、また、窯跡での例もこの透しであった。こういった様相の中で本例は、その生産地について問題点が残るものである。方形透しを施す例は、畿内でも周辺部の窯跡で認められるもので、搬入品である場合にはこの地域で生産されたものである可能性が高い。よって現段階では、出土した高坏は、搬入品として理解することが妥当である。ただし、宍道町の八頭遺跡の住居跡からは円形透しの高坏が出土しており、未発見の窯跡が存在する可能性も残る。今後の調査例の増加によって、出土須恵器の位置付けを明確にしていく必要があるものと考えられる。

[横穴墓と後背墳丘]

本調査区では、横穴墓を主体部とする古墳を2基検出した。2号墳は、前方後方形の墳丘であるものと考えられ、また、3号墳も同種の墳形である可能性が考えられるものである。2号墳の時期は、主体部として推定した2号横穴墓が大谷4期と考えられことから、その時期と推測している。仮に4期であるならば、最も時期の新しい前方後方墳として考えることができる。また、横穴墓を主体部とする古墳は、周辺では松江市中竹矢1号横穴墓で前方後方形を呈すものが確認されており、意宇平野縁辺部では、横穴式石室を主体部とする前方後方墳とともに多数存在していることになる。

横穴墓を主体部とする古墳は、近年確認されるようになり、今後類例が増えるものと考えられる。類例の増加によって、新ためて、横穴式石室を主体部とするものと比較し、その階層的位置付け等の検討を行なっていく必要があるものと考える。

（註）

1. 田辺昭三『須恵器大成』　角川書店　1981年

第３表　１区１号墳出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	蓋	12.0	5.1			天井部につまみ、口縁部１条沈線、口縁端部内面に沈線？	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
2	高坏	－	－		9.0	１段３方透（菱形）	外面・回転なで、かきめ 内面・回転なで	良好		
3	坏	13.0	4.5				外面・内面とも風化により調整不明	やや良好		
4	坏	12.8	4.1				外面・内面とも風化により調整不明	やや良好		
5	坏	12.6	4.2				外面・内面とも風化により調整不明	やや良好		
6	坏	13.2	－				外面・内面とも風化により調整不明	やや良好		
7	坏	12.9	4.2				外面・内面とも風化により調整不明	やや良好		土師器
8	坏	12.3	－				外面・内面とも風化により調整不明	やや良好		土師器
9	坏	－	－				外面・内面とも風化により調整不明	やや良好		土師器

第４表　１区２・３号墳出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	蓋	－	－			輪状つまみ	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
2	高坏	24.6	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
3	短頸壺	－	－	12.8		肩部・５条波状文	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好		非常に丁寧な調整
4	壺	8.4	－	－			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		口縁部
5	壺	11.8	－	－			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		口縁部
6	壺	－	－	－			外面・へら削り、 内面・回転なで	良好		
7	坏	－	－				外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで	良好		
8	甕	8.1	－	－			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
9	坏身	11.5	－	13.5			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
10	坏壺	12.0	4.4			口縁部内面に１条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
11	甕	21.4	24.8				外面・はけめ 内面・へら削り	良好		
12	平瓶	7.3	12.8			肩部にボタン状の把手１個	外面・口縁部回転なで、胴かきめ、回転へら削り、内面・回転なで	良好		

第５表　１区１号横穴墓閉塞石付近出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	甕	－	－	25.8			口縁部・横なで 内面・胴部けずり	良好		土師器

第６表　１区１号横穴墓出土土器観察表（前庭部）

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	13.2	4.9			内面・口縁端部内面に沈線	外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A７）	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
2	坏蓋	12.9	5.0				外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
3	坏蓋	13.0	4.9			浅い沈線1条	外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
4	坏蓋	12.9	4.6				外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
5	坏蓋	13.0	4.8				外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
6	坏身	11.7	4.4	14.4			外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
7	坏身	11.2	4.3	14.2			外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
8	坏身	11.2	5.0	14.2			外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
9	坏身	11.8	4.4	14.1			外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
10	坏身	11.6	4.5	14.4			外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
11	高坏	8.9	10.1		8.6	二段三方透（上三角、下四角） 脚に沈線1条	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 6)	
12	高坏	8.5	8.7		6.0	二段三方透（上切り込み、下四角） 杯部・沈線2条、脚・沈線2条	外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(A 6)	杯底部に連続刺突文
13	高坏	8.9	9.7		7.2	二段二方透（上切り込み、下四角） 杯部・沈線3条	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 6)	
14	高坏	8.9	8.6		6.7	一段三方透（切り込みのみ） 杯部・沈線3条、脚・沈線1条	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
15	有蓋高坏	11.0	9.8	14.2	10.6	一段三方透（三角）	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(E 2)	
16	有蓋高坏	11.5	13.1	14.4	12.8	二段三方透（上下とも四角） 脚・沈線2条	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(C)	
17	高坏	16.2	10.8		10.0	一段二方透（四角） 脚・浅い沈線1条	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
18	高坏	16.2	10.6		10.3	一段二方透（四角）	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
19	直口壺	8.7	11.8	13.5	7.5		外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好		
20	脚付直口壺	8.3	14.3	12.1	9.6	脚・一段二方透（四角）	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好		
21	直口壺	7.0	9.6	9.9			外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
22	直口壺	6.6	9.3	9.1			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、底部未調整	良好		
23	直口壺	6.2	8.7	9.0			外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
24	直口壺	8.8	21.8	21.0		肩部に環状つまみ1対	外面・頸部～胴部・回転なで、たたき、内面・回転なで	良好		
25	平瓶	7.5	16.5	18.5		肩部にボタン状つまみ1対 頸部に沈線1条	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好	(C 2)	
26	平瓶	7.4	14.0	15.4		肩部にボタン状つまみ1対 頸部に沈線2条	外面・回転なで、回転へら削り、へら切り後なで、内面・回転なで	良好	(C 2)	底部にへら記号/
27	平瓶	8.1 (歪み)	15.5	17.5		肩部にボタン状つまみ1対 底部・へらで筋状の模様	外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(C 2)	
28	提瓶	8.5 (歪み)	20.0	15.0 13.5		肩部にボタン状のつまみ1対 頸部に沈線3条	外面・回転へら削り、回転なで、かきめ、内面・回転なで	良好	(Cエ)	頸部にへら記号×
29	提瓶	8.2	22.3	16.2 14.2		肩部にボタン状のつまみ1対 頸部に沈線1条	外面・回転なで、回転なで、 内面・回転なで	良好	(Cウ)	
30	提瓶	7.0	18.6	14.6 12.6		肩部にボタン状のつまみ1対	外面・回転なで、かきめ、 内面・回転なで	良好	(C 6)	
31	提瓶	7.6	19.7	14.5 13.0		肩部にボタン状のつまみ1対	外面・回転なで、かきめ 内面・回転なで	良好	(Cエ)	
32	坏蓋	13.4	3.8				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
33	坏蓋	11.6	4.2				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
34	坏身	10.9	3.5	13.2			外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(A 7)	
35	坏身	11.2	3.5	13.6			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
36	坏身	11.5	4.1	13.7			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
37	坏身	11.2	4.2	14.1			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
38	坏身	10.2	3.6	12.4			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
39	高坏	17.6	—		—		外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好	(A 5)	
40	高坏	—	—		12.8		外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(B 5)	
41	はそう	—	—	10.5		頸部・沈線1条 胴部・沈線2条	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好	(A 7)	
42	はそう	—	—	8.6			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好		

第7表　1区1号横穴墓出土土器観察表（玄室）

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	12.9	4.8				外面・回転なで、荒い削り、 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
2	坏身	11.5	4.8	13.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
3	坏蓋	13.5 (歪み)	4.7				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
4	坏身	14.0	4.0	14.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
5	坏蓋	13.4	4.6				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
6	坏身	11.8	4.3	14.3			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
7	坏蓋	11.8	4.3			2条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
8	坏身	10.7	3.8	13.3			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
9	坏蓋	13.0	4.5			2条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
10	坏身	11.0	4.2	14.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
11	坏蓋	13.5	4.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	へら状工具で2条の線
12	坏身	14.0	4.1	14.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	底部へら状工具で数本の線
13	坏蓋	13.9	4.1				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
14	坏蓋	12.7	4.3				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
15	坏蓋	12.4	4.1				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
16	坏蓋	12.2	4.2				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	天井部にへら記号／
17	坏蓋	12.2	4.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	やや良好	(A 7)	天井部にへら記号／
18	坏蓋	12.6	4.3				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
19	坏蓋	13.6	4.5			沈線2条	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
20	坏蓋	13.4	4.5				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
21	坏蓋	13.7	4.3				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
22	坏蓋	13.3	4.6				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	天井部にへら状工具で2条
23	坏蓋	12.6	3.9				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	同上
24	坏身	11.8	3.5	14.3			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	天井部にへら記号×
25	坏身	11.0	4.1	13.7			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
26	坏身	11.8	4.5	14.6			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
27	坏身	10.8	4.2	13.7			外面・回転なで、底部調整不明 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	
28	坏身	12.4	4.1	14.7			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	底部にへら記号/
29	坏身	10.8	3.6	13.9			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 7)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
30	坏身	10.6	4.3	13.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	底部にへら記号/
31	坏身	11.2	3.3	13.5			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	底部にへら記号 =
32	坏蓋	10.7	4.5				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
33	坏身	9.8	3.9	12.5			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
34	坏蓋	11.5	4.1				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
35	坏身	10.4	3.9	12.6			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
36	坏蓋	10.0	3.7			2条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
37	坏身	8.6	3.5	11.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
38	坏蓋	10.0	4.1				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
39	坏身	8.8	4.1	11.1			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
40	坏蓋	10.6	4.4			沈線2条	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
41	坏身	8.8	4.6	11.1			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	やや不良	(A8)	
42	坏蓋	8.0	3.7				外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
43	蓋	13.6	2.8			輪状つまみ	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(B1)	
44	坏 高台付	13.3	4.0		8.5		外面・回転なで、静止糸切り 内面・回転なで	良好	(B3)	
45	坏 高台付	14.6	4.5		8.6		外面・回転なで、静止糸きり 内面・回転なで	良好		
46	坏蓋	13.5	4.1				外面・回転なで、へら切り後なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	口縁端部が外傾する
47	蓋	6.2	3.6			宝殊つまみ	外面・回転なで、 内面・回転なで、静止なで	良好		
48	蓋	8.3	2.7			宝殊つまみ	外面・回転なで、 内面・回転なで、静止なで	良好		
49	坏 土師器	16.0	5.5			へら削り3方向	外面・へら削り、回転なで 内面・へら磨き	良好		暗文
50	高坏 低脚	14.2	—		—	杯部・沈線1条 1段2方透し(四角)	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
51	高坏	14.8	—		—		外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
52	高坏	—	—		9.4	脚部・2方透(形は不明)	外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(A6)	
53	高坏	9.0	9.8		7.6	杯部・沈線4条、脚部・沈線3条、 2段3方透(上切り込み、下四角)	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
54	脚付甕	10.0	12.6	7.4	5.0	頸部・沈線2条、胴部・沈線3条 脚付	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、回転へら削り	良好	(A8)	
55	甕	8.8	10.4	8.0		胴部・沈線2条	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(A8)	
56	脚付椀	7.3	5.7	7.8	5.7		外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
57	直口壺	4.0	7.1	6.7			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		底部にへら記号 ×
58	直口壺	5.2	8.7	8.1			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		ミニチュア
59	直口壺	8.2	9.8	9.4			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
60	小壺	6.3	8.4	9.4			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
61	長頸瓶 高台付	9.0	24.7	16.6	9.8	頸部・沈線2条、 高台付	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(3型)	
62	平瓶	—	—	29.2		頸部・沈線1条 肩部に輪状の把手1対	外面・回転なで、かきめ 内面・回転なで、たたき	良好	(B型)	
63	平瓶	8.0	15.0	14.6		頸部・沈線1条 肩部にボタン状の把手1対	外面・回転なで、かきめ、回転へら 削り、内面・回転なで	良好		
64	平瓶	8.0	15.3	15.7		肩部にボタン状の把手1対	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(C2)	
65	平瓶	6.2	15.5	14.8			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(C3)	
66	提瓶	5.4	12.1	10.0 9.4			外面・なで 内面・なで	良好	(C)	ミニチュア

第８表　１区１号横穴墓出土鉄器観察表（馬具）

（単位：cm）

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	刃　幅	頸　部	刃部厚	頸　厚	備　　考
－１	大刀	86.9(残)	80.5	3.4	2.3	0.7	0.7	・鐔、鎺残存 ・茎は茎尻に向かって細くなる。
－２	鉄鏃	10.7(残)	－	－	0.5	－	0.3	・部位不明確
－３	刀子	11.5(残)	5.0	1.0	1.0	0.5	0.5	刃部と茎部の先端は欠
－４	鞍							
－５	鞍							
－６	轡							

第９表　１区１号横穴墓出土玉類観察表

（単位：mm）

番号	器　種	材　質	色　調	長　径	短　径	孔　径	備　　考
－７	勾玉	水晶	半透明	25.5	14.5	1.1～3.0	片面穿孔
－８	丸玉	碧玉	暗緑色	11.5	9.0	1.6～2.6	片面穿孔
－９	丸玉	ガラス	藍	8.3	3.7	1.7	
－10	丸玉	ガラス	藍	8.7	6.5	1.9	

第10表　１区１号横穴墓出土耳環観察表

（単位：mm）

番号	器　種	a	b	c	d	e	備　　考
－11	耳環	22.7	24.1	12.4	6.4	5.5	全面に錆付着
－12	耳環	22.0	23.5	11.5	6.6	6.0	全面に錆付着

第11表　１区２号穴横穴墓出土土器観察表（前庭部）

（単位：cm）

番号	器　種	法量				形態上の特徴	調　　整	色調焼成	分　類	備　　考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	13.0	4.3			１条沈線	外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ４)	
2	坏身	12.0 (歪み)	4.0	14.5			外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ４)	
3	坏蓋	12.0	4.5			１条沈線	外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ４)	
4	坏身	13.0	4.2	13.1			外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ４)	
5	坏蓋	13.2	3.9			２条沈線	外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ４)	
6	坏身	10.9	4.4	13.8			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ５)	
7	坏蓋	13.2	4.2			２条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ５)	
8	坏身	10.7 (歪み)	4.5	13.8			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ５)	
9	坏蓋	13.0	4.2			２条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ５)	
10	坏身	10.8	4.2	13.3			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ５)	
11	坏蓋	12.9	4.1			２条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Ａ５)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
12	坏身	11.2	4.4	14.0			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
13	坏蓋	12.8	4.5			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
14	坏蓋	13.0	4.5			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
15	坏身	10.8	4.4	13.2			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転へら削り、回転なで	良好	(A5)	
16	坏身	10.7	4.2	13.6			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
17	坏身	11.4	3.7	14.1			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
18	高坏	13.8	10.1		10.7		外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
19	坏蓋	12.3	4.6			1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
20	坏蓋	12.5	4.1			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	やや不良	(A5)	
21	坏身	10.5	4.7	13.3			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
22	坏身	10.8	4.0	13.8			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
23	壺	—	—	9.1		胴部・沈線2条	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好		
24	高台付壺	—	—	—	9.6		外面・回転なで 内面・静止なで	良好		

第12表　1区2号穴横穴墓出土土器観察表（玄室）

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	13.0	4.1			2条沈線	外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
2	坏蓋	12.0	4.5			2条沈線	外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
3	坏蓋	12.6	4.3			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	天井部にへら記号×
4	坏蓋	12.3	3.9			1条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
5	坏蓋	12.4	4.2			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
6	坏蓋	13.2	3.9				外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
7	坏蓋	13.2	3.9				外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
8	坏蓋	12.6	3.8				外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
9	坏蓋	12.6	4.2				外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
10	坏蓋	12.2	4.0				外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
11	坏蓋	12.4	4.3			1条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
12	坏蓋	12.8	4.4			2条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	天井部にへら記号×
13	坏身	10.4	3.9	13.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
14	坏身	10.8	3.3	13.4			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
15	坏身	11.0 (歪み)	3.7	13.7			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
16	坏身	12.6	3.9	12.6			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
17	坏身	10.5 (歪み)	3.4	13.6			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
18	坏身	10.7	3.6	13.5			外面・荒い削り、回転なで 回転へら削り、内面・回転なで	良好	(A6)	
19	坏身	13.8	3.9	13.9			外面・中心部は削らない、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
20	坏身	13.9	4.0	13.8			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
21	直口壺	9.1	14.1	13.1			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
22	提瓶	7.6	19.9	14.1 10.5		ボタン状の把手が1対	外面・腹部かきめ、背部回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(Cオ)	
23	瓿	10.4	12.2	8.0		胴部・沈線4条、刺突文 頸部・波状文	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好	(A5)	
24	瓿	12.2	13.8	9.3		胴部・沈線1条	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好	(A6)	
25	高坏	10.0	11.7		8.6	背部・沈線2条、脚部・沈線2条 二段三方透(上切れ込み、下四角)	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
26	高坏	15.5	10.6		11.1	一段二方透(三角)	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	

第13表　1区2号横穴墓出土鉄器観察表(馬具)

(単位:cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
−1	絞具							
−2	絞具							
−3	絞具							
−4	鐙金具							
−5	鐙金具							
−6	鐙金具							
−7	轡							

第14表　1区2号横穴墓出土玉類観察表

(単位:mm)

番号	器種	材質	色調	長径	短径	孔径	備考
−1	三輪玉	水晶	半透明	42.1	23.1	17.0〜 20.9	※2号墳、墳頂部出土
−2	三輪玉	水晶	半透明	34.5	17.1	19.2〜 19.4	
−3	三輪玉	水晶	半透明	34.6	16.5	18.8〜 19.1	
−4	三輪玉	水晶	半透明	41.6	18.4	18.8〜 21.9	
−5	三輪玉	水晶	半透明	35.4	16.7	17.1〜 19.1	
−6	三輪玉	水晶	半透明	32.5	18.4	13.0〜 16.3	
−7	勾玉	瑪瑙	淡橙褐色	26.4	16.2	1.2〜 2.8	片面穿孔
−8	勾玉	瑪瑙	橙褐色	25.0	13.7	1.9〜 2.8	片面穿孔
−9	勾玉	瑪瑙	淡白橙色	31.0	19.1	1.4〜 2.9	片面穿孔
−10	勾玉	瑪瑙	淡橙色	23.8	15.0	1.9〜 3.9	片面穿孔 (両面とも整っている。)
−11	勾玉	瑪瑙	淡橙褐色	28.7	16.5	1.3〜 3.4	片面穿孔
−12	管玉	碧玉	緑色	31.4	9.1	1.5〜 4.5	片面穿孔
−13	管玉	碧玉	暗緑色	16.6	6.5	1.4〜 3.6	片面穿孔
−14	管玉	碧玉	暗深緑色	12.8	6.4	1.1〜 3.0	片面穿孔
−15	切子玉	水晶	半透明	17.5	13.5	1.8〜 3.7	片面穿孔
−16	切子玉	水晶	半透明	14.5	12.8	1.1〜 3.4	片面穿孔 (質的にあまり良くない。)

番号	器　種	材　質	色　調	長　径	短　径	孔　径	備　考
−17	切子玉	水晶	半透明	14.4	11.7	1.0〜3.6	片面穿孔
−18	切子玉	水晶	半透明	14.1	12.0	1.8〜4.9	片面穿孔
−19	切子玉	水晶	半透明	14.1	12.2	2.1〜3.6	片面穿孔
−20	丸玉	水晶	半透明	11.4	9.5	1.4〜3.3	片面穿孔
−21	丸玉	ガラス	藍	9.5	6.6	2.4	
−22	丸玉	ガラス	藍	9.4	7.3	2.0	
−23	丸玉	ガラス	藍	7.1	5.2	2.0	
−24	丸玉	ガラス	藍	6.7	5.0	2.0	
−25	丸玉	ガラス	水色	5.7	3.0	1.7	
−26	丸玉	ガラス	藍	4.9	3.1	1.8	

第15表　1区2号横穴墓出土耳環観察表

（単位：mm）

番号	器　種	a	b	c	d	e	備　考
−27	耳環	27.1	29.6	15.3	8.8	6.8	全体に錆が付着
−28	耳環	23.7	25.8	14.9	5.5	5.5	全体に錆が付着
−29	耳環	23.1	26.6	16.5	5.0	5.2	全体に錆が付着

第16表　1区2号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	刃　幅	頸　部	刃部厚	頸　厚	備　考
−1	大刀	108.5(残)	88.0	4.3	3.0	0.9	0.8	・切先先端部欠　・目釘穴2残存 ・鞘の木質一部残存
−2	大刀	62.4(残)	54.1	3.1	2.1	1.0	0.8	・象嵌　・鉈柄頭残存 ・柄の木質残存
−3	刀子	11.8	7.8	1.5	1.0	0.4	0.3	・木質残存
−4	鉄斧	10.8	7.2	3.9	3.2	1.3	1.5	・金田善教（古代吉備17）の有袋鉄斧のBⅡ類と推定
−5	鉄鏃	13.3	2.1	0.9	0.5	0.3	0.3	・茎部先端欠 ・木質残存
−6	鉄鏃	10.6(残)	2.1	0.7	0.5	0.3	0.3	・茎部欠
−7	鉄鏃	6.3(残)	2.2	0.9	0.4	0.2	0.3	・茎部欠
−8	鉄鏃	6.1(残)	2.4	0.6	0.4	0.2	0.4	・茎部欠
−9	鉄鏃	4.6(残)	2.0	1.0	0.4	0.2	0.2	・茎部欠
−10	鉄鏃	4.0(残)	2.7	0.9	0.3	0.2	0.2	・茎部欠
−11	鉄鏃	3.5(残)	3.1	0.9	0.5	0.2	0.3	・茎部欠
−12	鉄鏃	1.6(残)	1.6(残)	0.9	−	0.3	−	鏃身部上部のみ
−13	鉄鏃	1.1(残)	1.1(残)	0.9	−	0.2	−	鏃身部上部のみ
−14	鉄鏃	8.6(残)	−	−	0.4	−	0.3	箆被部の破片
−15	鉄鏃	6.6(残)	−	−	0.4	−	0.2	箆被部の破片
−16	鉄鏃	5.8(残)	−	−	0.5	−	0.3	箆被部の破片

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	刃　幅	頸　部	刃部厚	頸　厚	備　考
−17	鉄鏃	3.3(残)	−	−	0.4	−	0.2	篦被部の破片
−18	鉄鏃	3.1(残)	−	−	0.3	−	0.3	茎部先端付近
−19	鉄鏃	2.1(残)	−	−	0.4	−	0.2	篦被部の破片
−20	鉄鏃	2.7(残)	−	−	0.4	−	0.2	茎部先端付近
−21	鉄鏃	3.9(残)	−	−	0.4	−	0.2	茎部先端付近
−22	鉄鏃	3.1(残)	−	−	0.5	−	0.3	茎部の破片
−23	鉄鏃	4.2(残)	−	−	0.4	−	0.2	茎部の破片
−24	鉄鏃	5.9(残)	−	−	0.4	−	0.3	茎部の破片
−25	鉄鏃	7.5(残)	−	−	0.4	−	0.3	茎部周辺
−26	鉄鏃	8.7(残)	−	−	0.4	−	0.3	頸部のみ
−27	鉄鏃	9.7(残)	−	−	0.4	−	0.3	頸部のみ
−28	鉄鏃	12.8(残)	−	−	0.4	−	0.3	鏃身部欠

第17表　１区ＳＸ０４出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	法量				形態上の特徴	調　整	色調焼成	分　類	備　考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	甕 土師器	22.8	30.2	29.0			外面・口縁部横なで、胴部はけめ 内面・口縁部横なで、胴部けずり	良好		

第18表　１区３号横穴墓出土土器観察表（前庭部）

（単位：cm）

番号	器　種	法量				形態上の特徴	調　整	色調焼成	分　類	備　考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋 天井部欠	13.3	4.1			内面・端部に沈線	外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(A５)	
2	坏蓋	12.2	4.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A７)	天井部にへら記号≠
3	坏蓋	12.5	4.5			２条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A７)	
4	坏身	10.4	4.2	12.9			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A７)	
5	坏身	10.7	3.7	13.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A７)	
6	坏身	10.0	3.9	12.3			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A７)	
7	坏身	10.0	3.4	11.9			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A７)	
8	坏身	10.6	3.4	12.8			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A７)	底部にへら記号×
9	坏身	9.7	3.3	11.7			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A７)	底部にへらで数本の線
10	坏蓋	10.9	4.4				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A８)	
11	坏蓋	11.1	3.6				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A８)	
12	坏蓋	10.6	3.4				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A８)	
13	坏蓋	10.8	3.7				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A８)	天井部にへら記号／
14	坏身	8.9	3.5	11.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A８)	
15	坏身	11.6	3.4	12.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A８)	
16	坏蓋	9.5	3.8				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A８)	

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
17	坏蓋	9.8	3.8				外面・周辺削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 8)	
18	坏身	7.9	3.8	10.6			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 8)	
19	蓋	9.5	3.0	12.2		宝殊つまみ、櫛状工具による連続刺突文	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
20	坏	13.0	4.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
21	高坏	17.0	12.2		11.0	杯部・沈線1条、脚部・沈線3条 二段二方透（上切れ込み、下四角）	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(B 5)	
22	高坏	17.0	13.3		12.0	杯部・沈線1条、脚部・沈線3条 二段二方透（上切れ込み、下四角）	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(B 5)	
23	高坏	16.3	12.1		11.8	脚部・沈線1条 一段二方透（四角）	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 4)	
24	高坏	9.6	9.7		7.2	沈線は杯部1条、脚部2条、刺突文 二段二方透（上切り込み、下四角）	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 6)	
25	甕	11.4	12.7	9.0		胴部・沈線2条、櫛状工具による連続刺突文	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 8)	
26	甕 (胴部)	—	—	8.2		頸部・沈線1条	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好	(A 8)	
27	甕 (口縁)	10.5 (歪み)	—	—			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
28	甕 (口縁)	10.5					外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
29	脚付椀	10.0	7.9		8.0	一段二方透（切り込み）	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
30	長頸瓶	7.9	18.1	13.1			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(1型)	肩部に2箇所へら記号×
31	平瓶	6.5	11.9	17.5 12.0			外面・胴部・かきめ、底部・たたき 内面・回転なで、静止なで	良好	(C 3)	口縁部が一方に傾く
32	平瓶	7.8	16.2	18.7		肩部にボタン状の把手1個	外面・回転なで、回転へら削り、かきめ、内面、回転なで、静止なで	良好	(C 2)	
33	長頸瓶	6.7	17.5	15.2			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(1)	底部にへらによる数本の線
34	平瓶 (胴部)	—	—	15.1			外面・回転なで、かきめ、回転へら削り、内面・回転なで	良好		
35	平瓶 (胴部)	—	—	14.8			外面・回転なで、かきめ、回転へら削り、内面・回転なで	良好		
36	平瓶 (口縁)	10.8	—	—		1条沈線	外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
37	甕	16.8	—	—			外面・横なで 内面・へら削り	良好		

第19表　1区3号横穴墓出土土器観察表（前庭部子持壷）

（単位：cm）

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	子持壷	17.5	64.4	31.5	22.6	子壷4方向でその間円形の透かし 脚部・沈線6条、二方向四角透かし	外面・口縁部回転なで、胴部たたき後下半は横なで上半はかきめ、脚部縦なで後板状工具による横なで、内面・胴部横なで、脚部たたき後横なで。子壷・回転なで、なで	やや不良		
2	子持壷	15.7	—	18.1	—	円形の透4方向	外面・口縁部回転なで、胴部たたき後下半は横なで上半はかきめ、脚部縦なで後板状工具による横なで、内面・胴部横なで、脚部たたき後横なで、縦なで	良好		
3−A	子持壷 口縁部	13.0	—	—	—	円形透	外面・口縁部回転なで、胴上部たたき、内面・口縁部回転なで	良好		
3−B	子持壷 脚部					2条沈線、三方四角透	外面・たたき後たてなで、内面・たたき後横なで	良好		
3−C	子持壷 子壷口縁	7.4	—	—	—		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
4	子持壷 脚	—	—	—	—		外面・横なで 内面・横なで	良好		
5	子持壷 上部除く	—	28.0	22.0	19.6	胴部・透円形4方向、脚上部透円形二方向、脚中部2条沈線の間に透四角二方向	外面・口縁部回転なで、胴部たたき後下半は横なで、脚部縦なではけ状の横なで、内面・胴部横なで、脚部たたき後横なで	良好		

第20表　1区3号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
－1	刀子	8.0(残)	2.4(残)	1.0	0.5	0.3	0.2	3－A号墓出土
－2	鉄斧	8.5	4.2	4.7	3.6（袋幅）	0.8	1.6（袋厚）	全庭部出土

第21表　1区3－A号穴横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	12.7	4.8				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	底部は板状工具によるなで
2	坏身	10.5	4.2	13.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・静止なで	良好	（A7）	
3	坏蓋	12.6	4.5			2条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	
4	坏蓋	13.0	4.3				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	
5	坏身	11.3	4.5	14.1			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	
6	坏身	11.3	3.7	13.5			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	
7	坏身	10.1（歪み）	4.2	13.8			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	底部にへら記号×
8	高坏	9.2	8.4		6.6	杯部・沈線2条、脚・浅い沈線2条	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	
9	甕	18.4	24.1	23.7			外面・口縁部・横なで、胴部・はけめ、内面・胴部・へらけずり	良好		土師器

第22表　1区3号横穴墓玄門出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	甕	10.3	3.1			つまみ	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（C2）	内面にへら記号/
2	坏	9.0	3.5				外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（C2）	内面にへら記号/
3	高坏	16.4	10.8		9.9	透しなし	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	
4	甕 土師器	22.6	28.2				外面・口縁部横なで、胴部縦はけめ 内面・縦へら削り	良好		

第23表　1区3－B号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	11.8	5.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	天井部にへら記号×
2	坏身	10.8	4.5	12.8			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	底部にへら記号×
3	坏蓋	12.2	3.9				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	天井部にへら記号×
4	坏身	10.8	4.0	12.8			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	底部にへら記号×
5	坏蓋	12.2	4.6				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	天井部にへら記号×
6	坏蓋	11.4	5.2				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	
7	坏身	9.8	3.8	12.8			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	
8	坏身	10.6	4.2	12.9			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A7）	底部は板状工事によるなで

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
9	坏身	11.4	4.3	13.5			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部にへらで数本の線
10	坏蓋	11.2	4.1				外面・へら切り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	天井部にへら記号×
11	坏蓋	10.2	3.5	12.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部にへら記号×
12	坏身	9.6	4.1	11.6			外面・へら切り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部にへら記号×
13	坏蓋	10.6	4.5				外面・へら切り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部にへら記号×
14	坏身	9.8	3.3	11.4			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部にへら記号×
15	坏蓋	10.4	4.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	天井部にへらで数本の線
16	坏身	9.6	3.8	11.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部にへら記号××
17	坏蓋	11.0	3.9				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
18	坏身	9.6	3.7	12.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
19	坏蓋	10.7	3.9				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
20	坏蓋	10.3	4.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部は板状工具によるなで
21	坏蓋	10.3	4.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部は板状工具によるなで
22	坏身	8.8	3.5	11.1			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部にへら記号/
23	坏身	9.2	3.4	11.3			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	底部にへら記号×
24	坏身	9.2	3.8	11.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
25	坏身	8.7	3.8	11.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
26	蓋	8.4	3.4			つまみ付	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(C2)	
27	蓋	10.2	3.5			つまみ付	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(C2)	
28	坏	9.2	3.3				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(C2)	
29	坏	9.4	3.0			暗文	外面・へらみがき、静止なで 内面、暗文、静止なで	良好		
30	高坏	9.0	9.0		5.8	脚部・沈線2条	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
31	高坏	15.6	12.6		11.9	脚部・沈線1条 二段二方透（上下とも四角）	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(B5)	
32	長頸瓶	8.1	20.2	13.3	7.0	高台付	外面・頸部・回転なで、胴部・かきめ、回転へら削り、内面・回転なで	良好	(2)	やや変形
33	長頸瓶	8.5	18.9	15.1		頸部・沈線3条	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(1)	肩部にCの印が2箇所
34	平瓶	6.6	14.5	13.5			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(C2)	
35	平瓶	6.7	14.5	12.7			外面・胴部・かきめ、回転へら削り 頸部・回転なで、内面・回転なで	良好	(C3)	
36	平瓶	6.2	15.8	13.7			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(C3)	
37	広口壺	11.0	14.0	15.0			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好		
38	甕	13.6	31.6	28.6			外面・回転なで、格子状たたき後かきめ、内面・同心円状文たたき	良好		

第24表　1区3－B号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
－1	鉄釘	11.9	－	－	0.5	－	0.5	完形 木質の付着面は同一面
－2	鉄釘	9.0	－	－	0.4	－	0.5	完形 木質の付着面は同一面
－3	鉄釘	10.2(残)	－	－	0.4	－	0.4	木質は同一面に付着

番号	器　種	材　質	色　調	長　径	短　径	孔　径		備　　考
－4	鉄釘	9.4	－	－	0.4	－	0.5	完形 木質は同一面に付着
－5	鉄釘	9.5(残)	－	－	0.5	－	0.5	頭部は方形 木質は同一面に付着
－6	鉄釘	8.5	－	－	0.4	－	0.5	頭部は折れ曲がっている。 木質は同一面に付着
－7	鉄釘	9.5	－	－	0.4	－	0.4	木質の付着面は部位により異なる。
－8	鉄釘	10.5	－	－	0.4	－	0.4	木質の付着面は部位により異なる。
－9	鉄釘	9.7	－	－	0.5	－	0.5	木質の付着面は部位により異なる。
－10	鉄釘	4.5(残)	－	－	0.4	－	0.4	先端部のみ
－11	刀子	7.2(残)	2.3(残)	1.5	－	0.4	－	茎部
－12	刀子	12.1	7.0	0.9	－	0.3	－	完形 木質残存
－13	鉄のみ	12.3(残)	－	0.7	0.9	0.2	0.3	先端欠
－14	鉄のみ	18.3(残)	－	1.1	1.1	－	0.8	

第25表　1区3－B号横穴墓出土耳環観察表

（単位：mm）

番号	器　種	a	b	c	d	e	備　　考
－15	金環	20.6	22.0	12.0	6.9	4.9	全体的に錆が付着しているが、一部金箔が見える。
－16	金環	20.4	21.9	11.0	7.0	4.8	全体的に錆が付着しているが、一部金箔が見える。

第26表　1区3－C号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	法　量				形態上の特徴	調　整	色調 焼成	分　類	備　考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	10.8	4.1				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A8）	
2	長頸瓶	6.7	17.0	13.0			外面・回転なで、回転へら削り、頸部・かきめ、内面・回転なで	良好	（1）	

第27表　1区3－C号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	刃　幅	頸　部	刃部厚	頸　厚	備　　考
－1	大刀	45.6(残)	39.8	3.1	1.7	0.9	0.8	・切先部先端欠　・目釘穴半分残存 ・刃部中央で折れ曲がっている。
－2	刀子	13.1	8.1	1.3	－	0.4	－	木質が付着
－3	不明鉄器	2.6		0.6		0.2		木質が内外面とも付着している。
－4	不明鉄器	2.8		0.6		0.2		木質が内外面とも付着している。

第28表　1区3－C号横穴墓出土耳環観察表

（単位：mm）

番号	器　種	a	b	c	d	e	備　　考
－5	耳環	24.2	26.3	12.9	8.0	6.5	全体的に錆
－6	耳環	25.0	27.8	13.6	8.3	7.3	全体的に錆

第29表　１区古道出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	11.6	4.0			２条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好		
2	坏蓋 口縁のみ	11.8	－				外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
3	坏身 口縁のみ	10.1	－	12.1			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
4	坏身 口縁のみ	11.2	－	13.5			内面・回転なで 内面・回転なで	良好		

第30表　１区遺構外出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	蓋	15.9	2.7			輪状つまみ	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
2	坏	15.2	4.7		8.4	脚付	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
3	坏	12.7	4.2			口縁端部はかなり内傾している。	外面・回転なで、底部・回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
4	坏	14.3	4.4				外面・回転なで、底部・回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
5	坏	－	－				外面・回転なで、底部・回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
6	坏	12.7	2.1				外面・回転なで、底部・回転糸きり 内面・回転なで	良好		
7	甕 口縁のみ	11.5	－	－			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
8	壷 胴部のみ	－	－	－			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
9	甕 口縁のみ	14.4	－	－			外面・横なで 内面・横なで	良好		土師器
10	巨大土錘	3.4	6.7			円形の孔	外面・なで	良好		土製品

写真２　島田池遺跡出土中最大甕復元終了後
（１区１号・６区４号横穴墓出土）

第２節　２区の調査

概　　要　調査区の大半は、遺跡の北東側の緩斜面にあたり、上方の尾根には、５基の古墳群が存在し７区として調査を行っている。遺構は、奈良時代後半にあたる段状遺構等と遺物を検出している。また、同一の斜面をやや南東側にいったところでは、横穴墓の築造途中のものと推定される土壙を１基検出している。

調査前の地形では、すでに斜面の傾斜が緩やかになる部分が２段にわたって見られ、加工段の存在を推定される状況であった。

調査当初には、他の調査区で多数検出されている横穴墓の存在を確認するため、斜面の上半部分の表土を重機によって除去した。横穴墓は検出しなかったが、その下半部分で加工段の存在する可能性があったことから、同様に重機によって表土の除去を行った。その時点で、遺物の出土を確認し、表土除去後に人力によって精査をおこなった。調査によって、堆積した土砂が少ないことから、後世にある程度の削平を受けたものと判断された。こうした調査の経過を得て、加工段、ピット、土壙を検出した。以下、遺構ごとに順を追って説明したい。

(1)加工段

［ＳＢ０１］（第71図）

調査区の北端の斜面の最も高い位置で検出し、標高20m付近に存在する。遺構は、ほんの一部分のみ検出し、大部分は調査区外にも広がるものである。斜面をコ字形に加工し、幅1.5ｍ程の平坦面を造りだしたものであり、南端部分のみを調査した。深さは、0.2mを測り、床面にはピットを検出した。ピットは半分のみの調査であるが、径30㎝、深さ８㎝のものである。

遺物は、加工段の覆土より土製支脚（第73図－１）の破片が出土している。

遺構の時期は、調査範囲が狭いことと、出土遺物が少ないことから明確にできないが、後述する同様の遺構と同じものと推定される。

［ＳＢ０２］（第72図）

調査区の中央付近で検出した加工段で、標高19mの位置に存在する。斜面を深さ70㎝程削りこんで平坦面を作り出したもので、平面的にはコ字に近い形である。作り出された平坦面の規模は、南北10mを測り、東西は不明瞭であるが３ｍ程と推定される。土層は、地山直上に８㎝ほど硬く締まった層（４層）が認められ、貼床である可能性があり、この面が本来の床面であると考えられる。また、その上の土層は自然に堆積したものと考えられる。

床面では、いくつかのピットを検出しているが、並びを特定できるものは確認できなかった。また、南端付近からは、土壙（ＳＫ０３）を検出している。

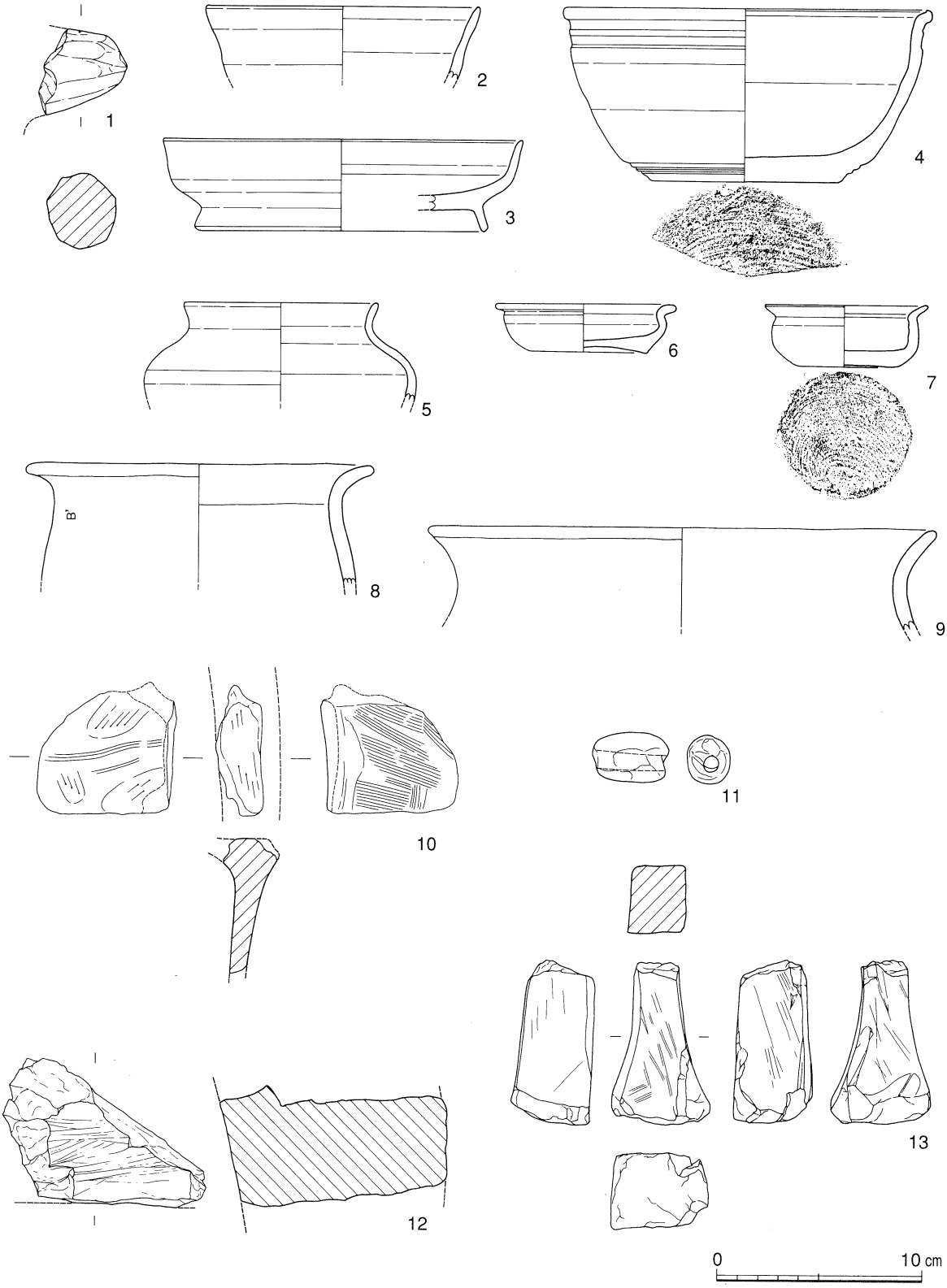
出土遺物（第73、74図）には、須恵器（２～７）、土師器、（８、９）、竈（10）、土錘（11）、砥石（12、13）、土製支脚（第74図－１）、鉄滓（第80図－１）等があり、その出土層位から２つに分けることができる。上層の遺物（８、11、13、第73図－１）は、流入土に含まれたものである。下層の遺物（２～７、９、10、12、74図）は、４層の貼り床上面に対応するものと考えられる。

第71図　2区遺構配置図（S＝1：120）

第72図　2区SB02遺構実測図（S＝1：60）

須恵器は、高台付の深い坏（2）、高台付の浅い坏（3）、鉢（4）、壷（5）、灯明皿（6、7）が出土し、壷以外のものの底部には回転糸切り痕が残るものである。

土師器は、口径17㎝（8）と25㎝（9）の大小2種類存在し、両者とも口縁があまり屈曲しない

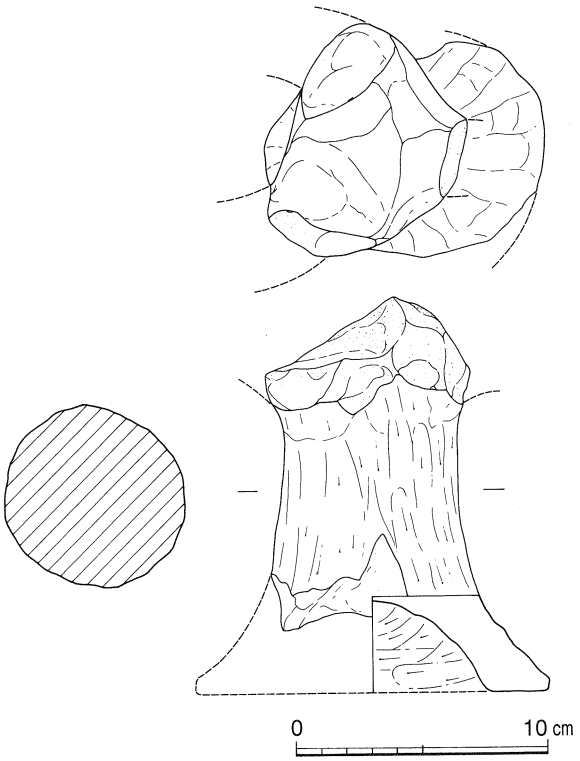


第73図　2区SB01・02出土遺物実測図（S＝1：3）

ものである。調整は、外面ハケメ、内面ヘラケズリと推定できるが、風化のため観察できなかった。

竈（10）は、庇部分の破片が出土している。小片であるため詳細は不明である。

砥石の12は、研磨面が一面のみ残存しているもので、肌理の細かい質の岩石で作られたものである。一方、13はやや粗目の岩石で作られたものである。形状は、四角柱状で端部が広がるものである、端部は片方のみ残存している。各４面とも擦痕が認められ、研磨面として使用されている。その他に、南端の平坦面に存在するピット（Ｐ17）からは、鉄鎌（第80図－４）が出土している。　遺構の時期は、出土した須恵器の高台付の皿から、高広ⅣＢ期（註１）と推定される。



第74図　２区SB02出土土製支脚実測図（Ｓ＝１：３）

［ＳＢ０３］（第75図）

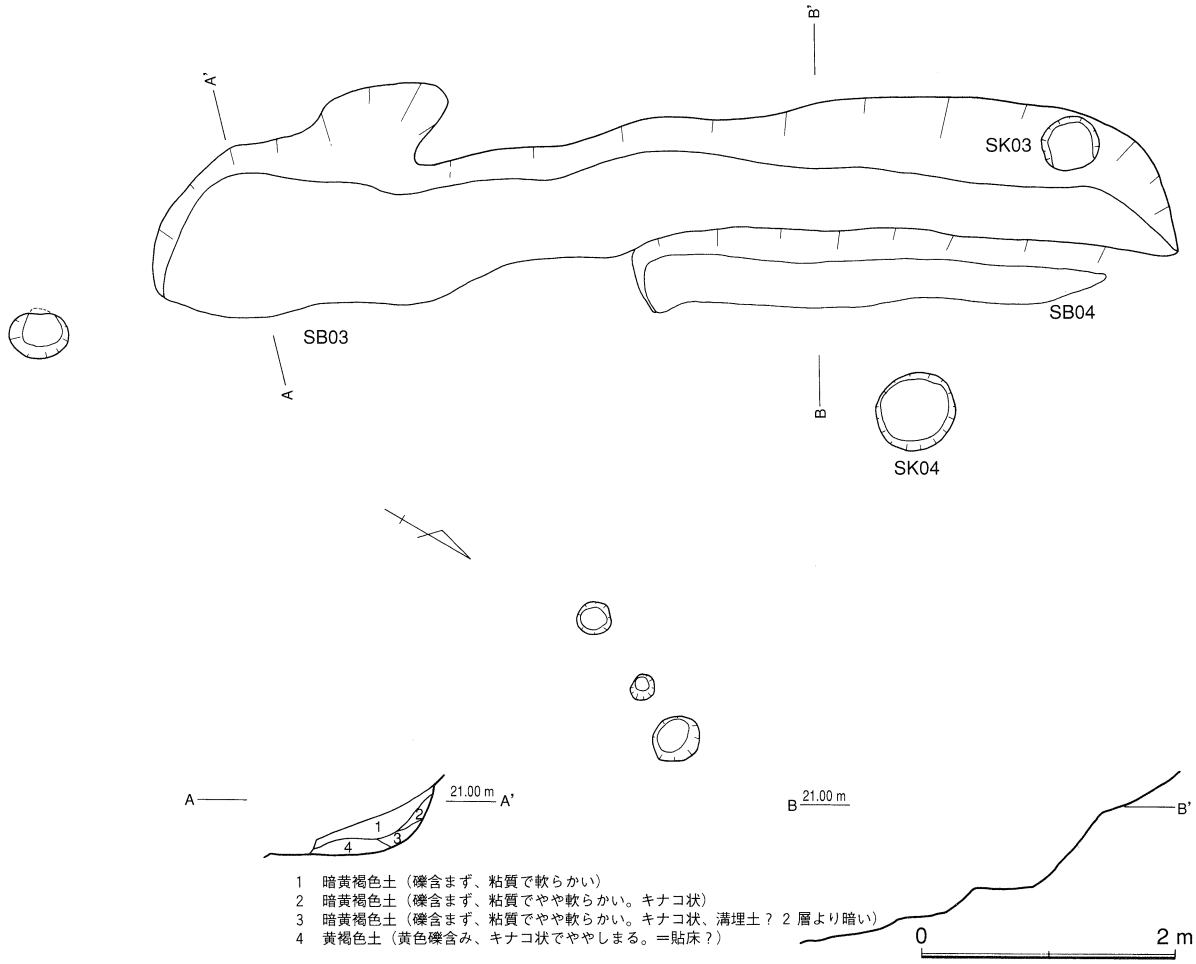
調査区の南端で検出した加工段で、標高20.5mの位置に存在する。斜面を深さ50㎝程削りこんで平坦面を作り出したもので、平面的にはコ字状に近い形である。作り出された平坦面の規模は、南北８m、東西1.5mを測る。土層は、地山直上に20㎝ほどやや硬く締まった層（３、４層）が認められ、貼床である可能性が考えられる。また、この面が本来の床面であると考えられる。その上の土層は自然に堆積したものと考えられる。

床面検出時において、壁際付近で土質の異なる部分が、短い溝状にいくつか確認された。しかし、地山まで掘り下げた時点では、認められなかった。壁際で見られた溝状の土質の異なる部分は、本来建物の壁材が存在していた痕跡であったと考えられるが、図化等の資料化を怠ったために詳細については、不明である。また、床面からはピット等確認されなかったが、北端コーナ付近の壁面に掘られた土壙（第78図）を検出している。

遺物は遺構に伴うと考えられるものは、出土しておらず、よって遺構の時期については不明である。

［ＳＢ０４］（第75図）

前述のＳＢ０３の東側に接して検出した加工段で、ＳＢ０３と切り合い関係にあるものと考えられるが、土層観察のベルト等設定ししなかったために、前後関係は不明である。規模は、現状で深さ20㎝、東西0.4m、南北3.7mを測る。平面的には、コ字に加工したものと考えられるが、北側は不明瞭であった。床面からは、ピット等は検出していない。また、遺物も出土していないことから、時期については不明である。



第75図　2区SB03・04遺構実測図（S＝1：60）

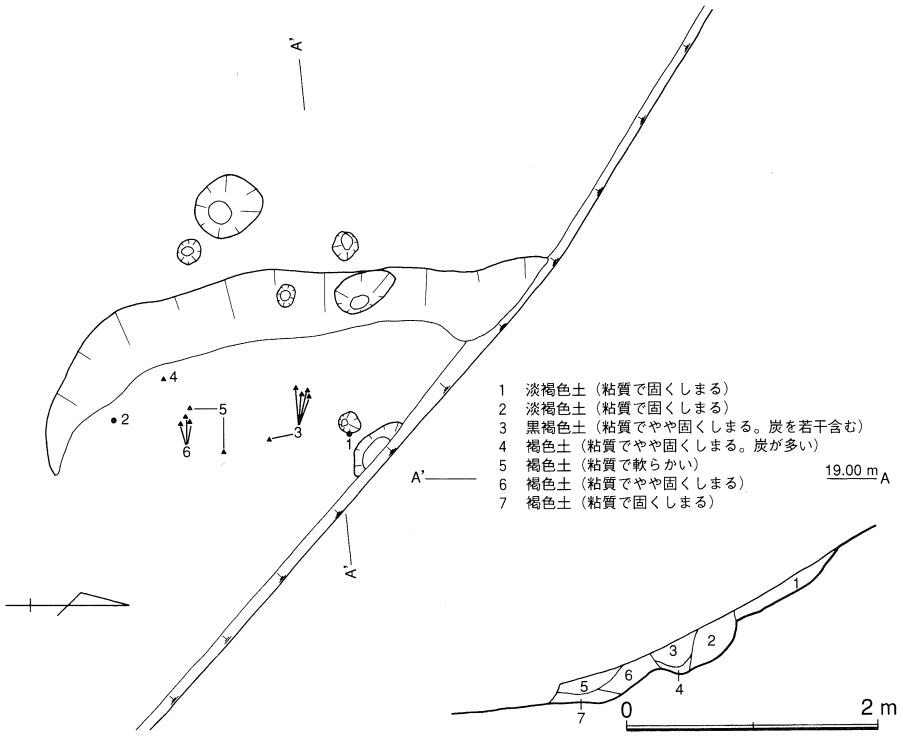
［ＳＢ０５］（第76図）

調査区の北端で検出した加工段で、標高17mの位置に存在する。ＳＢ０１～０４が存在している平坦面より、一段低い位置に存在し、この標高で、調査区外にも加工段がいくつか存在している可能性が高い。加工段は、斜面を深さ30㎝程削りこんで平坦面を作り出したもので、平面的にはコ字状に近い形と考えられるが、その南端の一部を検出したのみであるため、実態については不明である。作り出された平坦面の規模は、東西0.5mで、南北は現状で3.5mを測る。土層は、地山直上に7㎝ほどやや硬く締まった層（7層）が認められ、貼床と考えられる。また、この面が本来の床面であると考えられる。その上の土層は自然堆積土と考えられる。

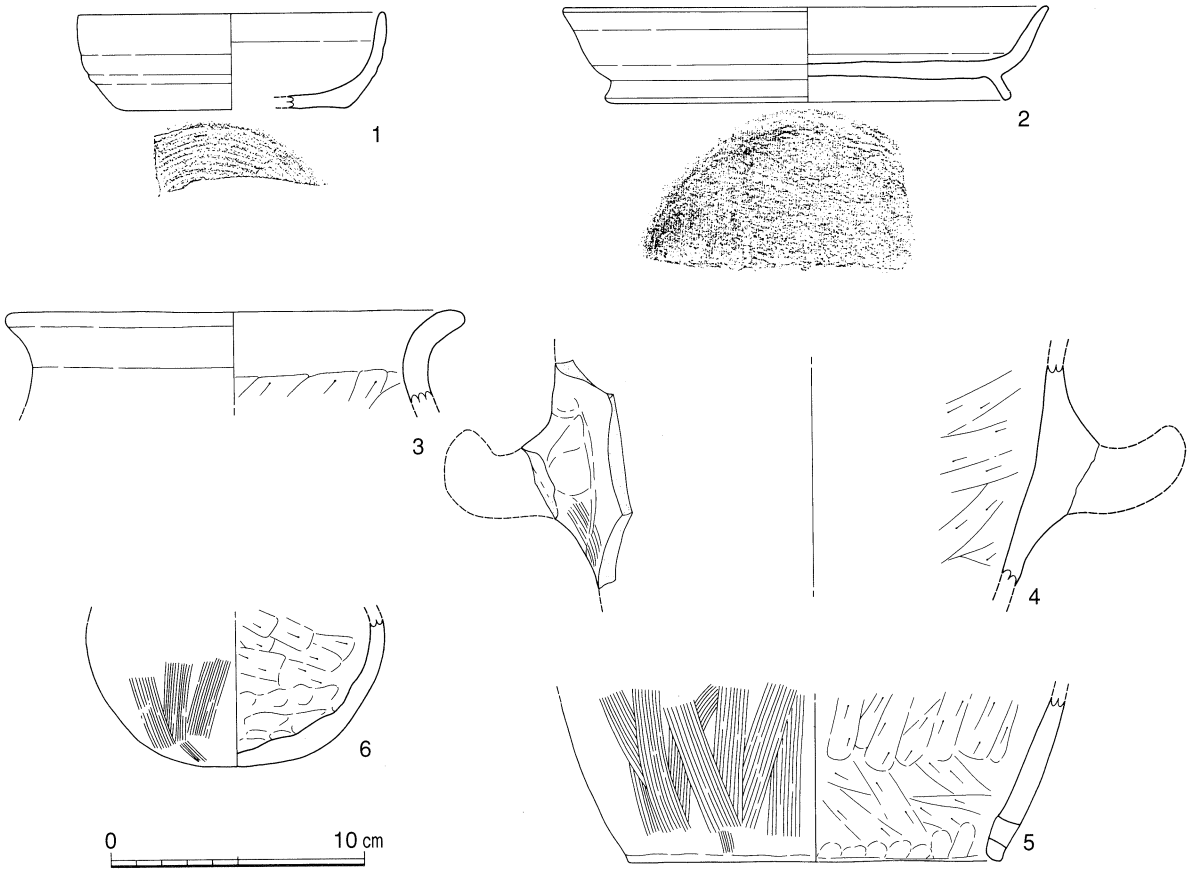
床面及び壁面には、いくつかピットを検出しているが、現状では、建物の柱穴として推定されるものは、認めることができなかった。

遺物は、須恵器（第77図－１、２）、土師器（第77図－３～６）が存在している。また、出土層位から、床面上から出土の遺物（１、４～６）と、堆積土に含まれて出土した遺物（２、３）の２つに分けられる。その中で、確実に遺構に伴う可能性のものは、床面上のものと考えられる。

遺構の時期は、出土須恵器から高広ⅣＢ期（註２）と推定される。



第76図　2区SB05遺構実測図（S＝1：60）



第77図　2区SB05出土土器実測図（S＝1：3）

(2)土　壙

［ＳＫ　０１］（第78図）

標高21mのやや急な斜面に掘り込まれた土壙であり、調査区の最も高い位置に存在する。平面は、やや不整な円形状を呈し、長径0.95m、短径0.75m、深さ1.3mを測る。底面は平坦であり、その中心には、径18㎝、深さ30㎝の円形のピットが掘られている。覆土は、暗黄褐色を呈す粘質な土で、自然に堆積したものと考えられた。出土遺物は認められず、時期については不明であるが、その形状から落とし穴と推定できるものである。

［ＳＫ　０２］（第78図）

ＳＢ０１の上方の標高20mの斜面に掘られた土壙である。平面は、不整楕円形を呈し、長径1.55m、短径0.78m、深さ0.4～1.1mを測る。底面は、凹凸が激しいものである。覆土は、５層に分層したが、基本的に自然堆積によるものと考えられる。出土遺物には、須恵器（第79図－１）、ミニチュアの土師器（２、３）があり、覆土の上層部分から出土している。また、須恵器は、下方の平坦面の堆積土からも出土している。

遺構の性格については、ミニチュアが出土していることから、非日常的な特別な行為に伴う可能性が考えられる。また、その時期については、不明確ではあるが、出土須恵器より高広ⅣＢ期（註３）と推定される。

［ＳＫ　０３］（第78図）

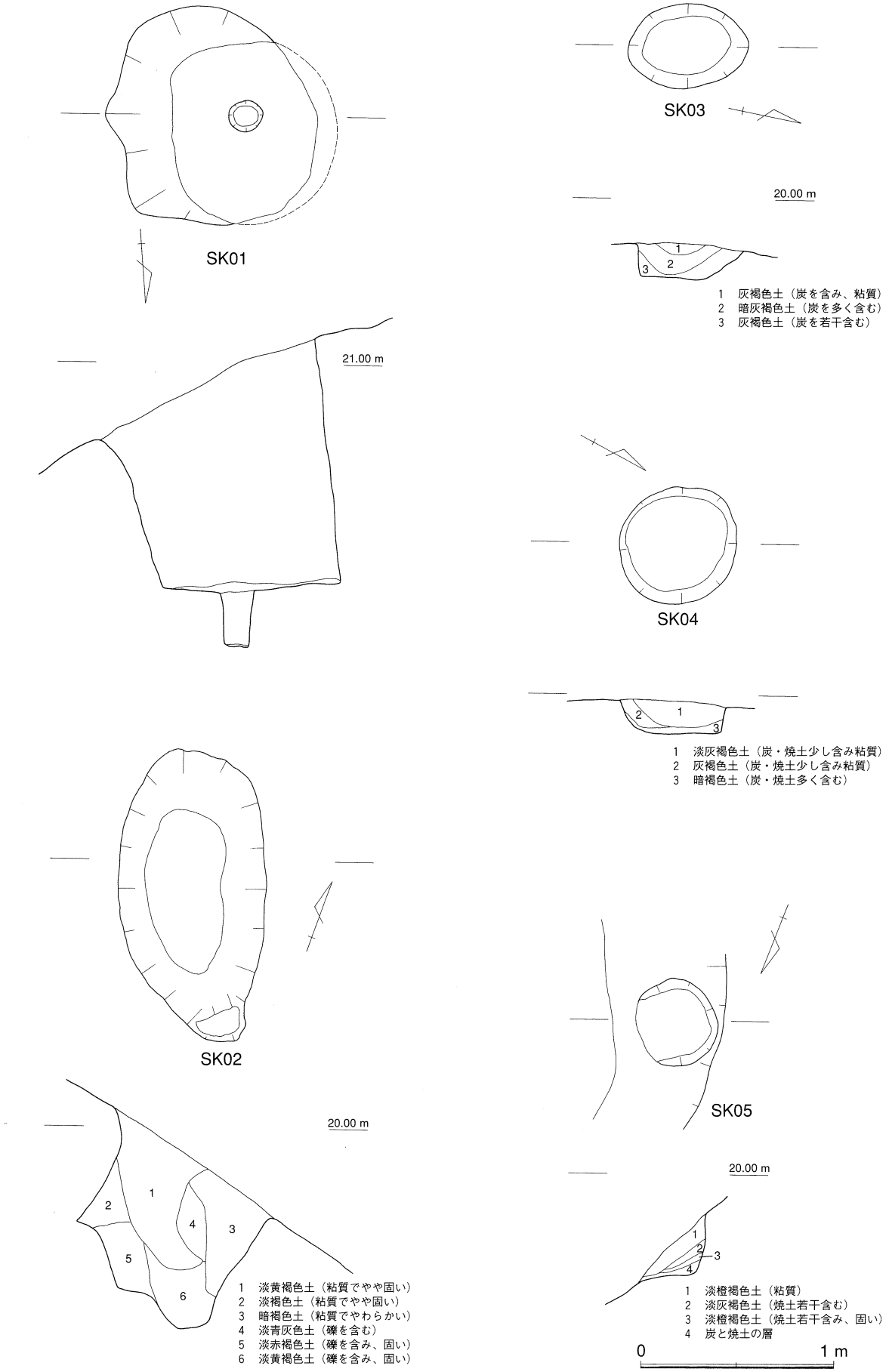
ＳＢ０１の平坦面に掘られた土壙である。平面は、不整楕円形を呈し、長径0.65m、短径0.43m、深さ0.2mを測る。底面は、平坦なものである。覆土は、下層の３層に炭を含む層である。何らかの火の使用に関連した遺構と考えられる。時期は、遺物が出土していないことから不明確であるが、ＳＢ０２の平坦面に伴うものと考えれば、高広ⅣＢ期（註４）と推定されるものである。

［ＳＫ　０４］（第78図）

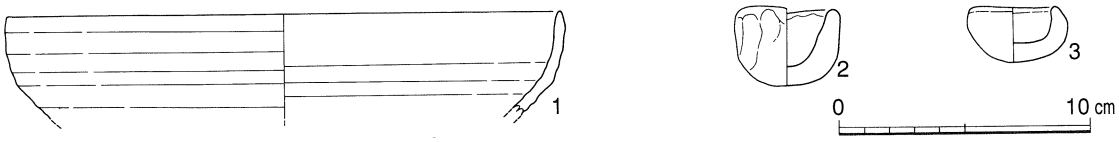
ＳＢ０４の東側に存在する平坦面で検出した土壙である。平面は、径60㎝程の円形を呈し、深さ18㎝を測るものである。覆土は、底面付近に炭を含む層があり、また鉄滓（第80図－２）が出土している。鍛冶等に伴う遺構として考えられることもできるものである。時期については、不明である。

［ＳＫ　０５］（第78図）

ＳＢ０３の壁体に掘られている土壙である。平面は、隅丸の不整方形を呈し、長径0.45m、短径0.40m、深さ0.65mを測る。また、壁面は赤褐色に焼けており、底面は、平坦に加工されたものである。覆土は、４層に分層したが、基本的に自然堆積によるものと考えられる。壁面が焼けていることから、火の使用を伴う遺構であったと考えられる。遺物の出土はなく、時期については不明である。



第78図　2区土壙（SK01～05）実測図（S＝1：30）



第79図　2区SK02出土土器実測図（S＝1：3）

(3)遺構外出土遺物（第80、81、82、83図）

調査区内からは、遺構外から遺物が出土しており、基本的に地山上の堆積土（暗褐色土）より出土している。取上げは、上段、中段、下段と標高により3地区に分けて取り上げた。上段は、ＳＢ０１～０４の存在する周辺、中段は、それよりも東側～斜面にかけての部分、下段はＳＢ０５の存在する高さ周辺である。遺物の図化は、小片のものを除いて可能な限りおこなった。以下種類ごとに概略を述べたい。

[須 恵 器]（第81、82図）

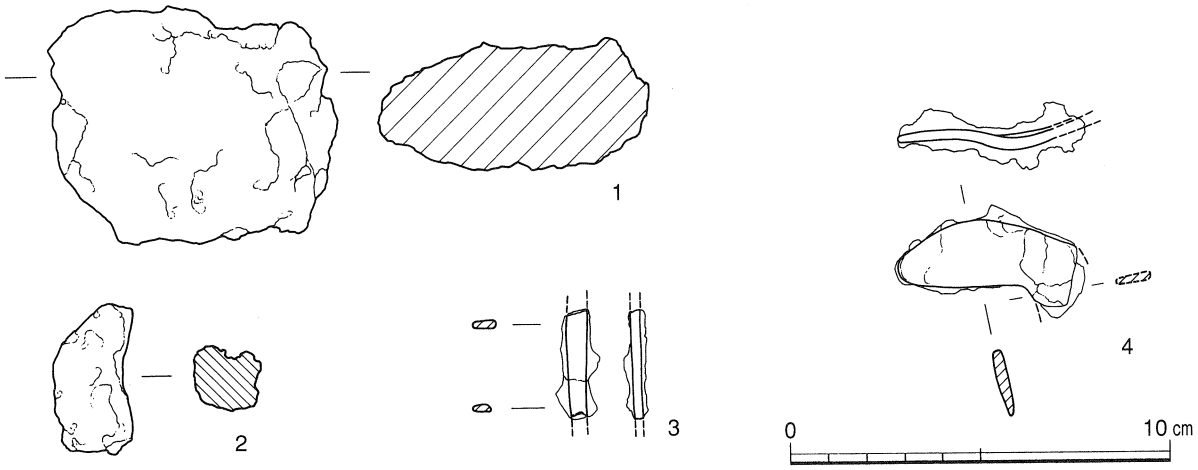
1段目からは、3点（第81図1～3）出土している。鉢（1）、高台付の深い坏（2）、浅い坏（3）が存在し、全て回転糸切痕を底部に残すものである。また、3は赤褐色を呈し、土師器に近い焼成である。

2段目からは、22点（第81図4～22、第82図23～25）出土している。それぞれを分類すると、高台付の深い坏（4、5）、高台付の浅い坏（6）、端部の屈曲する坏（7～10）、端部を丸くおさめる坏（11～15）、端部を丸くおさめるやや深めの坏（16～19）、高坏（20～22）、壷（第82図23～25）に分けられる。基本的に坏類は、底部に回転糸切り痕を残すものである。

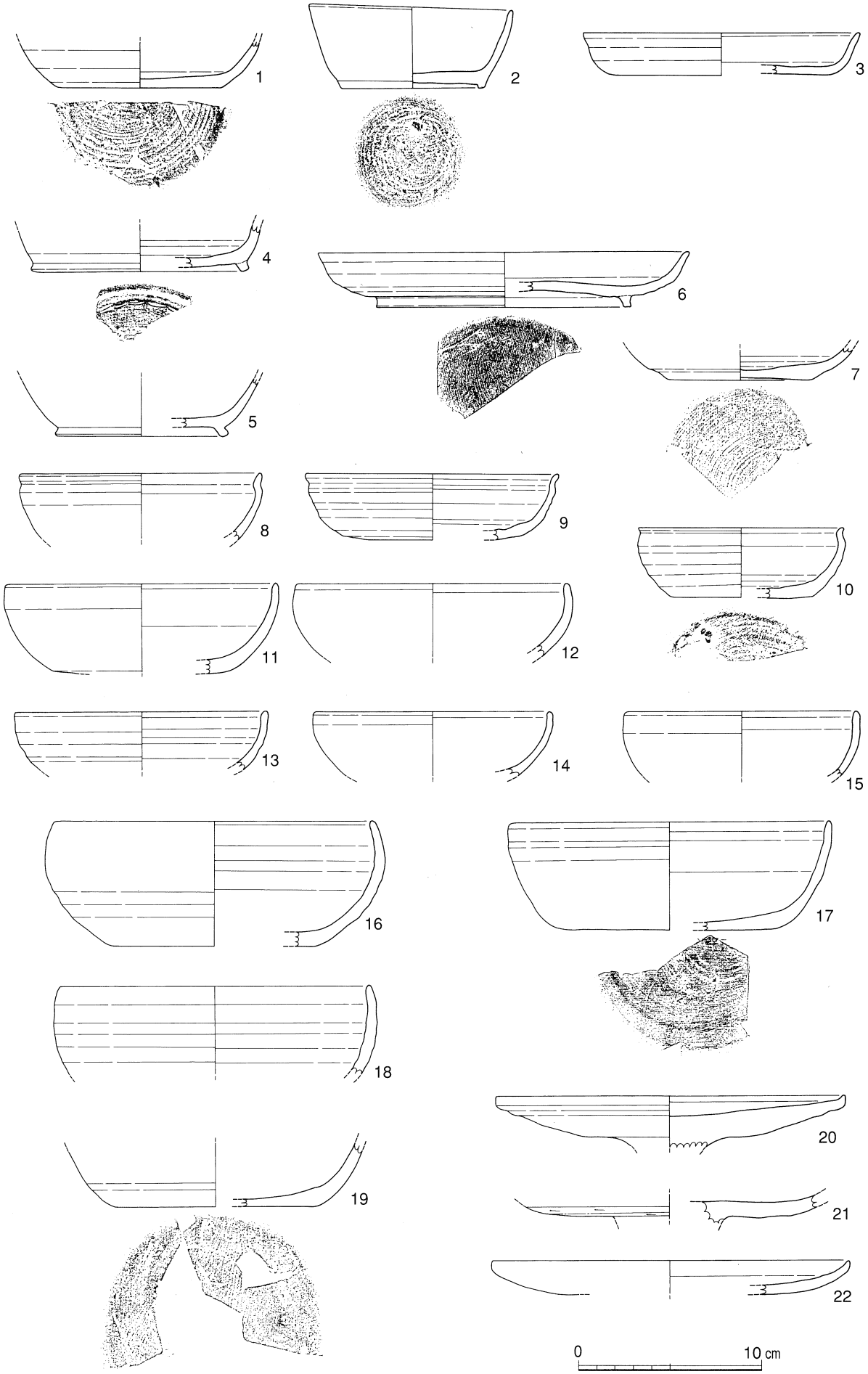
3段目からは、4点（第82図26～29）出土している。高台付の浅い坏（26、27）、坏底部（28）、壷底部（29）が出土している。

[須恵器甕]（第82図）

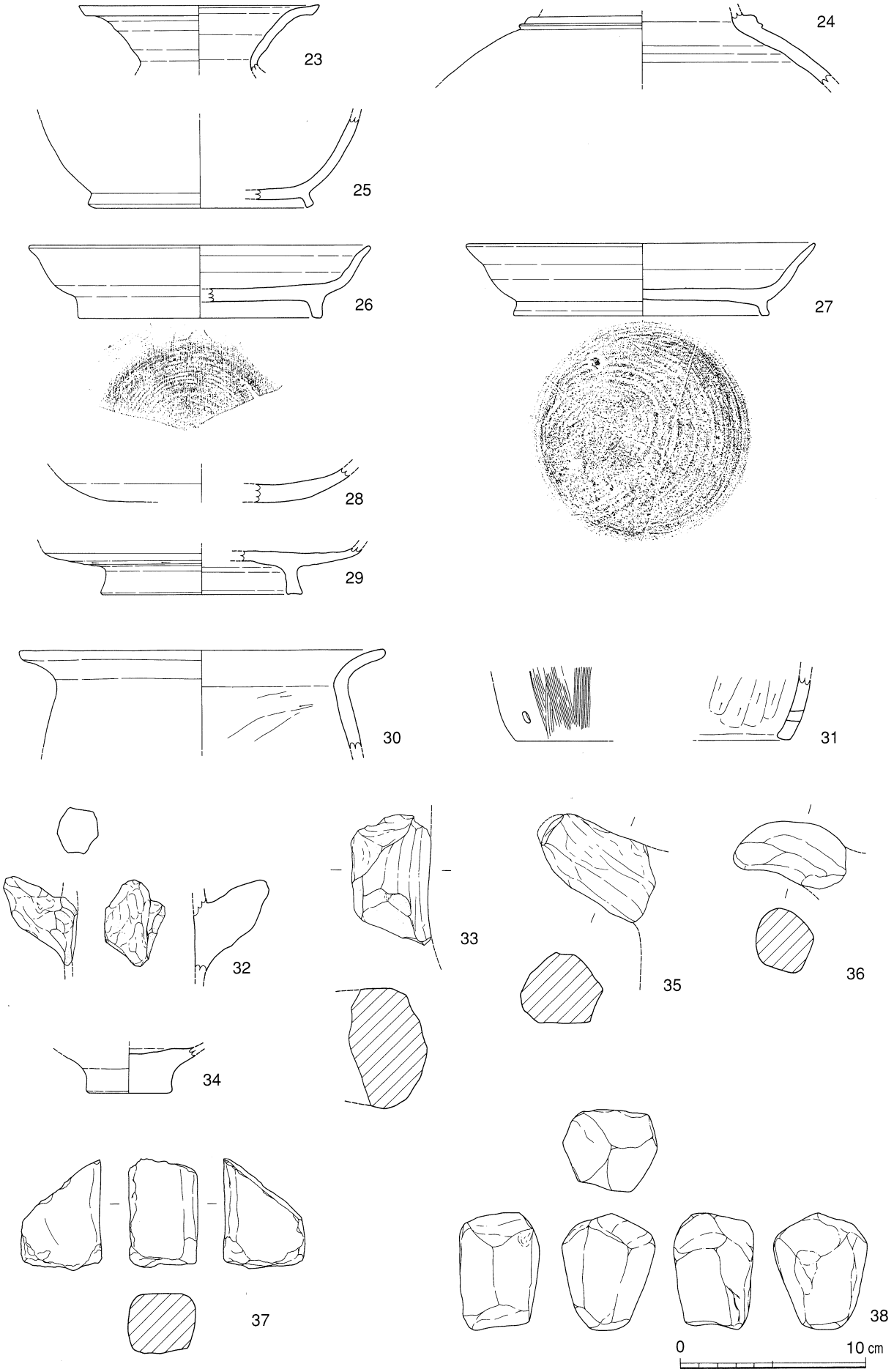
1段目～2段目からは、甕が破片で出土している。口径20㎝程のもので、口縁端部は、二重口縁状になるが、横穴墓等から出土するものと比較すると、端部と頸部の段が不明瞭であまり突出しないものである。また、頸部には、ヘラ描きの紋様が施される。



第80図　2区出土鉄滓・鉄器実測図（S＝1：2）



第81図　2区遺構外出土遺物実測図(1)（S＝1：3）



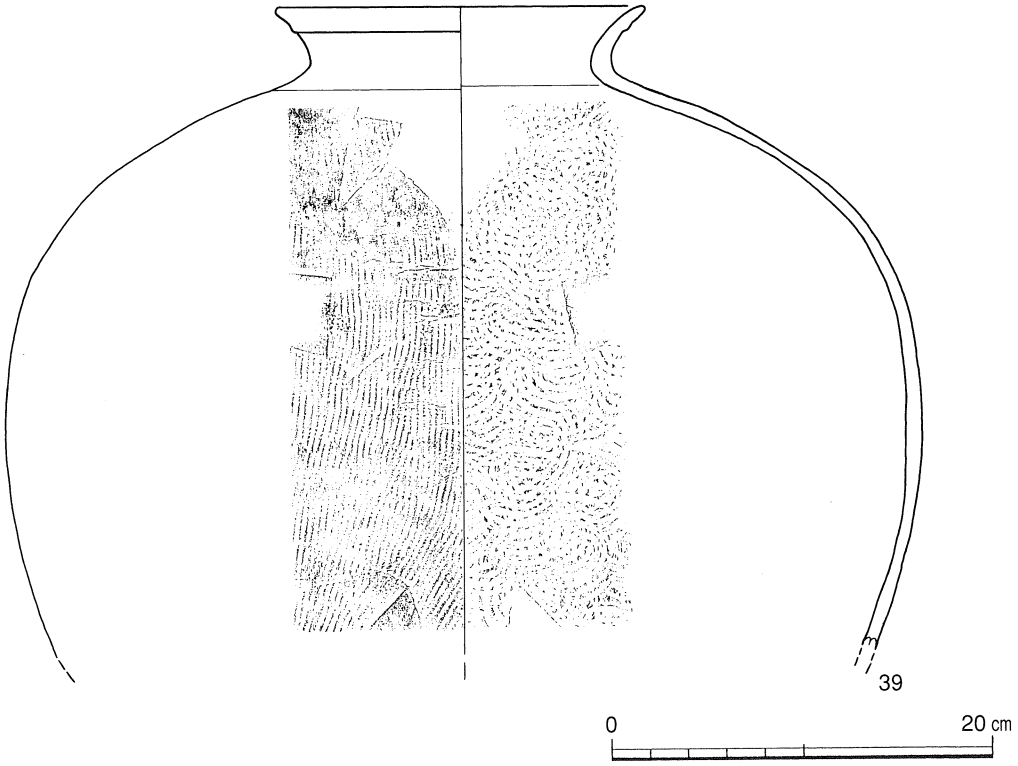
第82図　2区遺構外出土遺物実測図(2)（S＝1：3）

[土 師 器]（第82図）

2段目からは、甕（30）、甑（31）、甑の把手（32）、土製支脚（33）、底部（34）が出土している。それぞれほぼ近い時期のものと考えられるが、34は、底部に回転糸切り痕が見られ、新しい様相をもつものである。

[砥　　石]（第82図）

2段目から2点出土しており、37は肌理のやや粗目の岩石で作られたものである。四角柱状を呈し、4面とも研磨面として使用されていたと考えられるが、擦痕は不明瞭で確認できなかった。38は、肌理の粗い岩石で作られたもので、断面が6角形の多面直方体状を呈すものである。6面は、研磨面として使用されたものと考えられ、さらに端部の3面も研磨面であったものと考えられる。なお、擦痕は不明瞭で確認できなかった。



第83図　2区遺構外出土須恵器甕実測図（S＝1：4）

(4)横　穴

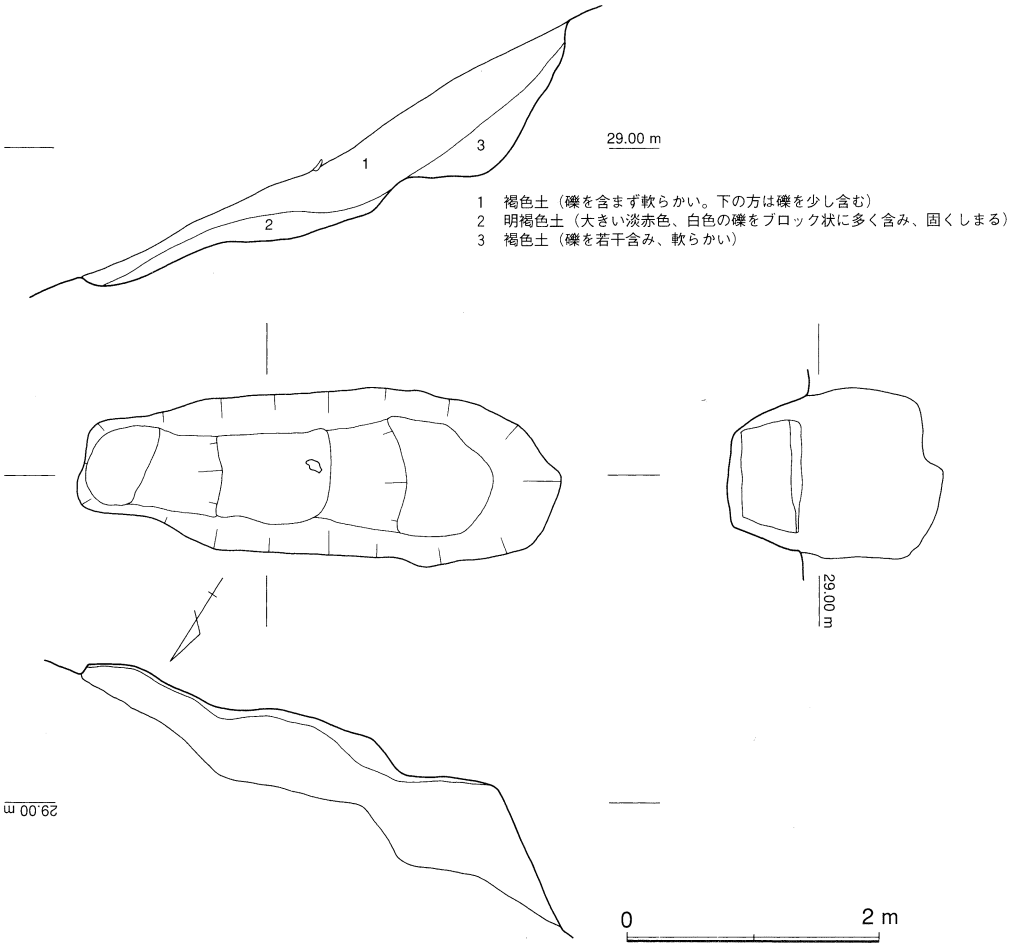
[1 号横穴]（第84図）

前述の加工段等が検出された斜面を南側にいった標高29 mのやや急な斜面に位置している。縦長の楕円形の土壙であり、横穴墓の前庭部の築造途中のものと考えた。地山を深いところで60㎝掘りこんだもので、床面は、階段状になり、平坦に加工された面が 3 面存在する。規模は、上端で、幅0.9m、長さ水平距離で3.25m、斜距離で3.50mを測るものである。また、最上段の床面は、幅88㎝、奥行68㎝を測り、奥壁側は孤状を呈す。2 段目は、幅52㎝、奥行84㎝を測り、方形を呈す。最下段は、幅60㎝、奥行48㎝を測り、前壁側は孤状を呈すものである。

土層は、3 層に分層しているが、基本的に自然堆積によるものと考えられ、人為的に埋め戻された可能性はないものと思われる。

出土遺物は、プラン検出時に堆積土上面から須恵器甕片が出土しているが、遺構に伴う可能性は、明確ではない。

遺構の時期、性格ともに明確にできないものであるが、斜面に掘られている点、そして、その平面的な形状から横穴墓の前庭部の築造途中のものと推定した。また、横穴墓として本来掘られていたものとすれば、完成していない理由は、その地山の軟弱である点がまず考えられる。



第84図　2区1号横穴遺構実測図（S＝1：60）

(5)小　結

本調査区では、建物跡に伴うものと考えられる加工段を主に検出している。ここでは、その調査成果と課題について整理したい。

[加工段について]

基本的に斜面を加工し平坦面を作り出した遺構には柱穴が並び、そこに掘立柱建物が存在するものであるが、今回検出した加工段からは、柱穴は存在していない。建物が存在していないとして考えた場合、その性格について問題になってくるものと考えられる。

本例を考える上で、参考となるものとして、群馬県中筋遺跡・黒井峯遺跡（註５）が挙げられ、時期は異なるが、集落の中でも明確な柱穴が存在しない壁立の建物が存在している。本例は、そういった構造の建物が存在していた可能性が考えられるものである。

また、出土遺物には、土師器の煮炊具等が存在し、住居跡から出土しているものと変わらないものである。加工段は、特殊な性格をもつものでなく、一般的な集落と同じような性格をもつものとして捉えた方がよいと考えられる。

[出土須恵器について]

出土した須恵器は、遺構内外を含め、ほんの数点を除いては、時期の前後するものは少なく、高広ⅣＢ期に対応し、凡そ８世紀後半～９世紀前半のものと推定される。これらの器種構成ををみると、高台付きの深い坏、高台付きの浅い坏、端部の屈曲する坏、端部を丸くおさめる浅い坏、端部を丸くおさめる深めの坏、灯明皿が存在し、坏類については器種分化が認められるものである。

[ま と め]

以上述べてきたように、本調査区検出の遺構は、８世紀後半～９世紀前半の集落の一角と考えられる。同時期のものと考えられる集落跡は、８区（尾根を挟んだ西側の谷）でも検出しており、遺跡周辺の丘陵谷部の緩斜面には、この時期の集落跡が広がっているものと考えられる。また、出土遺物から推定される、その存続期間は、一時期に限られる特徴が見られ、短期間のものであったと考えられる。

また、同一丘陵の斜面には、９世紀の集落跡として岸尾遺跡も存在し、本調査区の集落の移動したものと推定することが可能な遺構も存在している。いずれにしても、島田池遺跡の存在する丘陵の谷部に広がる緩斜面には、大規模な集落跡の存在している可能性が高いものと考えられる。

（註）

1. 『高広遺跡発掘調査報告書』 島根県教育委員会　1984年
2. 註１と同文献
3. 〃
4. 〃
5. 大塚昌彦「火山灰下の家屋」『家族と住まい』考古学による日本歴史15　雄山閣　1996年

第31表　２区ＳＢ０１・２出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	土製支脚						外面・内面ともなで	良好		
2	坏	13.6	－				外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
3	坏	17.8	4.5		14.6	高台付	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
4	坏	18.3		9.4	9.4	高台付近３条沈線、口縁部２条沈線	外面・回転なで、底部・回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
5	短頸壷	9.7		13.6			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好		
6	坏	8.0	3.0	5.0			外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
7	坏	8.8	2.4	5.8			外面・回転なで、底部・回転糸きり 内面・回転なで	良好		
8	甕	17.3	－	－			外面・内面とも風化により調整不明	良好		土師器
9	甕	25.0	－	－			外面・頸部横なで 内面・調整不明	良好		土師器
10	竈	－	－	－			外面・はけめ 内面・削り	良好		土師器
11	土錘	直径 2.5	3.8	内径 0.8			外面・指で押さえてある。 内面・	良好		
12	砥石	10.0	11.0	7.0			外面・			
13	砥石	8.0	3.5				外面・４面とも研いだ痕が残る	良好		

第32表　２区ＳＢ０５出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	坏	12.4	3.8		9.1	沈線３条	外面・回転なで、底部・回転糸きり 内面・回転なで	良好		
2	坏	19.4	3.8		16.2	高台付	外面・回転なで、底部・回転糸きり 内面・回転なで	良好		
3	甕	18.6	－	－			外面・口縁部横なで 内面・横なで、へら削り	良好		土師器
4	甑 把手付近						外面・把手の付け根にはけめ 内面・横方向のへら削り	良好		土師器
5	甑	－	－		15.0		外面・端部横なで、胴部はけめ、内面・胴横へら削り、脚端指頭圧痕	良好		土師器
6	小壷			12.0			外面・縦はけめ、内面・胴横削り、底部付近・指頭圧痕	良好		土師器
7	土製支脚	径 8.0			14.0		外面・縦へら削り 内面・横へら削り	良好		土師器

第33表　２区ＳＫ０２出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	坏	22.0	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
2	小形土器	4.1	3.2				外面・内面とも指で押さえて形成 外面には指頭圧痕残る	良好		
3	小形土器	3.6	3.1				外面・内面とも指で押さえて成形	良好		

第34表　2区出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
－1	鉄滓							
－2	鉄滓							
－3	鉄釘	2.9(残)	－	－	0.6	－	0.2	頭部及び下部欠
－4	鉄鎌	4.8	3.5	1.8	－	0.3	－	刃部がS字状にやや曲がっている。

第35表　2区包含層出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏	－	－		9.0		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
2	坏	11.1	4.6		7.8		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
3	坏	15.2	2.3		12.4		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
4	坏 高台付	－	－		12.0		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
5	坏 高台付	－	－		9.6		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
6	坏 高台付	20.2	3.0		14.0		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
7	坏	－	－		8.0		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
8	坏	13.3	－		－	口縁部沈線1条	外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
9	坏	13.9	3.6		10.0		外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
10	坏	11.2	3.8		7.8		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
11	坏	14.9	5.0		10.0		外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
12	坏	14.8	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
13	坏	14.0	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
14	坏	13.0	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
15	坏	12.7	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
16	坏	17.6	6.8		11.3		外面・回転なで、なで 内面・回転なで	良好		
17	坏	17.5	5.9		11.5		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
18	坏	17.2	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
19	坏	－	－		11.2		外面・回転なで、板状工具なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
20	坏	19.2	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
21	高坏	－	－		－		外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
22	坏	19.6	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
23	壺	13.0	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		口縁のみ
24	壺	－	－		－	突帯あり	外面・回転なで 内面・回転なで	良好		肩部のみ
25	壺	12.3	－		－		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		底部のみ
26	杯 高台付	18.6	4.0		13.4		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		
27	杯 高台付	19.0	3.9		13.9		外面・回転なで、底部回転糸きり 内面・回転なで、静止なで	良好		

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
28	高坏	—	—		—		外面・回転なで 内面・静止なで	良好		
29	坏	—	—		10.8		外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		底部のみ
30	甕土師器						外面・口縁部横なで、胴部はけめ 内面・口縁部横なで、胴部けずり	良好		口縁のみ
31	甑	—	—	—			外面・底端部縦はけ、胴部よこなで 内面・底端部横なで、胴部縦けずり	良好		
32	甑	長さ 5.0	厚さ 2.5				なで	良好		
33	土製支脚	—	—		—		縦方向のなでと削り	良好		
34	坏	—			4.4		外面・なで、回転糸きり 内面・回転なで、なで	良好		底部のみ
35	土製支脚	長さ 6.7	厚さ 3.8				外面・なで 内面・なで	良好		
36	土製支脚						外面・なで 内面・なで	良好		
37	砥石	長さ 6.0	径 3.6							
38	砥石	長さ 6.2	径 4.5							
39	甕	13.0	—	33.0			外面・口縁部回転なで、胴部並行たたき後かきめ、内面・同心円文たたき	良好		

第３節　３、４区の調査

概　　要　本調査区は、遺跡の南側に延びる丘陵部の尾根とその斜面を対象地としたものであり、島田遺跡とは、同一の丘陵である。尾根と斜面の上方を４区に、斜面の下方を３区とした。ただし、３区は、重機による表土掘削の結果、横穴墓等の存在やそれに関連した遺物は、確認されなかった。４区からは、トレンチ調査の結果から横穴墓の存在が確認されていたことから、表土については、重機で除去した。そして、前庭部（墓道）のプラン検出後は、人力により、基本的に４分法により調査を行った。その結果、14基の横穴墓を斜面から検出した。また、尾根部分については、後世の改変により半分以上は削られていたが横穴墓に伴うと思われる古墳を４基検出した。

(1)テラス状遺構

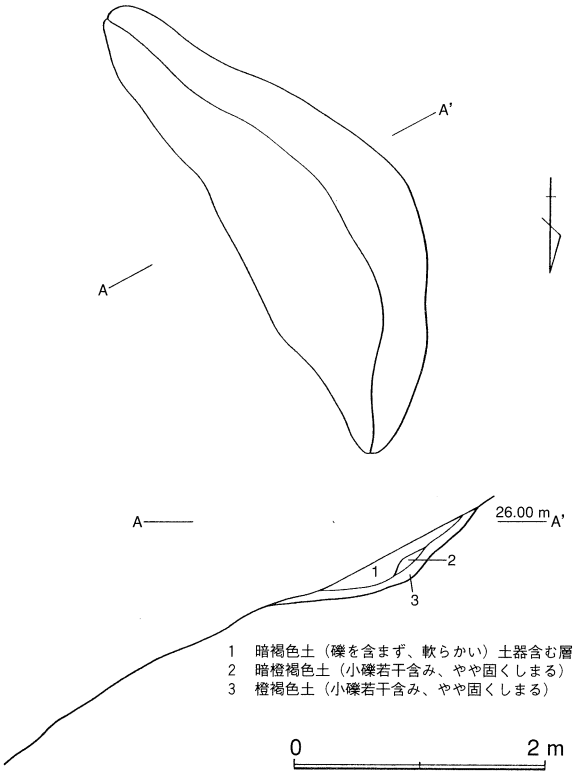
［ＳＴ０１］（第85図）

位　　置　北東に面した斜面で検出した遺構で、標高26ｍ付近に位置し、下方には９号横穴墓が存在する。

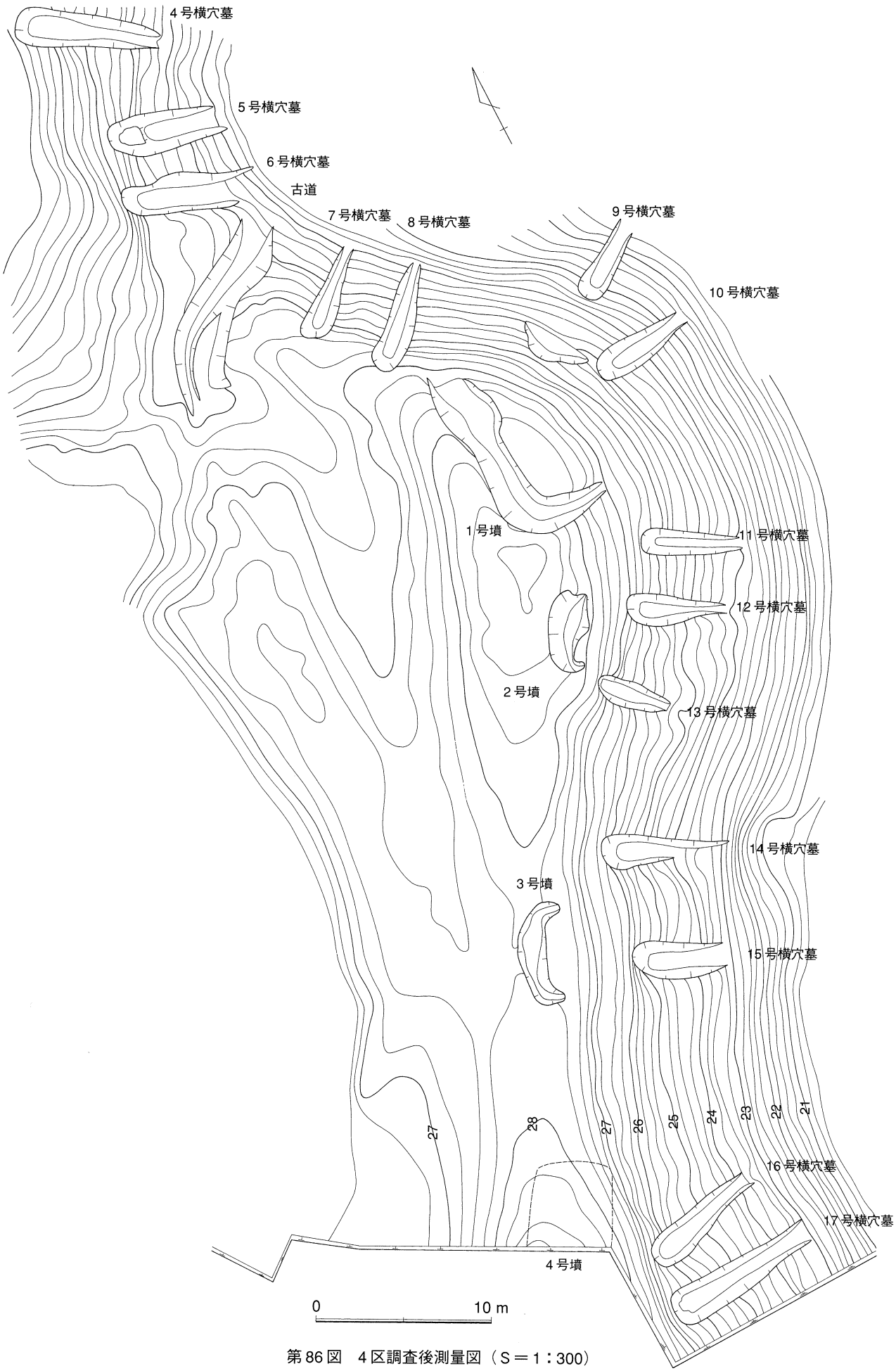
規模・形態　丘陵斜面を平面では弧状に近い形で、断面はＬ字状にカットして平担面を作り出したものである。規模は、長さ4.2mを測り、幅は最大で1.4m、最小で0.6mである。

堆 積 土　覆土は、３層からなり、弥生時代後期の甕（第87図１）が１片出土している。覆土は、自然に堆積したものと考えられ、出土遺物は、遺構とは無関係のものである可能性が考えられる。

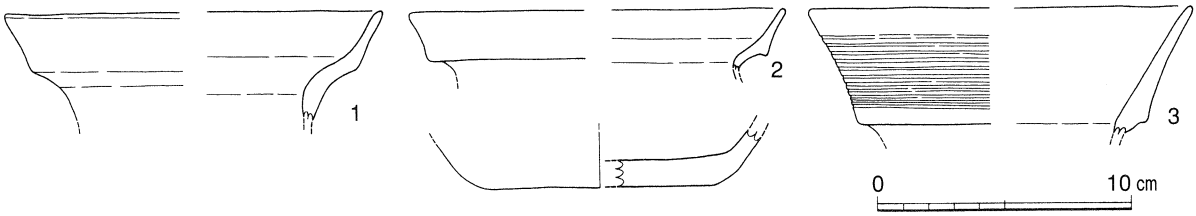
時　　期　遺構に伴う遺物が出土していないことから、確実なところは不明である。ただし、後述の１号墳の溝と対応するものと考えた場合、古墳の墳丘の裾部分として作られた可能性が考えられる。



第85図　４区ST01（テラス状遺構）実測図（Ｓ＝１：60）



第86図　4区調査後測量図（S＝1：300）



第87図　4区ST01・SD01出土弥生土器実測図（S＝1：3）

(2)古　墳

[1号墳（SD01)]（第88図）

位　　置　尾根が南側に屈曲する位置で検出された古墳であり、尾根の稜線より斜面側にかなり片寄った立地である。また、下方斜面には9、10号横穴墓が位置している。

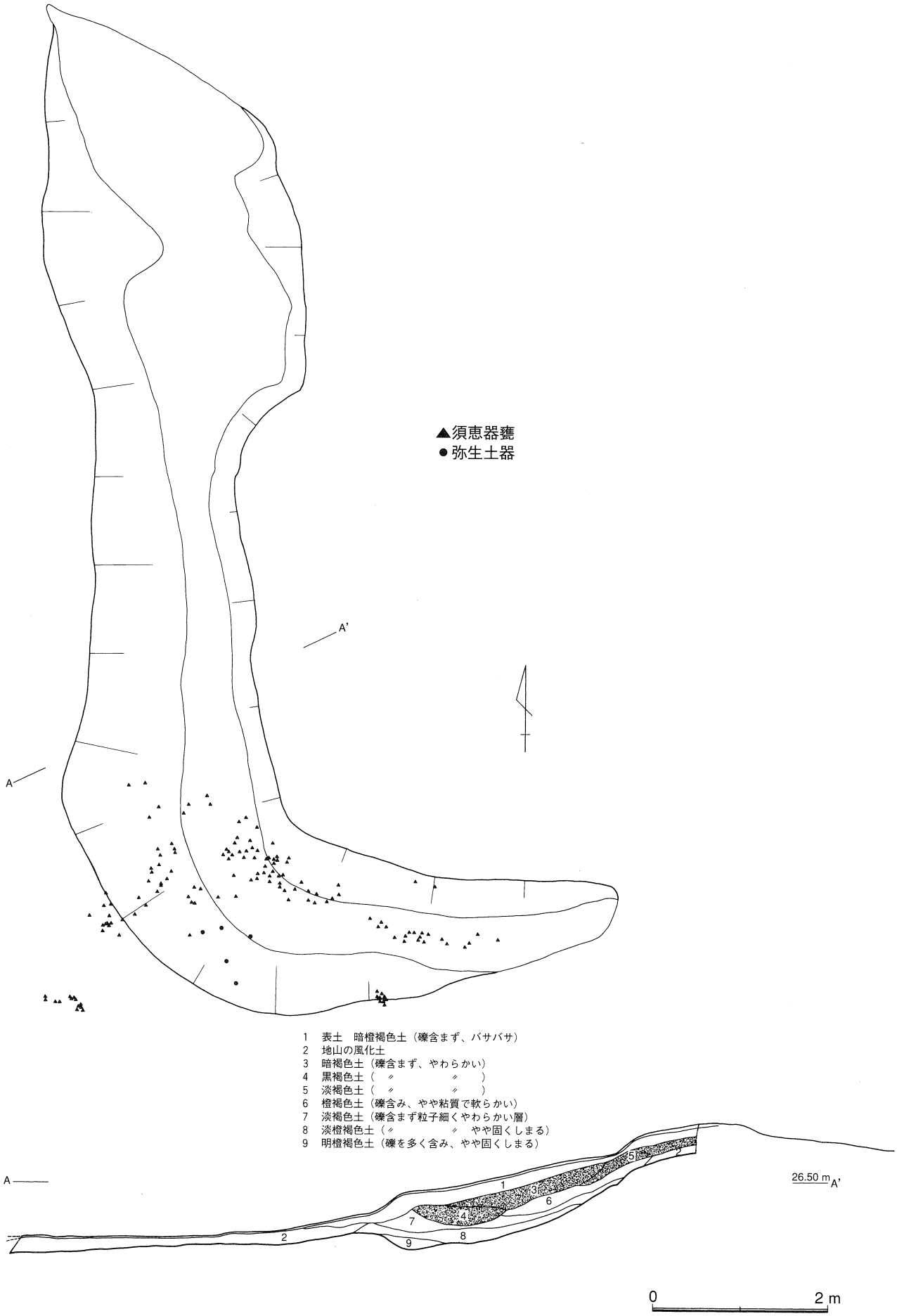
周溝（SD01）　周溝は、尾根部分のみに廻り、斜面部分では認められないものであった。規模は、底面の幅0.4m～1.2m、上面の幅1.6m～3.0m、深さ0.4m～0.6mを測るものである。形状は、調査当初「コ」字形に廻るものと考えていたが、調査により南辺で直角に近く折れたのち、西辺部分でやや東側に若干折れたのちに北側に延びていること確認できた。その結果、溝によって区画された古墳の部分は、前方後方形に近い形であることが判明した。また、前述のST01と溝が対応するものとすれば、さらに高い可能性が考えられる。検出した溝の長さは、南辺で4.2m、東辺で10.2mである。覆土は、基本的に自然堆積土であり、また、古墳の墳丘盛土が流れ出した土の可能性のあるものは認められなかった。覆土からは、弥生時代後期の甕・鼓形器台（第87図2.3）と多数の須恵器甕片が出土している。

墳　　丘　盛土は、ほとんど失われており、斜面側に若干残存しているのみであった。なお、斜面に残存していた盛土についても横穴墓調査時の重機掘削によって除去しているため不明確な点が多い。現状では、地山上の旧表土部分から厚さ10㎝～20㎝程の赤褐色の地山礫を含む土が盛られていたことを確認した。

規模は、前方後方形と仮定した場合、全長10m程で主軸をほぼ南北にとるものと考えられる。後方部については、東西6.5m、南北6m程と考えられ、正方形に近い形になるであろう。前方部は、先端部をST01とSD01の北端付近と考えた場合、長さ4mと考えられる。同じく幅についてもST01とSD01の位置関係から考えた場合には、4m程とすることができる。以上の結果から短めの前方部がつくものと推測されるものである。

主 体 部　表土から地山までが浅く、また盛土が流れているといった要因もあるが、検出されなかった。ただし、1区の2、3号墳の様相と類似点が多いことから横穴墓を主体部として考えることが可能である。下方には、9・10号横穴墓が存在し、10号横穴墓が主体部の候補として考えられる。10号横穴墓を主体部とした場合、主体部は、くびれ部付近に穿たれていることになる。

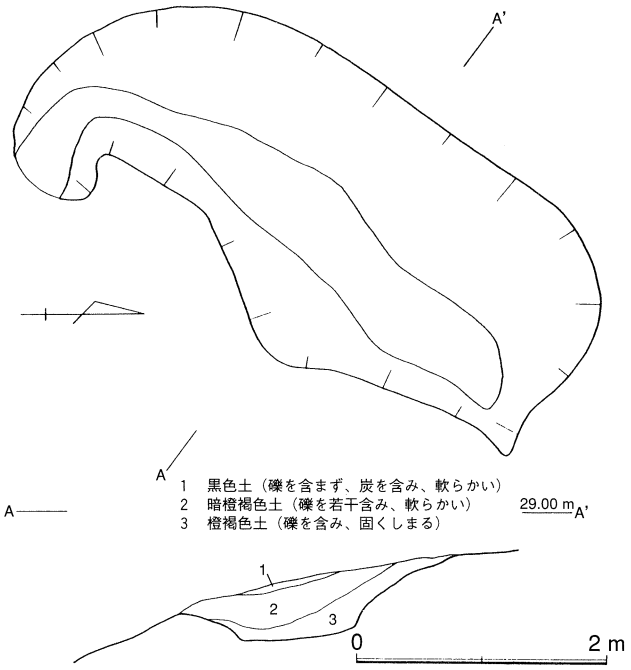
時　　期　溝から須恵器甕片が出土している点、可能性として横穴墓が主体部である点を積極的に評価すれば、築造は出雲4期と考えられる。



第88図　4区1号墳（SD01）遺構実測図（S＝1：60）

[２号墳（ＳＤ０２）]（第89図）

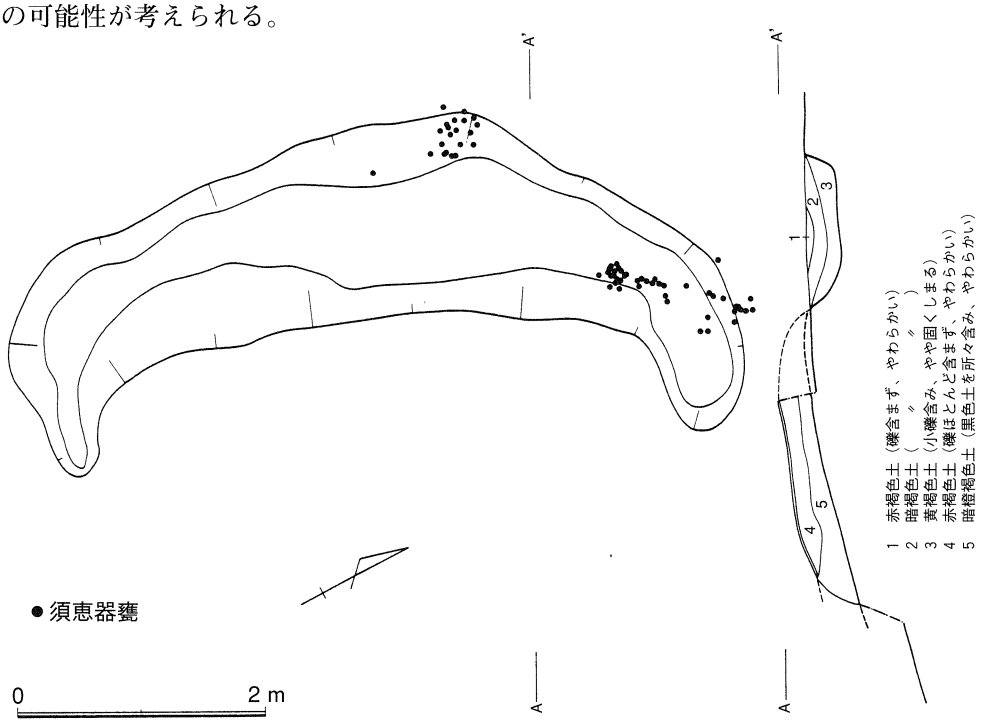
１号墳と同様丘陵斜面側に片寄った位置に存在する。墳丘盛土は確認されず、周溝のみを検出した。周溝は、「コ」字形に廻るものと考えられるが、北西辺と南西辺の一部を検出したにとどまった。規模については、幅が、上面で1.0m～2.2m、底面で0.2m～0.6mを測る。長さは、北西辺で４mあり、西側コーナーから直角に曲がって延びる南西辺では、２mである。墳形は、溝の形状より方墳と考えられる。溝には、流土が堆積しており、遺物などは出土していない。主体部は確認されなかったが、１号墳と同様の性格をもつものと考えた場合には、12・13号横穴墓が主体部と考えられ、築造は、出雲４期と考えられる。



第89図　４区２号墳（SD02）遺構実測図（Ｓ＝１：60）

[３号墳（ＳＤ０３）]（第90図）

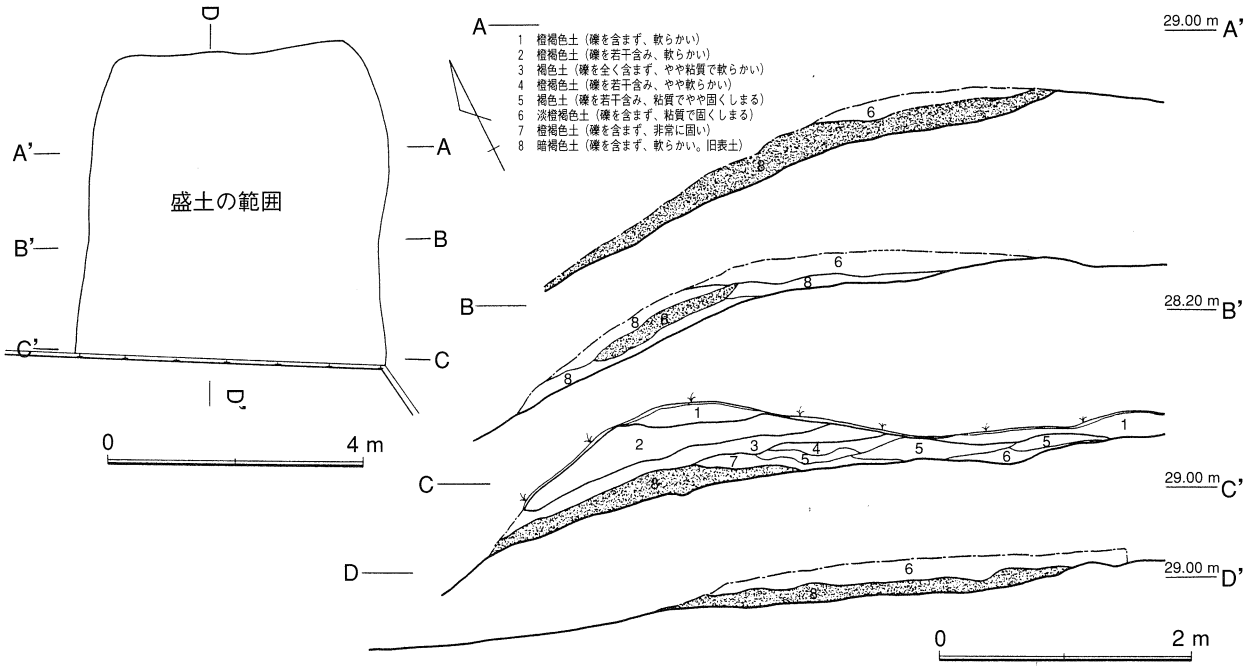
他の古墳と同様に横穴墓群の存在する斜面寄りに立地し、周溝と盛土の一部を検出した。周溝は、「コ」字形と考えられ、西辺と南辺、北辺の一部を確認した。幅は、上面で0.7m～1.5m、底面で0.2m～0.9mを測り、長さは西辺4.6m、南辺1.2m、北辺1.2mである。墳丘は、旧表土上に0.3m程盛土して築造しているが、土層断面のみで確認しているため、その築成工程については、明らかにできなかった。墳形については、周溝の状況から一辺５m程の方墳と考えられる。主体部は下方斜面に位置する15号横穴墓の可能性が考えられる。



第90図　４区３号墳（SD03）遺構実測図（Ｓ＝１：60）

［4 号墳］（第91図）

調査区の南西端で検出し、遺構は、調査区外まで広がるものであり、調査では、墳丘盛土のみを確認している。墳丘東側の状況は、斜面であり盛土が流れている可能性が高く、また、墳裾を示す加工は認められなかった。西側についても後世に削られ平坦になっており、墳裾を確認できる状況ではない。北側は、後世の改変の可能性は考えられなかったことから、盛土の及ぶ範囲が墳裾と考えられる。現状での古墳の規模は、東西で 5 m、南北で 5 m を測るが、東西の計測値については、正確なものではなく、本来は、それ以上であった推定される。墳丘盛土は、旧表土と考えられる黒褐色土上面に多いところで50㎝程盛られている。主体部は、調査区外に存在している可能性も考えられるが、立地が斜面に片寄っている点は、1 ～ 3 号墳と同様であり、横穴墓を主体部とする可能性が高いものと考えたい。



第91図　4区4号墳墳丘土層実測図（S＝1：60）

(3)横穴墓

[4 号横穴墓]

立　　地　標高27mの南西に面した丘陵斜面に存在し、後述の 5 、6 号横穴墓と 1 つの小支群をなす。4 号横穴墓の東側から 1 区 3 号横穴墓までの斜面には、横穴墓は認めらず空白地帯である。その原因としては、基盤層の違いが考えられる。空白地帯の基盤層は黄褐色の固くしまった粘土質であり、横穴墓の穿たれている基盤層とは異なり、掘削が困難な層である。

墓　　道（第92図）　主軸をＳ－56°－Ｅ方向をとるものである。地山から深いところで 2 m掘削し床面の幅0.6m、長さ8.7mの断面Ｕ字形の細長い前庭部を作り出している。床面は玄門方向に向かって徐々に高くなり、玄門付近と前端との比高差0.6mである。

玄　　門（第92図）　墓道の前壁の中央に開口し、幅0.65m、長さ1.3m、高さ0.85mを測り前端部側に向かって低くなっている。主軸は墓道とは異にし、Ｓ－69°－Ｅの方向であり、開口方向をより東西方向に近づける意識が見られる。断面は長方形を呈している。玄門部前側には、閉塞用の刳込が設けられ、床面には、幅0.8m深さ0.13mの溝が掘り込まれ、刳込は、幅0.9m、長さ0.08m、高さ溝より1.25mを測る。

閉　　塞（第93図）　玄門部刳込み床面より幅0.35m、長さ0.83m程の凝灰岩が出土し、また、墓道の埋土からも同様の石が出土していることから、閉塞は凝灰岩によるものと考えられる。玄門付近出土のものは、工具による加工の痕がみられ、本来は切石の 1 枚石であった可能性が考えられる。墓道出土のものは、割石状のものであり、玄門出土の石とセットで使用されたものかどうかは不明である。

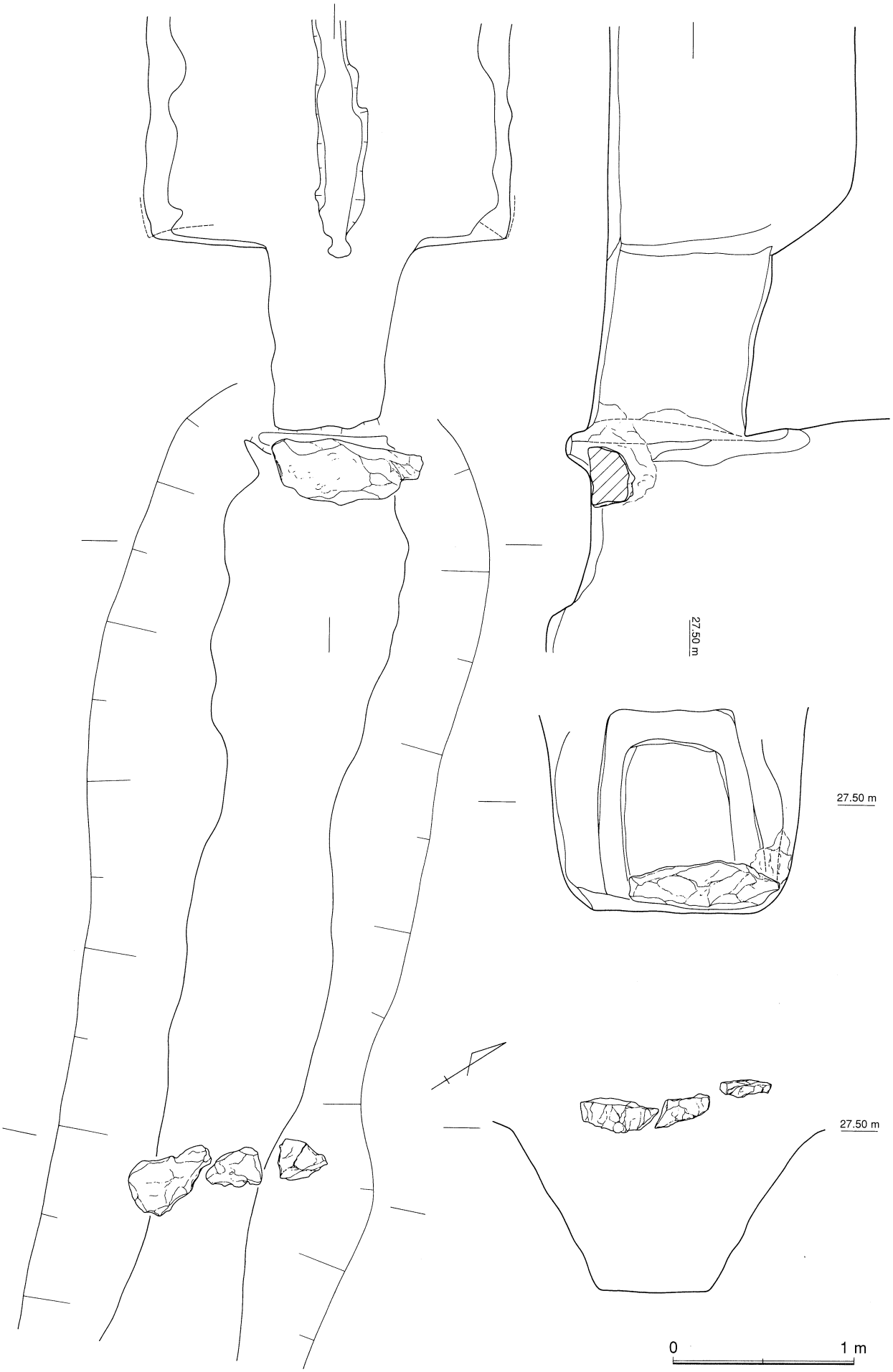
玄　　室（第92図）　平面形は、奥行2.03m、幅1.98mのほぼ正方形を呈している。床面には、4 壁に沿って溝が廻り、また、中央にも溝が穿たれ、屍床を設けた形になる。4 壁沿いの溝は、幅10㎝前後、深さ5㎝程で、中央のものは、幅20㎝前後、深さ6㎝程度のものである。一方、立面形は縦断では、奥壁はほぼ垂直に立上り、天井は水平に加工されている。横断面では、丸く仕上げられている。

線刻壁画（第94図）　玄室内の四壁及び天井部の一部には、線刻による壁画が施されていた。線刻は、多数認められ、内容の不明確なものが多く見られた。拓本は、ある程度内容の分かるものに限りおこなった。前壁には、船に類似したものが幅1.2㎝程の線で刻まれ、三角で表現されたものは、帆と考えられる。（3）右側壁にも、船と「大佛」と読める文字が刻まれている。（1、5、6）船は前壁のものとは異なり、幅 1㎝と細い線で刻まれており、表現も船体部分と帆部分に紋様が刻まれている。奥壁部分の左隅付近には、鳥居と高床式の建物と思われるものが、幅1.4㎝の線で刻まれている。（2）建物には、船で見られたものと同様の紋様が刻まれており、同一の時期に刻まれたものかもしれない。

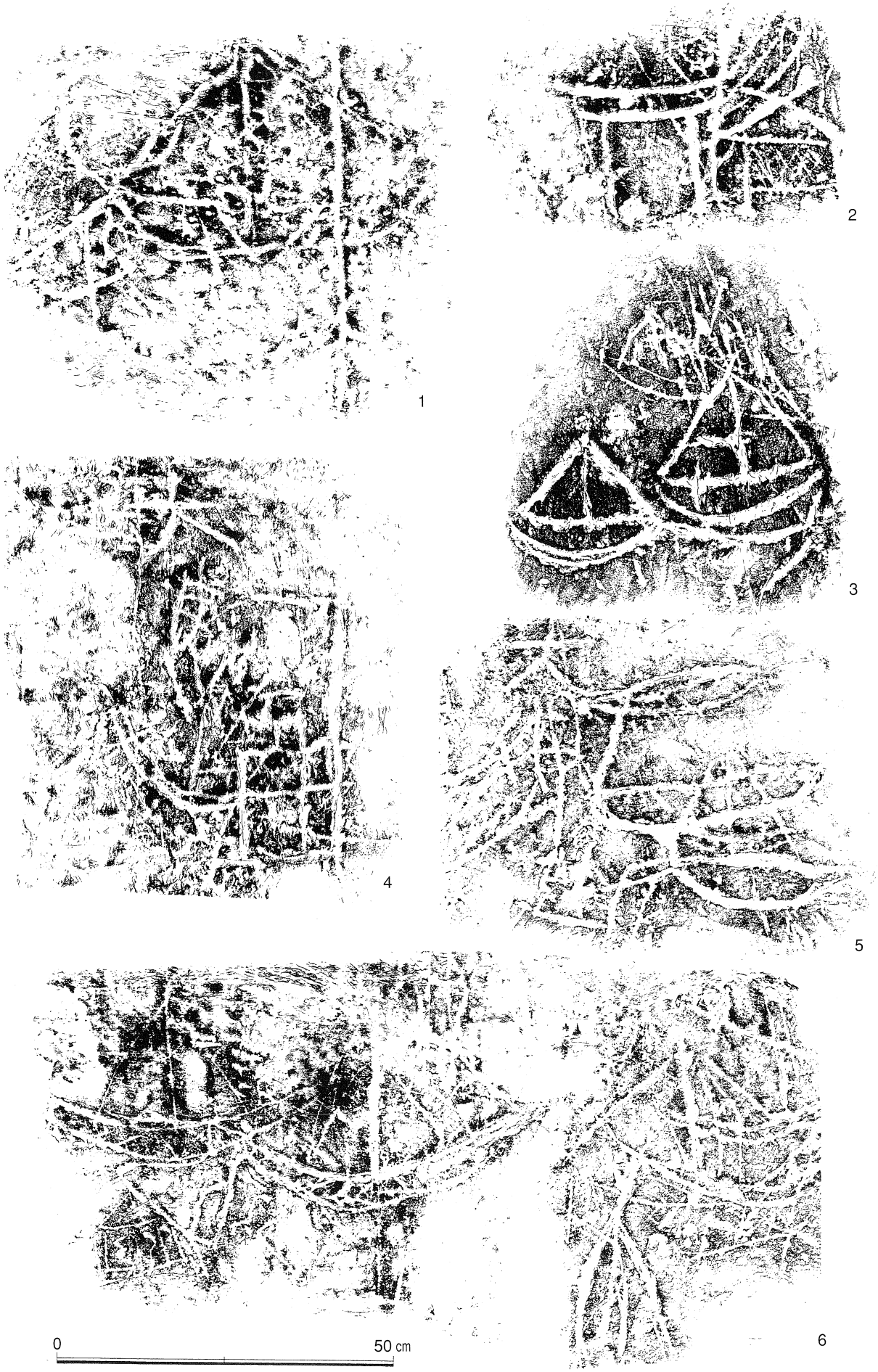
これらの線刻は、線の太さから、線の太い前壁のものと、線の細い他の壁のものとの 2 つに分類が可能であり、この違いは、時期差である可能性が考えられる。また、これらの壁画が刻まれた時期であるが、横穴墓が確実に閉塞された状況であり、明確にすることは難しい。ただし、「大佛」という文字が存在することから奈良時代以降のものが含まれている可能性は考えられる。

埋土堆積状況　大きく見て、9 層群に分けることができた。1 層は墓道の奥壁に堆積したもので、地山礫を含まない層で、流土と考えられる。2 層は、地山礫を含む層で、2a層～2c層、2e、2f層までは、やや暗色系の土で、2d層は、明色系の土である。これらの層は、最終の埋葬後に堆積したもので暗色系の土層は、埋土又は、自然に堆積したものと考えられるが、2d層は、最終埋葬時の埋土と考

第92図　4区4号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

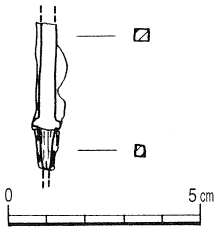


第93図　4区4号横穴墓閉塞石出土状況実測図（S＝1：30）



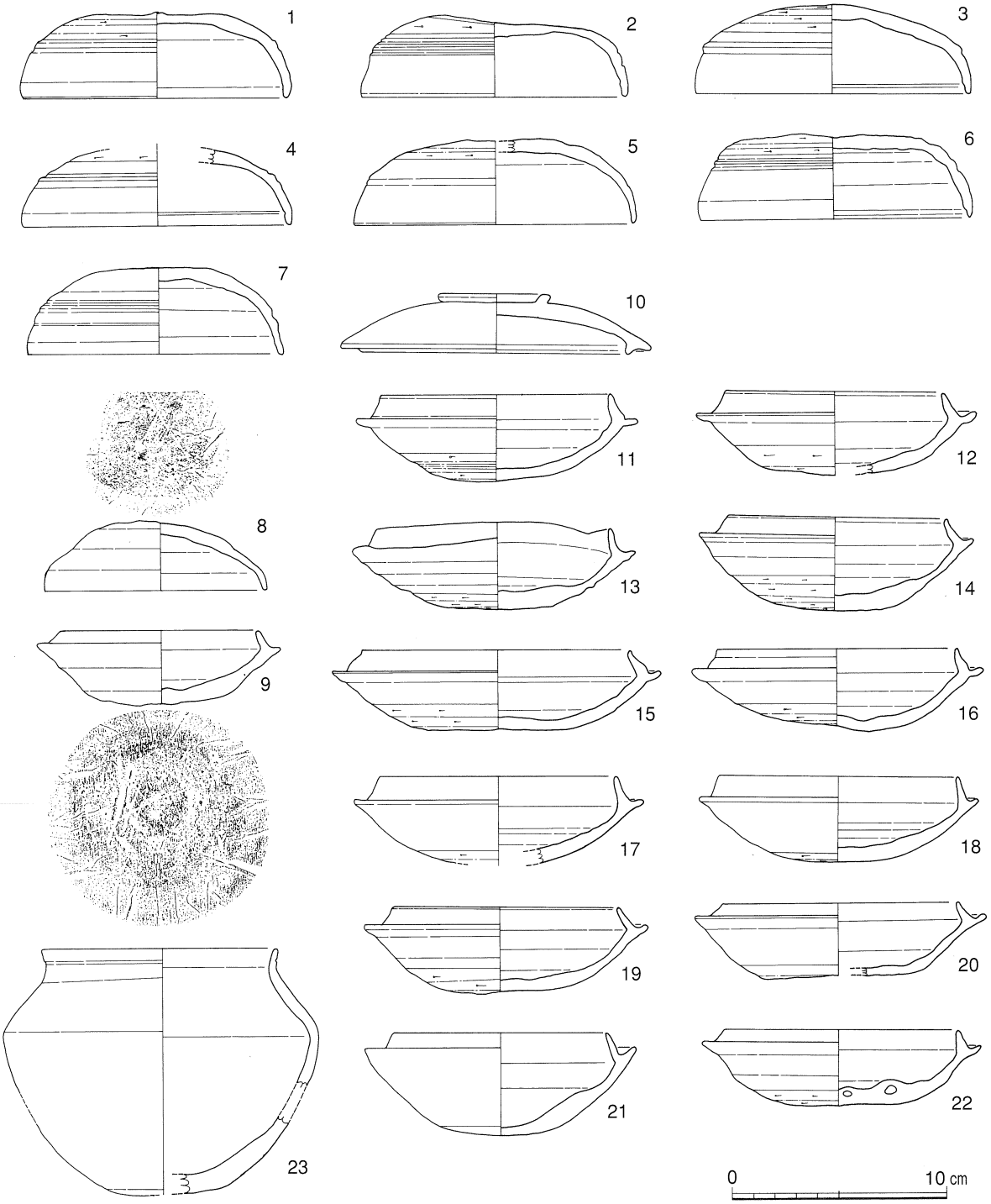
第94図　4区4号横穴墓玄室内線刻壁画拓影（S＝1：8）

えられる。3 層は 3 次の埋葬時の埋土で 3a、3b 層は、黒色を呈し、長期間の腐食が認められ、多数の須恵器甕片が出土している。また、玄門に向かって斜め方向に削られている層である。4 層は、2 次埋葬時の埋土であり、その下面からは須恵器片が出土している。5 層は、初葬時の埋土であり、地山礫を最も多く含む層である。以上の土層の観察結果より、最低 4 回以上の埋葬行為が行われたものと考えた。

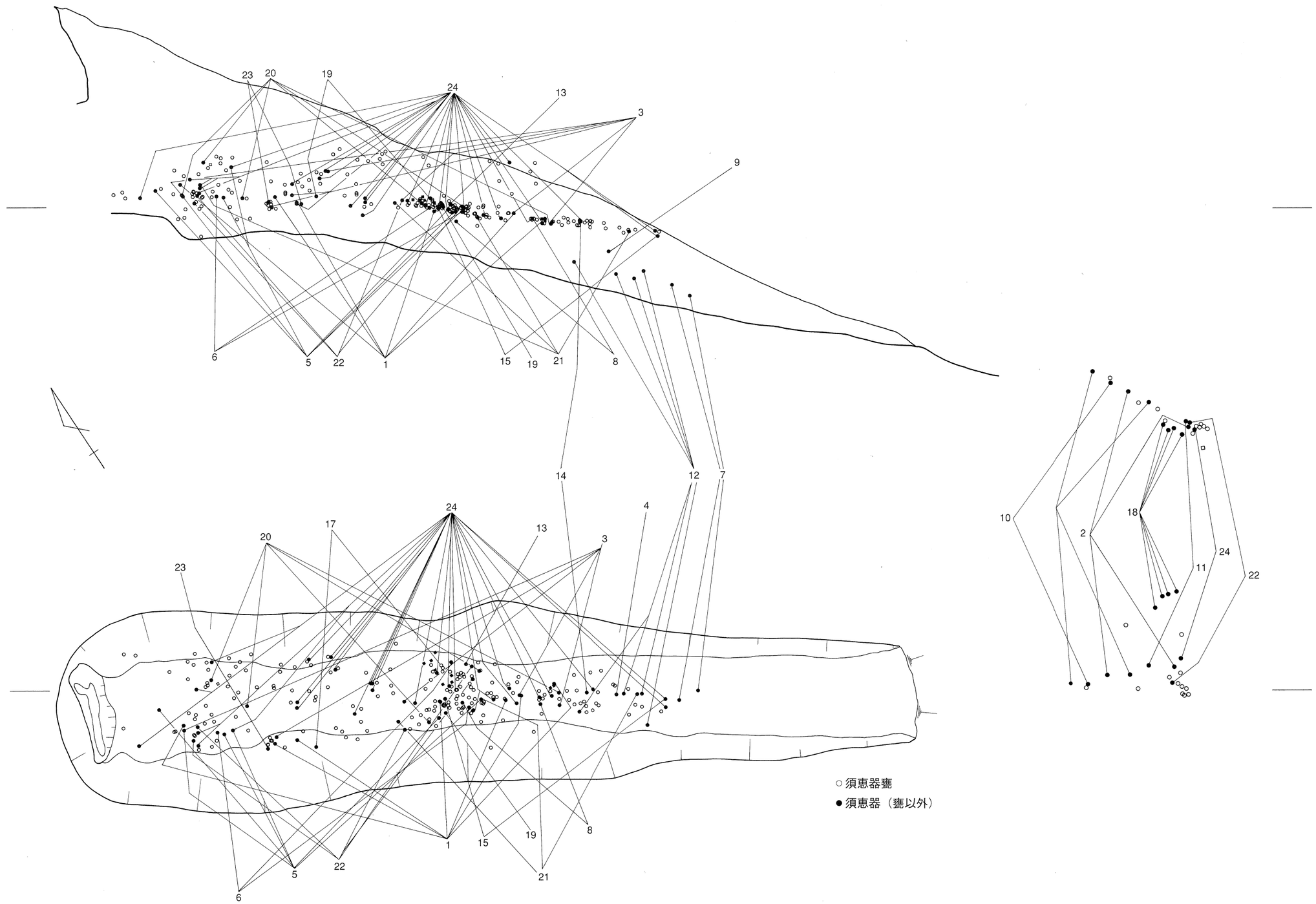


第95図　4区4号横穴墓墓道出土鉄鏃実測図（S＝1：2）

その他に、墓道下方の旧表土上に築造時の排土が認められ、また、版築状に叩



第96図　4区4号横穴墓墓道出土須恵器実測図（S＝1：3）



第97図　4区4号横穴墓墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）

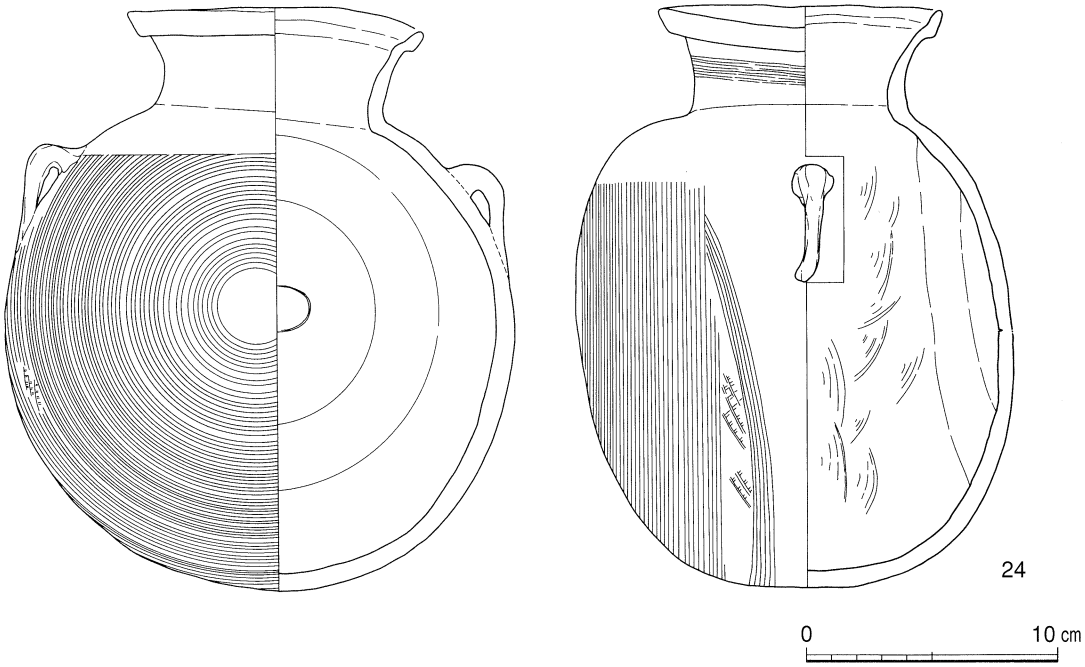
き締められた古道と考えられる層を確認した。古道は、上面に横穴墓の埋土がかぶさり、横穴墓の初葬時には機能していたものと考えられる。

遺物出土状況（第97図）　墓道のみで遺物は出土し、玄室内からは遺物の出土はなかった。墓道出土のものは、大きく3面に分かれている。一つは、4層上面のもので、須恵器甕片と蓋坏等が出土している。蓋坏は、時期が前後するものも見られる。また、第3次の埋葬面にあたり、須恵器は、玄室内から持ち出されたものと考えられる。また、甕片は、全体的に蓋坏等より上面の3 b層から出土している。4層上面（第3次埋葬面）出土の遺物は、大谷分類の蓋坏のA 4型、A 5型が出土している。

もう一つは、5層上面出土のもので、横穴墓築造時の排土上面にあたる。蓋坏と提瓶が出土しており、時期的には相前後するものが含まれる。また、提瓶の破片は、4層上面からも出土しており、4層上面と当層位面の一部は、同一時期の面であった可能性が考えられる。

墓道出土の遺物は、全体的に見て、3層（黒色土）から須恵器甕片が出土し、その他の埋葬面で、須恵器の甕以外の器種が出土している傾向が見てとれる。

時　　期　出土須恵器の様相から大谷4期に築造され、埋葬は大谷6期までおこなわれたものと推定される。



第98図　4区4号横穴墓墓道出土提瓶実測図（S＝1：3）

[5 号横穴墓]

立　　地　4 号横穴墓の南側に存在し、標高25 mのやや低い位置に存在している。トレンチ調査により、すでに前庭部の一部を確認していた横穴墓である。

前 庭 部（第100図）　主軸をＳ－73°－Ｅ方向をとるものである。地山から深いところで1.8m掘削し床面の幅1.2m、長さ6.0mの断面Ｕ字形のやや幅の広い前庭部を作り出している。床面は玄門方向に向かって4.6mいったところで20㎝程一段高くなっている。

羨　　道（第100図）　前庭部の前壁の中央に開口し、幅1.05m、長さ0.8m、高さ0.92mを測り、断面は方形を呈すものである。床面は、玄門部側にやや凹みが認められた。

玄　　門（第100図）　羨道部より 5㎝程 1 段高くなり、幅0.07m、長さ0.95m、高さ0.78mを測り前庭部側に向かって低くなっている。断面は長方形を呈している。

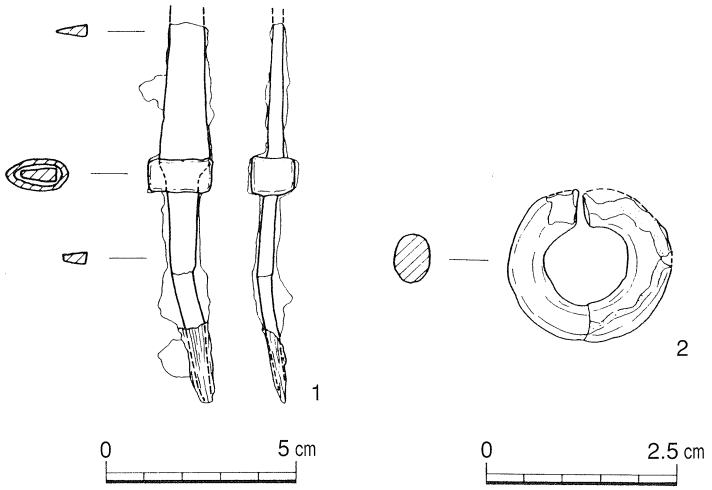
閉　　塞（第101図）　玄門部床面直上より割石の凝灰岩が10点以上出土しているが、玄門部全てを覆うまでには至っていない。本来は玄門部の天井部まで積み上げられていたものと考えられるが、追葬等により抜き取られたものと推測される。

玄　　室（第100図）　主軸は、Ｓ－81°－Ｅをとり、前庭部から玄門部とは異なる軸で作られている。4 号横穴墓同様により東西に近い軸を意識した結果と考えられる。平面形は、奥行き2.2m、幅2.3mのほぼ正方形を呈している。床面は、地山が軟質であるために残りが良くないが、左右に有縁屍床を設けている。縁部は、幅20～25㎝、高さ 5㎝程のもので、奥壁側から玄門部に向かって「ハ」字に開いている。

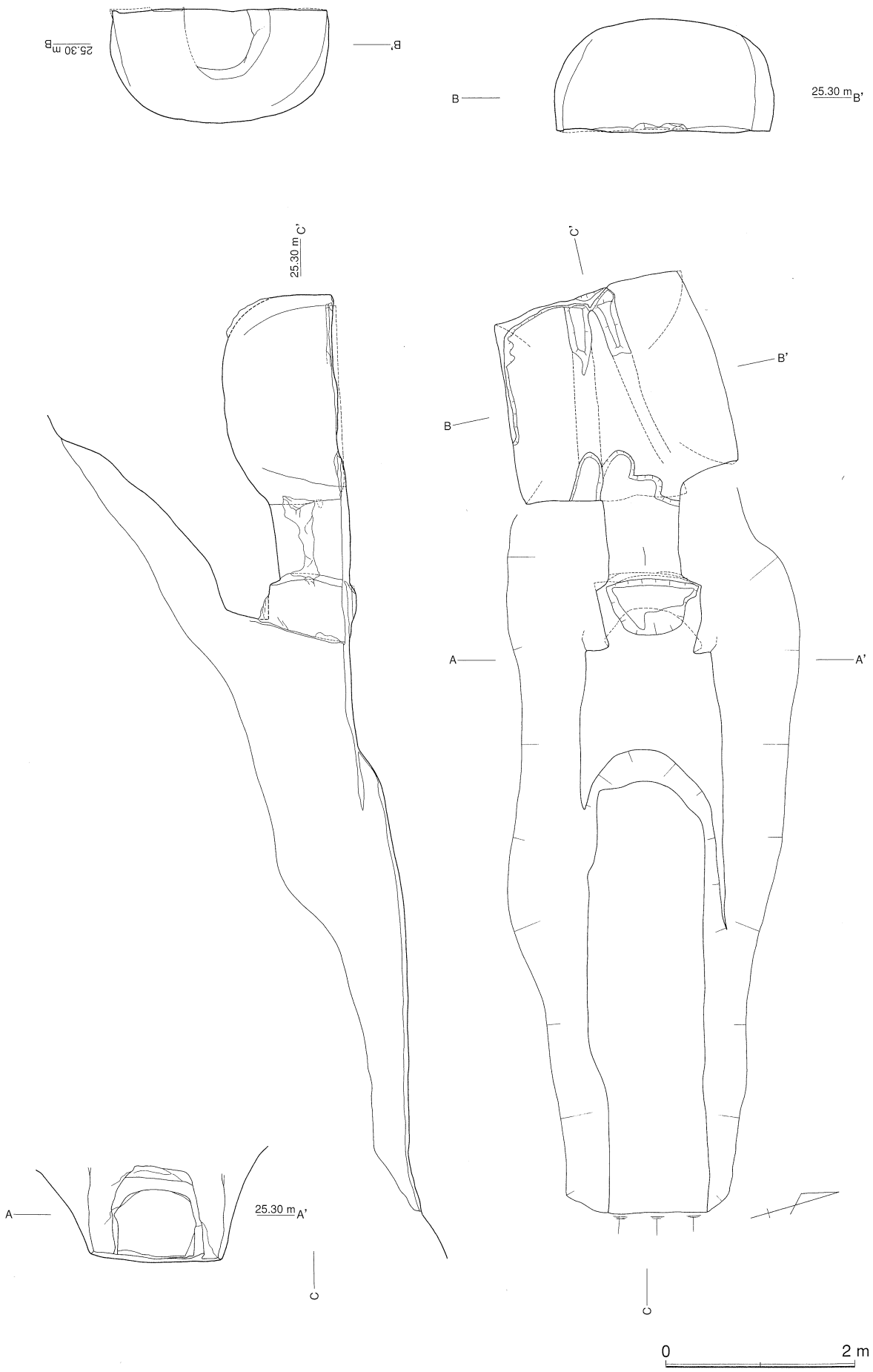
一方、立面形は縦断では、奥壁はほぼ垂直に立上り、天井は水平に加工されている。横断面では、やや丸く仕上げられているが天井部は平坦に近い。

埋土堆積状況（第102図）　前庭部の土層の断面軸は、トレンチの壁を利用したものと、途中から主軸に近いもので軸を設定して調査したことから 2 本存在している。

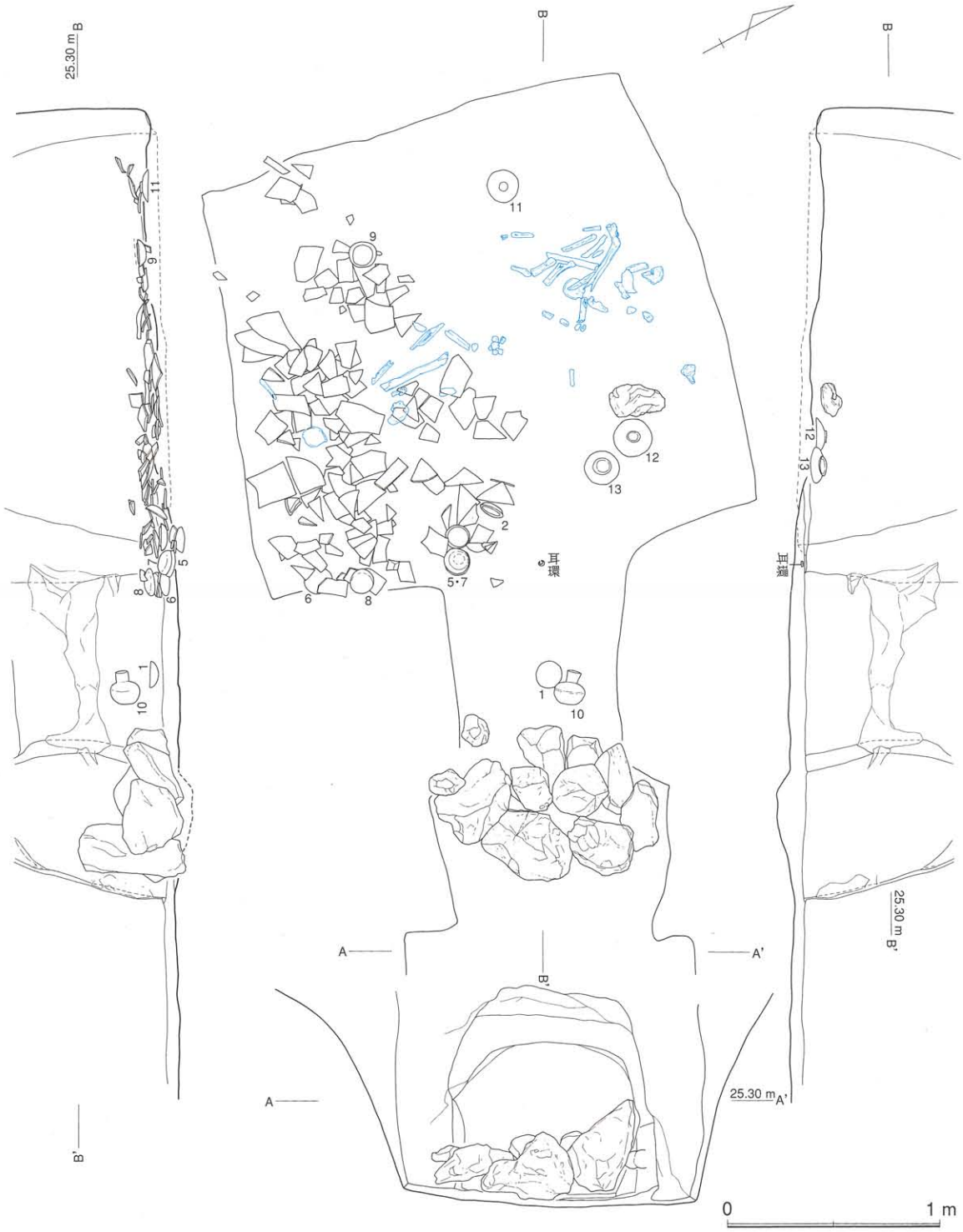
両土層は、大きく見て、6 層群に分けることができた。1 層は前庭部の奥壁に堆積したもので、地山礫を含まない層で、流土と考えられる。2 層は、最終の埋葬時の埋土と考えられ、それ迄の埋土を斜めに削りこんだ後のものである。また、埋葬面（2 層下面）は、閉塞石の上面にあたることから閉塞石の失われた上部は、この時に除去された可能性が考えられる。3 層は、第 4 次の埋葬時の埋土であり、上層の 3a層～ 3c層は、腐食が著しく黒色を呈し厚い。4 層は、第 3 次の埋葬時の埋土で土層図Ａの方では、ほとんど第 4 次の掘削時に削られて一部確認しただけである。5 層は、第 2 次の掘削時の埋土で第 3 、4 次の掘削によって上面は削られており、その上面からは、須恵器が出土している。



第99図　4区5号横穴墓出土金属器実測図（Ｓ＝1：2、1：1）

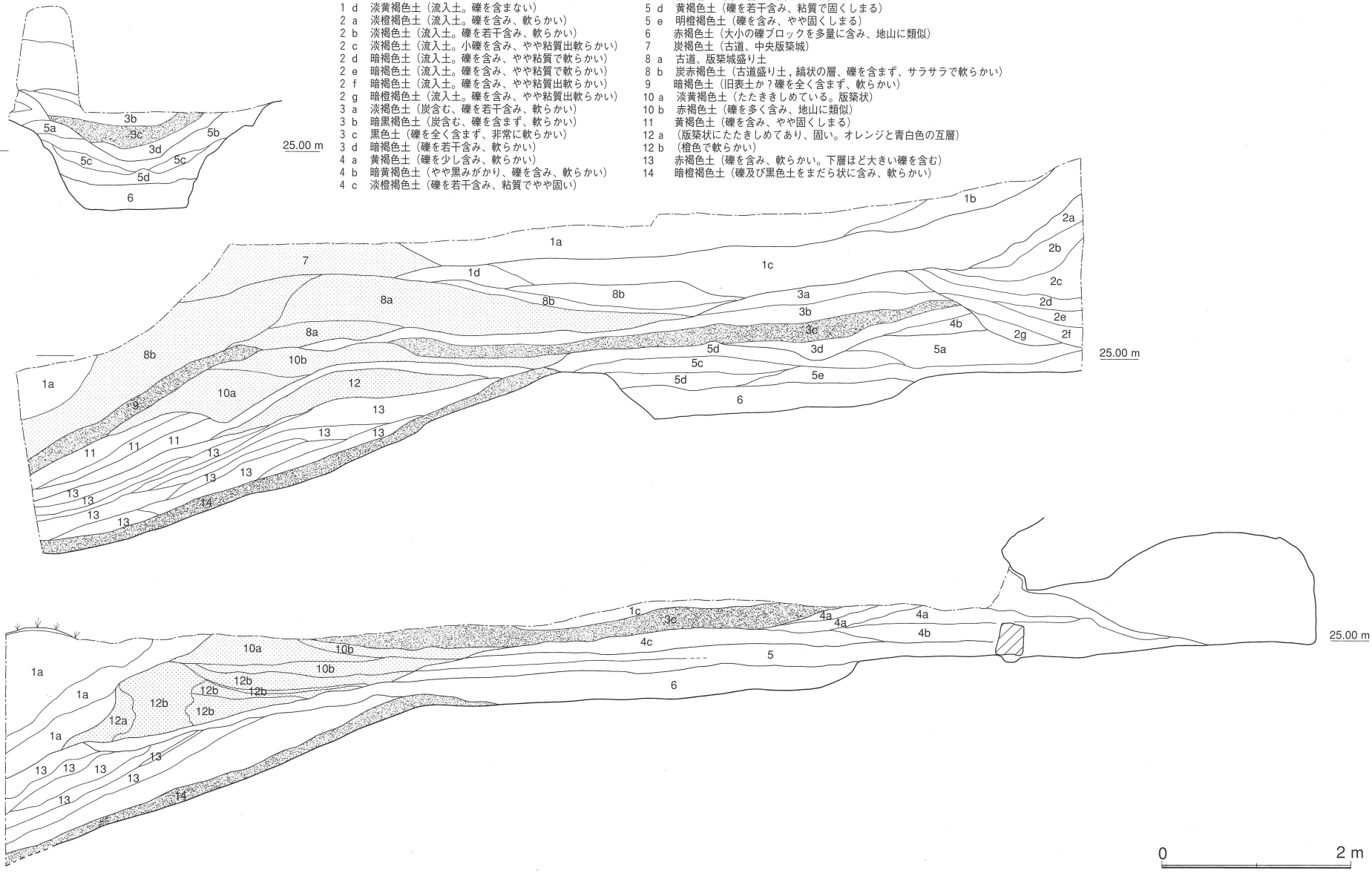


第100図　4区5号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）



第101図　4区5号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）

1 a　淡赤褐色土（礫を全く含まず、ボサボサし軟らかい）
1 b　淡橙色土（流入土。礫を若干含み、軟らかい）
1 c　暗橙色土（礫を全く含まず、非常に軟らかい）
1 d　淡黄褐色土（流入土。礫を含まない）
2 a　淡橙褐色土（流入土。礫を含み、軟らかい）
2 b　淡褐色土（流入土。礫を若干含み、軟らかい）
2 c　淡褐色土（流入土。小礫を含み、やや粘質出軟らかい）
2 d　暗褐色土（流入土。礫を含み、やや粘質で軟らかい）
2 e　暗褐色土（流入土。礫を含み、やや粘質で軟らかい）
2 f　暗褐色土（流入土。礫を含み、やや粘質出軟らかい）
2 g　暗橙褐色土（流入土。礫を含み、やや粘質出軟らかい）
3 a　淡褐色土（炭含む、礫を若干含み、軟らかい）
3 b　暗黒褐色土（炭含む、礫を含まず、軟らかい）
3 c　黒色土（礫を全く含まず、非常に軟らかい）
3 d　暗褐色土（礫を若干含み、軟らかい）
4 a　黄褐色土（礫を少し含み、軟らかい）
4 b　暗黄褐色土（やや黒みがかり、礫を含み、軟らかい）
4 c　淡橙褐色土（礫を若干含み、粘質でやや固い）
5 a　褐色土（礫を多量に含み、軟らかい）
5 b　暗橙褐色土（礫を含み、やや固くしまる）
5 c　橙褐色土（礫を含み、固くしまる）
5 d　黄褐色土（礫を若干含み、粘質で固くしまる）
5 e　明橙褐色土（礫を含み、やや固くしまる）
6　赤褐色土（大小の礫ブロックを多量に含み、地山に類似）
7　炭褐色土（古道、中央版築城）
8 a　古道、版築城盛り土
8 b　炭赤褐色土（古道盛り土，縞状の層、礫を含まず、サラサラで軟らかい）
9　暗褐色土（旧表土か？礫を全く含まず、軟らかい）
10 a　淡黄褐色土（たたききしめている。版築状）
10 b　赤褐色土（礫を多く含み、地山に類似）
11　黄褐色土（礫を含み、やや固くしまる）
12 a　（版築状にたたきしめてあり、固い。オレンジと青白色の互層）
12 b　（橙色で軟らかい）
13　赤褐色土（礫を含み、軟らかい。下層ほど大きい礫を含む）
14　暗橙褐色土（礫及び黒色土をまだら状に含み、軟らかい）



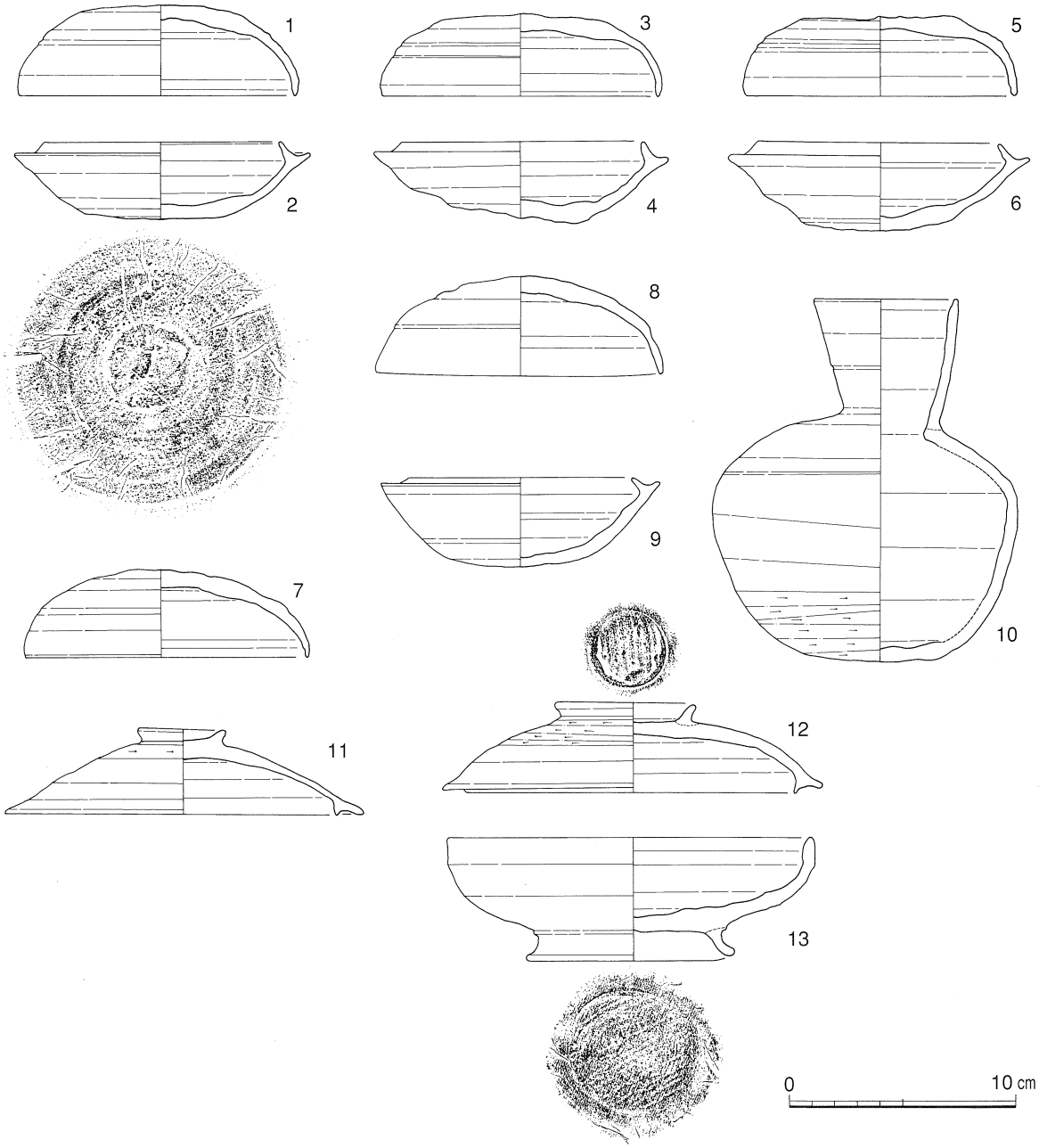
第102図　4区5号横穴墓土層実測図（S＝1：60）

6 層は、初葬時の埋土で地山礫の大きいものを含む層であり、第 2 次埋葬により削られ、上面からは須恵器蓋坏が出土している。以上の観察結果より、最低 6 回の前庭部の掘削が行われていたものと解釈した。

その他に前庭部下方の旧表土の上には築造時の排土（13層）を確認し、また 4 つの版築状の古道を確認している。古道Aは、横穴墓の埋土が上面にかぶり、古道Bは、2 次の掘削時の腐食土が上面に確認できることから、それぞれ横穴墓の機能していた時期に伴うものと考えられる。古道C、Dは横穴墓の埋土の上面に存在することから、横穴墓の時期よりは、新しい時期のものと考えられる。

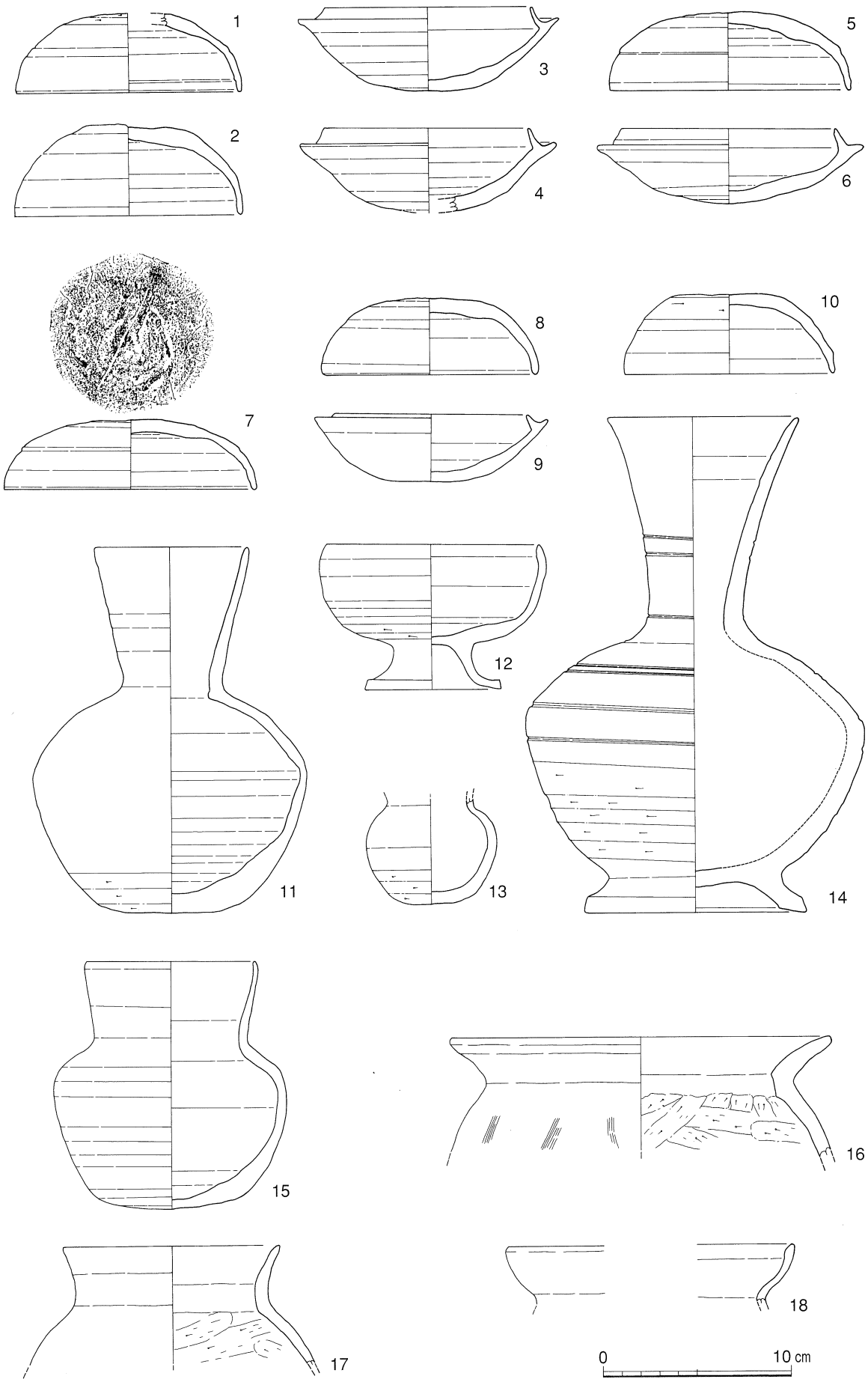
遺物出土状況（第101、104図） 前庭部出土のものは、第 2 次、3 次掘削面と第 4 次掘削面の 3 面から出土している。

第 2 次掘削面からは、A 7 型の蓋坏が出土している。第 3 次の掘削面からは、A 8 型の蓋坏が出



第103図　4区5号横穴墓玄室内出土土器実測図（S＝1：3）

第104図　4区5号横穴墓前庭部遺物出土状況実測図（S＝1：40）



第105図　4区5号横穴墓前庭部出土土器実測図（S＝1：3）

土しており、それぞれの掘削面出土の須恵器の時期は相前後する。第 4 次掘削面は蓋坏、長頸瓶、小壷が出土している。蓋坏の 1 点は、第 2 次の掘削面出土のものと接合している。

前庭部出土の遺物は、基本的に見て、掘削面からのみ出土しているものと考えられる。

玄室内からは、左側には須恵器甕を敷いた屍床が設けられ人骨、須恵器が、また、右側からは須恵器、人骨が出土している。なお、左側の須恵器床は、さらに中央側のものと左壁側の 2 つの群に分けることができる可能性が考えられる。

出土遺物（102、103、105図） 出土須恵器の特に蓋坏は、3 つに細分可能である。1 類は、蓋で径12㎝以上、坏で径10㎝後半～11㎝のものである。2 類は、蓋で径10.8～11.5㎝、坏で10㎝以下のものである。3 類は、輪状つまみをもつ坏と高台の付く坏のセットである。それぞれの出土状況は、1 類が玄室内須恵器床の前側から、2 類が須恵器床の奥側、3 類が右壁側から出土している。それぞれの須恵器が埋葬位置からの移動がないものと考えた場合には、左壁側の須恵器床が先葬で右壁側のものが後に埋葬されたものと考えられる。

時　　期 前庭部及び玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷 5 期と考えられ、埋葬は 8 期までと推定される。

［6 号横穴墓］

立　　地 5 号横穴墓の南側に存在し、標高25mのやや低い位置に存在している。

墓　　道（第106図） 主軸をＳ－74°－Ｅ方向をとるものである。地山から深いところで2.4m掘削し床面の幅1.2m、長さ7.4mの断面Ｕ字形の墓道を作り出している。床面は玄門方向に向かって緩やかに高くなっており、比高差は0.88mである。墓道の上端は、後の古道造成時に削られ平坦に改変され、また、墓道埋土には、古墓が後世作られたために、右壁の一部も破壊されている。

玄　　門（第106図） 幅0.75m、長さ1.25m、高さ0.87mを測り、天井部は墓道側に向かって低くなる。横断面は台形に近いが、天井部と側壁の界線は曖昧である。墓道側には、閉塞用の刳込が設けられ、幅0.98m、長さ0.16m、高さ1.02mを測り、正面から見た場合に方形を呈す。

閉　　塞（第107図） 玄門部中央より左側より割石の凝灰岩が12点程出土している。おそらく追葬等により、本来、玄門部の天井部まで積み上げられていたものが抜き取られたものと推測される。また、左壁付近のものは、床面より浮いた位置から出土しており、初葬時以降の閉塞石として捉えることができる。

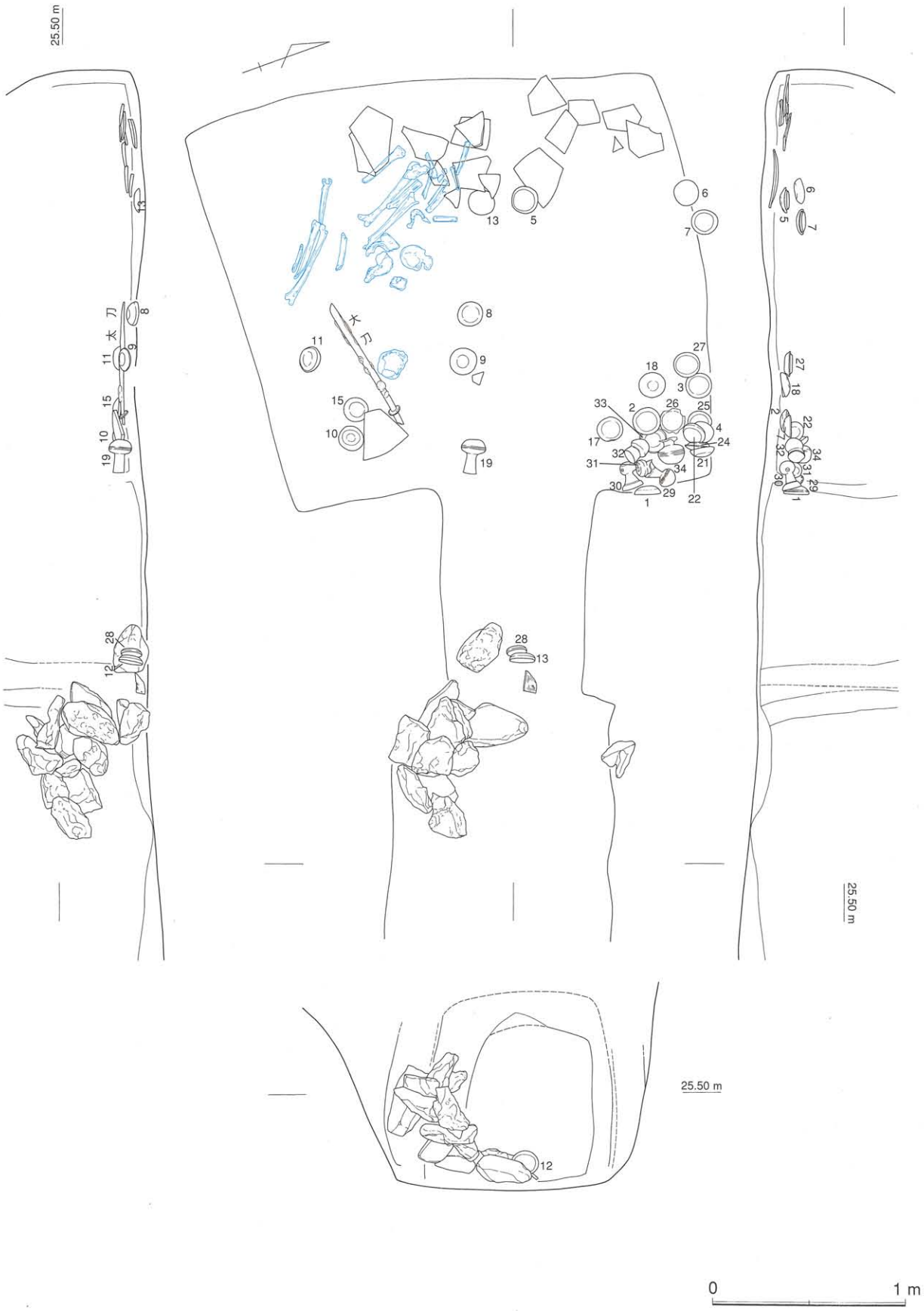
玄　　室（第106図） 主軸は、Ｓ－85°－Ｅをとり、4、5 号横穴墓と同様に、墓道から玄門部主軸とは異なる軸で作られている。4 ～ 6 号横穴墓は、玄室の主軸を東西軸に合わせることを意識している点で共通している。

平面形は、正方形に近く、奥行き2.2m、幅は奥壁で2.48m、前壁で2.2mを測り、やや奥壁の方が幅が広い。床面は、平坦に加工され、屍床等の施設は認められないが、奥壁に平行してまばらではあるが、甕片による須恵器床が設けられている。

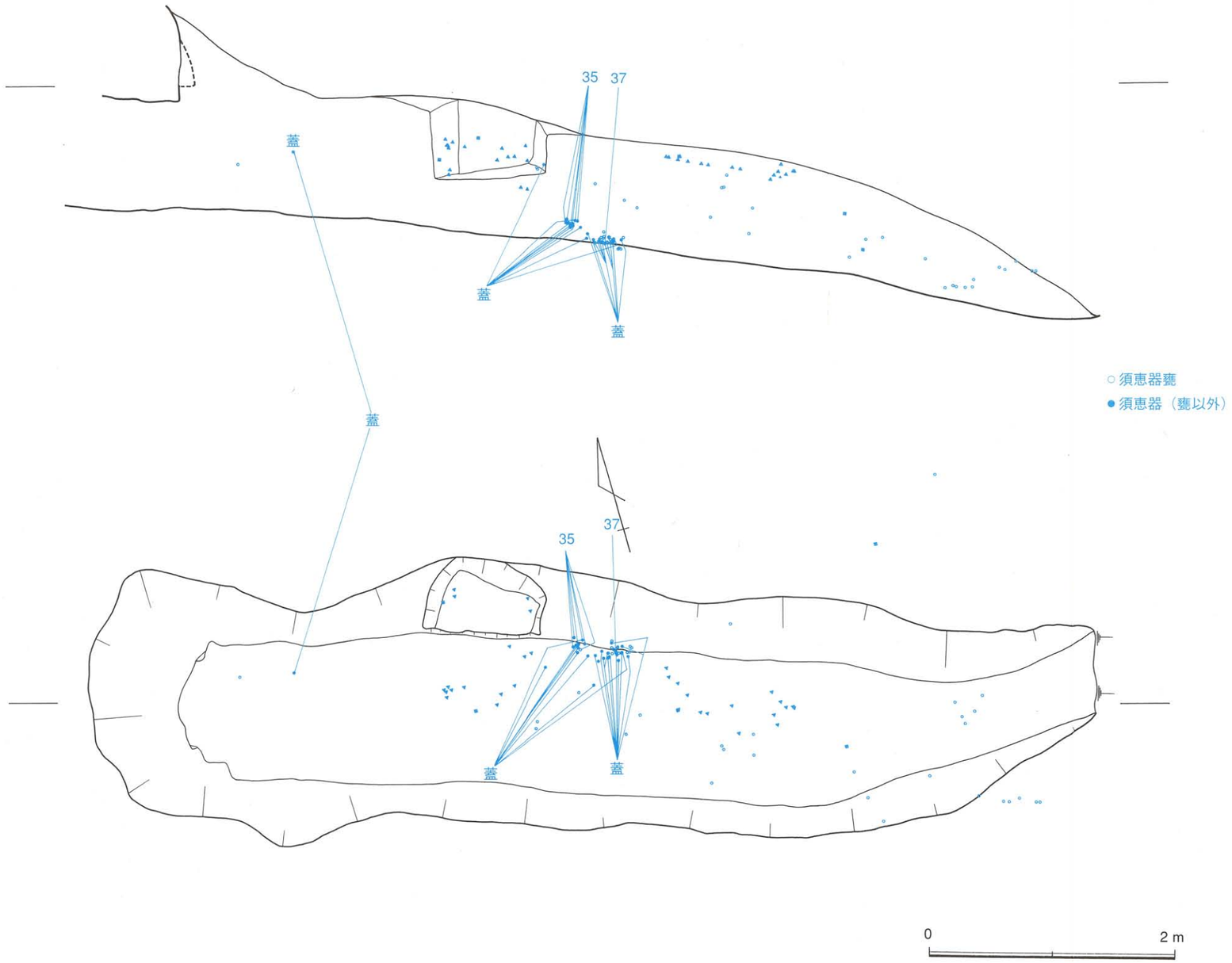
一方、立面形は縦断では、天井部の中心が最っも高く、丸く仕上げられ、そこでの高さは1.18mを測る。横断面もやや丸く仕上げられているが、天井部は平坦に近い。

埋土堆積状況（第106図） 土層は、大きく見て、5 層群に分けることができた。1 層は墓道の奥壁に堆積したもので、地山礫を少し含む層で、流土か埋土の玄室内への二次堆積土と考えられる。2 層は、

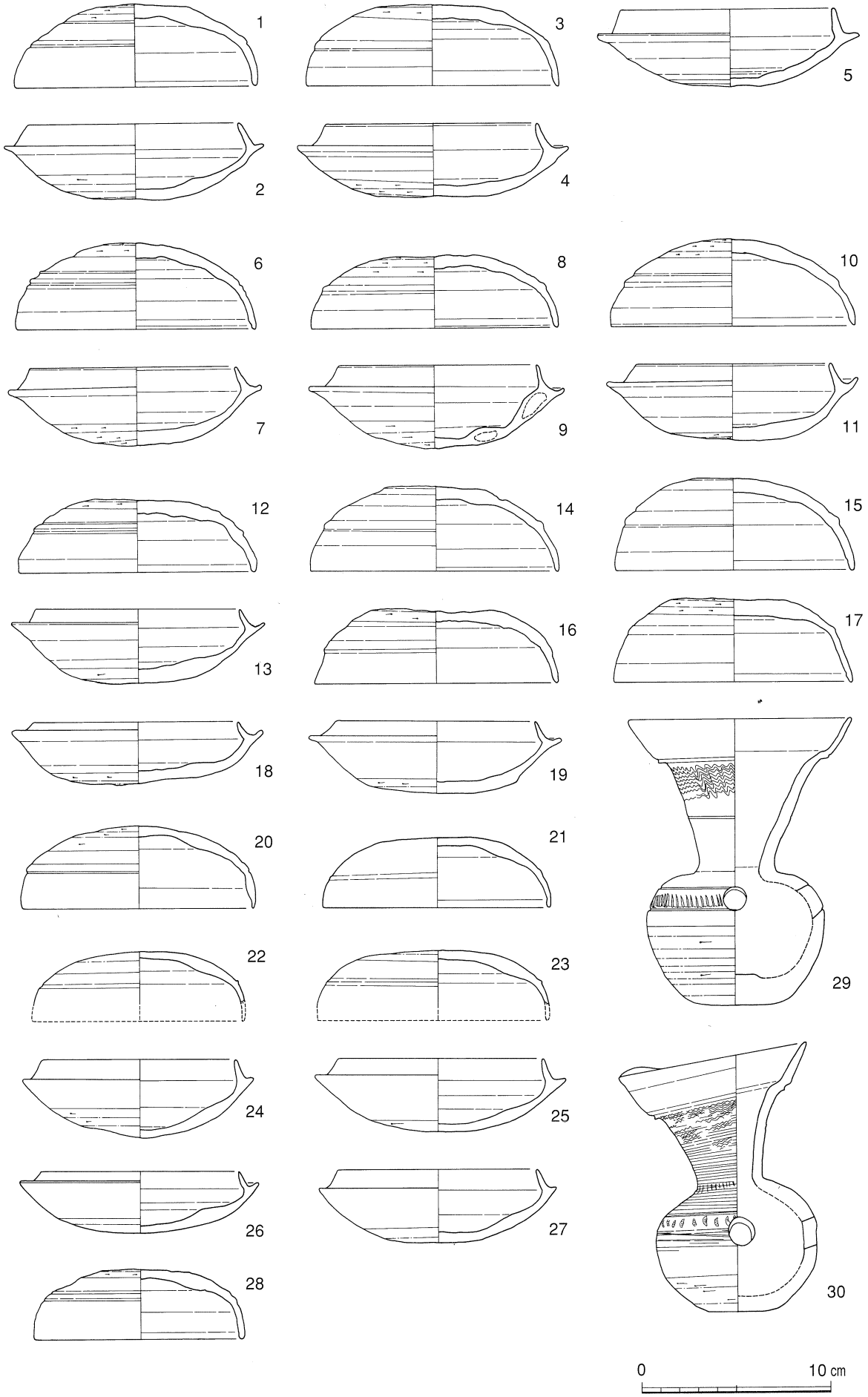
第106図　4区6号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）



第107図　4区6号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）



第108図　4区6号横穴墓墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）



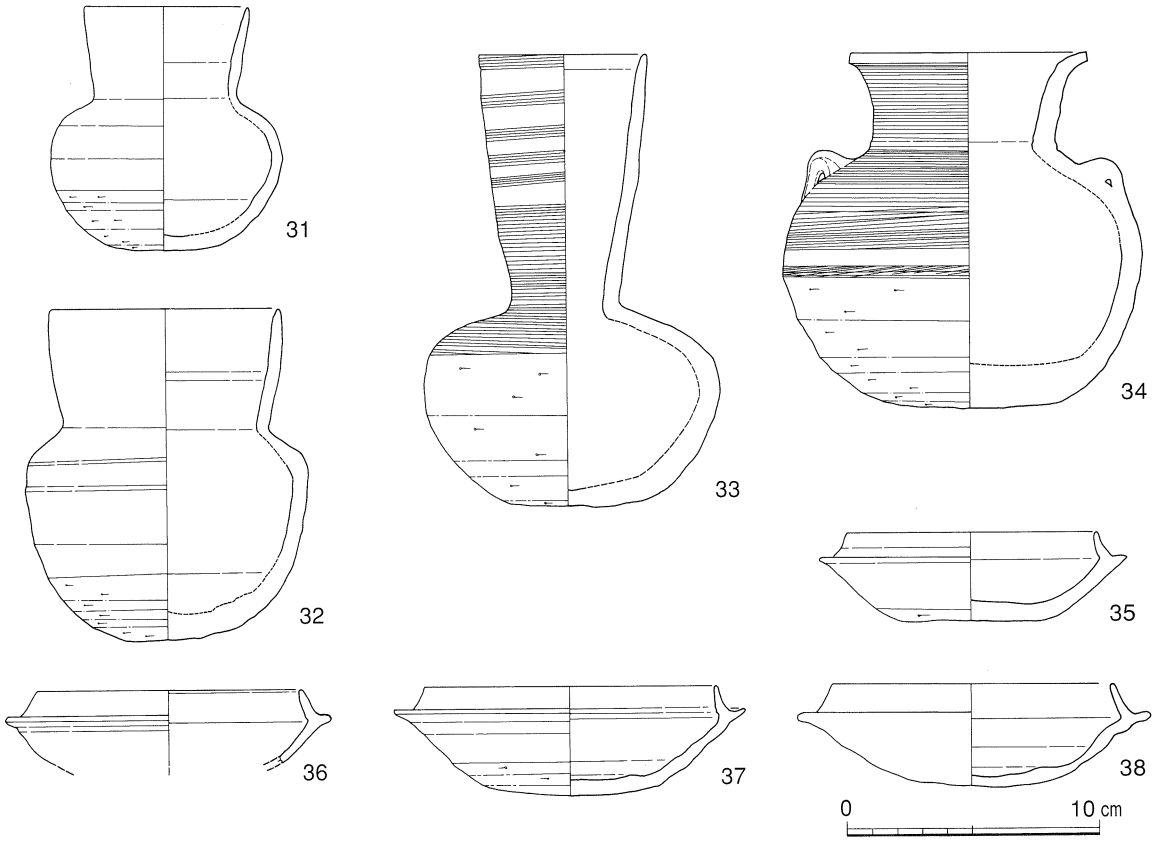
第109図　4区6号横穴墓出土須恵器実測図(1)（S＝1：3）

最終の掘削時の埋土と考えられ、それ迄の埋土を斜めに削りこんだ後のものである。また、掘削面（2層下面）は、閉塞石の上面にあたることから閉塞石の失われた部分は、この時に除去された可能性が考えられる。3層は、第3次の埋葬時の埋土であり、上層の3a層～3d層は、腐食が著しく黒色を呈し厚い。4層は、初葬時の埋土であり、上面の4a層はやや腐食している層である。5層は2次埋葬時に削られ、一部確認しているのみである。以上の観察結果より、最低4回の前庭部の掘削が行われていたものと解釈した。その他に前庭部下方の旧表土の上には築造時の排土（9層）を確認し、また3つの版築状の古道を確認している。古道Aは、横穴墓の初葬と2次掘削の埋土が上面を覆い、古道Bは、3次の掘削時の埋土が上面に確認できることから、それぞれ横穴墓の機能していた時期に伴うものと考えられる。古道Cは横穴墓の埋土の上面に存在することから、横穴墓の使用された時期よりは、新しい時期のものと考えられる。

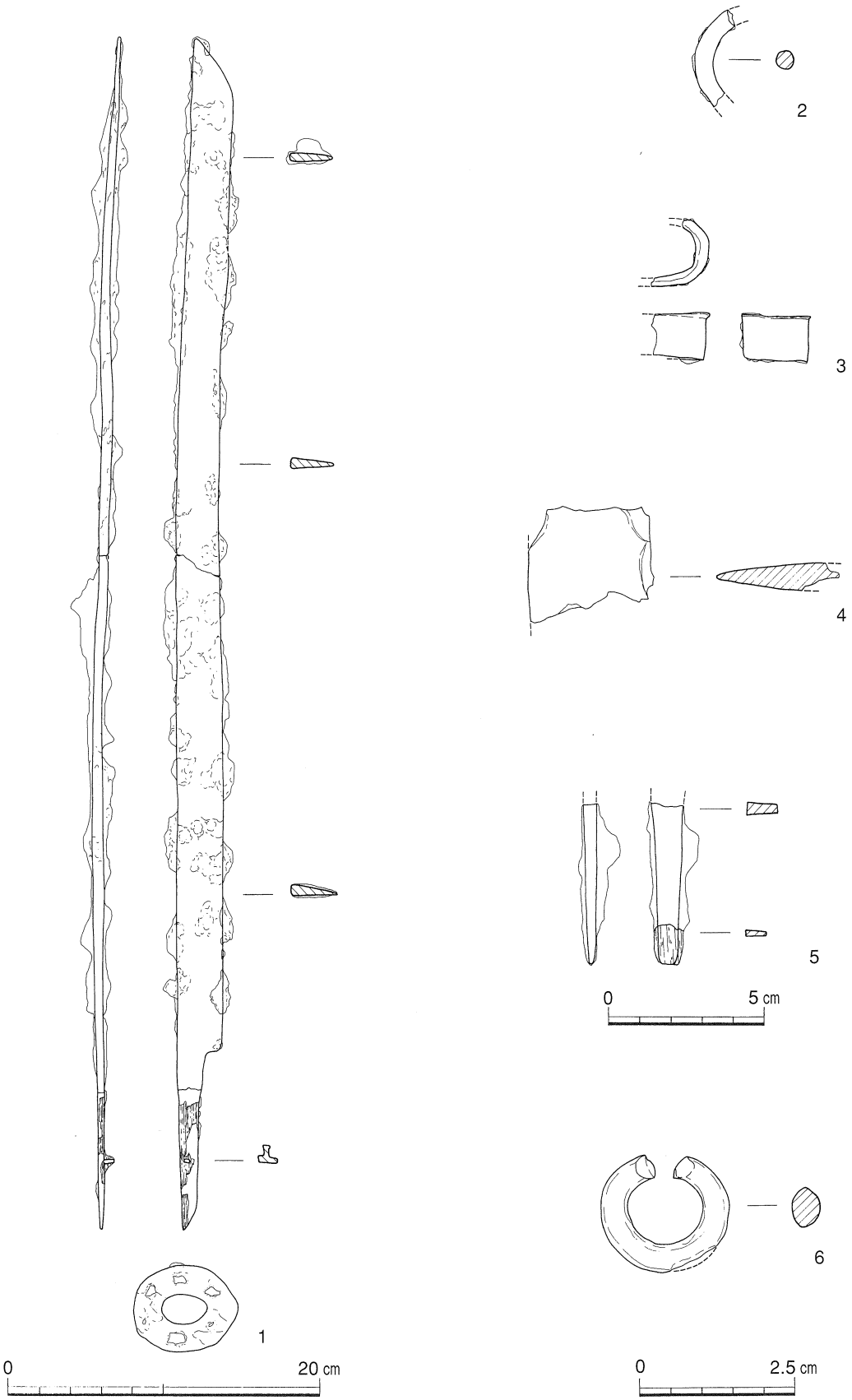
遺物出土状況（第107、108図）　墓道出土のものは、第2次埋葬面（5層上面）と第3次埋葬時の埋土上面の2面から出土している。第2次埋葬面からは、A5型の蓋坏が出土し、第3次の埋葬時の埋土上面の黒色土からは、甕片が出土している。

玄室内からは、奥壁側の須恵器屍床の左側に人骨が集中して出土し、中央には左右方向にセットのの蓋坏と大刀、頭蓋骨が出土し、右の前壁コーナ付近には、多数の須恵器が集中して出土している。

出土遺物（第109～111図）　出土須恵器の中で蓋坏は、3つに細分可能である。1類（第109図1～5）は、蓋で径13㎝前半、坏の立上りの高いものである。2類（第109図20～27）は、土師器質に近い焼きの蓋坏である。3類（第109図6～19）は、蓋坏の天井部及び底部の回転ヘラ削りが荒く、坏は1類よりも立上りが低いものである。それぞれの須恵器は、形式的に1類が古く2、3類が新



第110図　4区6号横穴墓出土須恵器実測図(2)（S＝1：3）



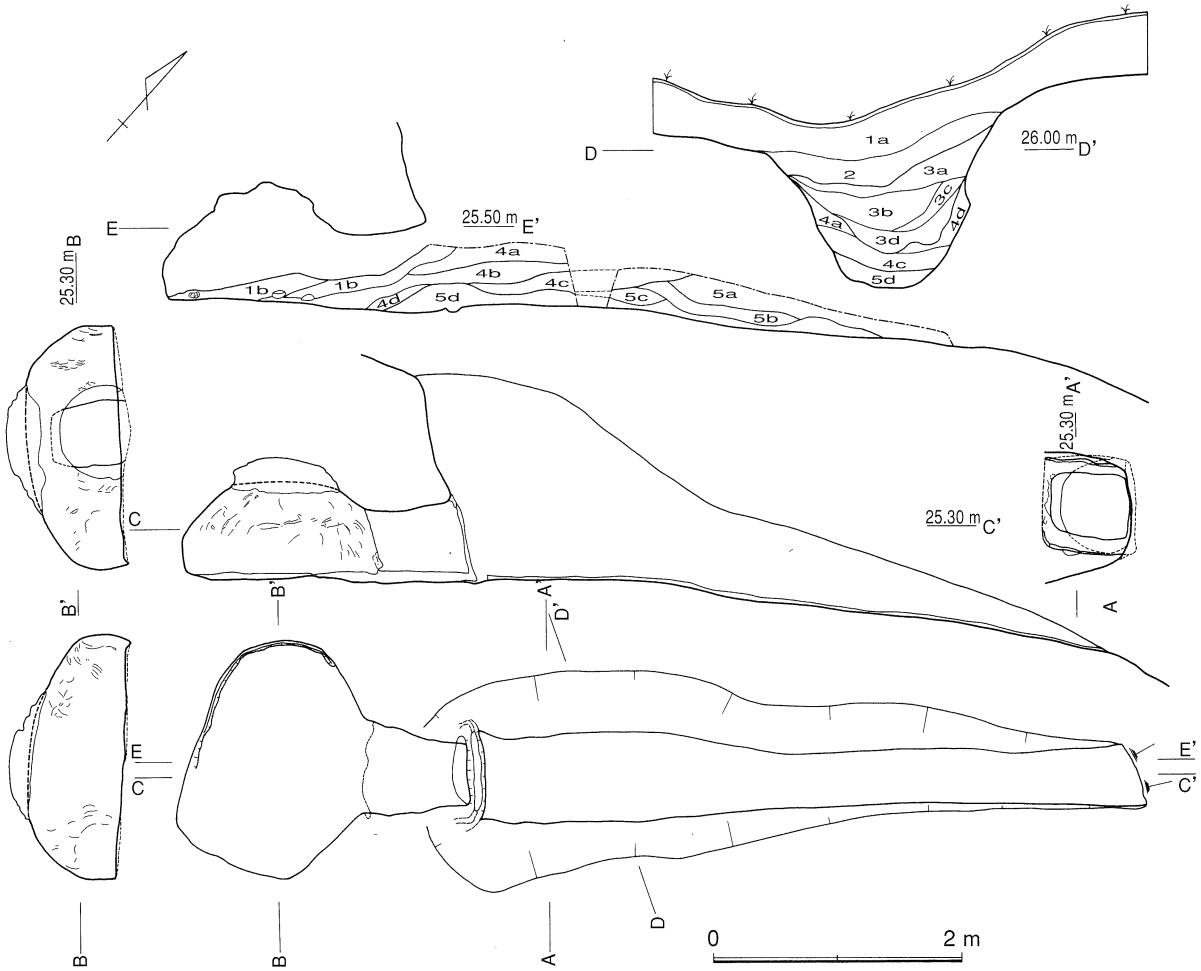
第111図　4区6号横穴墓出土金属器実測図（S＝1：4、1：2、1：1）

しい様相をもつ。

それぞれの蓋坏の出土状況を見た場合、1類は玄室内の須恵器床上から1点と右前壁コーナー付近から4点出土し、2類は右前壁コーナー付近からのみ出土し、3類は中央からと右前壁コーナ付近から出土している。

玄室内の須恵器蓋坏の出土状況から、右前壁コーナー付近の一群は、埋葬時期の異なるものが片付けらた結果と考えられる。また、奥壁側と中央部のものが、本来の位置を保っているものであれば、埋葬の順序は、奥壁から前壁に向かって埋葬されていったと推測可能である。しかし、人骨、大刀ともに本来の位置から動いているものと思われるので、明確なことは不明である。

時　　期　墓道及び玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷4期と考えられ、埋葬は4期のなかで終わっているものと推定される。なお、埋葬回数は最低4回と推察される。



1a　橙褐色土(礫を含まず、軟らかい)
1b　赤褐色土(礫ブロックの層)
2　褐 色 土(礫を含まず、軟らかい)
3a　暗褐色土(礫を含まず、軟らかい)
3b　黒褐色土(礫を含まず、軟らかい)
3b　褐 色 土(礫を含まず、軟らかい)
3d　暗褐色土(礫をほんの少しだけ含み、軟らかい)
4a　暗橙褐色土(礫をほんの少し含み、軟らかい)
4b　暗橙褐色土(大きめの礫を若干含み、軟らかい)
4c　橙褐色土(礫を含み、やや固くしまる)
4d　淡明橙褐色土(礫を多く含み、軟らかい(4c層と比べて))
5a　暗褐色土(粘質でやや風化。礫を若干含み、固くしまる)
5b　暗橙褐色土(粘質で礫を若干ふくみ、固くしまる)
5c　暗橙褐色土(粘質でやや風化、固くしまる)
5d　淡橙褐色土(礫を多く含み、固くしまる。斑状に褐色土を含む)

第112図　4区7号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

[7 号横穴墓]

立　　地　北東側に面した斜面に穿たれており、東側の 8 号横穴墓と 2 穴で小支群をなす。

標高25mの位置に存在している。調査当初は、溝状遺構と誤認し発掘したために、墓道の縦断土層の上半部分については確認できなかった。

墓　　道（第112図）　主軸をN－47°－E方向をとるものである。地山から深いところで1.6m掘削し、前端部床面の幅0.43㎝、玄門付近の幅0.66㎝と玄門部側が広がる。全長は、5.3mで、横断面U字形の狭長の墓道である。

玄　　門（第112図）　墓道中央に穿たれ、奥行き1.0m、幅は墓道側で0.5m、玄室側で0.75m測り、玄室側にやや広がる。高さは0.6mを測り、横断面長方形である。閉塞用の刳込は、床面に幅14㎝、長さ0.75㎝、深さ5㎝の溝が掘られ、奥行きは5㎝、幅0.75m、高さ0.7mを測り、横断面は長方形を呈す。

玄　　室（第112図）　平面形は、隅丸の横長の長方形であり、奥行き1.46m、幅1.85mを測る。一方、立面形は縦断、横断面とも丸く仕上げられており、天井部は崩落のため正確な高さは分からないが凡そ0.74mと推定される。

埋土堆積状況（第112図）　土層は、縦断の上半部が失われており、横断から判断した。大きく見て、5 層群に分けることができた。1 層は地山礫を含まない表土である。2 層は前庭に自然に堆積した流土である。3 層は、最終埋葬時の埋土と考えられ、上方の 3a層～ 3c層は腐食が著しく黒色を呈す。4 層は、第 2 次掘削時の埋土であり、上面は、第 3 次の埋葬により削られている。5 層は、初葬時の埋土で地山礫を最も多く含む層であり、上面は第 2 次の埋葬により削られている。以上の観察結果より、最低 3 回の前庭部の掘削が行われていたものと解釈した。

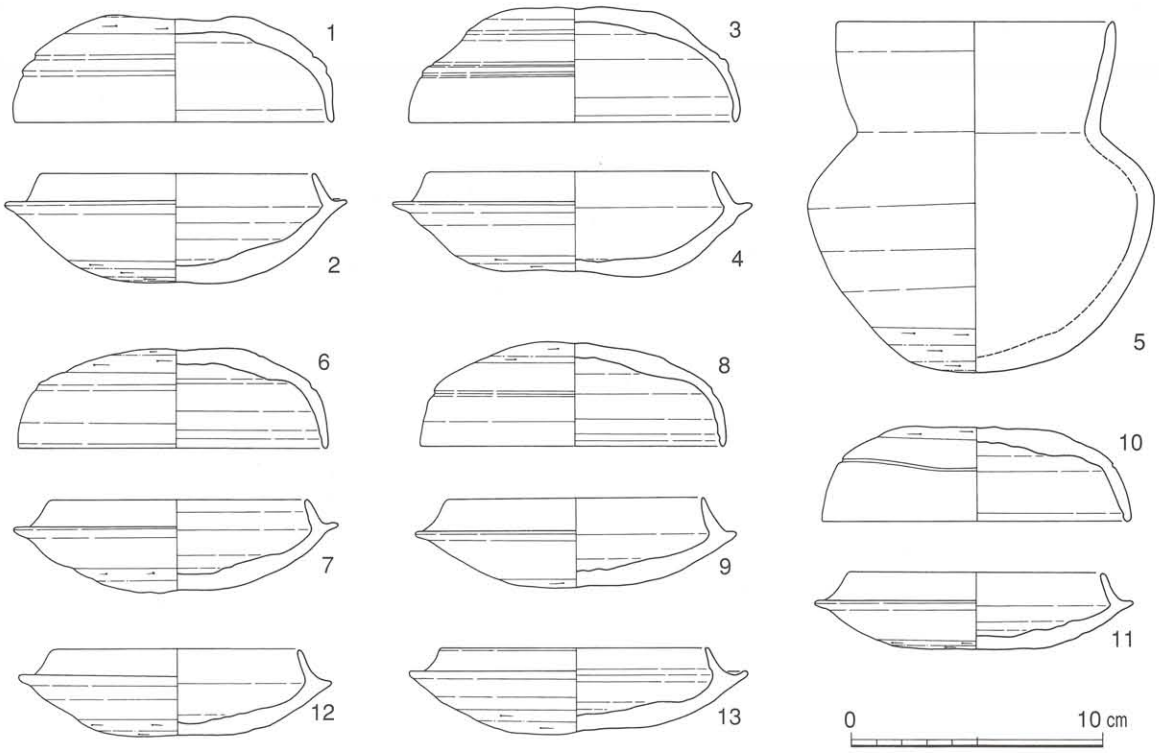
遺物出土状況（第113図）　墓道からは、遺物は出土せず、玄室内だけで出土している。

玄室内からは、奥壁に平行して人骨が 2 体出土し、鉄器類はその周囲から出土している。また、左壁よりには、坏身が 2 点出土し、その内の 1 点は、頭蓋骨の下から出土している。枕として使用された可能性が考えられる。ほとんどの須恵器は、玄室内の前壁側に集中して出土し、蓋坏はセットをなすものが多い。セットをなす蓋坏は、蓋を下にし、坏身を上にして置いたのであった。

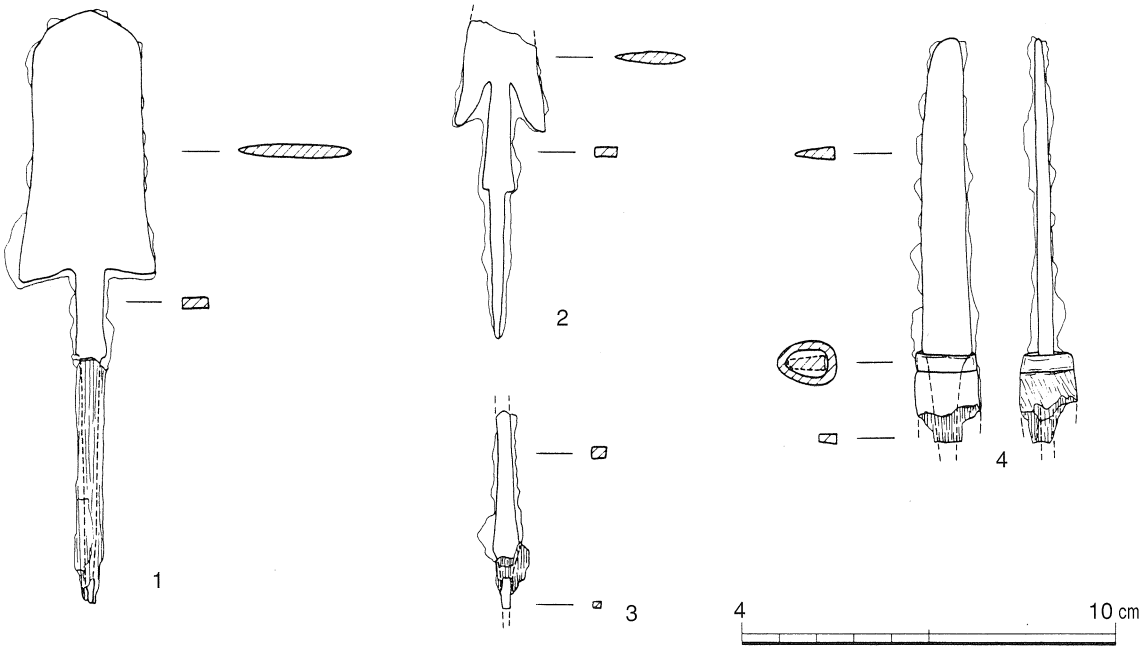
出土遺物（第114、115図）　出土須恵器の蓋坏は、2 つに細分可能である。1 類は、蓋で径13㎝以上、坏で径11㎝以上のもので、胎土は青灰色のものである。2 類は、蓋で径12㎝前半、坏で10㎝前半で、受部が平坦なもので、胎土は、淡灰褐色のものである。また、直口壷は、青灰色を呈すことから 1 類に伴う可能性が考えられる。1 類 2 類とも大谷A 4 型又はA 5 型の範疇に含まれ、形式差を時期差として判断することは困難なものである。それぞれの出土状況は、1 類が玄室内奥側～中央にかけて、2 類が前壁右側で出土している。また、それぞれの須恵器が別の時期に使用されたものとすれば、埋葬は 2 回以上と考えられる。

時　　期　玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷 4 期と考えられ、埋葬は 4 期の中で終了しているものと推定される。

第113図　4区7号横穴墓玄室内人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）



第114図　4区7号横穴墓玄室内出土須恵器実測図（S＝1：3）



第115図　4区7号横穴墓玄室内出土鉄器実測図（S＝1：2）

[8 号横穴墓]

立　　地　7号横穴墓の東側に存在し、標高25mのやや低い位置に存在している。重機による表土掘削時に玄室から玄門にかけての天井部の一部が崩落した。

墓　　道（第116図）　主軸をN－44°－E方向をとるものである。地山から深いところで1.8m掘削し床面の幅0.54m、長さ4.94mのを測り、狭長の墓道を作り出している。床面は玄門方向に向かって緩やかに高くなっており、比高差は0.7mである。また、玄門部から0.56m手前の墓道の左壁側で平面で0.14m広がり刳込状になっている部分があるが、右壁では、認められない。

玄　　門（第116図）　幅0.65m、奥行き0.8m、高さは、天井部は崩落のため失われており明確でないが、推定で0.9mと考えられる。

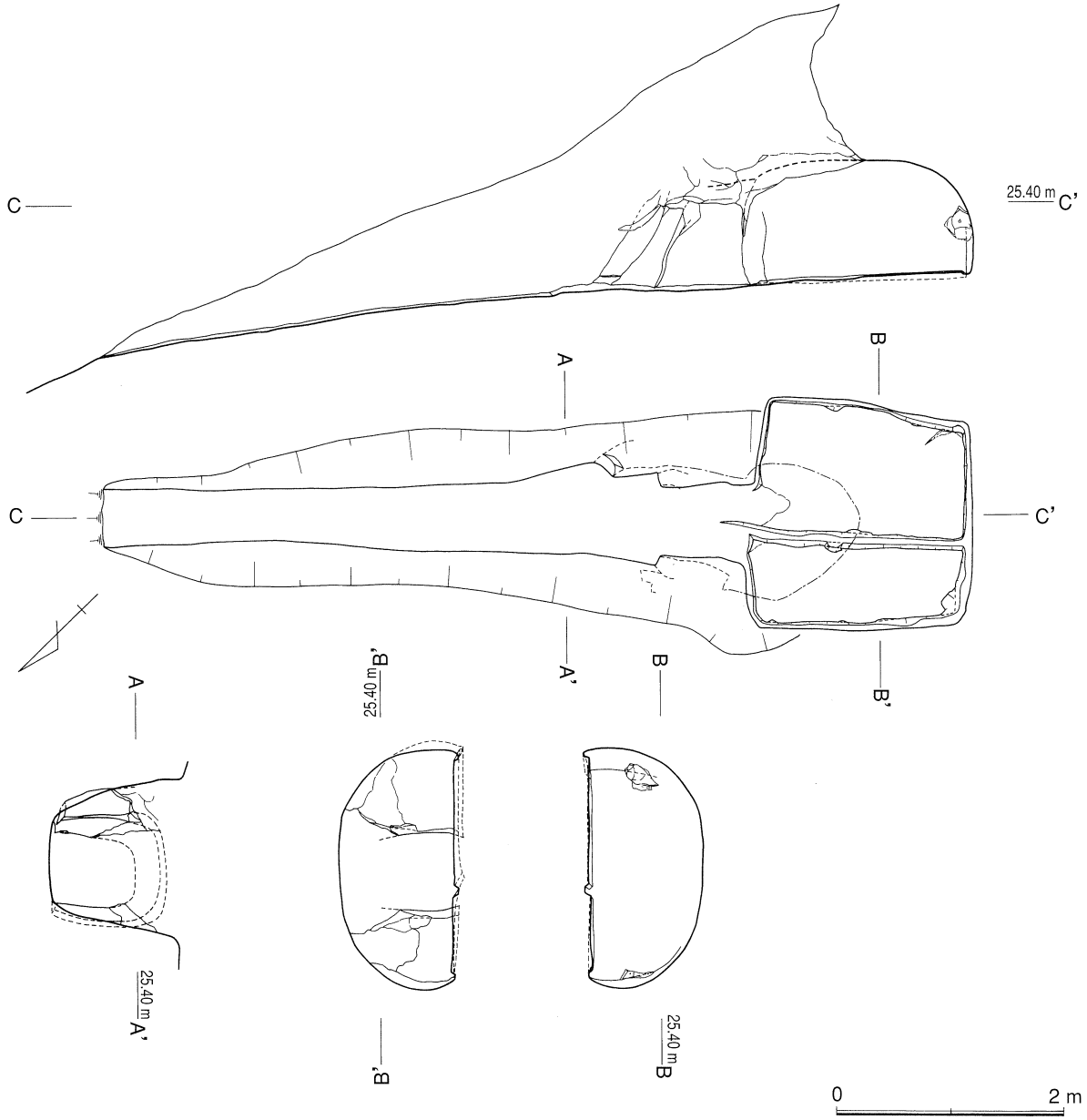
玄　　室（第116図）　平面形は、正方形に近いもので、奥行き0.97m、幅は奥壁で1.79m、前壁で2.05mを測り、やや前壁の方が幅が広い。床面は、平坦に加工され、四壁沿いと中央には溝が廻る。四壁に沿って掘られた溝は幅4～7㎝、深さ4㎝程を測る。また、中央の溝は中軸線より右壁に寄ったところに掘られ、深さ5㎝、幅8～12㎝を測る。

一方、立面形は縦断では、奥壁はやや丸く立上り、天井部はほぼ同じ高さと推定されるが、失われており、明らかではない。横断面も同様にやや丸く仕上げられている。高さは、推定で、1.02mと考えられる。

埋土堆積状況（第119図）　土層は、大きく見て、6層群に分けることができた。1層は流土と考えられるものである。2層は玄室内への流入土と天井部の崩落土からなるものであり、下層ほど地山の礫ブロックを多く含む。3層は、最終の埋葬時の埋土と考えられ、上層（3a層）は腐食し黒色を呈す。それ迄の埋土を斜めに削りこんだ後のものである。また、玄室内の3b層は、この埋土が二次的に流入したものと推測される。4層は、腐食の著しい5a層を削り込んだ後の埋土であり、これを第3次の埋葬時に伴う埋土と考えることは可能であるが、最終の掘削面を4層上面と捉えるか、その下面と

捉えるかによって、解釈を異にする。一つの解釈として掘削面を 4 層下面と考え、4 層を掘削時の排土もしくは、整地土と捉え、その上面が何らかの作業面として機能していたものと解釈することも可能であるからである。ここでは、他の横穴墓で 4 層に対応する層の例がいくつか見られ、かつ、その上面が硬化している例も認められることから、4 層は、最終埋葬時の整地土として最終埋葬に伴うものと考えられる。5 層は、2 次掘削に伴う埋土として考えられ、上層の 5a層は、腐食が最も著しく黒色を呈す。6 層は、初葬時に伴う埋土である。以上の観察結果より、最低 3 回以上の墓道の掘削が行われていたものと解釈できる。ただし、5 層を削り込む最終埋葬面は、玄室に向かってかなり傾斜をもっている。他の掘削面が平坦であるのに対して異質であり、埋葬の性格が異なるものである可能も考えられる。

遺物出土状況（第117、119図） 墓道からは、第 2 次埋葬面（6 層上面）と最終時作業面（4 層上面）の 2 面から出土している。第 2 次埋葬面からは、完形の蓋坏とは瑳が出土し、最終時作業面からは、



第116図　4区8号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

高坏の破片が出土している。

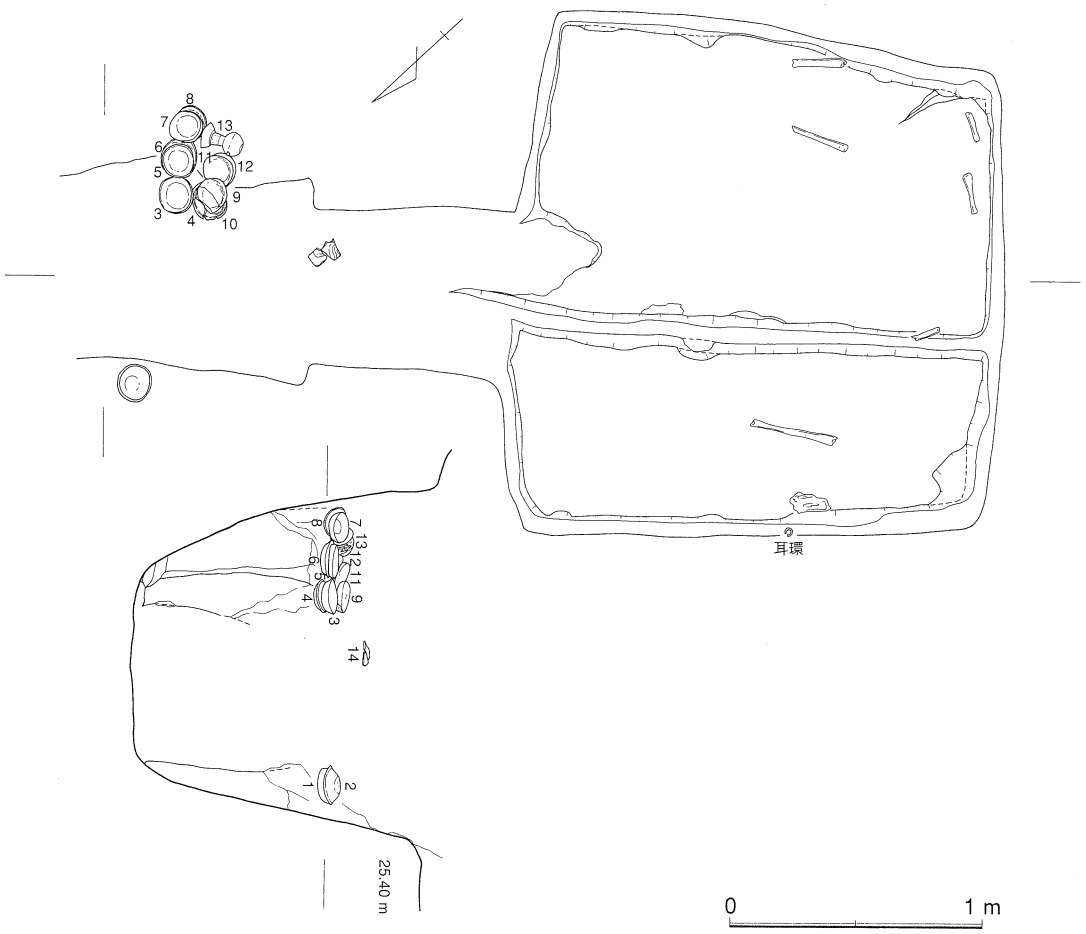
第 2 次埋葬面出土のものは、平面的には墓道の左壁の広がる部分の一群とそれに対応する右壁付近から出土している。左壁部分からは、蓋坏 5 セットと瑞 1 点が出土し、蓋坏は坏身を下にし、その上に逆転した蓋が重なるものである。一方、右側のセットは、伏せた蓋の上に、伏せた坏が重なるものである。

また、横穴墓に伴わない時期の古銭 3 枚と土師器46枚が出土している。2 及び 3 層上面から出土しており、完全に前庭部が埋まった後のものである。時期的には、17世紀前後のものと考えられる。その性格については、古墓に伴う可能性を考えられるが、土層断面の観察からは土壙等は明確にはできなかった。時期的に近い遺構として 6 号横穴墓の墓道検出の 2 基の古墓が存在しており、何らかの関連した遺物である可能性が推定される。

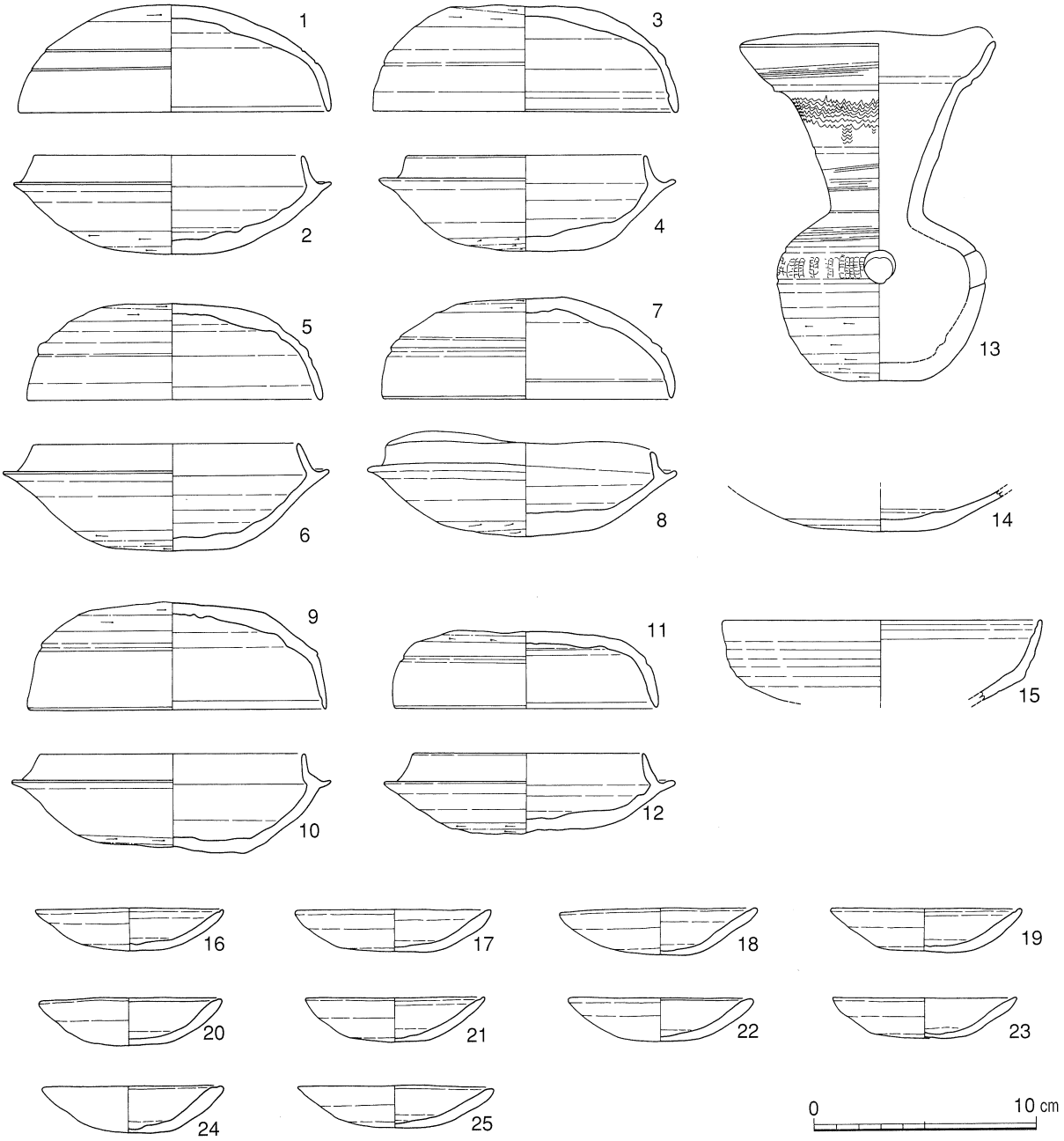
玄室内からは、人骨、耳環、鉄鏃が出土している。人骨は、ほとんど残っておらず、埋葬位置のままであるかどうかは、判断できない。

出土遺物（第118図）　墓道から一括出土した蓋坏は、ほとんどのものが蓋で径13㎝以上のものであるが、11と12のセットが蓋で径12㎝と一回り小さく他のものに比し扁平なものである点異なっている。

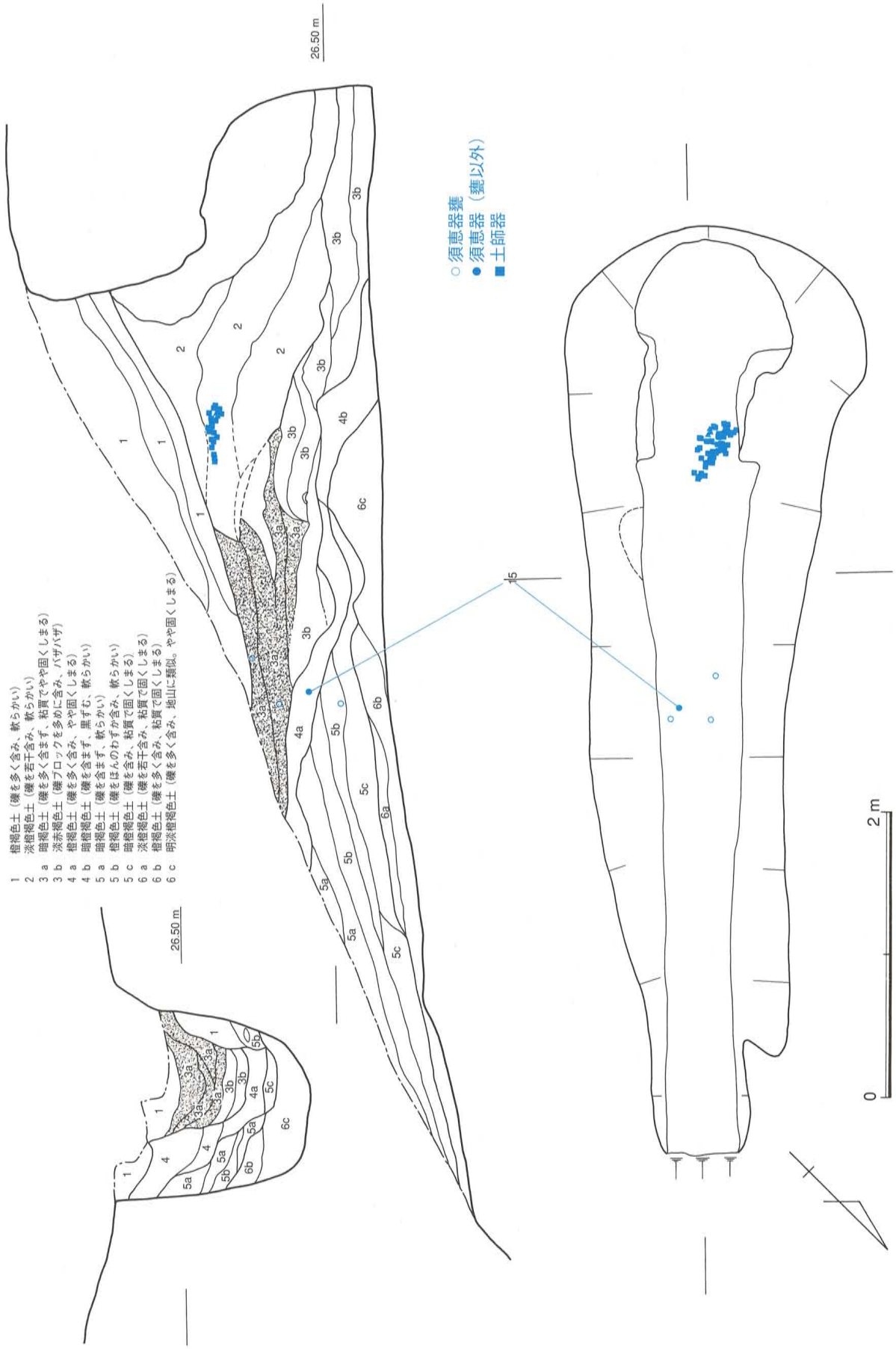
時　　期　墓道から出土している須恵器より築造は、大谷 4 期と考えられ、埋葬は 4 期のなかで終わっているものと推定される。なお、埋葬回数は、最低 3 回と推察される。



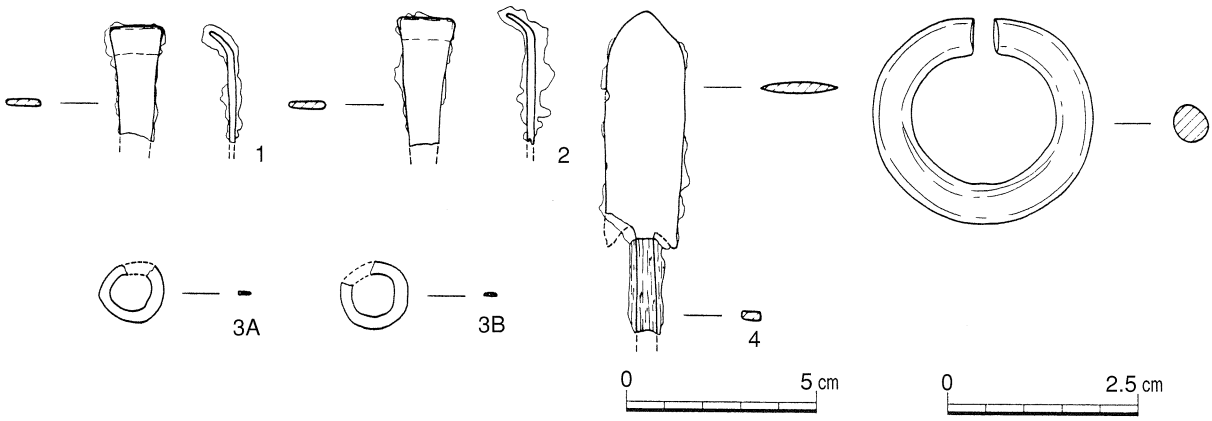
第117図　4区8号横穴墓人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）



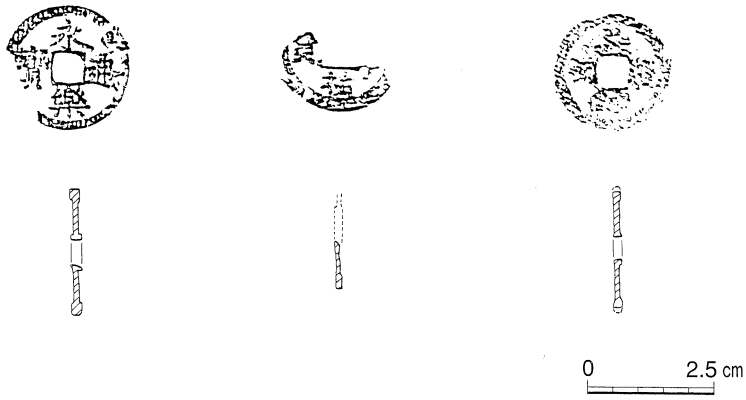
第118図　4区8号横穴墓出土土器実測図（S＝1：3）



第119図　4区8号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）



第120図　4区8号横穴墓玄室内出土金属器実測図（S＝1：2、1：1）



第121図　4区8号横穴墓墓道出土古銭（S＝2：3）

［9 号横穴墓］（第122図）

立　　地　丘陵が南西側に折れるコーナー部分の斜面に開口し、北側の10号横穴墓と2穴で小支群を形成している。標高22mの位置に存在し、玄室～玄門にかけての天井部は、崩落により失われている。

墓　　道（第122図）　主軸をN－47°－E方向をとるものである。地山から深いところで1.6m掘削し床面の幅0.8m、全長3.84mを測り、幅狭の前庭部である。床面は水平であるが、玄門方向で段状に近い形で高くなる。

玄　　門（第122図）　奥行き0.9m、幅が、前庭部側で0.58m、玄室側で0.81mを測り、玄室側に向かって広がる。高さは、天井部が失われていることから明確ではないが、0.5m程であったものと考えられる。また、閉塞用の刳込等は、設けられていなかった。

閉　　塞（第123図）　玄門部と墓道の境から割石が2点出土している。玄門床面上から出土しており、初葬時に伴うものと考えられる。本来は玄門部の天井部まで積み上げられていたものと考えられるが、追葬等により抜き取られたものと推測される。

玄　　室（第122図）　平面形は、隅の丸い横長の長方形を呈すが、楕円形に近い。奥行き1.70m、幅は奥壁で1.2m、前壁で1.5mを測る。また、左前壁の方が、右前壁よりやや長いものである。前壁の方が幅が広い。

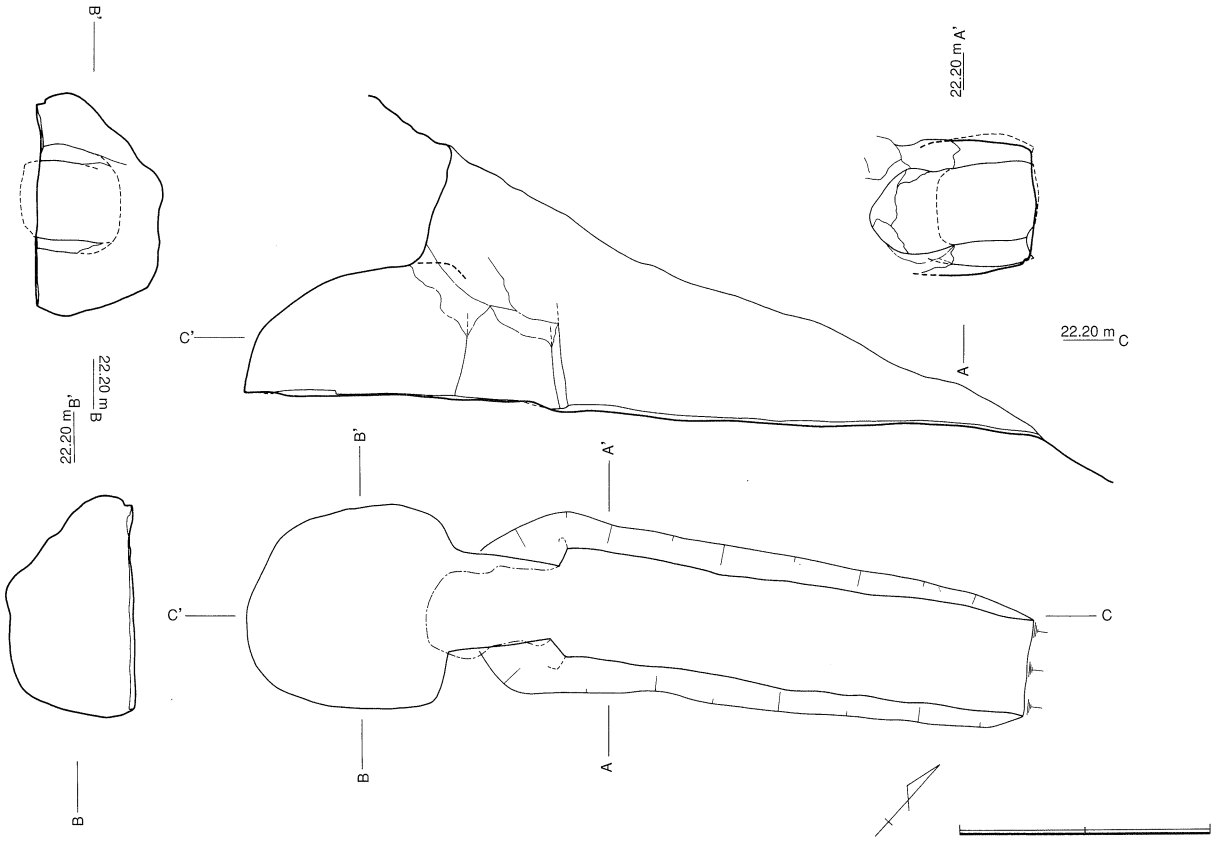
一方、立面形は縦断では、奥壁はやや丸く立上り、高さは、1.0mを測る。横断面は、整った形ではなく、左右対称的ではない。

埋土堆積状況（第124図）　土層は、大きく見て、5層群に分けることができた。1層は、地山礫をほとんど含まない層であり、流土と考えられる。2層は玄室内への流入土と天井部の崩落土からなるものであり、下層ほど地山の礫ブロックを多く含む。3層は、最終の埋葬時の埋土と考えられ、上層（3a層）は腐食し黒色を呈す。それ迄の埋土を斜めに削りこんだ後に埋められたものである。また、玄室内の3d層は、この埋土が二次的に流入したものと推測される。4層は、2次埋葬に伴う埋土として考えられる。5層は、地山礫を多く含む土層で、初葬時に伴う埋土である。

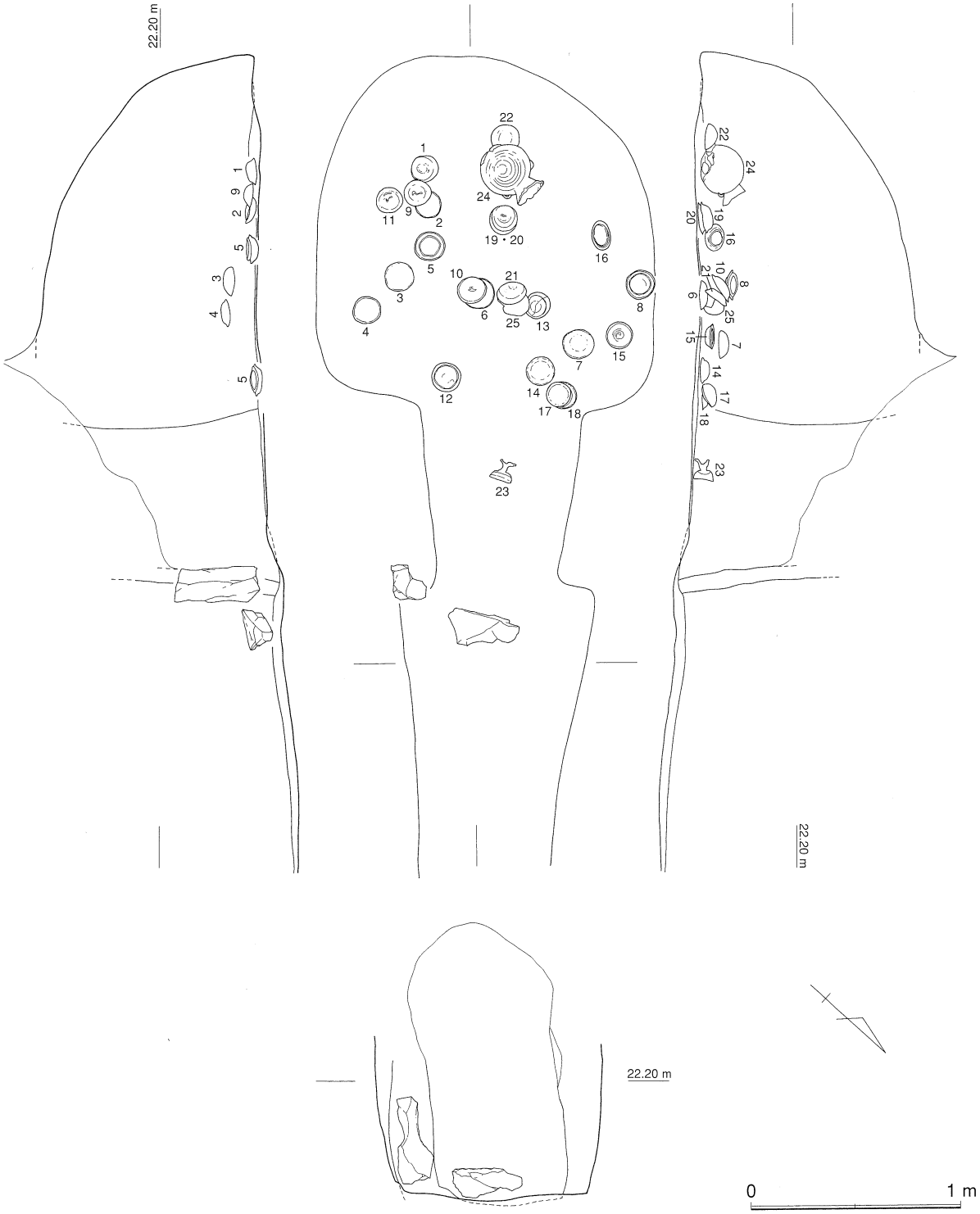
遺物出土状況（第123、124図）　墓道からは、第2次埋葬面（5層上面）から脚付直口壷1点、坏身1点が出土している。直口壷は、ほぼ完形のもので、坏身は、破片で出土している。

玄室内からは、須恵器、鉄器が出土している。須恵器は、ほぼ床面全域に広がり出土している。面的には、床面直上のものと10㎝程浮いた状態の2面存在する。浮いている器種は、坏身のみであり注目される。

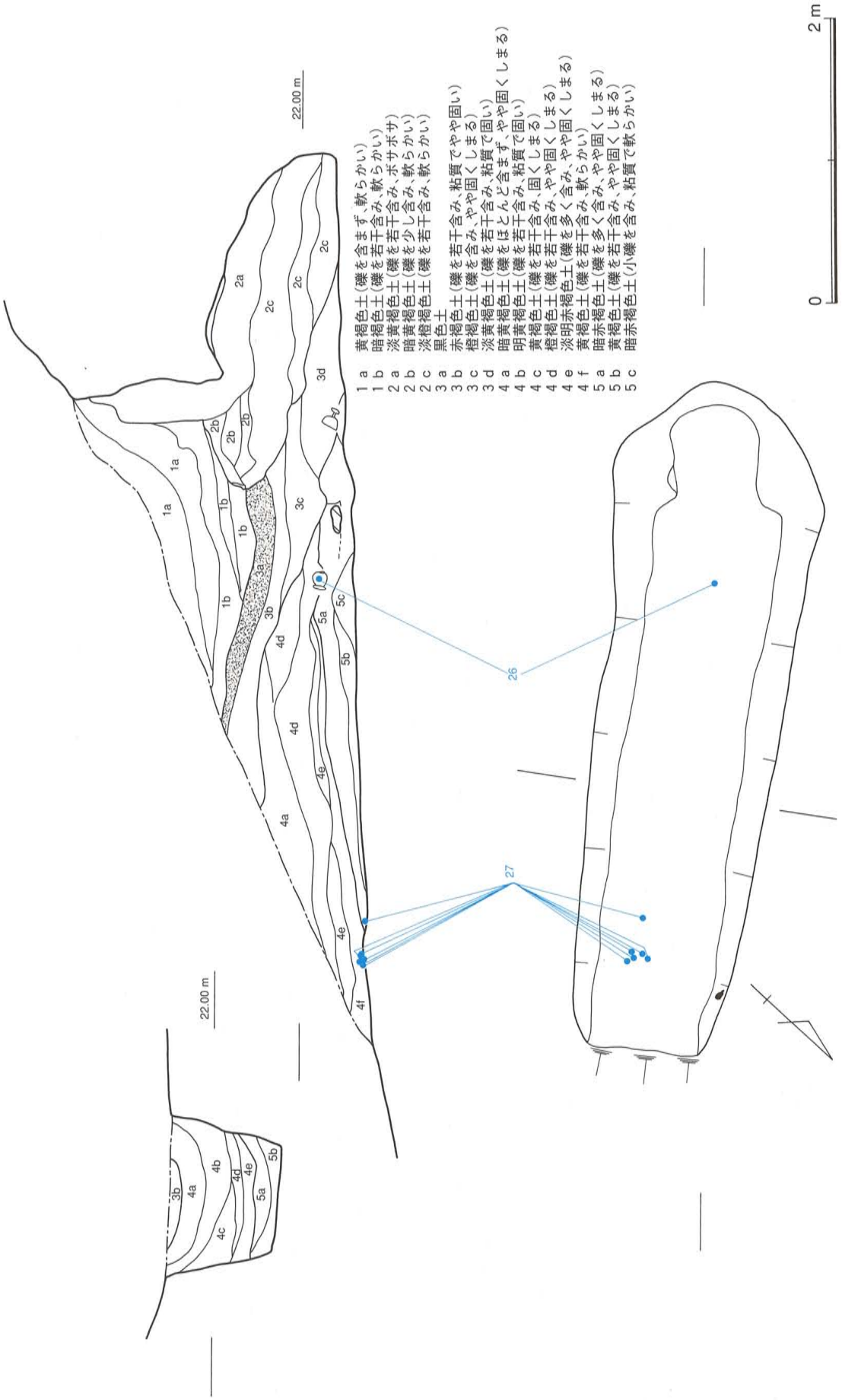
出土遺物（第125、126、127図）　玄室内から出土した蓋坏は大きく見て3つに分けることができる。1類は、蓋だけであり、青灰色を呈し、天井部を中心部からしっかり削るものである。2類は、坏身のみで、底部をある程度削るものである。3類は、削りの認められないもので、A、Bの2つに細分した。3A類は、淡灰色で蓋の肩部に沈線を施さず、なでによって稜を表現するものである。3B類は、淡灰色で蓋の肩部に1条の沈線を施すものであり、坏身は立上りの低いものが多い。



第122図　4区9号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）



第123図　4区9号横穴墓閉塞石・遺物出土状況実測図（S＝1：30）

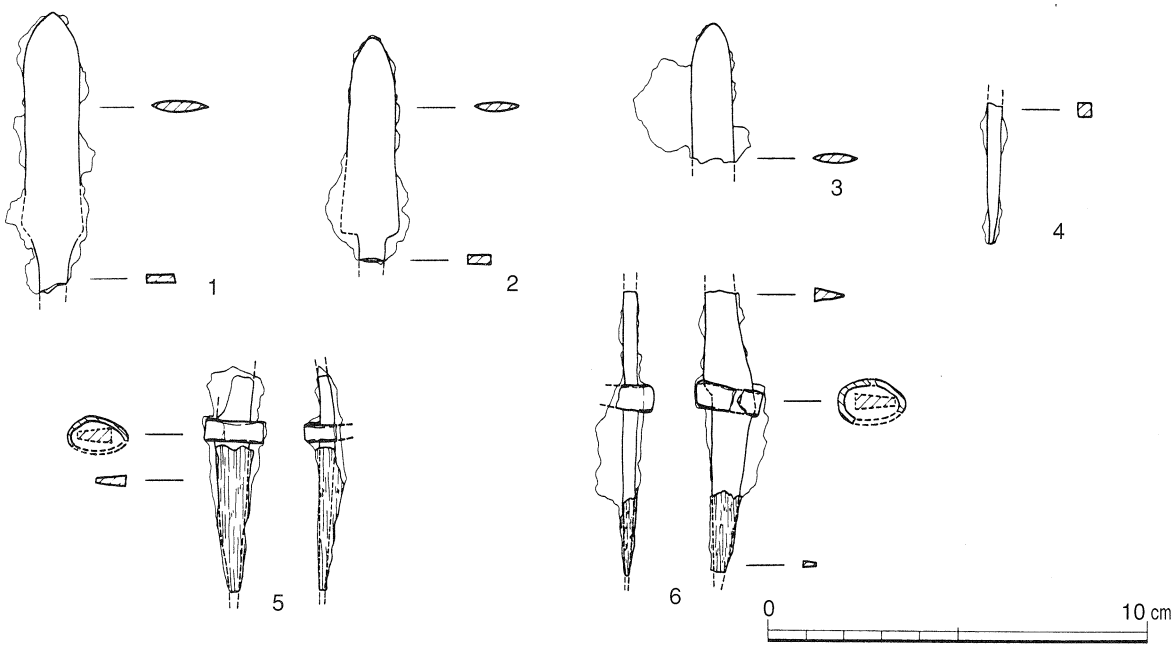


第124図　4区9号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）

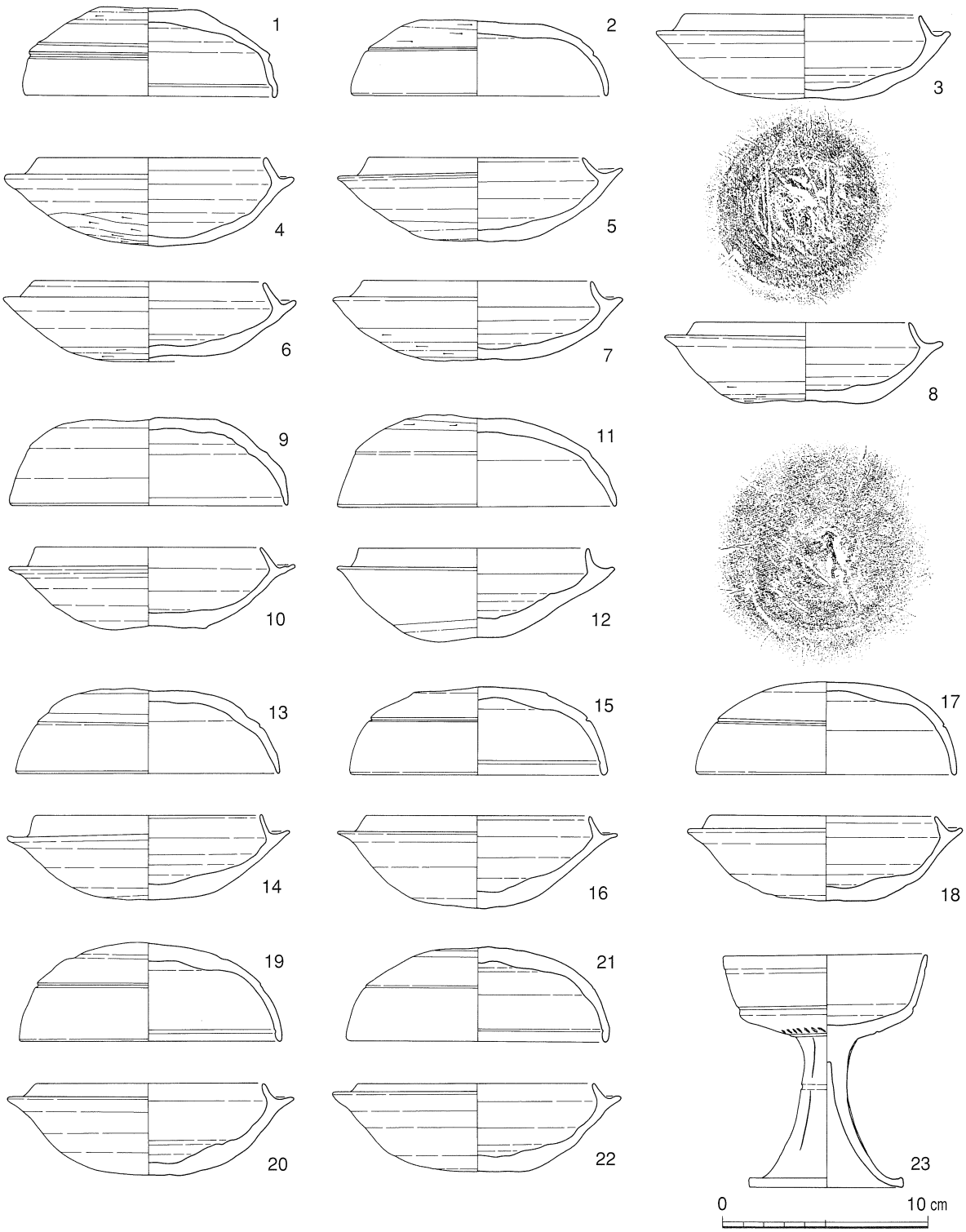
それぞれの出土状況を見ると、1類は、玄室内の左側から出土し、2類は、玄室内の手前側から出土し、床面から浮いているものが多い。3 A類は、玄室内の左側から出土し、3 B類は、右側から出土している。なお、以上の蓋坏の分類は、床面出土のものと浮いた状態で出土しているものとが同一の分類に属し、厳密に対応していない点問題が残る。

また、それぞれ大谷分類と対比すると1類は、A 4又はA 5型に、2類は、A 5又はA 6型に、3類はA 7型になるものと考えられ、時期差をもつものである。

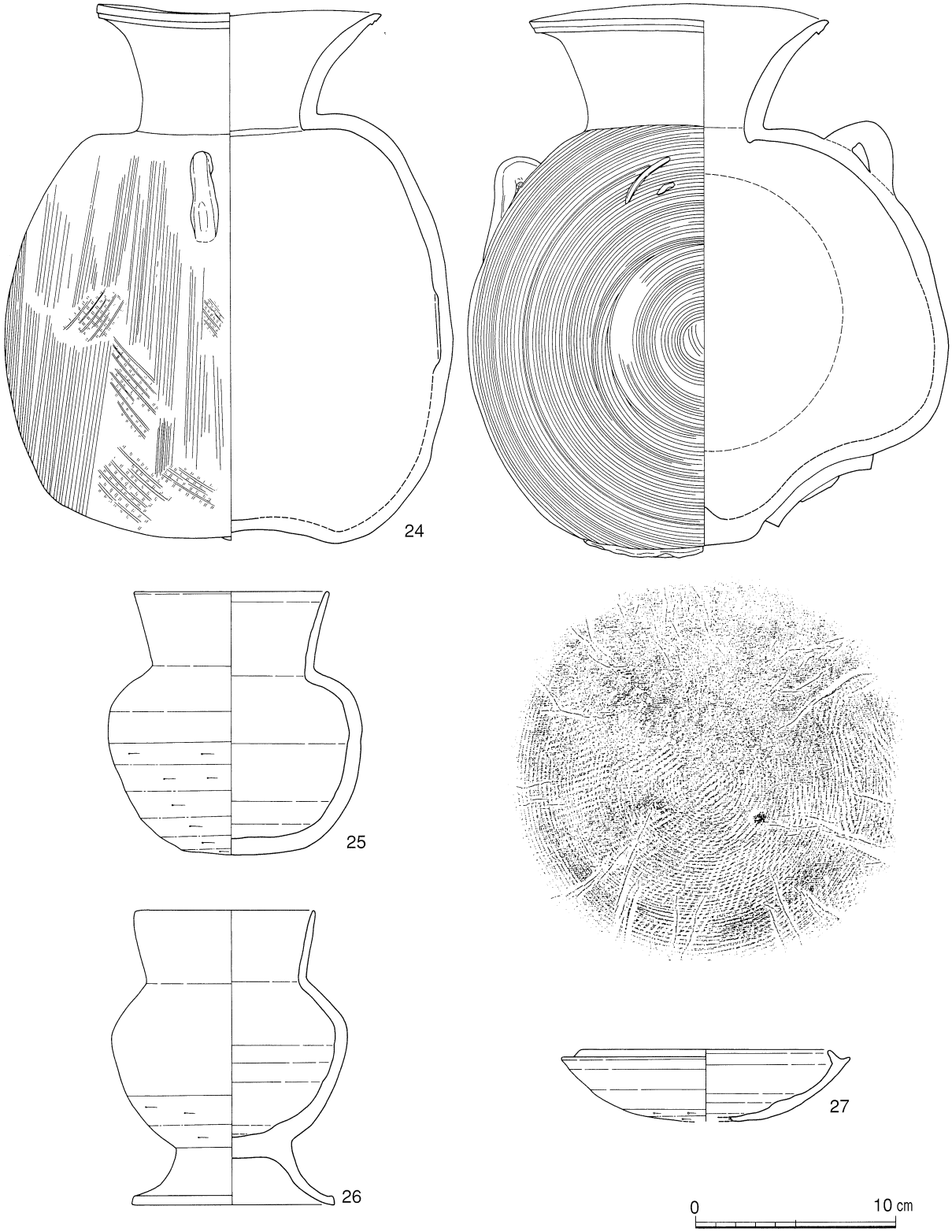
時　　期　玄室内から出土している須恵器の様相より築造は、大谷4期でも新しい頃と考えられ、埋葬は5期までと推定される。



第125図　4区9号横穴墓出土鉄器実測図（S＝1：2）



第126図　4区9号横穴墓出土須恵器実測図(1)（S＝1：3）



第127図　4区9号横穴墓出土須恵器実測図(2)（S＝1：3）

[10号横穴墓]

立　　地　9号横穴墓の南側に立地し、標高23mと9号横穴墓より高い位置ある。上方の尾根には、1号墳（前方後方形の可能性あり）が存在している。本横穴墓はその後方部直下に存在することから主体部である可能性が考えられるものである。

墓　　道（第128図）　主軸をN－80°－E方向をとるものである。地山から深いところで2.3m掘削し、全長4.4mを測る。床面の幅は、前端で0.48m、玄門付近で広がり0.94mを測る。全体的には幅狭の墓道である。

玄　　門（第128図）　天井部は、一部分だけ残り、ほとんどが崩落によって失われている。奥行き0.87m、幅0.55m、高さ1.10mを測る。また、刳込み（閉塞部）は、奥行きの長いもので、羨道として考えることも可能なものであるが、今回は、閉塞部として認識している。

閉塞部の床面には奥行0.12m、長さ0.82m、深さ5㎝の溝が設けられている。横断面は長方形と考えられ、幅に比し高さの高いものである。また、閉塞部の規模は、奥行き0.36m、幅0.90mを測る。高さは、おそらく1.20mと考えられ、玄門部より一段高くなっていたものと考えられる。断面は、長方形と考えられる。

なお、閉塞用の石材等は検出しなかった。

玄　　室（第128図）　平面形は、正方形を呈すが、奥壁側の隅は丸みをもつ。規模は、奥行き2.54m、幅2.65mを測る。床面は、地山が軟弱であるため、残存状況は良くない。特にコーナー付近は明確に検出できなかった。また、四壁に沿って幅3～6㎝、深さ7㎝を測る溝が廻る。また、溝は玄門部まで続くもので0.54㎝の長さのところでなくなる。

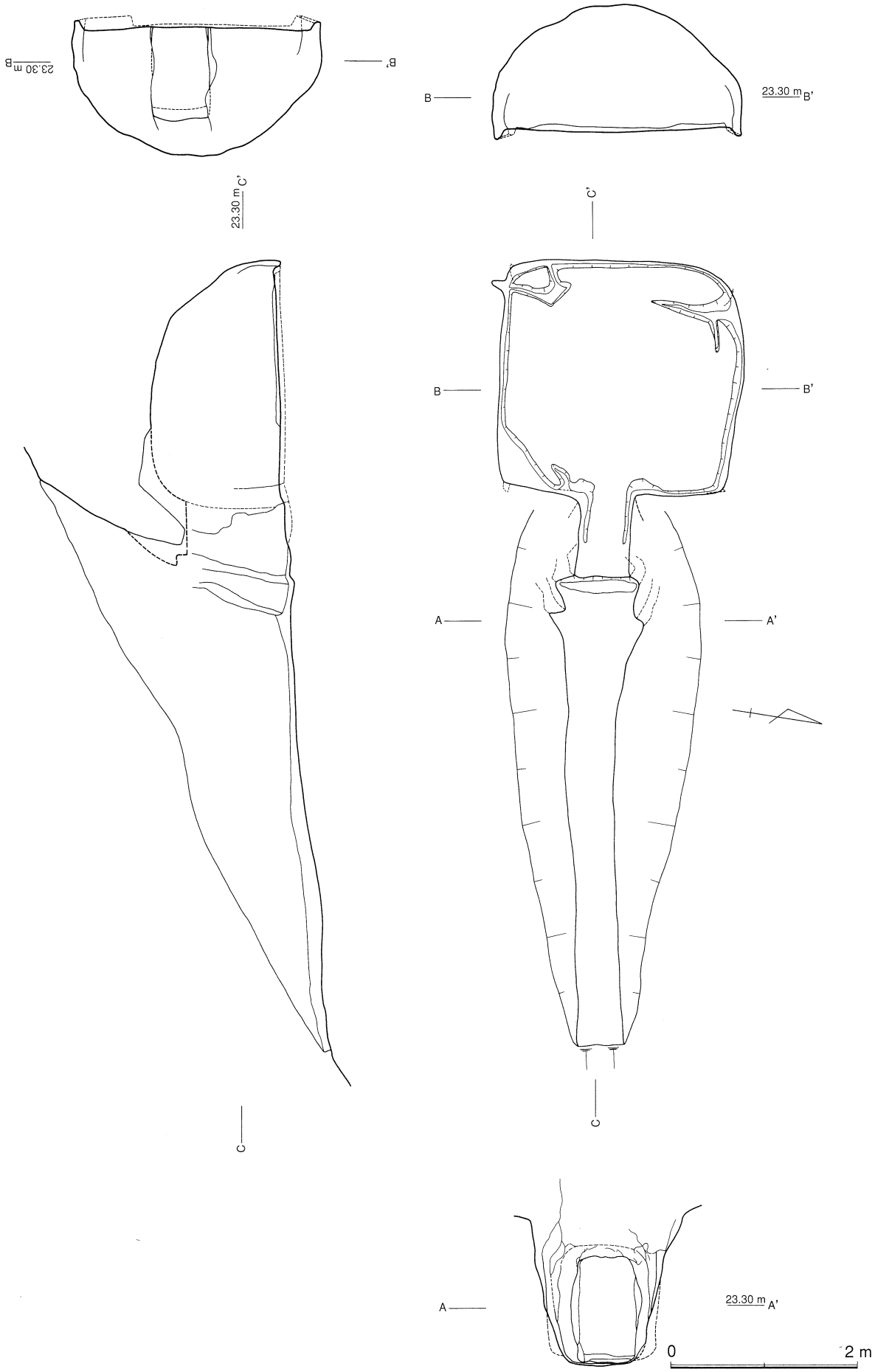
一方、立面形は縦断では、奥壁はやや丸く立上り、高さは、1.32mを測る。横断面は、右壁側が左壁に比べやや丸みを欠き、左右対称的ではない。各壁の界線は床面から40㎝程までは、明瞭であるが、それから上は、曖昧なものである。

埋土堆積状況（第130図）　土層は、大きく見て、6層群に分けることができた。1層は、地山礫をほとんど含まないそうであり、流土と考えられる。2層は玄室内への流入土と天井部の崩落土からなるものであり、下層ほど地山の礫ブロックを多く含む。3層は、最終の埋葬時の埋土と考えられ、上層（3a層）は腐食し黒褐色を呈す。また、3c、3d層は、その時の排土または、整地土と考えられ、その上面からは、須恵器が出土している。4層は、3次埋葬に伴う埋土として考えられ、その上層の4a層は、腐食の著しいもので黒色を呈している。なお、掘削面は、それまでの埋土の大部分を削り、玄門部付近の床面まで埋土を除去している。5層は、粘質で固くしまる層で、2次掘削時に伴う埋土である。6層は、地山礫を含む層であり、初葬時に伴う埋土と考えられるものである。

以上の土層観察結果から、最低4回以上の埋葬行為が存在していたものと推測される。

遺物出土状況（第129、130図）　墓道からは、最終掘削に伴う作業面（3c・d層上面）から蓋1点、坏1点、瓹の頸部片が出土している。蓋坏は、完形に近いものであるが、最終埋葬時の儀礼行為等に使用されたものかどうかは不明である。

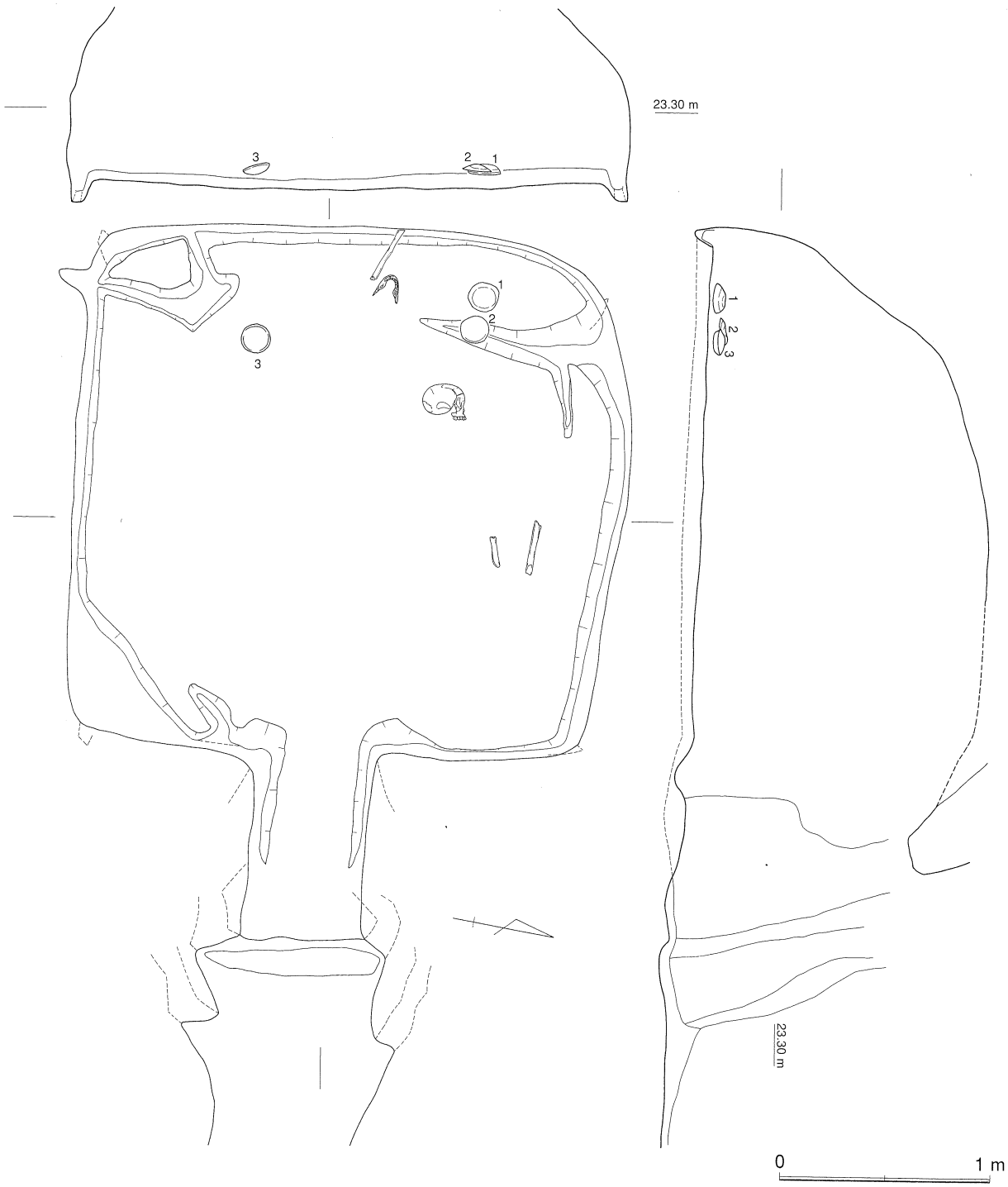
一方、玄室内からは、奥壁側から蓋坏3点と頭蓋骨が、左壁沿いから長管骨が出土している。頭蓋骨は、下顎骨と離れた位置から出土していることから、現位置を保っているものはないものと考えられる。また、鉄鏃は玄室内の流入土除去作業中に出土し、現位置は明らかにできなかった。全体的に遺物は少なく、かなりのものが外に運びだされている可能性が高い。



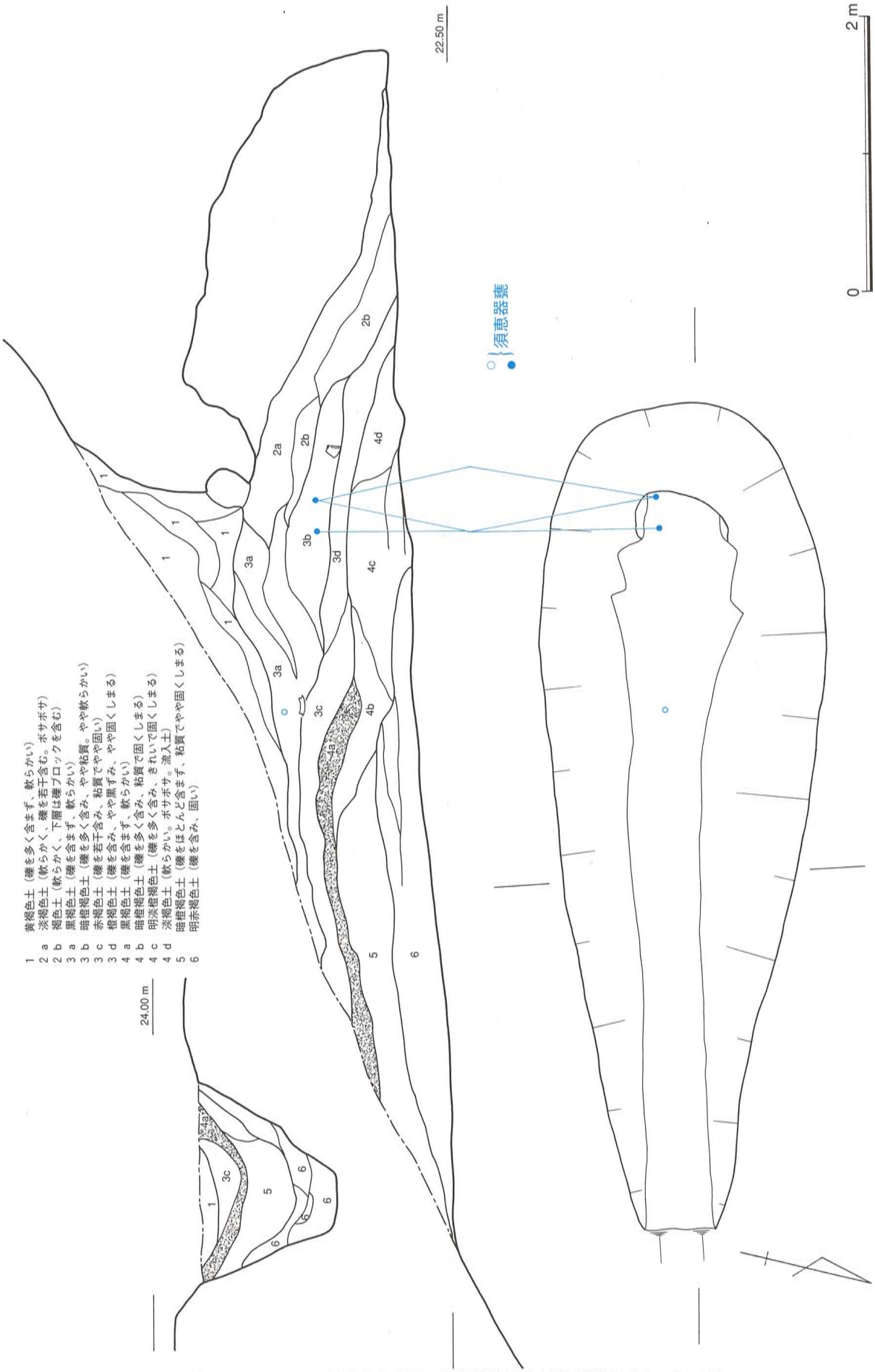
第128図　4区10号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

出土遺物（第131、132図）　玄室内及び墓道出土の蓋（1 ～ 5）は、扁平である点共通し、削りも天井部の中心から削り、丁寧である。坏身も類似しており、大谷分類でいうと5点ともA 4型として捉えることができる。一方、墓道出土の瑟（6）は、頸部に文様を欠く特徴から、大谷分類のA 5型～A 6型と考えられるものである。

鉄鏃（第131図 1 ～ 3）は、3個体が錆により固まった状態で出土し、3個体とも型式の異なるものである。2は鏃身関部が逆刺をなし、棘箆披のもので形式的には、類例の少ないものである。1は長三角形の鏃身のもので、3は柳葉の長頚鏃と考えられるものである。

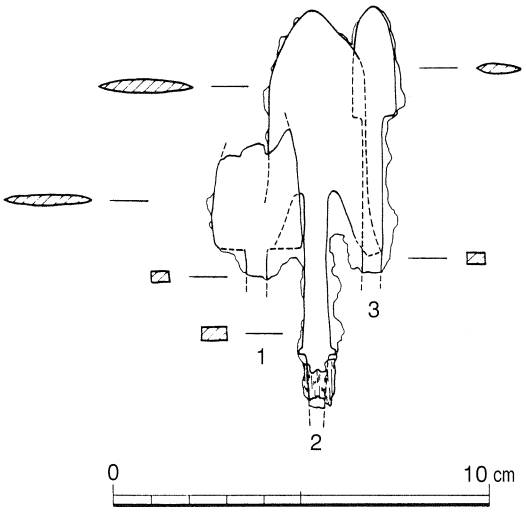


第129図　4区10号横穴墓玄室内人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）

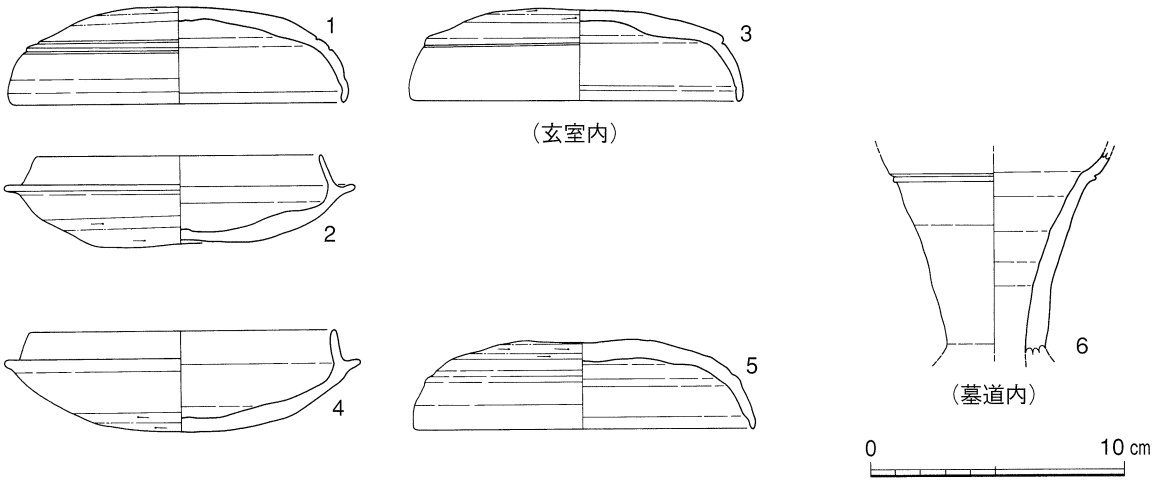


第130図　4区10号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）

時　　期　玄室内から出土している須恵器の様相より築造は、大谷 4 期と考えられ、埋葬は 4 期の中でおさまるものと推定される。ただし、墓道出土の碧の捉えかたによっては、5 期までと考えられる可能性を残している。



第 131 図　4 区 10 号横穴墓玄室内出土鉄鏃実測図（S＝1：2）



第 132 図　4 区 10 号横穴墓出土須恵器実測図（S＝1：3）

[11号横穴墓]

立　　地　南東側に面した斜面に穿たれており、南側の12号、13号横穴墓と3穴で小支群をなしている。標高25ｍの位置に存在し、支群の中では斜面の低い位置に立地する。

墓　　道（第133図）　主軸をＳ－69°－Ｅ方向をとるものである。地山から深いところで1.8m掘削し、全長は、5.1mである。前端部床面の幅0.38m、玄門付近の幅0.88mと玄門部側でやや広がる。狭長の墓道を作り出している。

玄　　門（第133図）　墓道中央に穿たれ、閉塞用の刳込をもつものである。奥行き1.1m、幅は刳込側で0.5m、玄室側で0.76mを測り、玄室側にやや広がる。高さは0.8mを測り、横断面長方形である。閉塞用の刳込（閉塞部）は、床面に幅14㎝、長さ80㎝、深さ6㎝の溝が掘られている。奥行きは18㎝、幅0.82m、高さ0.98mを測り、玄門部より一段天井が高い。天井部は平坦で、玄室側に向かって高くなるもので、横断面は長方形を呈す。

閉　　塞（第134図）　閉塞石として割石が玄門閉塞部から出土している。石は5点出土し、床面から48㎝のところで積み上げられていた。ちょうど玄門部の上半部分を覆う形で検出された。初葬時の閉塞ではなく、最終埋葬時の閉塞に伴うものと考えられる。

玄　　室（第133図）　平面形は、縦長の長方形を呈すものである。奥行き1.92m、幅1.53mを測る。また、前壁側の右袖で25㎝、左袖で38㎝測り、左袖が広く、右袖はほとんど丸く側壁に連なる。左側からは人骨が検出されていることから、築造当初から埋葬位置を意識して幅広に作られていたのかもしれない。一方、立面形をみると、奥壁垂直に立ち上がった後に丸く仕上げられ、横断でも左右対称に丸く仕上げられている。各壁の界線は、床面から50㎝程まで明瞭であるが、それ以上の部分は不明瞭である。高さは、1.05㎝を測る。また、床面には、幅8㎝、深さ4㎝程の溝が四壁に沿って廻っている。

埋土堆積状況（第135図）　土層は、大きく見て、4層群に分けることができた。1層は礫を含まないやわらかい層であり、流土と考えられるものである。2層は、礫を含む層で、上層の2a層は、腐食が著しく、黒色を呈すものである。最終埋葬時に伴う埋土と考えられ、その埋葬面上（3層上面）には、閉塞石が積み上げられている。3層も礫を多く含む層であり、上層の3a層はや腐食し、褐色を呈す部分がみられる。最終埋葬時の掘削により、大部分は削られている。4層は小礫を含む層で、玄室内に埋土が2次的に流れ込んだものと考えられる。

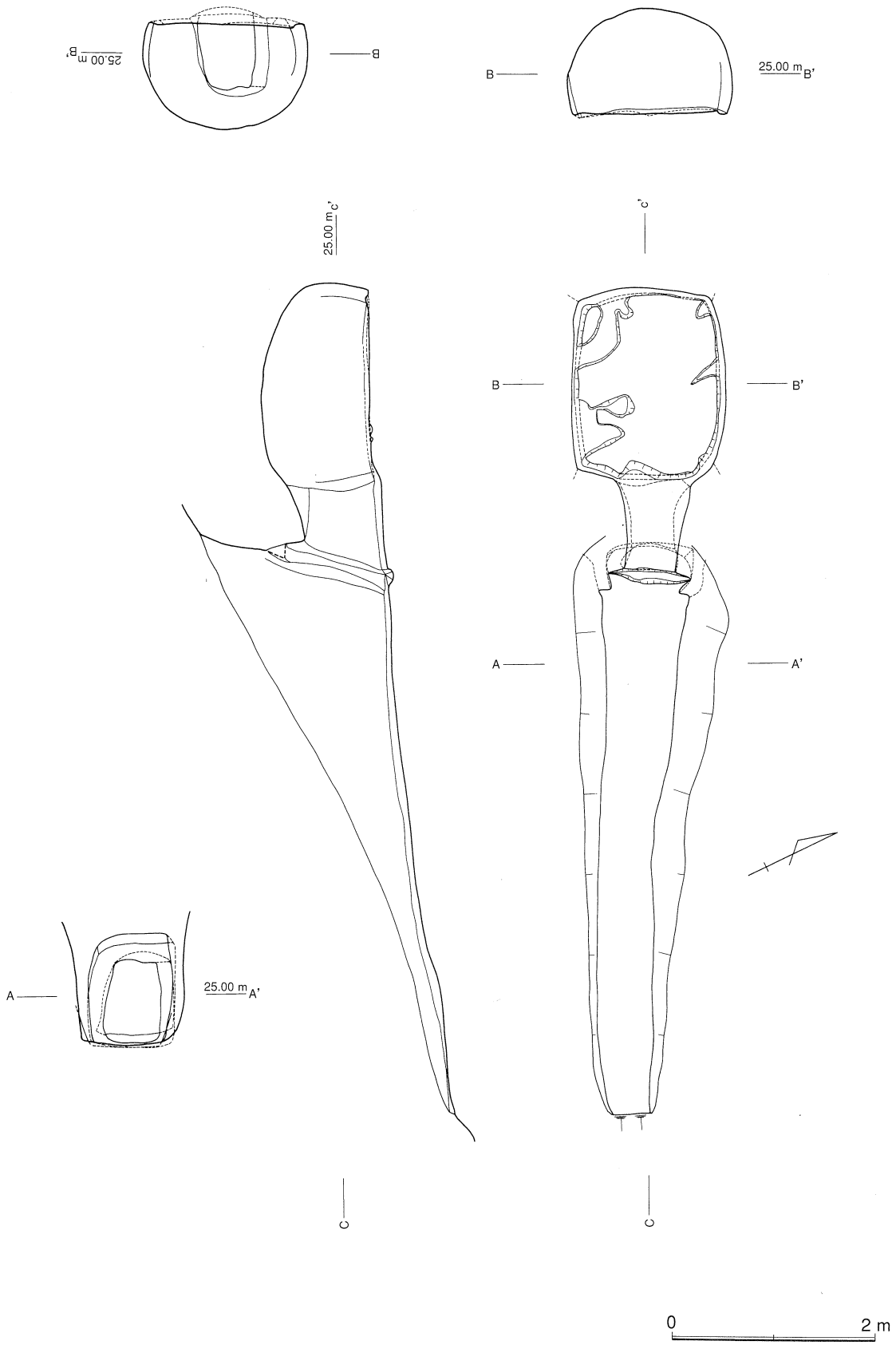
以上の観察結果より、最低2回以上の墓道の掘削が行われていたものと解釈でき、閉塞石は、最終埋葬時に伴うものである。

遺物出土状況（第134、135図）　墓道からは、2a層の黒色土より須恵器甕片が出土している。ほぼ全面にわたり出土し、破砕されたものが散布されたものと考えられる。この甕片が散布された時期は、最終埋葬終了時に墓道が埋め戻された後と考えられる。

玄室内では人骨1体を検出し、それは、左壁に平行して埋葬されたままの状態であった。遺存状況は良くないが、人骨は頭位を玄門側に向けているものである。

遺物は、須恵器8点、鉄鏃3点、刀子2点、土玉19点、メノウ製丸玉1点が出土している。遺物は左壁側の人骨の頭部周辺のものと、右奥コーナー付近から出土するものとの2つの群に分かれる。

人骨周辺の一群は、蓋坏と、玉類、刀子である。蓋坏はそれぞれ伏せられた状態であり、頭部付近から出土しているものは、枕として用いられた可能性がある。なお、玉類はフルイによって出土したものである。よって、厳密な位置は押さえられなかったが、人骨の頭部付近の精査中に出土したもの

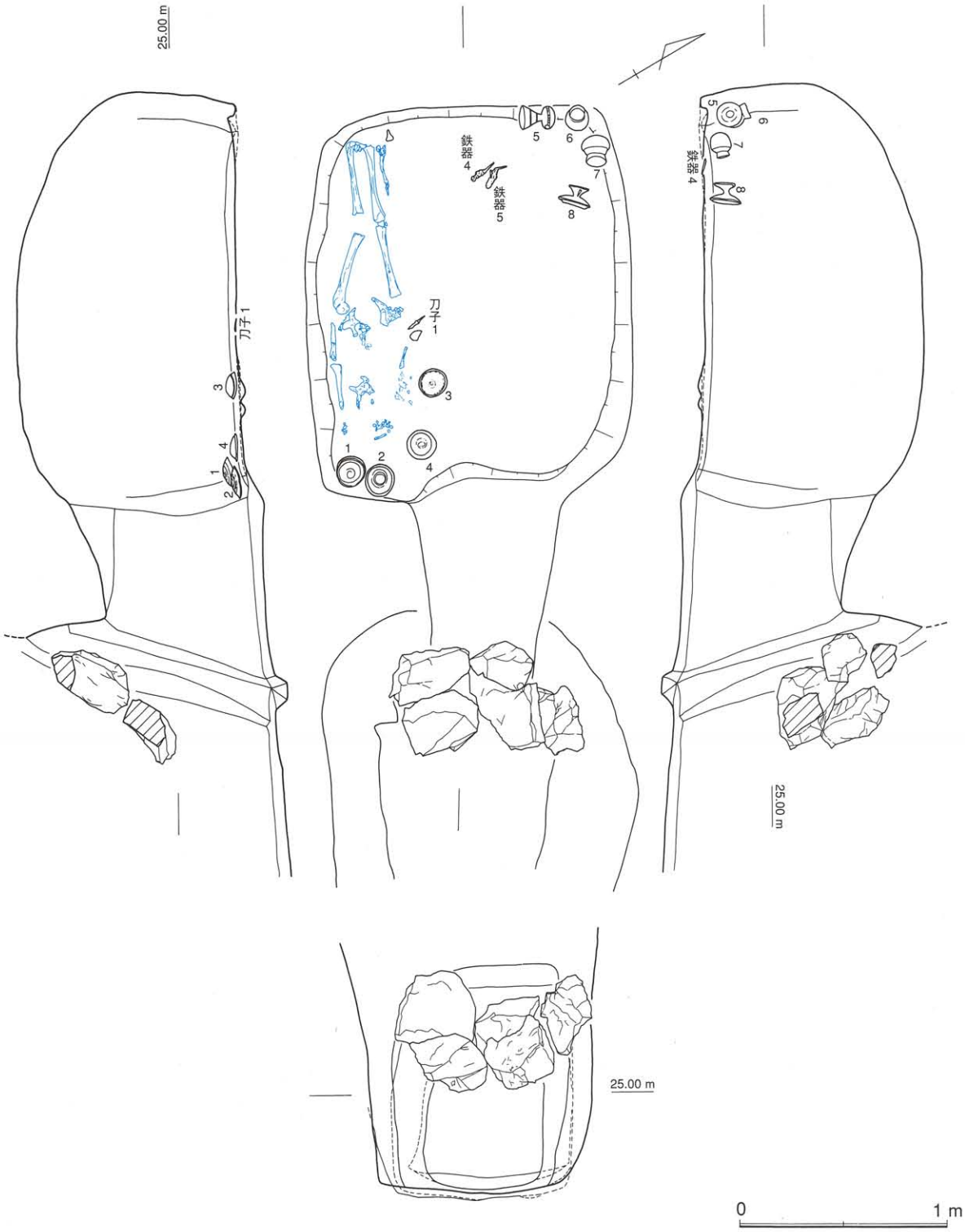


第133図　4区11号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

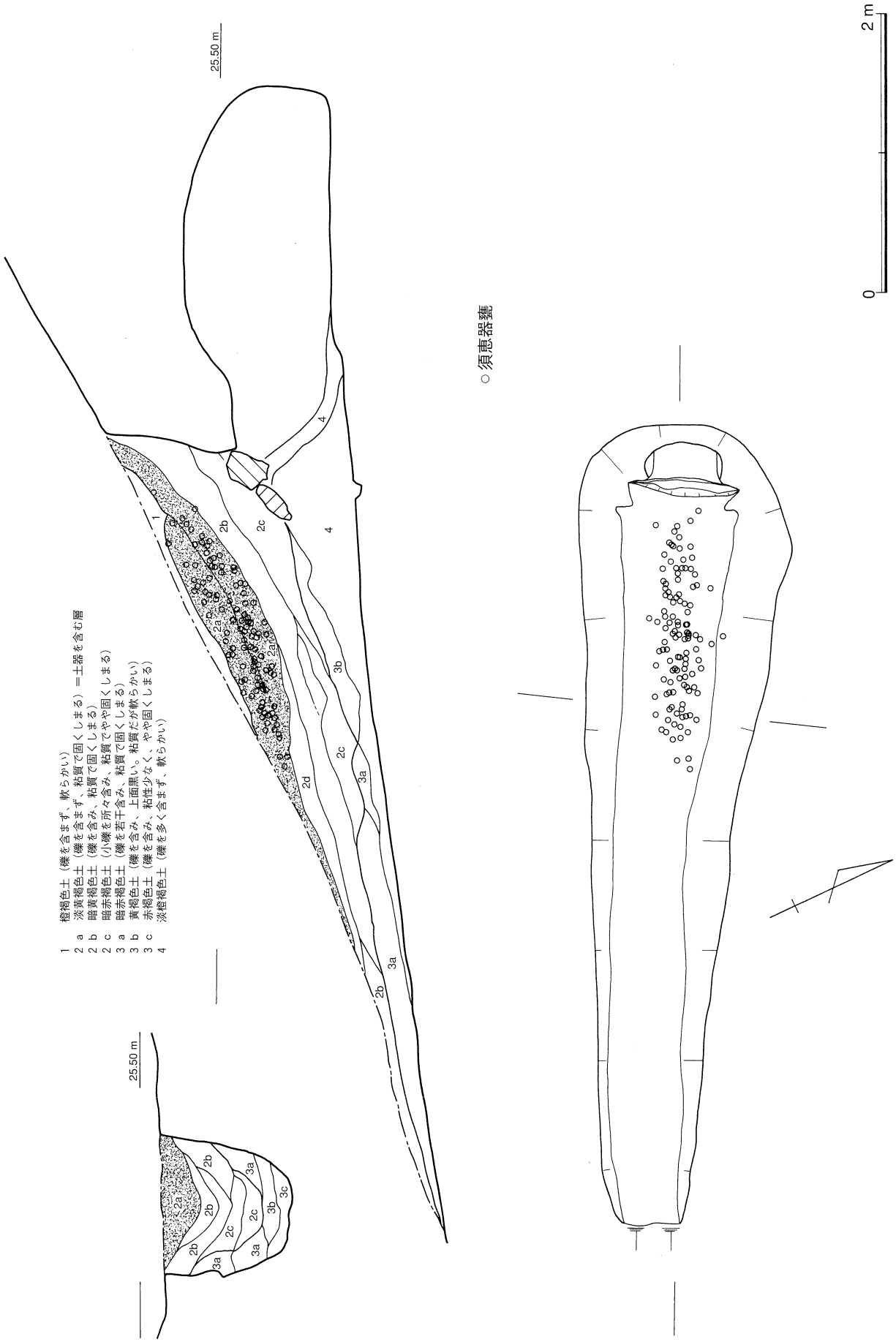
であることから、本来は遺体の首から胸元にかけての位置にあったものと考えられる。

一方、右奥コーナーのものは蓋坏以外の器種と鉄鏃である。人骨周辺から出土したものと同一埋葬時期のものであると考えた場合には、須恵器の器種によって副葬の位置が異なっていた可能性もある。

さて、玄室内の右側にも埋葬可能なスペースが存在しており、本来埋葬されていたものとも考えられる。しかし、調査では１体のみ検出し右側からはその痕跡すら伺えなかった。また、玄室内への土



第134図　4区11号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）



第135図　4区11号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）

砂の流入はほとんどないことから、埋葬された場合には、人骨が検出されるものと考えられる。結論として、埋葬人員は、1体とここでは考えておきたい。ただし、墓道の土層観察では、2回の掘削が認められており、埋葬行為とは異なる儀礼行為がおこなわれていたのかもしれない。

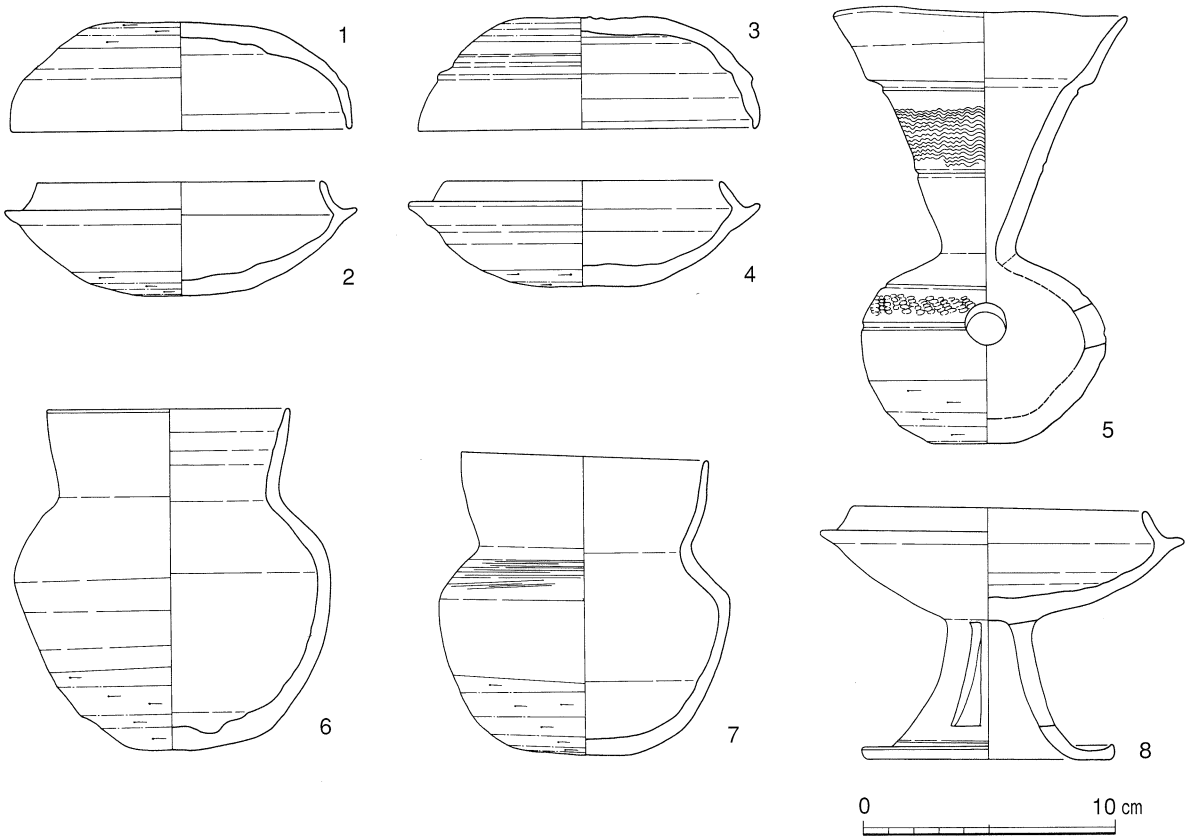
出土遺物（第136、137図）　出土須恵器の蓋坏は、少数であるが、2つに細分可能である。1類（1、2）は、淡灰色で、焼成の甘いもので削りが丁寧に施されている。一方、2類（3、4）は、茶褐色で1類に比し、削りがやや粗く、坏身の立ち上がりが低いものである。両者とも径は13.5㎝前後であるが1類の方が古相を呈す。また、それぞれは、型式的には大谷A 4型に属するものであるが、細かい特徴から時期差をみてとることも考えられるが、出土点数が少数であるため厳密な点については不明である。

瑗（5）は、体部の中に穿孔時の粘土が入り込んだまま焼かれたものである。その中に残ったものを観察すると管状のもので穿孔していることが確認できたものである。

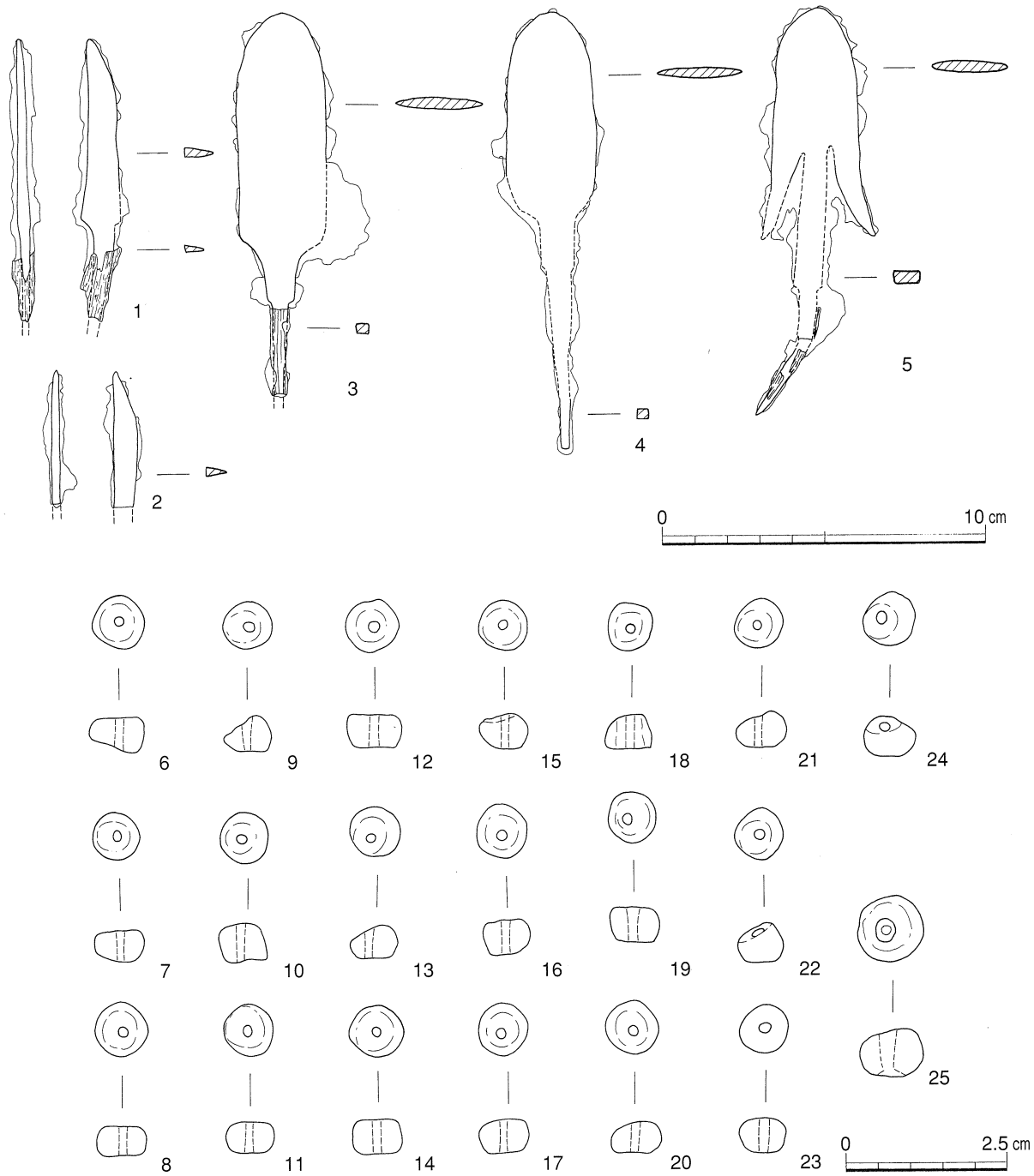
有蓋高坏（8）は、1段3方透しで大谷分類のD型と考えられるものである。大谷の編年観によれば有蓋高坏は蓋坏のA 3型と共伴するものと考えられていたが、本横穴墓の資料を見る限りでは、A 4型の蓋坏とも共伴している可能性が指摘されるものである。

玉類は、土玉（第137図6～24）とめのう製の丸玉が出土している。おそらく、セットで装身具として使用されたものと推定できるものである。土玉は、灰白色を呈し、焼かれたもので、管状になっていたものを切り離して作っているものと考えられる。

時　　期　玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷4期と考えられ、埋葬は4期の中で終了しているものと推定される。



第136図　4区11号横穴墓玄室内出土須恵器実測図（S＝1：3）



第137図　4区11号横穴墓玄室内出土鉄器・玉類実測図（S＝1：2、1：1）

[12号横穴墓]

立　　地　11号横穴墓と12号横穴墓の間に位置し、標高25mの位置に存在している。

墓　　道（第138図）　主軸をS－63°－E方向をとるものである。地山から深いところで1.85m掘削し全長5.3mを測る。床面の幅は、前端部で0.43m、玄門刳込部で1.0mを測り、玄門部付近で広がる。床面は玄門方向に向かって緩やかに高くなっており、比高差は0.75mである。また、墓道の途中で段状に幅8～10㎝程の平坦面が長さ1.7mにわたって存在する。これは、土層観察等によって、追葬により2次的に削られた結果であることが分かっている。全体的に狭長な墓道を作り出している。

玄　　門（第138図）　幅0.65m、奥行き1.0mを測り、天井部は崩落のため失われているが、推定で0.65mと考えられる。断面は、馬蹄形呈す。また、閉塞用の刳込が設けられており、床面には幅10～15㎝、深さ12㎝程の溝が掘られている。規模は、幅82㎝、高さ102㎝、奥行き15㎝で、断面は不明である。

閉　　塞（第139図）　閉塞部の床面直上より、割石が出土している。上半部は、追葬等により失われており、下半部のみが残っていた。閉塞石は、幅90㎝の大形のものを2段に積み上げ、その周囲を小型の石が覆っていた。

玄　　室（第138図）　平面形は、正方形に近い形を呈し、奥行き2.02m、幅は奥壁で2.05m、前壁で1.85mを測り、やや奥壁の方が幅広である。床面には、四壁沿いと中央に溝が廻るが、地山が軟弱であることから遺存状況は、良くない。四壁に沿って掘られた溝は幅8～10㎝、深さ4㎝程を測る。そして、中央の溝は中軸線に沿って掘られ、深さ3㎝、幅20㎝を測る。以上の溝により、玄室内に左右の屍床が作られている形になる。

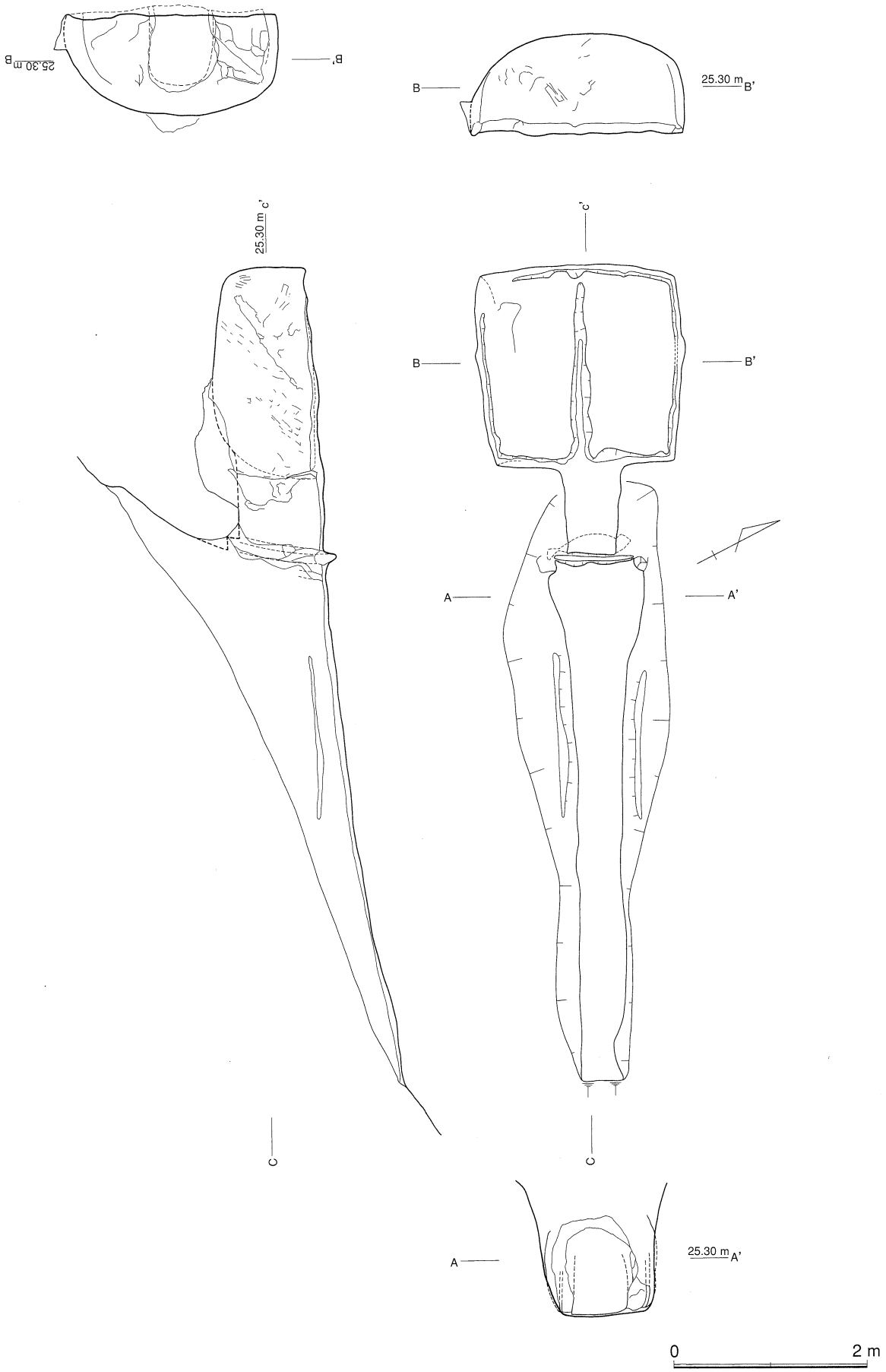
一方、立面形は縦断では、奥壁は垂直に立ち上がった後に丸く仕上げられ、天井部はほぼ同じ高さである。横断面も同様に丸く仕上げられている。天井までの高さは、1.04mである。

埋土堆積状況（第140図）　土層は、大きく見て、6層群に分けることができた。1層は礫を含まないやわらかい層であり、流土と考えられるものである。2層は、礫を若干含む層で、上層の方は、やや腐食し黒ずむ。最終埋葬時後の土層と考えられるが、人為的な埋土として捉えるには、上層の1層に類似しており、流土として考えた方が妥当であると推定した。3層は礫を多く含む層であり、上層の3a層は腐食が著しく、黒色を呈す。この層は第4次埋葬時の埋土と考えられ、最終掘削時に玄門部分側は削られている。4層は小礫を含む層で、第3次埋葬時の埋土と考えられる。また、この埋葬面（6層上面）は、閉塞石の上面に対応していることから、閉塞石の上半部が除去されたのは、この段階と考えられる。5層は、横断土層のみで確認された層で、殆どが第3次の埋葬により削られている。またこの埋葬面（横断の6層上面）は、墓道の2次的な加工段に対応しており、この段階で前庭部の壁を若干削りこんでいるものと推測される。6層は、初葬埋土として考えられるものである。

以上の観察結果より、最低5回以上の墓道の掘削が行われていたものと解釈でき、また、最終掘削時には、埋め戻しが行われていない可能性が考えられる。

遺物出土状況（第139、140図）　墓道では、3a層（黒色土）から須恵器甕片が出土している。おそらく第4次埋葬時の埋め戻し後に散布されたものである。

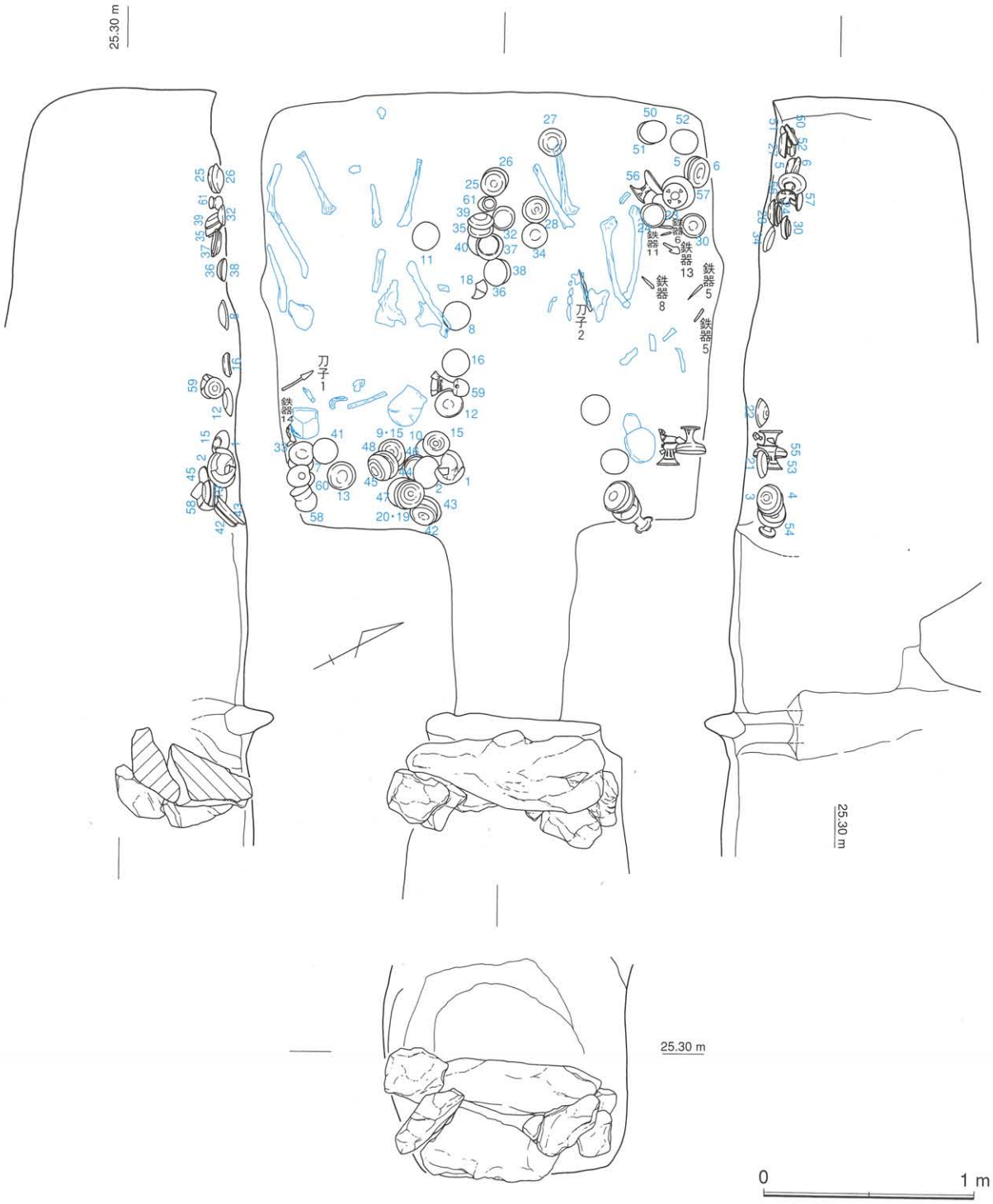
玄室内からは、人骨の頭蓋骨が3つ前壁側から出土している。それぞれ他の部位の人骨の出土状況から側壁に平行して左側に2体、右側に1体は、埋葬されていたものと考えられる。須恵器は62点出土している。これらは、その頭部付近に集中して置かれたものと奥壁の右コーナ部及び中頃付近に置かれていたものとに分かれる。鉄器は、刀子2本、鉄鏃11点出土している。刀子は、左側の人骨付



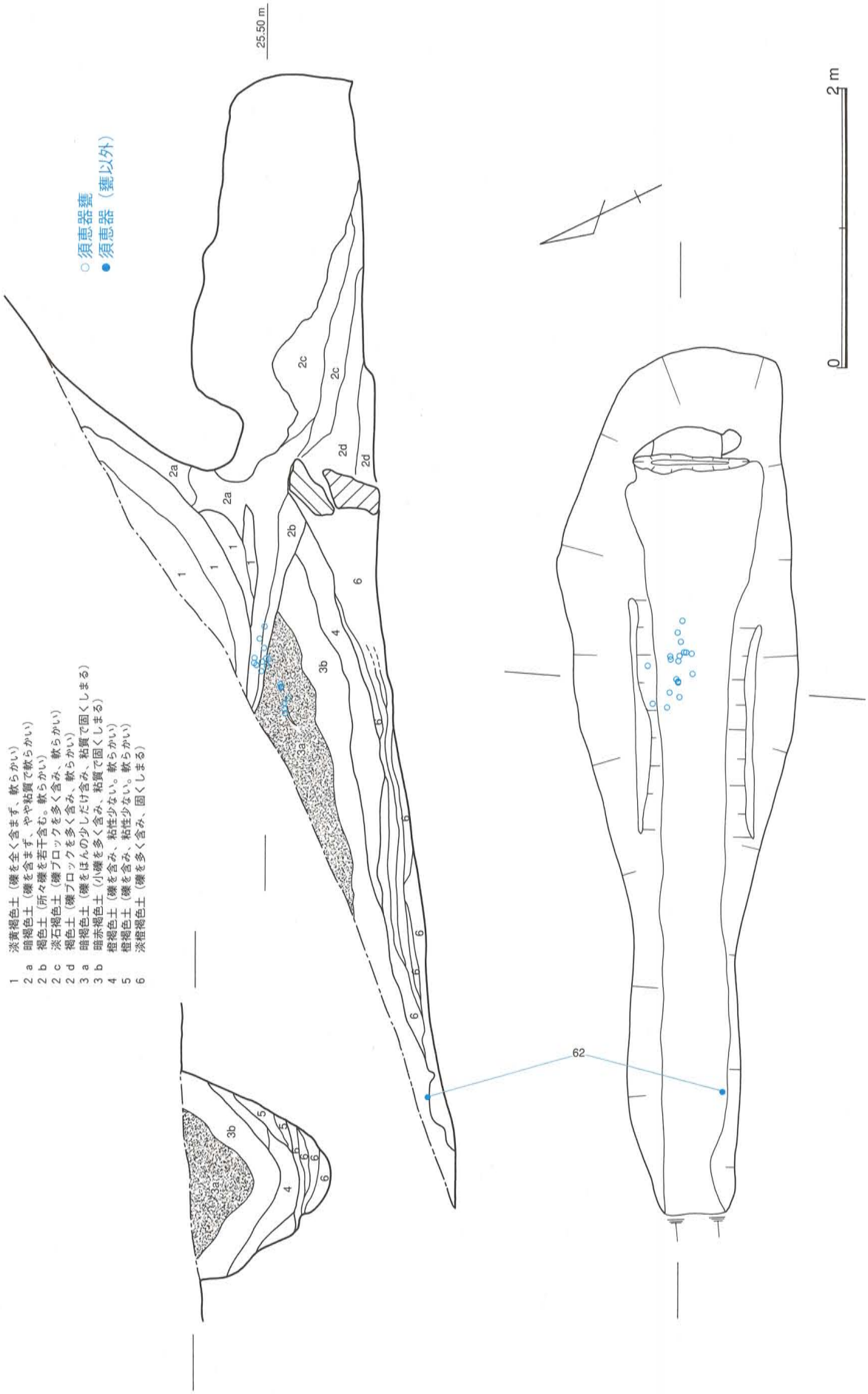
第138図　4区12号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

近からと右側の人骨付近より出土している。鉄鏃は、主に右壁側から出土している。

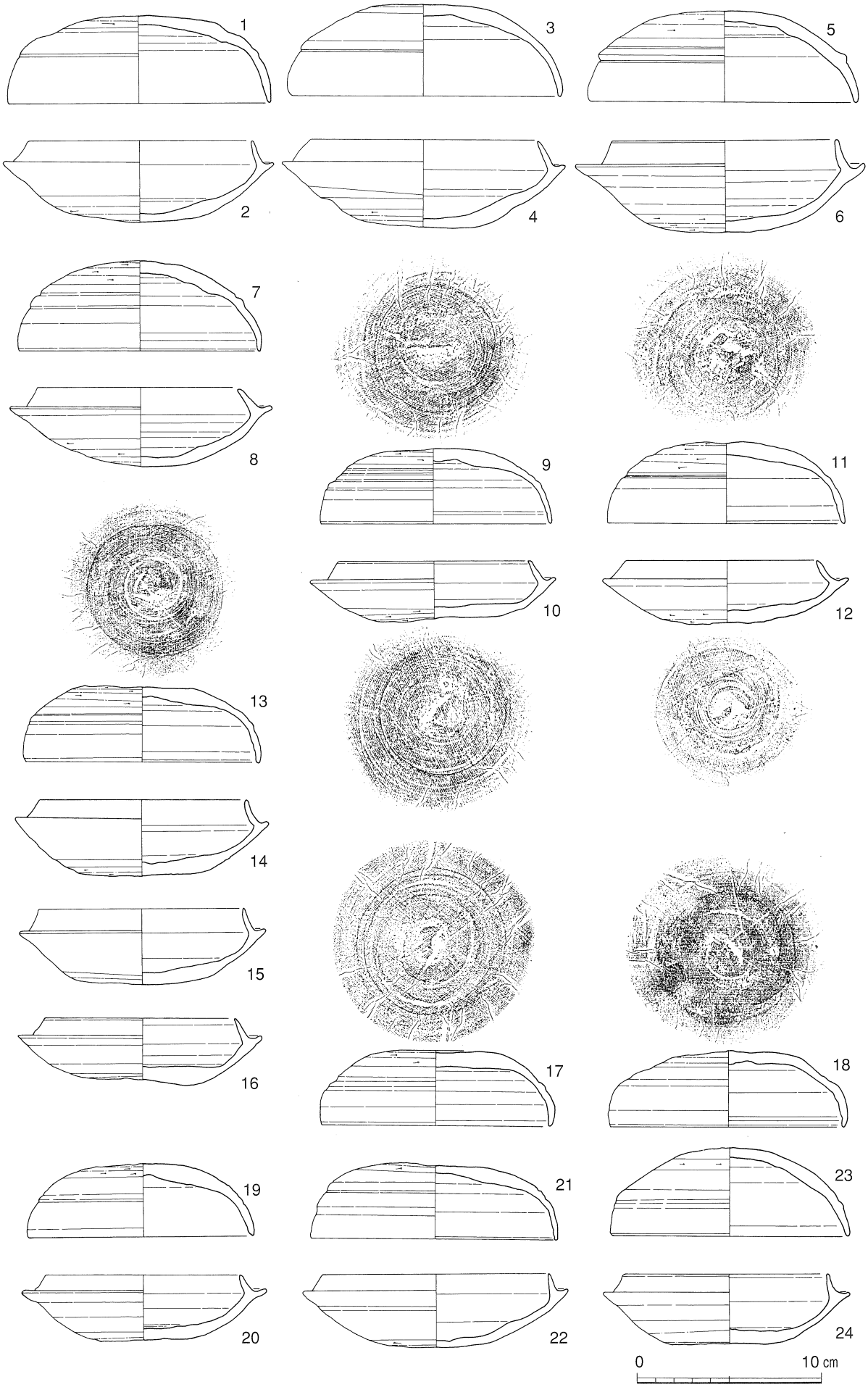
出土遺物（第141～143図）　玄室内出土の須恵器蓋坏は、胎土と色調から6つに分類した。1類は焼成の甘いもので、殆ど土師器に近く、蓋の径が14㎝と大形のA類（1～6）、と淡白灰色のB類（7、8）がある。2類（9～18）は、砂粒の少ない暗灰色のものである。3類（32～43、50～52）は、砂粒の多い淡灰色を呈すものである。32～39（A類）は蓋の径が12.5㎝とまとまったものである。B類は、その他のもので細分が可能なものである。4類は、自然釉が多くかかるもので、蓋、坏身ともかかるA類（25～31）、坏身に多くかかるB類（19～24）に分けられる。なお、B類は、それぞれセッ



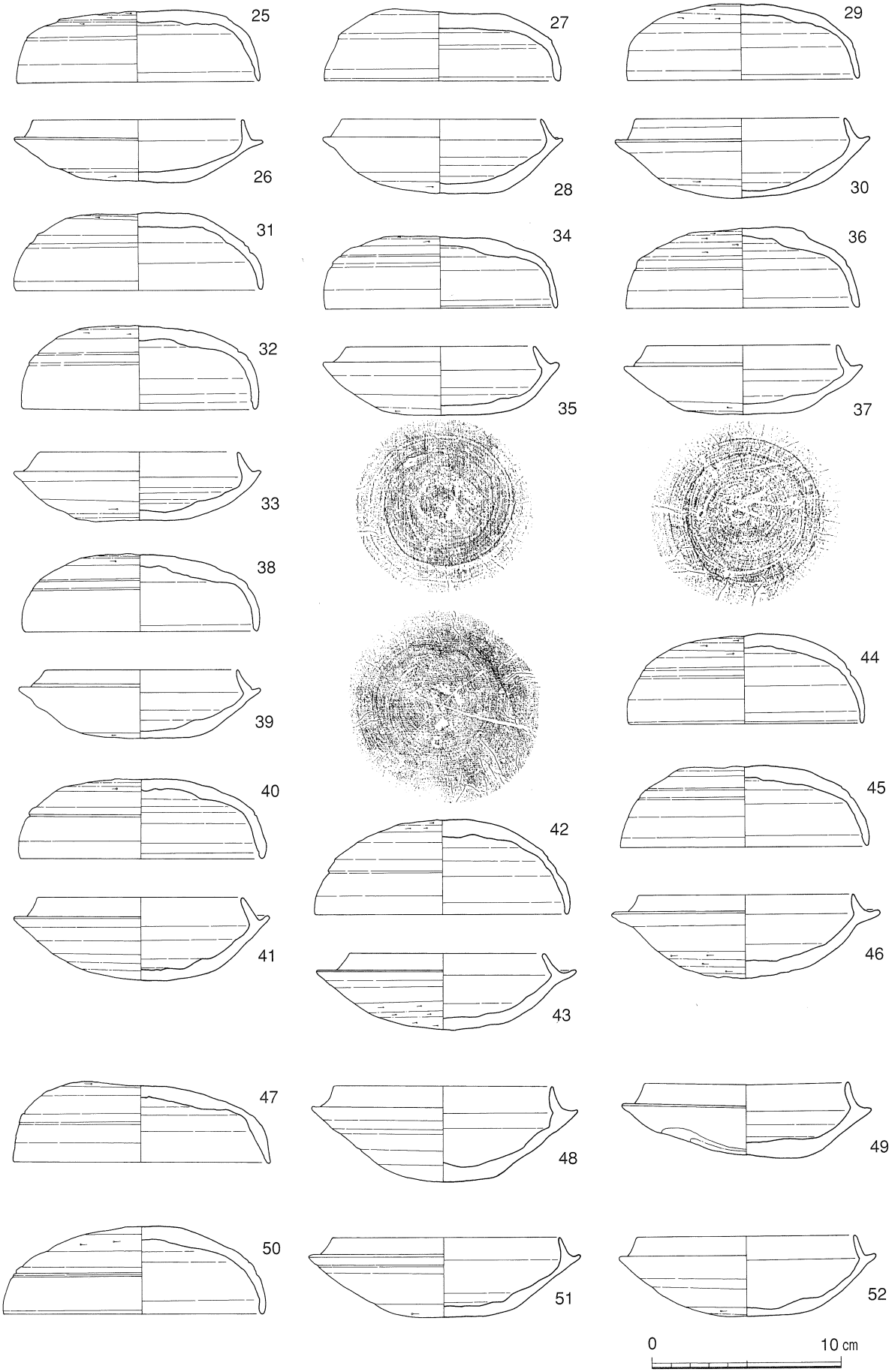
第139図　4区12号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）



第140図　4区12号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）



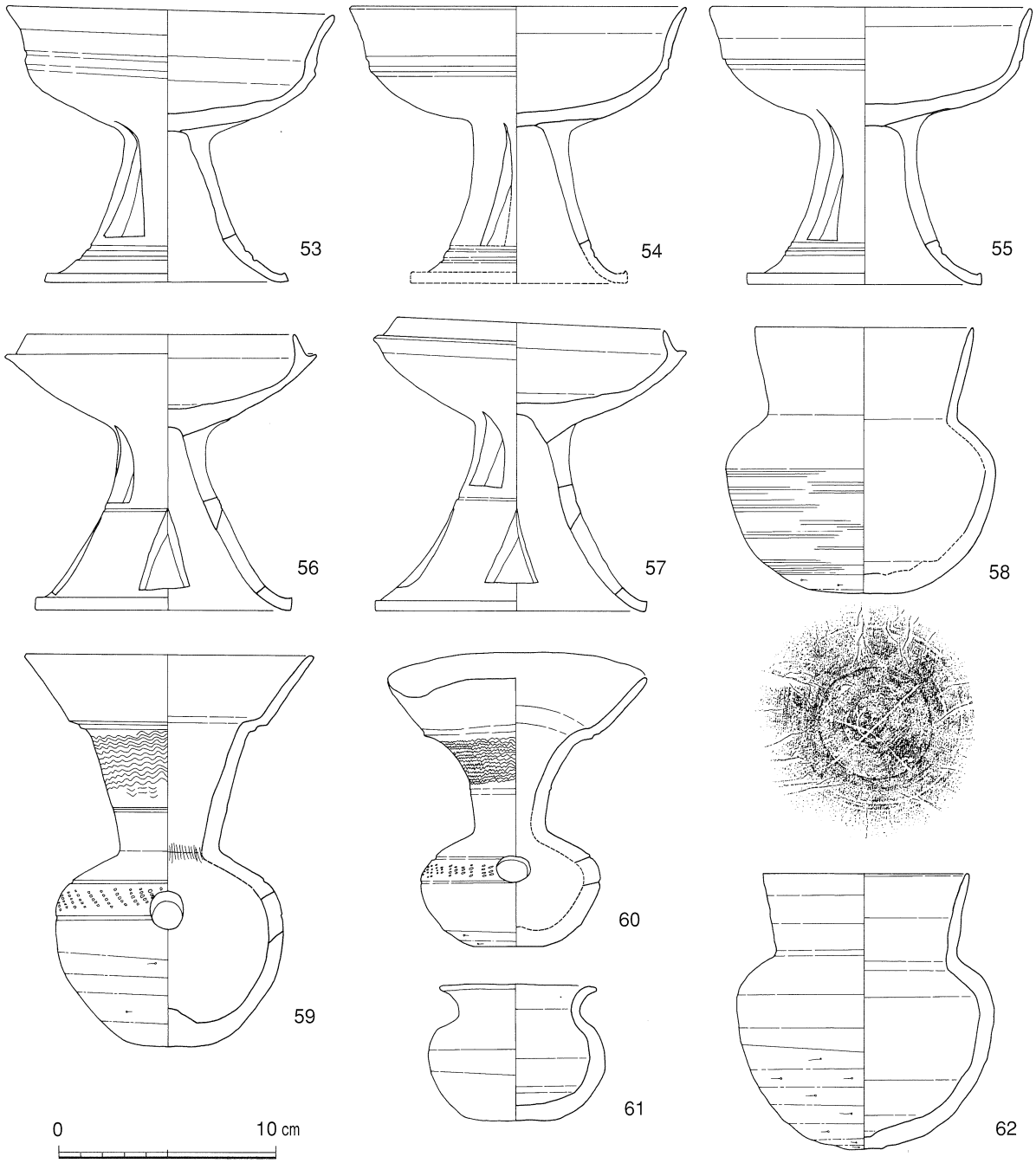
第141図　4区12号横穴墓出土須恵器実測図(1)（S＝1：3）



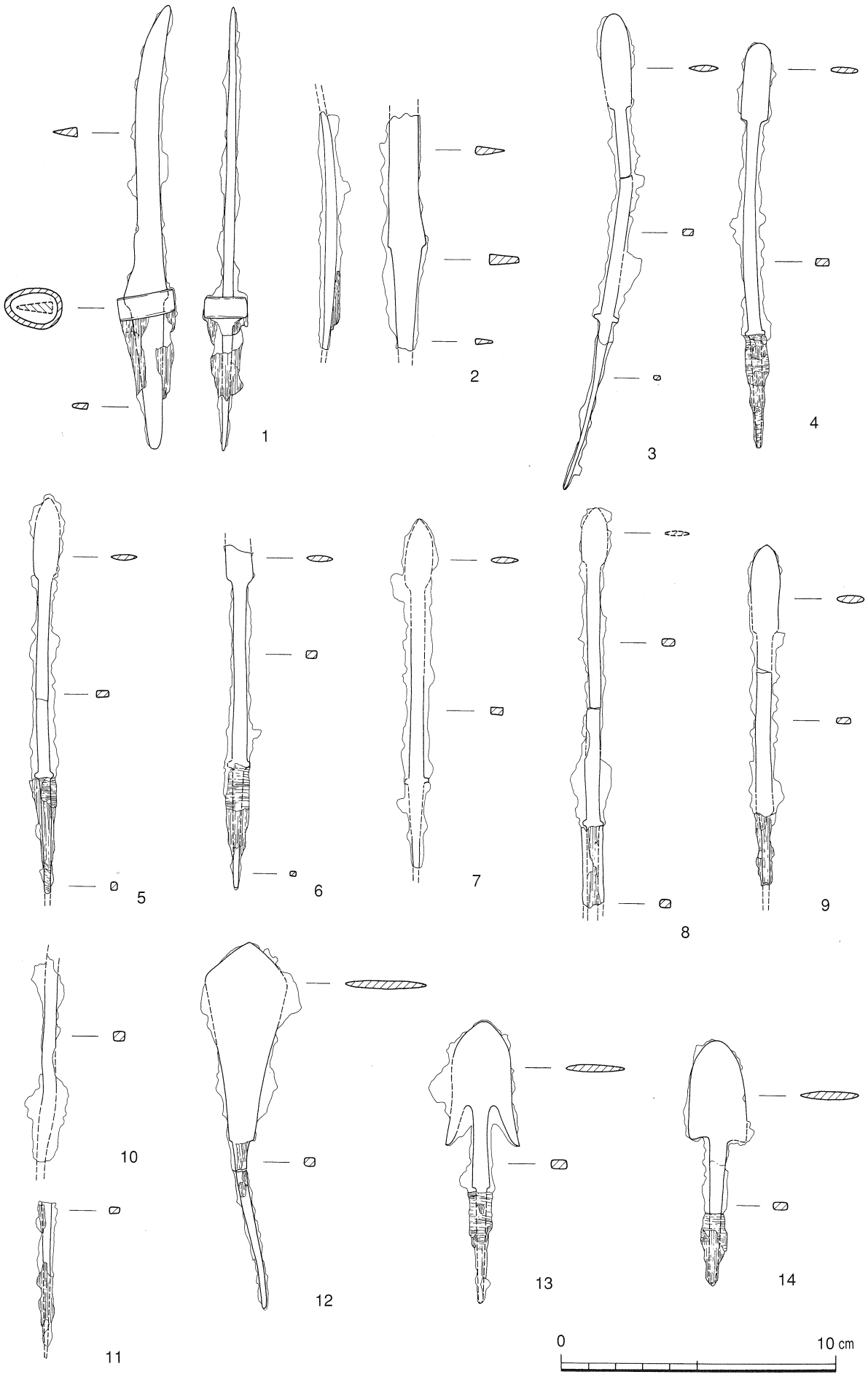
第142図　4区12号横穴墓出土須恵器実測図(2)（S＝1：3）

トごとに細分できるものである。5類（44～46）は、青灰色を呈すものである。6類（47～49）は、釉が厚く、胎土の鉱物が焼成時に破裂しているものである。以上の各分類と大谷編年との対応は、A3～A4型に対応するものと考えられる。また、それぞれの新古関係については、明確にするのは、困難である。ただし、1A類が径と削りの範囲等で、最も古相に属するものと考えられ、蓋の端部に沈線等が施されていない点について問題がのこるが大谷のA3型と考えて良いものと考えられる。

それぞれの出土状況をみると、1A類は右側と左側の主軸沿いの群に含まれ、2類は左側から出土し、3A類は、主軸沿いにみられる。4A類は、右側に多く出土し、5、6類は左側前壁付近で見られる。全体的に見て、各類型が特定の出土位置にまとまったものがないので、ある程度、追葬等の時



第143図　4区12号横穴墓出土須恵器実測図(3)（S＝1：3）



第144図　4区12号横穴墓出土鉄器実測図（S＝1：2）

に動かされている可能性が考えられる。

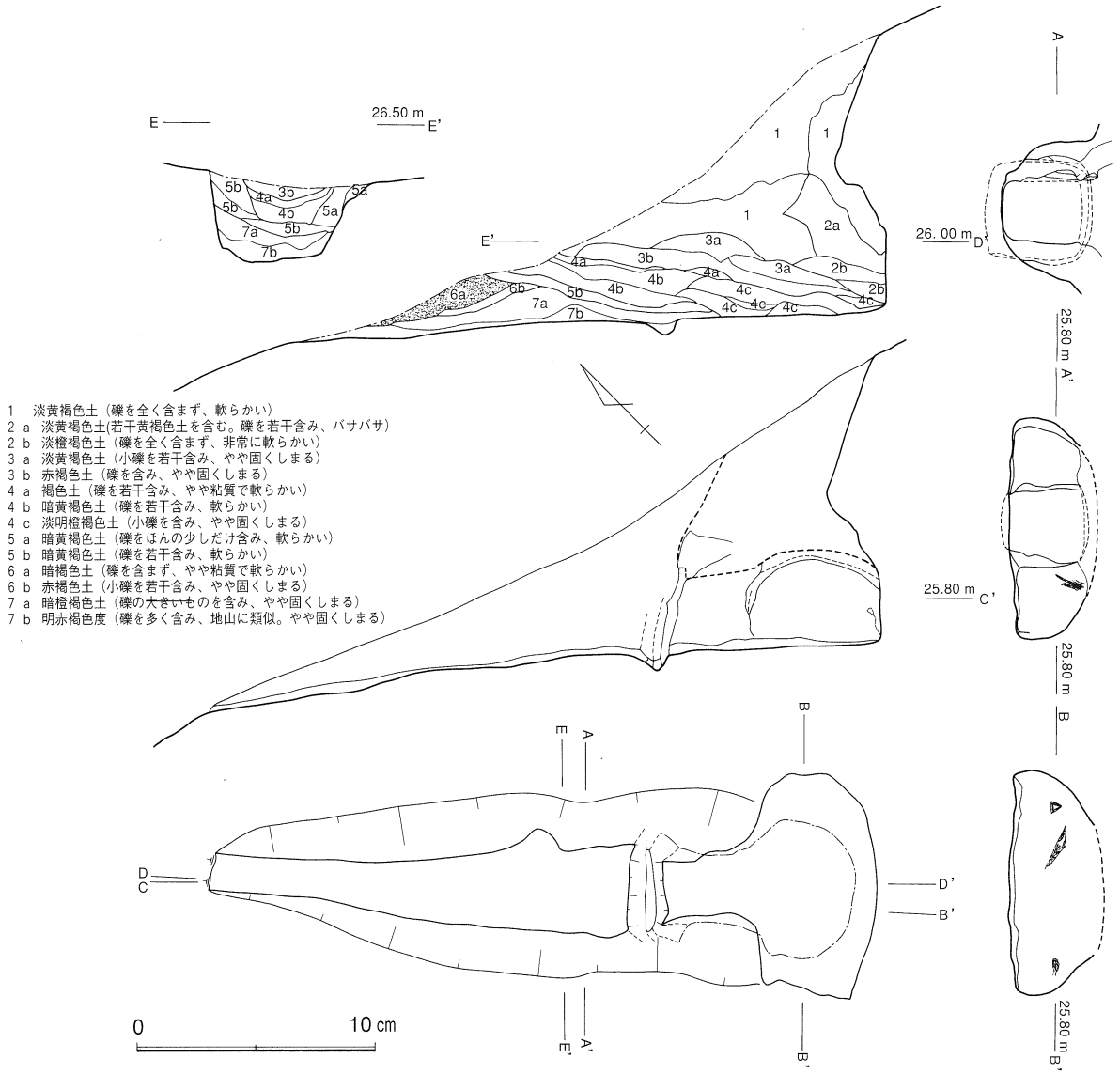
埋葬順序　古相の蓋坏と高坏が出土する右側が先葬で、左側は中央部の蓋坏がやや古相であるので、これが 2 番目と考えられ、その後に左壁沿いのものが埋葬されたものと推定される。

時　　期　玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷 3 期と考えられ、埋葬は 4 期の中で終了しているものと推定される。

[13 号横穴墓]

立　　地　南東側に面した斜面に穿たれており、標高26mの位置に存在し、北側の11号、12号横穴墓よりやや高い位置に立地している。また、玄室及び玄門部の天井は、崩落によって失われている。

墓　　道（第145図）　主軸をＳ－44°－Ｅ方向をとるものである。地山から深いところで1.3m掘削し、全長は、3.8mである。前端部床面の幅0.30m、玄門付近の幅0.71㎝と玄門部に向かって徐々に広がる。狭長の墓道を作り出している。



第145図　4区13号横穴墓遺構実測図（Ｓ＝1：60）

玄　　門（第145図）　墓道中央に穿たれ、閉塞用の刳込部をもつものである。奥行き1.08㎝、幅0.45㎝を測り、高さは天井部を失っているため不明確だが、0.53㎝と推定される。また、横断面は方形であった可能性が考えられる。閉塞用の刳込は、床面に幅30㎝、長さ79㎝、深さ13㎝の溝が掘られている。奥行き42㎝、幅0.88m、高さ推定で0.71mを測り、玄門部より一段天井が高かったものと推測される。また、閉塞用の石材等は、出土しなかった。

玄　　室（第145図）　平面形は、他の横穴墓に比し、規模の小さいものである。横長の長方形プランで、各コーナーは丸く明瞭ではない、奥行き1.03m、幅1.8mを測る。一方、立面形をみると、奥壁垂直に立ち上がった後に丸く仕上げられ、横断でも左右対称に丸く仕上げられている。高さは、推定で70㎝を測り、非常に低いものである。

埋土堆積状況（第145図）　土層は、大きく見て、7層群に分けることができた。1層は礫を含まないやわらかい層であり、流土と考えられるものである。2層は、ブロック状の礫を含む層で、天井部の崩落土と考えられる。3層は、最終埋葬後の流入土と考えられるものである。4層は、第4次埋葬に伴う埋土と考えられ上層の4a層は、やや腐食し褐色を呈す。5層は、第3次埋葬時の埋土と考えられ、上層の5a層（横断土層のみで確認）は、腐食している。6層は、第2次埋葬時の埋土と考えられ、上層の6a層は腐食が著しく暗褐色を呈す。7層は、礫を多く含む下層と若干腐食した下層であり、初葬時の埋土と考えられる。

以上の観察結果より、最低5回以上の墓道の掘削が行われていたものと解釈できる。

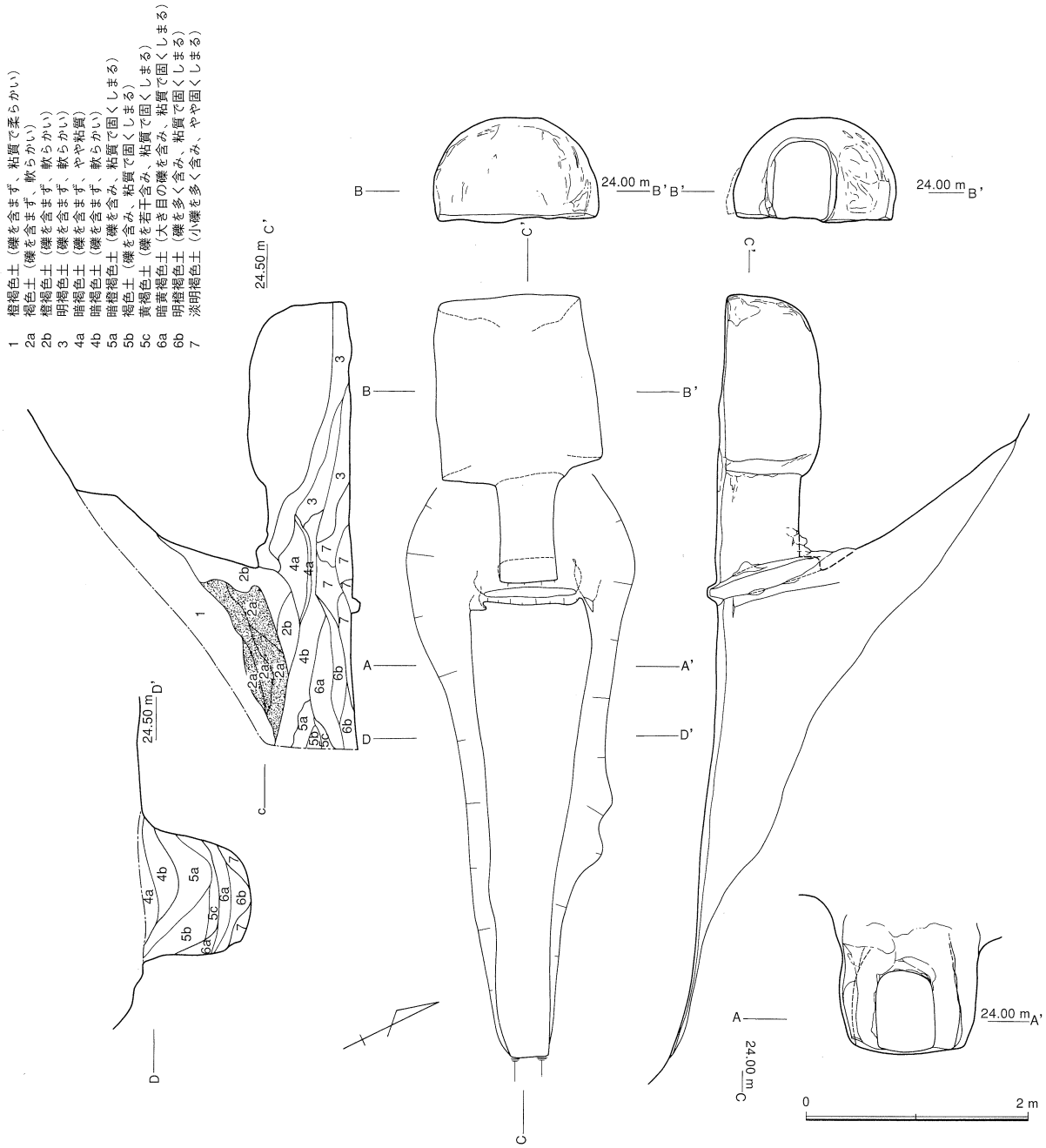
時　　期　出土遺物は皆無であり、時期については不明である。また、玄室が横長のプランであり、小形である点が他の横穴墓と異なっており、注目される。

[14号横穴墓]

立　　地　トレンチ調査によって、確認されていたもので、前庭部の一部を調査していたものである。南東側に面した斜面に穿たれており、南側の15号横穴墓と2穴で小支群をなしている。標高26mの位置に存在している。

墓　　道（第146図）　地山から深いところで1.7m掘削し、全長は、4.1mである。前端部床面の幅0.32m、玄門付近の幅1.05㎝と玄門部側に徐々に広がる。狭長の墓道を作り出している。

玄　　門（第146図）　墓道中央に穿たれ、閉塞用の繰込をもつものである。奥行き1.15m、幅は0.5mを測り、やや奥行の長いものである。高さは0.76mを測り、横断面は長方形に近いが、天井部はやや



第146回　4区14号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

丸みをおび、側壁との界線は明瞭でない。閉塞用の刳込は、床面に幅20㎝、長さ92㎝、深さ8㎝の溝が掘られている。奥行きは23㎝、幅0.89m、高さ0.88mを測り、玄門部より一段天井が高い。正面からは長方形を呈すものと推測される。また、閉塞用の石材等は出土しなかった。

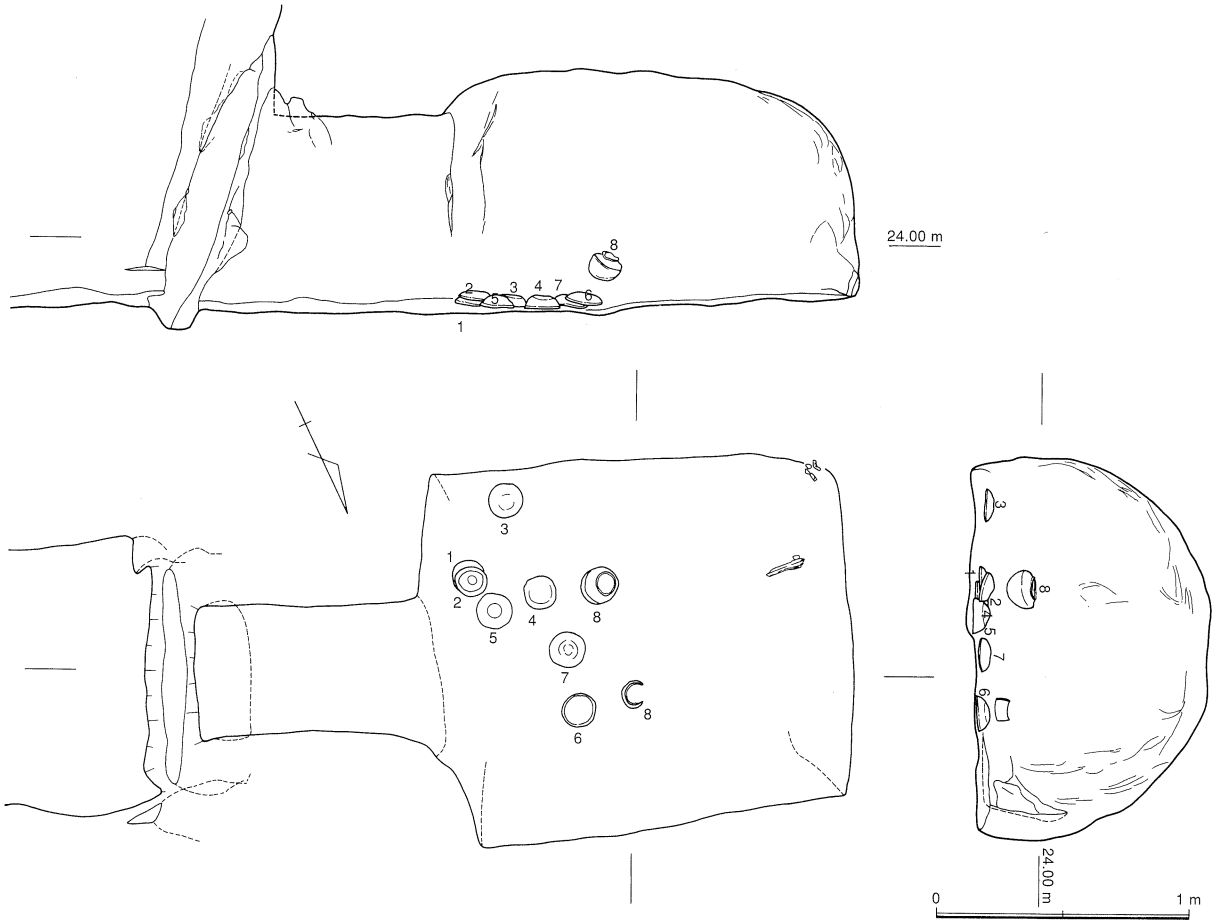
玄　　室（第146図）　主軸は、S－64°－Eをとり、平面形は、やや縦長の長方形であり、奥行き1.70mを測る。幅は、前壁側で1.8m、奥壁側で1.6mを測り、前壁がやや幅広のものである。

一方、立面形をみると、奥壁は垂直に立ち上がった後に丸く仕上げられ、、横断でも左右対称に丸く仕上げられている。各壁の界線は、床面から25㎝程までの高さまで明瞭である。高さは、0.92㎝を測る。

埋土堆積状況（第146図）　土層は、大きく見て、7層群に分けることができた。1層は礫を含まないやわらかい層であり、流土と考えられるものである。2層も地山礫を含まない層で、上層の3a層は、若干腐食し、褐色を呈す。自然堆積によるものと考えられる。3層は、玄室内で認められ、地山礫を含まない層である。玄室内に流入した土砂と考えられる。4層は、最終埋葬時に伴う埋土と考えられる。5層は、礫を含まず、硬く締まる層であり、第3次埋葬時の埋土と考えられる。6層は、大きめの礫を含み硬く締まる層で第2次埋葬時の埋土である。7層は小礫を多く含む層で初葬時の埋土と考えられる。

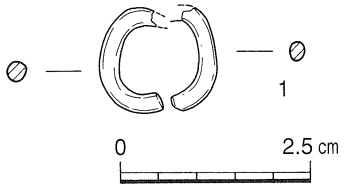
以上の観察結果より、最低4回以上の墓道の掘削が行われていたものと解釈できる。

遺物出土状況（第147、150図）　墓道からは、須恵器の蓋、坏身各1点ずつ出土している。出土層位等については、トレンチ調査時で、確認を怠っており不明である。



第147図　4区14号横穴墓玄室内人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）

玄室内からは、人骨 1 片と須恵器蓋坏 7 点、直口壷 1 点が出土している。また、環状の金属器を玄室内の土砂除去中に検出した。なお、人骨と直口壷は、流入土である 3 層上面から検出し、蓋坏は、床面直上から出土している。また、蓋坏は全て伏せられた状態で中心より前壁側に寄って出土している。埋葬面は、2 面存在する可能性が考えられる。

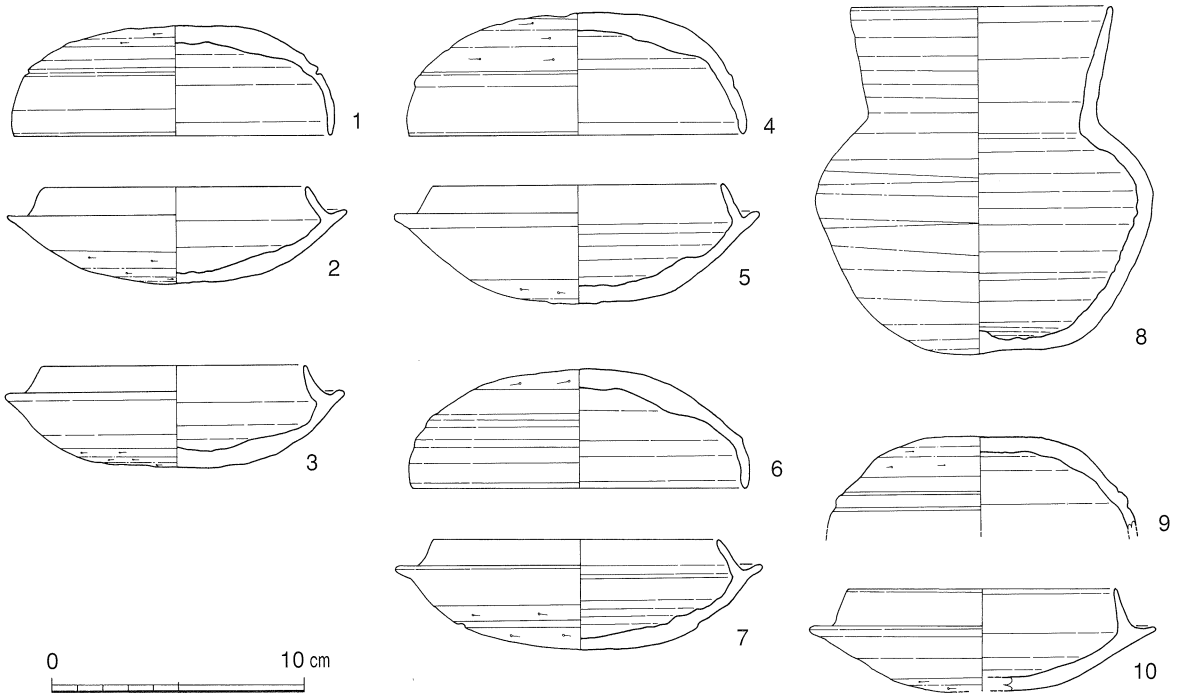


第 148 図　4 区 14 号横穴墓出土金属器実測図（S＝1：2）

出土遺物（第148、149図）　出土須恵器の蓋坏は、少数であるが、2 つに細分可能である。1 類は、胎土に砂粒を多く含み淡灰色を呈し、蓋の径は12.6㎝である。2 類は、内面の色調が暗褐色で、蓋の径が13.3㎝である。どちらとも大谷のＡ 4 型または、Ａ 5 型の範疇に含まれるものである。また、2 者を比較すると、2 類が径が大きく、坏身の立ち上りが高く、削りも丁寧であるので、若干古い可能性がある。なお、出土地点は、1 類が左前壁にまとまり、2 類が前側中央付近にまとまっている。

また、玄室内の流入土から出土した、環状の金属器（148図）は、現状で白色を呈すものである。鉄製のものではなく、性格不明の遺物である。

時　　期　玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷 4 期と考えられ、埋葬は 4 期の中で終了しているものと推定される。ただし、墓道出土の坏身（第149－10）の立ち上がりは高く、3 期にまで遡る可能性も残る。



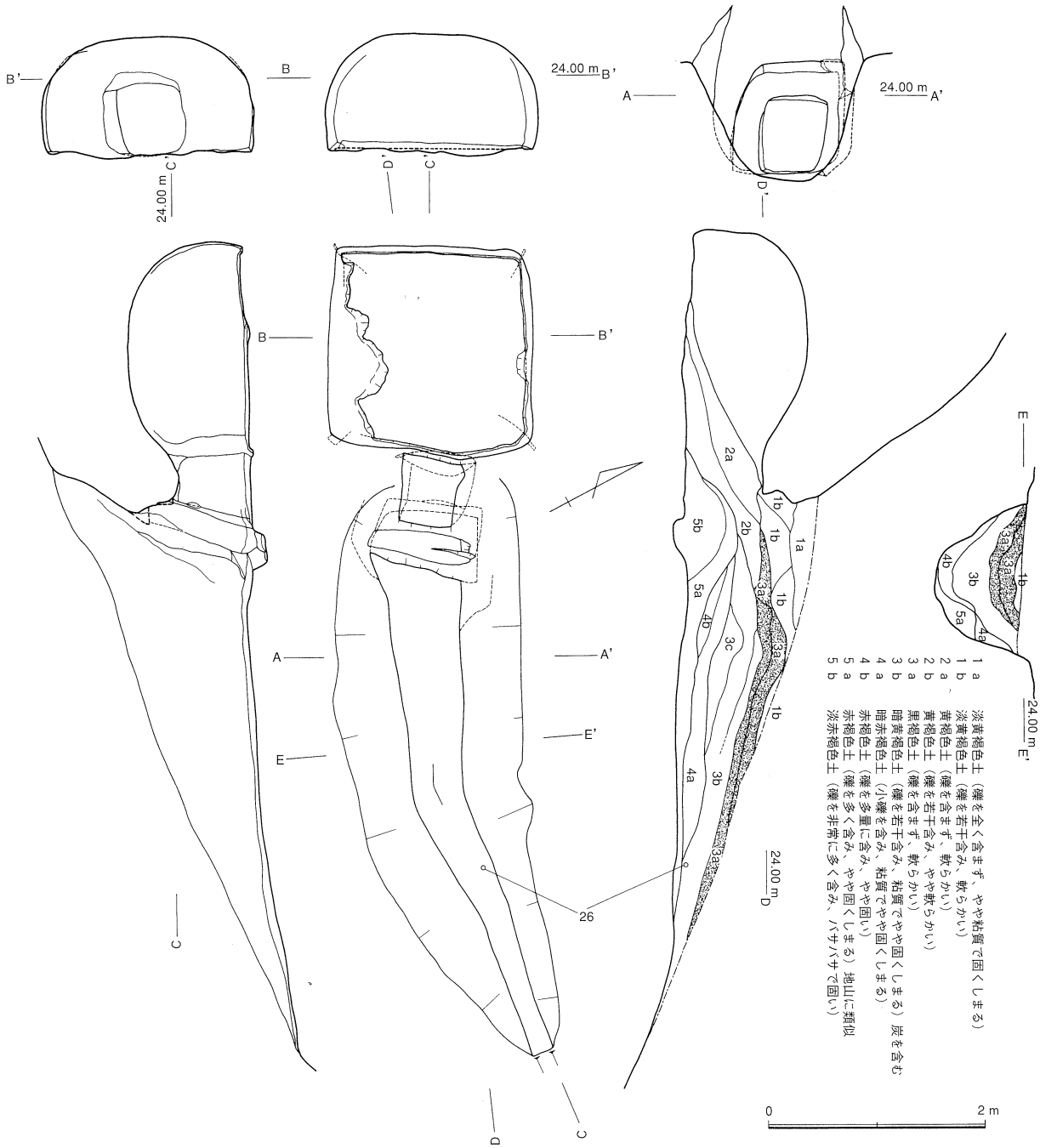
第 149 図　4 区 14 号横穴墓出土須恵器実測図（S＝1：3）

[15号横穴墓]

立　　地　14号横穴墓の南側に位置し、標高24mとやや低めの位置に存在している。上方の尾根には、3号墳が存在し、その主軸の延長上に本横穴墓は存在していることから、本横穴墓は3号墳の主体部と推定される。

墓　　道（第150図）　地山から深いところで1.7m掘削し、平面は、玄門閉塞部から2.2mのところで、東側に折れるもので狭長のものである。全長4.6mを測り、床面の幅は、前端部で2.2m、玄門閉塞部で0.8mを測り、玄門部付近で広がる。

玄　　門（第150図）閉塞部をもつもので、幅0.5m、奥行き1.1m、高さ0.67mを測る。横断面は、

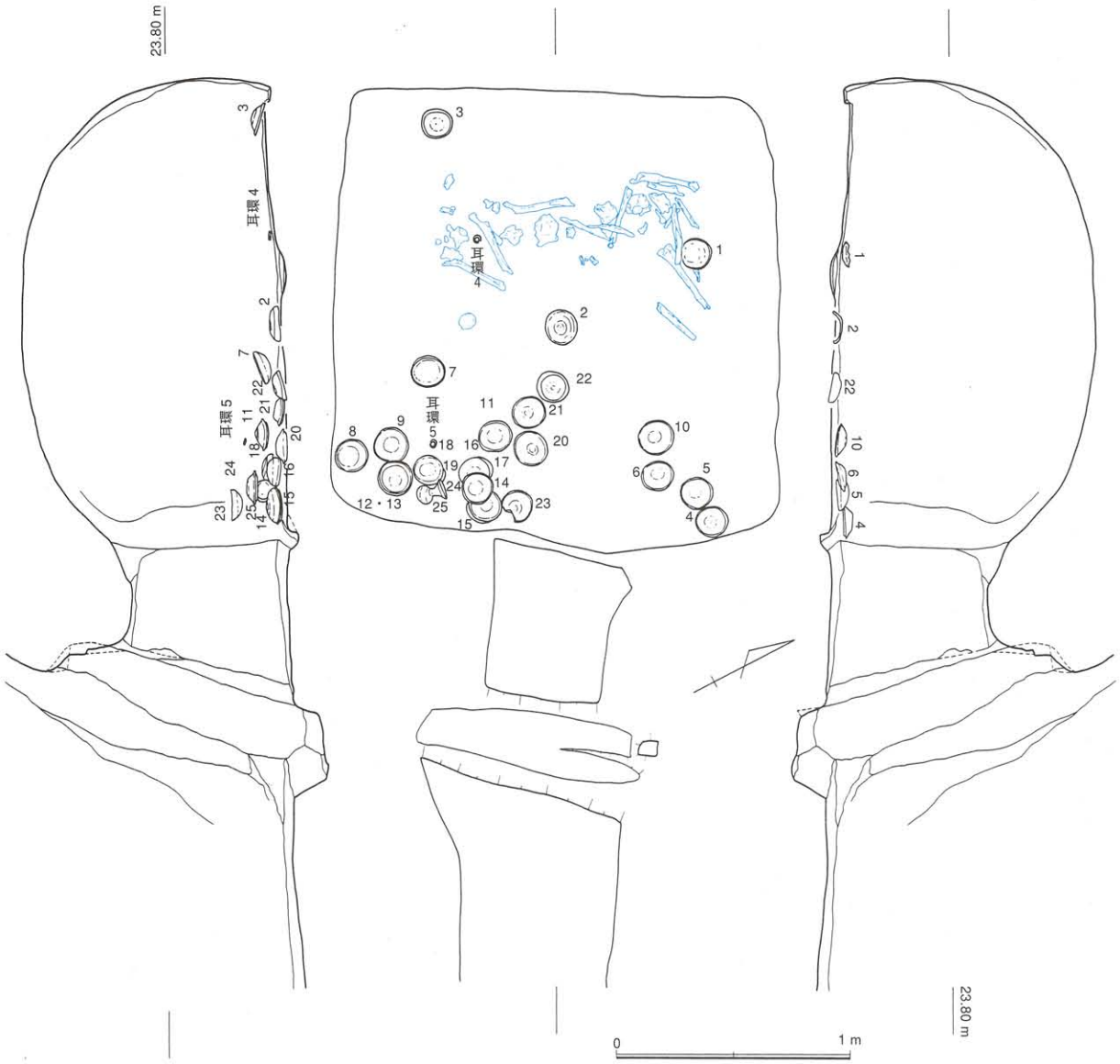


第150図　4区15号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

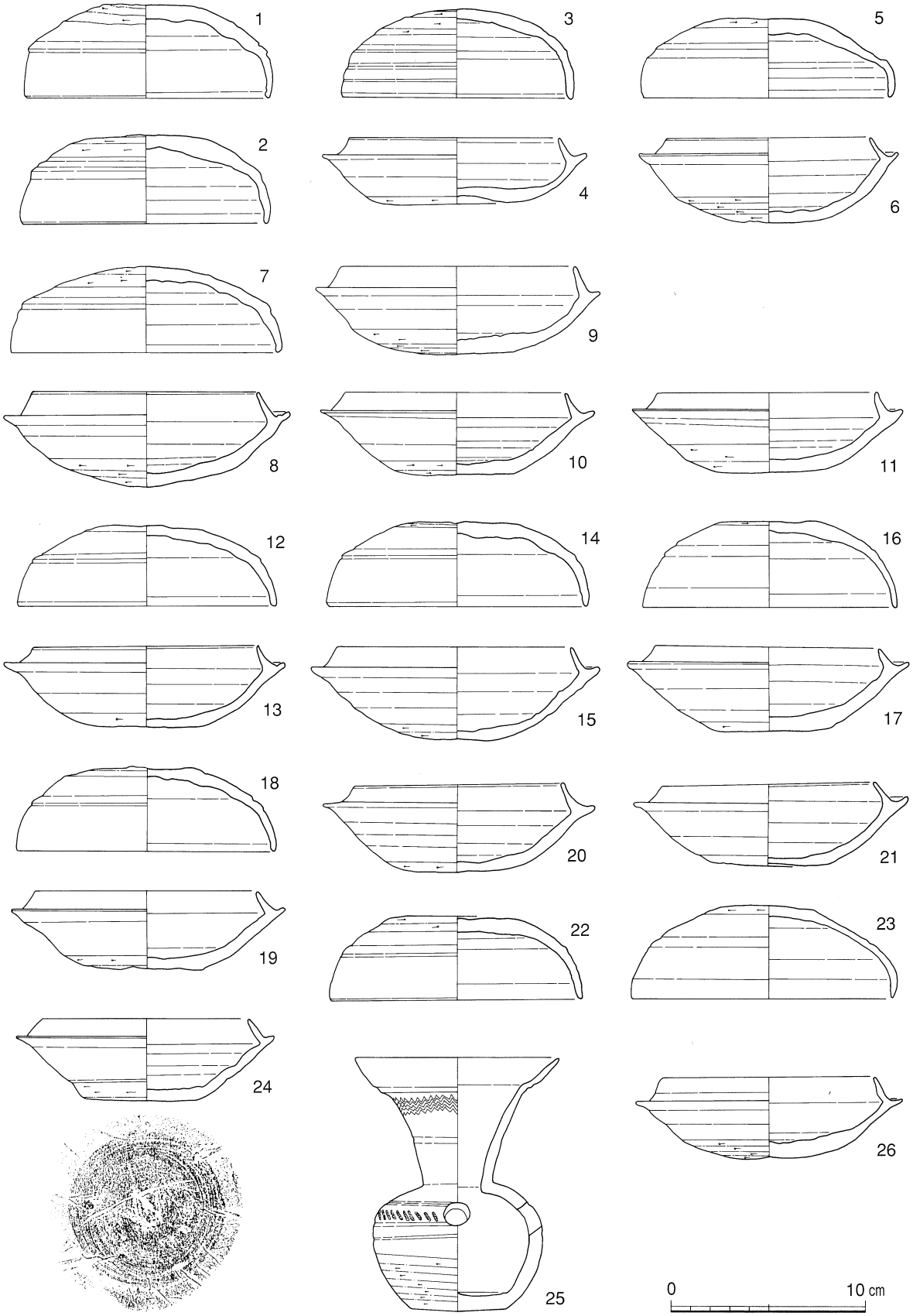
側壁と天井部の界線が明瞭な長方形を呈す。また、閉塞部は、床面に幅38㎝、深さ14㎝程の溝が掘られている。規模は、幅100㎝、高さ97㎝、奥行き32㎝で、玄門部より 1 段高くなる。横断面は玄門部と同じく長方形を呈す。なお、閉塞用の石材等は出土しなかった。

玄　　室（第150図）　主軸は、S－62－Eをとり、平面形は、正方形に近く、奥行き1.95m、幅は1.9mを測る。床面には、四壁に沿って溝が廻るが、地山が軟弱であることから左壁のものは残存していない。溝は幅7㎝、深さ4㎝程を測る。一方、立面形の縦断では、奥壁はやや丸みをもって立ち上がり、天井部も丸く仕上げられている。天井部はほぼ同じ高さである。横断面も同様に丸く仕上げられている。天井までの高さは、1.1mである。

埋土堆積状況（第150図）　土層は、大きく見て、5 層群に分けることができた。1 層は礫を含まないやわらかい層であり、流土と考えられるものである。2 層は、礫を殆ど含まない層で、玄室内に流入した土砂である。3 層は、礫を含みやや硬く締まる層である。その上層の 3a層は、腐食が著しく黒色を呈すものであり、玄門付近に向かって下降する。おそらく、玄室内の土砂のの流入の時の影響を



第151図　4区15号横穴墓玄室内人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）



第152図　4区15号横穴墓出土須恵器実測図（S＝1：3）

受け下降したものと考えられる。最終埋葬時に伴う埋土と考えられる。4 層は、礫を多く含み、上層の 4b 層は腐食しやや黒ずむものである。第 2 次埋葬に伴う埋土と考えられるものである。5 層は、地山礫を多く含む層で、上面からは須恵器が出土している。初葬埋土として考えられるものである。

以上の観察結果より、最低 3 回以上の墓道の掘削が行われていたものと解釈できる。

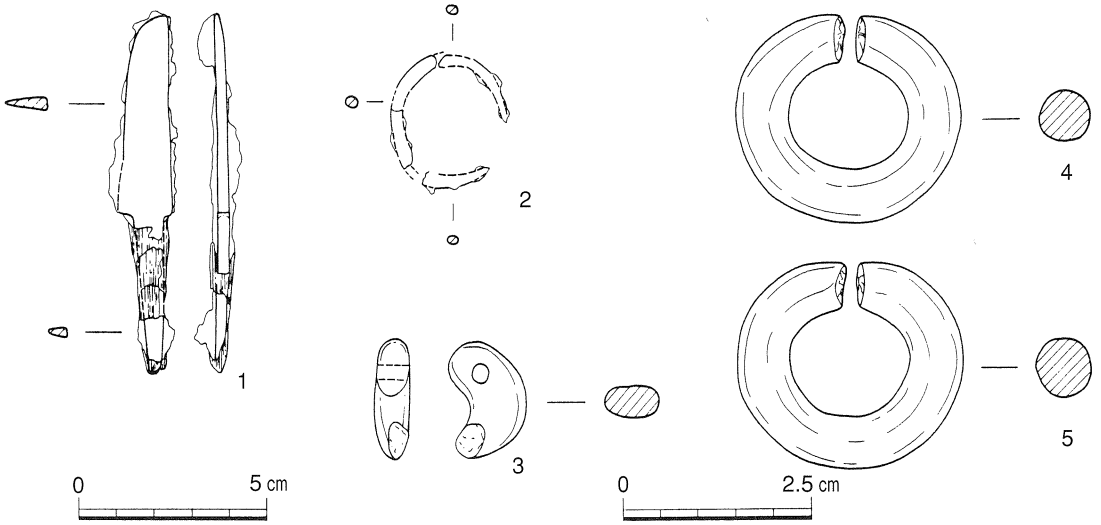
遺物出土状況（第150、151図） 墓道では、第 2 次埋葬面（5 層上面）から須恵器坏身が 1 点出土している。

玄室内からは、人骨が、中央より奥壁側に集中して出土し、1 部頭蓋骨が右前壁コーナー付近から出土している。遺物は、須恵器が25点、刀子 1 点、耳環 2 点、勾玉 1 点、性格不明の環状の金属器が出土している。そのうち、環状製品と勾玉については、土砂の除去中に検出しており出土位置を明らかにできなかった。須恵器は、前壁の右側付近、左側付近の 2 か所に集中し、2 点ほど人骨周辺から出土している。立面的には床面直上、床面より10㎝程浮いたもの、15㎝以上浮いたものの 3 面存在する可能性が考えられる。また、坏身は、全て伏せた状態で出土している。耳環は、前壁左側と人骨が集中している個所の左壁沿いから出土している。人骨や耳環の出土状況等から推測するに、人骨と遺物は、現位置からのかなりの移動が考えられる。

出土遺物（第152、153図） 玄室内出土の須恵器蓋坏は、胎土と調整から大きく 2 つに分類した。1 類（第125図 1 ～ 9）は、天井及び底部の削り調整が丁寧なものであり、基本的に青灰色を呈すが、7、8 のセットは、白灰色である。2 類（10～23）は、削りがやや粗いものであり、基本的に淡灰色を呈すものである。また、24は、青灰色を呈すが、削りを周辺のみ削り、一番新しい様相をもつものである。それぞれ、大谷分類に対比すれば、1 類がＡ 4 型に、2 類がＡ 5 型にあたるものと思われる。

それぞれの類型の出土状況を見ると、2 類は、玄室内の前壁左側に集中し、1 類は 2 類の出土地点の周囲から出土している。床面より15㎝以上浮いたものは、2 類と 1 番新相の24に限られている。

時　　期　玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷 4 期と考えられ、埋葬は 4 期の中で終了しているものと推定される。



第153図　4区15号横穴墓玄室内出土金属器・玉類実測図（S＝1：2、1：1）

[16号横穴墓]

立　　地　谷部の最も深く入り込んだ東側に面した斜面に穿たれており、標高24ｍの位置に存在する。南側には17号横穴墓が存在し、2穴で小支群をなしている。ただし、調査区外の斜面にも前庭部(墓道)の存在を推測させる凹みが存在することから、さらに南側に2穴は存在していると思われる。また、調査区外の斜面を10m程いったところから、「島田遺跡」として調査している。ここでは、横穴墓は検出されなかったことから、4区とした斜面には、調査区外に存在するものと思われるものを加えて総数16穴程の横穴墓が存在するものと推定される。

墓　　道（第154図）　地山から深いところで2.3m掘削し、全長は、7.3mを測り、狭長の墓道を作り出している。前端部床面の幅0.62m、玄門付近の幅0.74㎝と玄門部側で若干広がる。床面は玄門部に向かって徐々に高くなり、比高差は、0.58mである。また、前端から5.54m程のところで、側壁に面的に幅8㎝ほどの加工が施され、床面もこの辺りから幅が広がる。これは、何らかの区域としての仕切るものであったと考えられる。羨道としても考えられるが、天井部が存在した可能性はない。

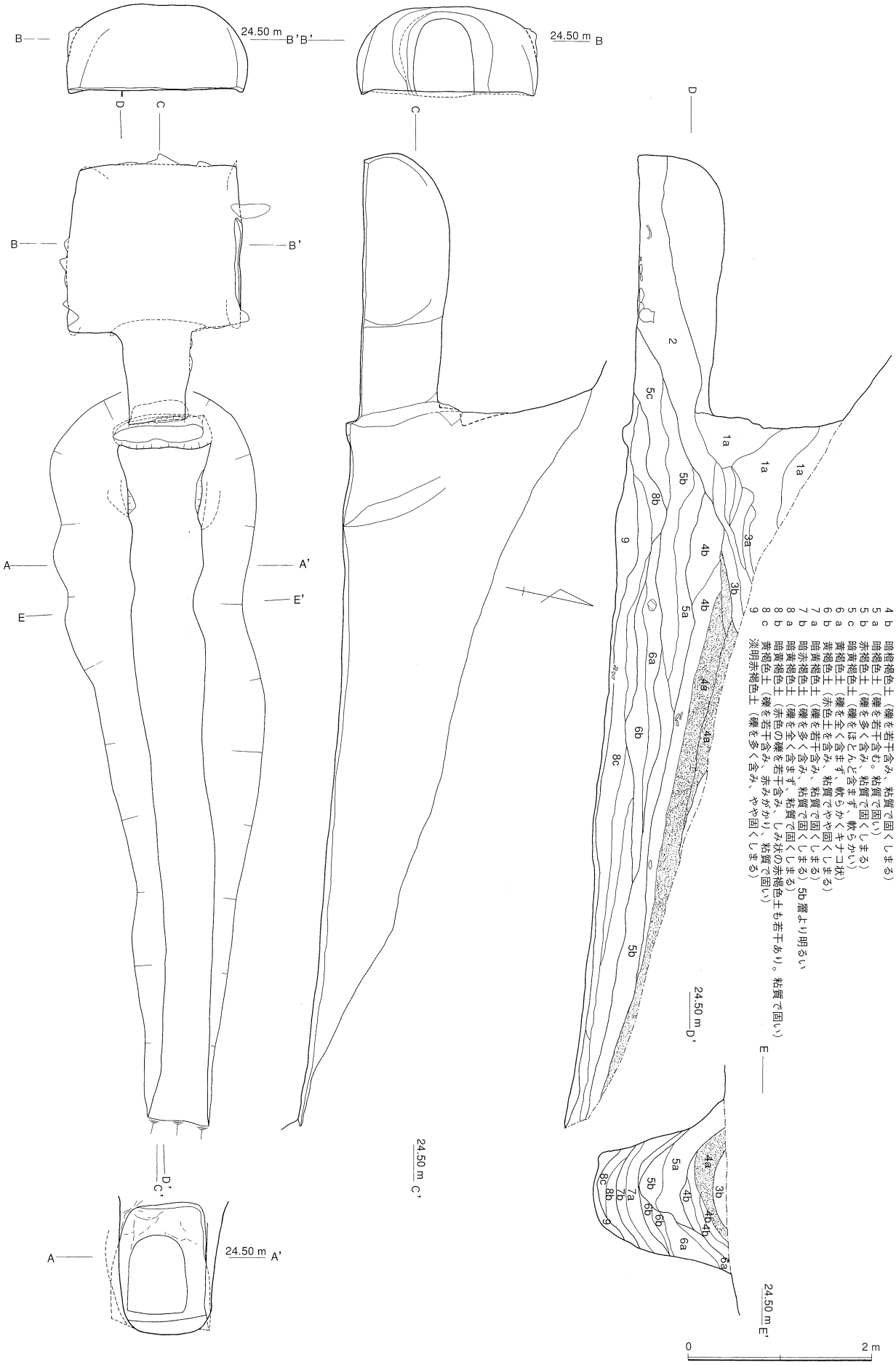
玄　　門（第154図）　墓道中央に穿たれ、閉塞用の刳込をもつものである。奥行き1.26m、幅0.66m、高さ0.86mを測る。横断面は長方形に近いが、天井部はやや丸みをおび、側壁との界線は明瞭でない。閉塞用の刳込は、床面に幅30㎝、長さ108㎝、深さ9㎝の溝が掘られている。奥行きは22㎝、幅108m、高さ109mを測り、玄門部より一段天井が高い。正面から見た場合は、長方形を呈す。また、閉塞用の石材等は出土していない。

玄　　室（第154図）　主軸は、N－73°－Eをとり、平面形は、ややほぼ正方形である。規模は、奥行き2m、幅は、前壁側で1.90m、奥壁側で1.71mを測り、前壁がやや幅広のものである。また、左壁側は崩壊しており隣接する17号横穴墓と繋がっていいる。一方、立面形をみると、奥壁は丸く立ち上がり、天井部はほぼ同じ高さで玄門部まで作られ、また玄門部の天井部の高さとあまり変わらないものである。横断でも左右対称に丸く仕上げられている。各壁の界線は、床面から76㎝程までの高さまで明瞭である。

埋土堆積状況（第154図）　土層は、大きく見て、9層群に分けることができた。1層は礫を含まないやわらかい層であり、流土と考えられるものである。2層も地山礫を含まない、非常に軟らかい層で、玄室内への流入土と考えられる。3層は、上層の3a層は若干腐食し、褐色を呈し、下層の3b層は黄褐色を呈す。最終埋葬に伴う埋土と考えられる。4層は、礫を若干含む層で上層の4a層は腐食が著しく黒色を呈すものである。第6次埋葬に伴う埋土と考えられる。5層は、礫を多く含み、硬く締まる層であり、玄門付近まで認められるが、この部分は、2次的に流れ込んだ可能性が考えられる。また、上層の5a層は、やや腐食したものである。第5次埋葬に伴う層である。6層も5層と同じく礫を多く含む層で、上層の6a層は、やや腐食したものである。第4次埋葬に伴う埋土と考えられ。7層は横断土層のみで確認でき、上層の7a層はやや腐食している。第3次埋葬に伴う層である。8層は礫を殆ど含まない層で、硬く締まるもので上層の8a層はやや腐食しているものである。第2次埋葬に伴う層である。9層は礫を多く含む層で、初葬時の埋土と考えられる

以上の観察結果より、最低7回以上の墓道の掘削が行われていたものと解釈できる。

遺物出土状況（第155、156図）　墓道からは、第6次埋葬時の埋め戻し後に形成された3a層から須恵器甕片が散布された状況で出土し、第3次埋葬面（8層上面）、第5次埋葬面（6層上面）、第6次埋葬面（5層上面）から須恵器蓋坏がそれぞれ出土している。ただし、第5次埋葬面出土の蓋（159



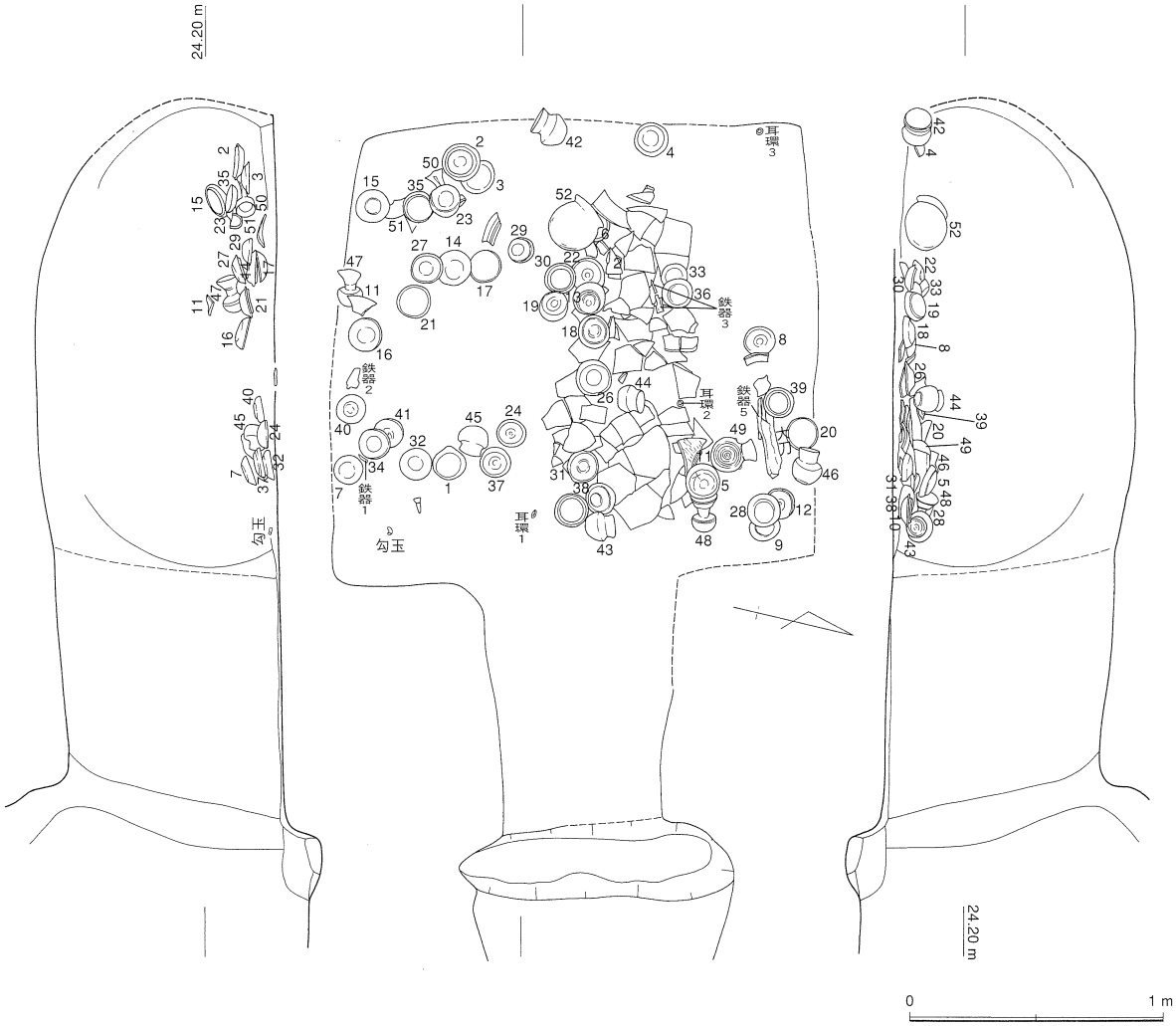
第154図　4区16号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

図56）は、黒色土からも出土している。

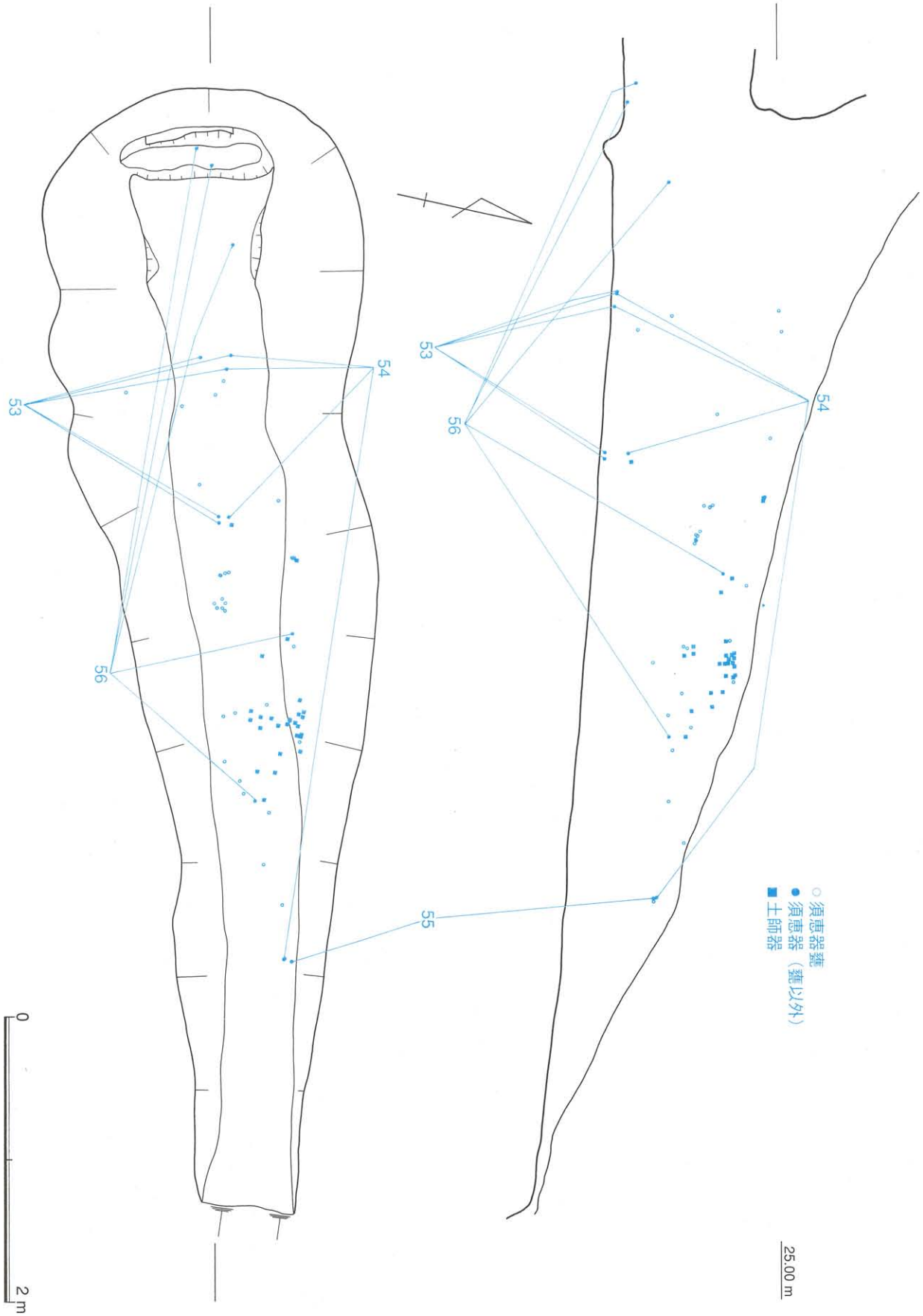
玄室内から出土の遺物はは、平面的に大きく 4 群に分けて捉えることができる。右側には、須恵器甕片による屍床周辺のものと、そのさらに右壁沿いの大刀を含む一群がある。右側には、中央付近に遺物の出土してない範囲があり、それを挟んで奥壁側の 1 群と前壁側の一群がある。器種ごとに、出土状況を見ると、蓋は 2 点を除き全て伏せられた状態で出土し、また、坏身も 4 点以外は、全て伏せられた状態であった。直口壷は、5 点と比較的多数出土しているが、各群に含まれた形で、分散して出土している。

須恵器以外の遺物では、大刀は現位置を保っている可能性があるが、耳環、玉類は、動かされている可能性が高い。なお、4 、6 ～18は、流入土除去中に出土してもので、出土地点を明確にすることはできなかった。

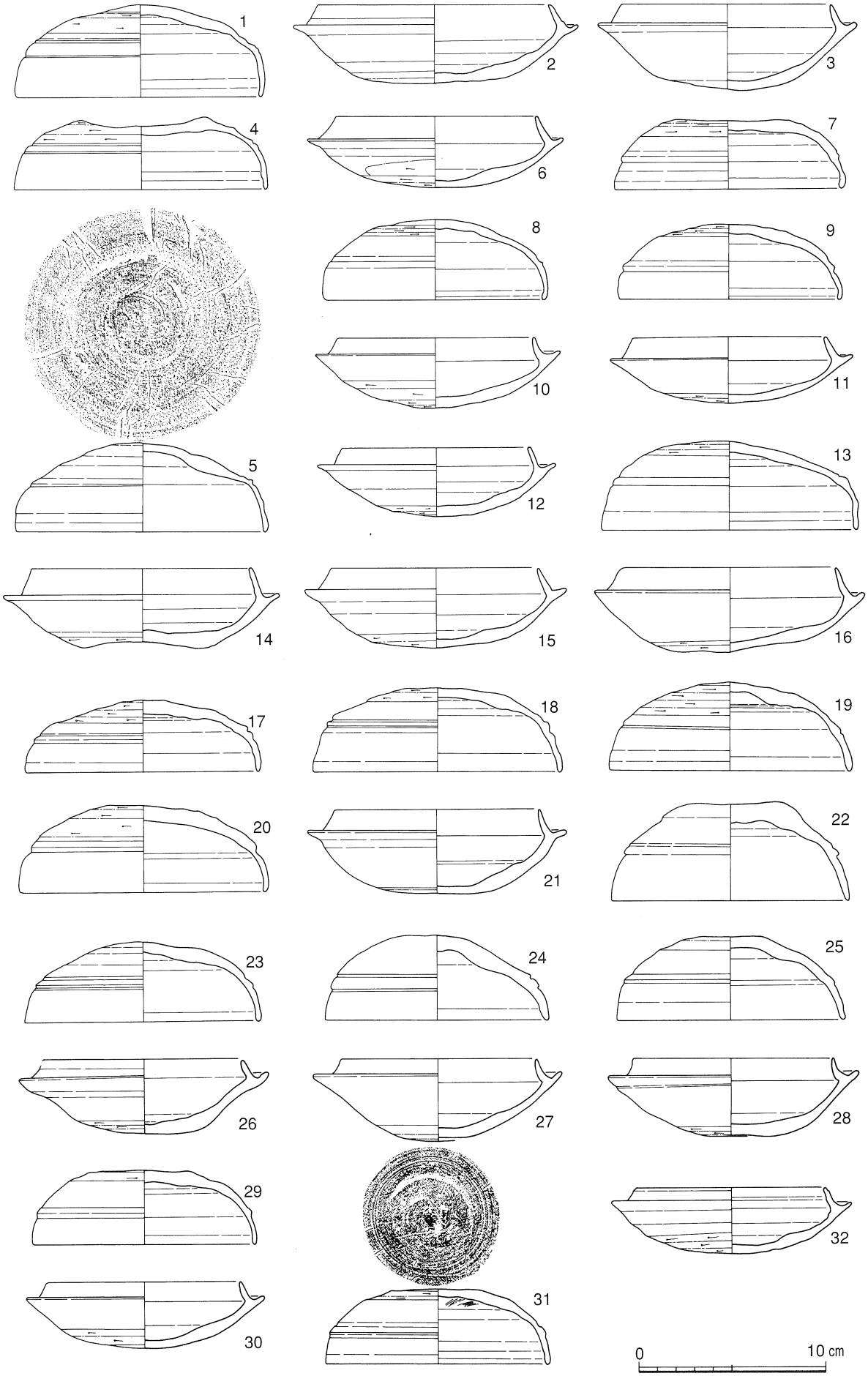
出土遺物（第157～160図） 出土須恵器の蓋坏は、径及びヘラ削り調整から大きく見て 4 つに細分した。1 類は、蓋の径が13㎝以上のもので、削りが丁寧なものである。そして、胎土によって 6 つに細分でき、淡青灰色で径13.5㎝前後のもの、内面が暗色系の色調で径が13.5㎝前後のもの、坏外面に釉がかかり径が12㎝前半のもの、緑灰色で径が13.5㎝前後で坏身の立上がりの高いもの、同じく緑灰



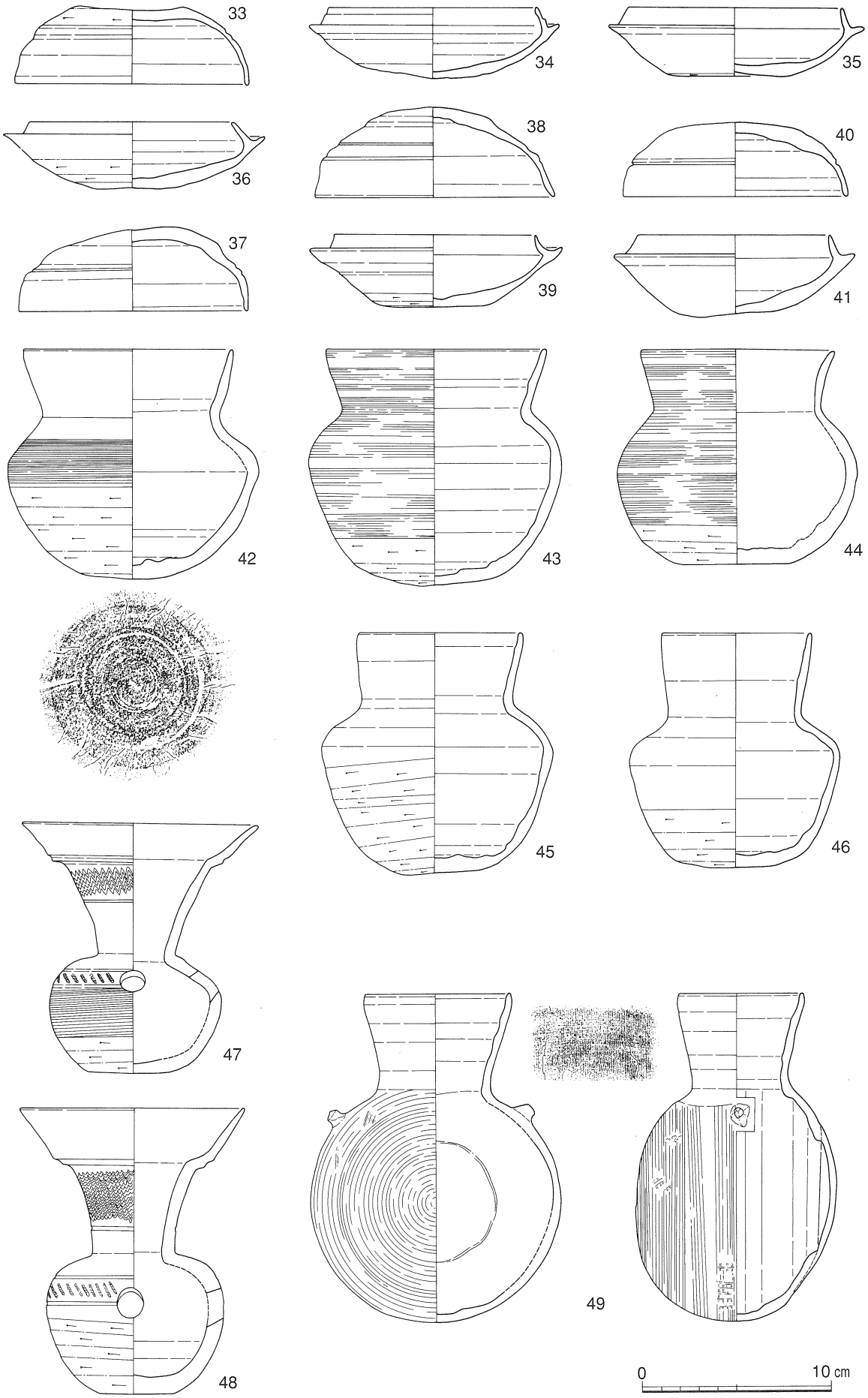
第155図　4区16号横穴墓玄室内遺物出土状況実測図（S＝1：30）



第156図　4区16号横穴墓墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）



第157図　4区16号横穴墓出土土器実測図(1)（S＝1：3）

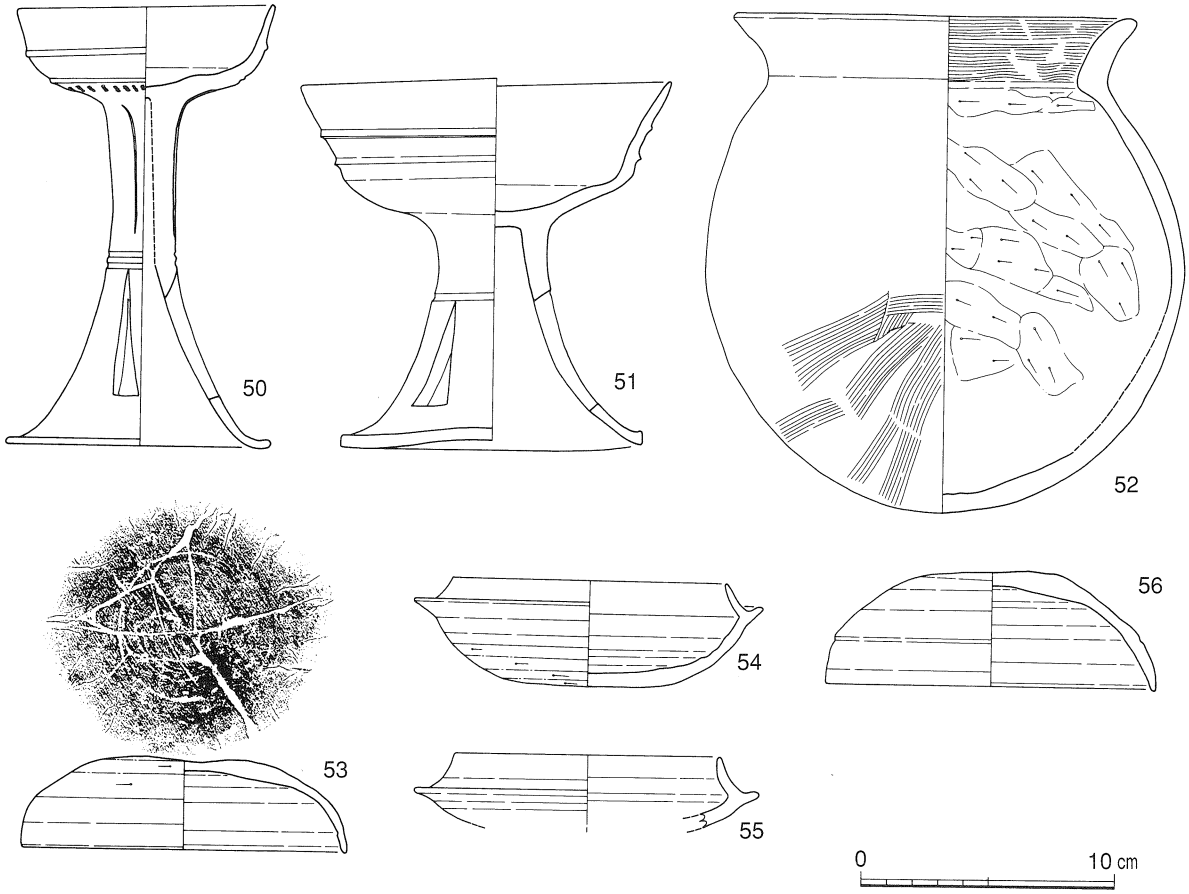


第158図　4区16号横穴墓出土土器実測図(2)（S＝1：3）

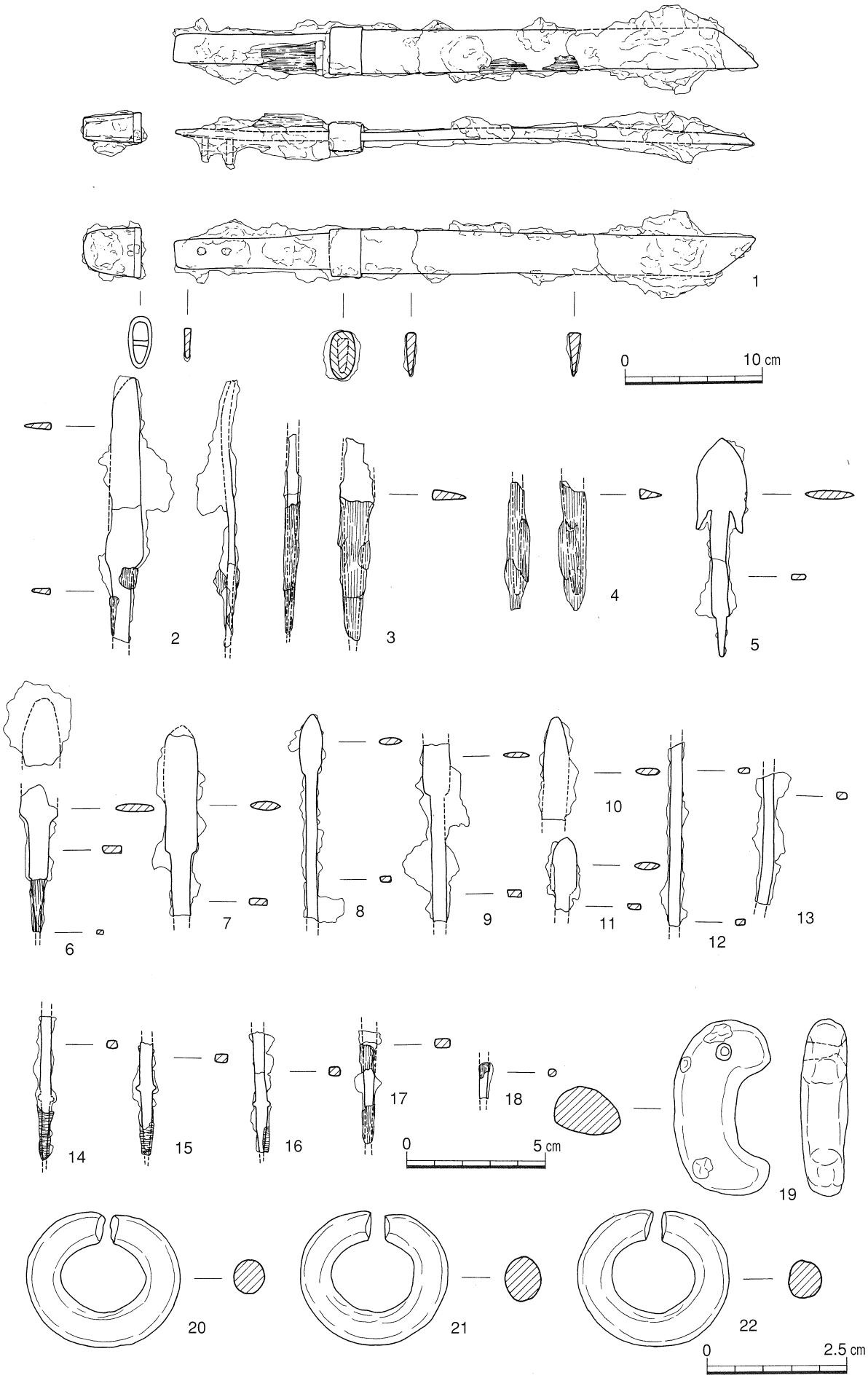
色で径が12㎝前半のもの、内面が滑らかなもので径が13㎝ほどのものが存在する。2類は、1類に比し削りがやや粗いものである。2類には、紫灰色で蓋の径が12㎝前半のもの、淡青灰色で蓋の径が12㎝前半のもの、内面が暗色系で径が12～13㎝のものが含まれる。3類は、削りが周辺のみのもので、径が12㎝のものである。4類は、削りが施されないものである。

各分類を大谷の分類と対比すれば、1類はA 4型に、2類はA 5型に、3類はA 6型に、4類はA 7型に凡そ対応するものと考えられる。それぞれの出土状況をみた場合に、特にまとまって同一の類型が出土するということは認められなかった。結論として、追葬等により、かなりの遺物の移動があったものと考えられる。

時　　期　玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷4期と考えられ、埋葬は5期の中で終了しているものと推定される。出土した多数の須恵器の様相から最低3回以上の埋葬が考えられる。



第159図　4区16号横穴墓出土土器実測図(3)（S＝1：3）



第160図　4区16号横穴墓出土金属器・玉類実測図（S＝1：4、1：2、1：1）

[17号横穴墓]

立　　地　16号横穴墓の南側に位置し調査区の端で検出したものである。標高25mの位置に存在し、若干16号横穴墓より高めに存在する。上方の尾根には、4号墳が存在している。4号墳は一部調査したのみで詳細は不明であるが、隣の16号及び調査区外に存在する横穴墓に伴う古墳（後背墳丘）である可能性が考えられる。

墓　　道（第161図）　地山から深いところで1.9m掘削し、全長8.3m、幅0.68mを測り、狭長の墓道を作り出している。床面は玄門部に向かって徐々に高くなり、比高差は、1.47mである。

玄　　門（第161図）　閉塞部をもつもので、幅0.84m、奥行き1.2m、高さ0.98mを測る。横断面は、馬蹄形で側壁と天井部の界線が不明瞭なものである。また、閉塞部は、他の横穴墓のように玄門より幅広になることはないが、立面では加工が施されている。天井部は、崩落により失われているが、玄門より一段高くなり、正面からは、馬蹄形になるものと考えられる。床面は、前庭部より3㎝一段高くなり、かつ、中央には主軸にに沿って幅20～30㎝、深さ4㎝程の溝が掘られている。この溝は、さらに玄室内にまで続くものである。

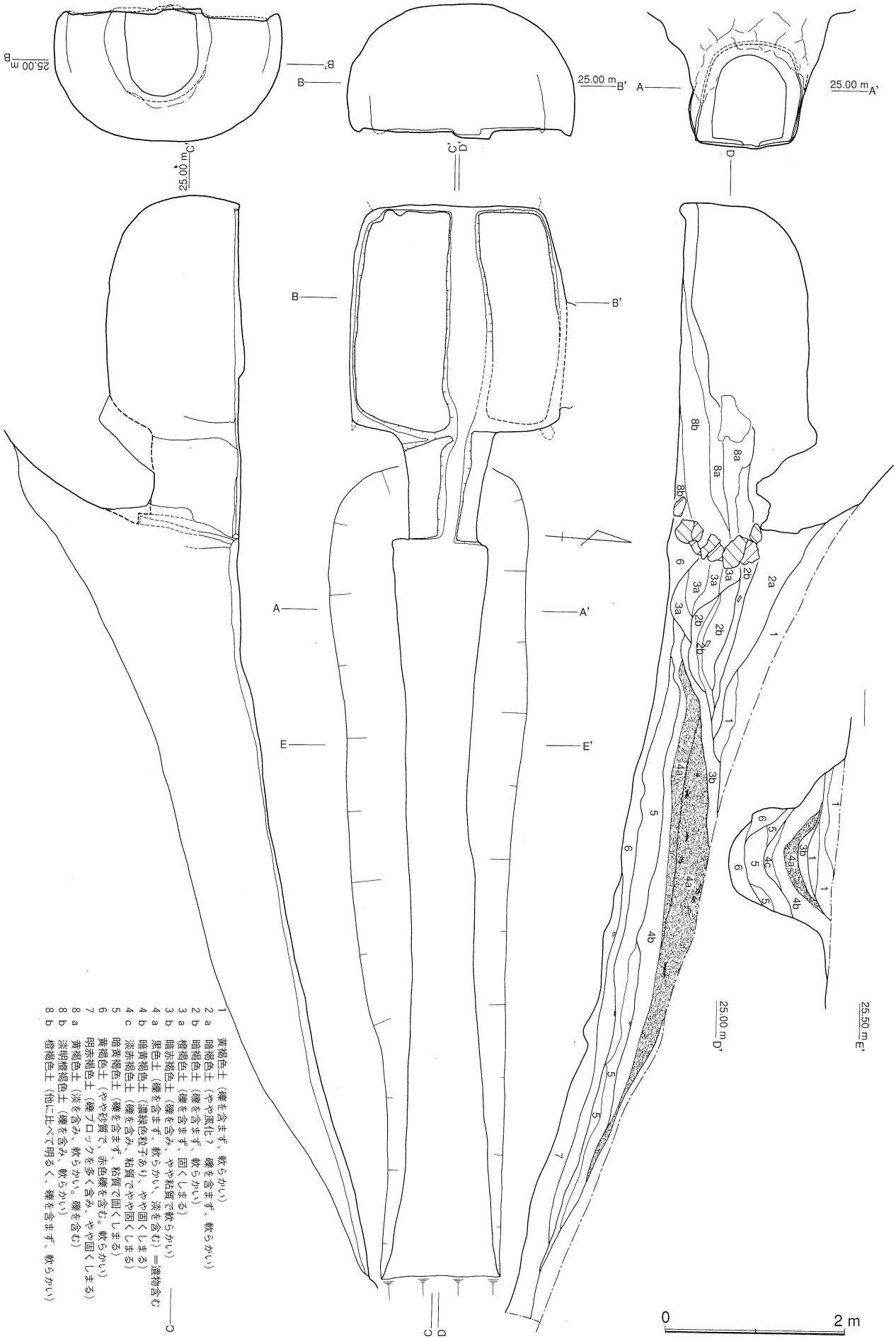
閉 塞 石（第162図）　閉塞には、割石を使用しており、玄門部を全て覆った状態で検出された。なお、閉塞石は、最終埋葬時とそれ以前の少なくとも2つに分けられる。

最終埋葬時のものは、6層上面に構築されたもので、割石を4～5段に積み上げたもので、比較的小さめの石で覆っている。それ以前のものは、床面直上から構築されたもので、最終埋葬時に上半部分は1度外されている。残存部分で、割石を2～3段積み上げたものである。また、玄門部の床面からも石が出土しており、これは追葬時に外された石が置かれたか、落ちたものである可能性が考えられる。

玄　　室（第161図）　主軸は、N－86°－Eをとり、平面形は、やや縦長の長方形に近く、奥行き2.44m、幅は奥壁で2.05m、前壁で2.25mを測る。床面には、溝が掘られている。溝は四壁に沿ったものと主軸沿いのものがあり、それぞれ玄門部の床面の溝と繋がるものである。規模は、四壁沿いのもので幅4～10㎝、深さ2～3㎝、主軸沿いのもので幅33～50㎝、深さ5～6㎝を測るものである。これらの溝によって左右に屍床を設けている形になる。一方、立面形の縦断では、奥壁はやや垂直気味に立ち上がった後に、天井部はやや丸く仕上げられ、ほぼ同じ高さである。横断面も同様に左右対称に丸く仕上げられている。床面から天井までの高さは、1.48mである。また、右壁には、崩落により16号横穴墓の玄室と繋がっている。

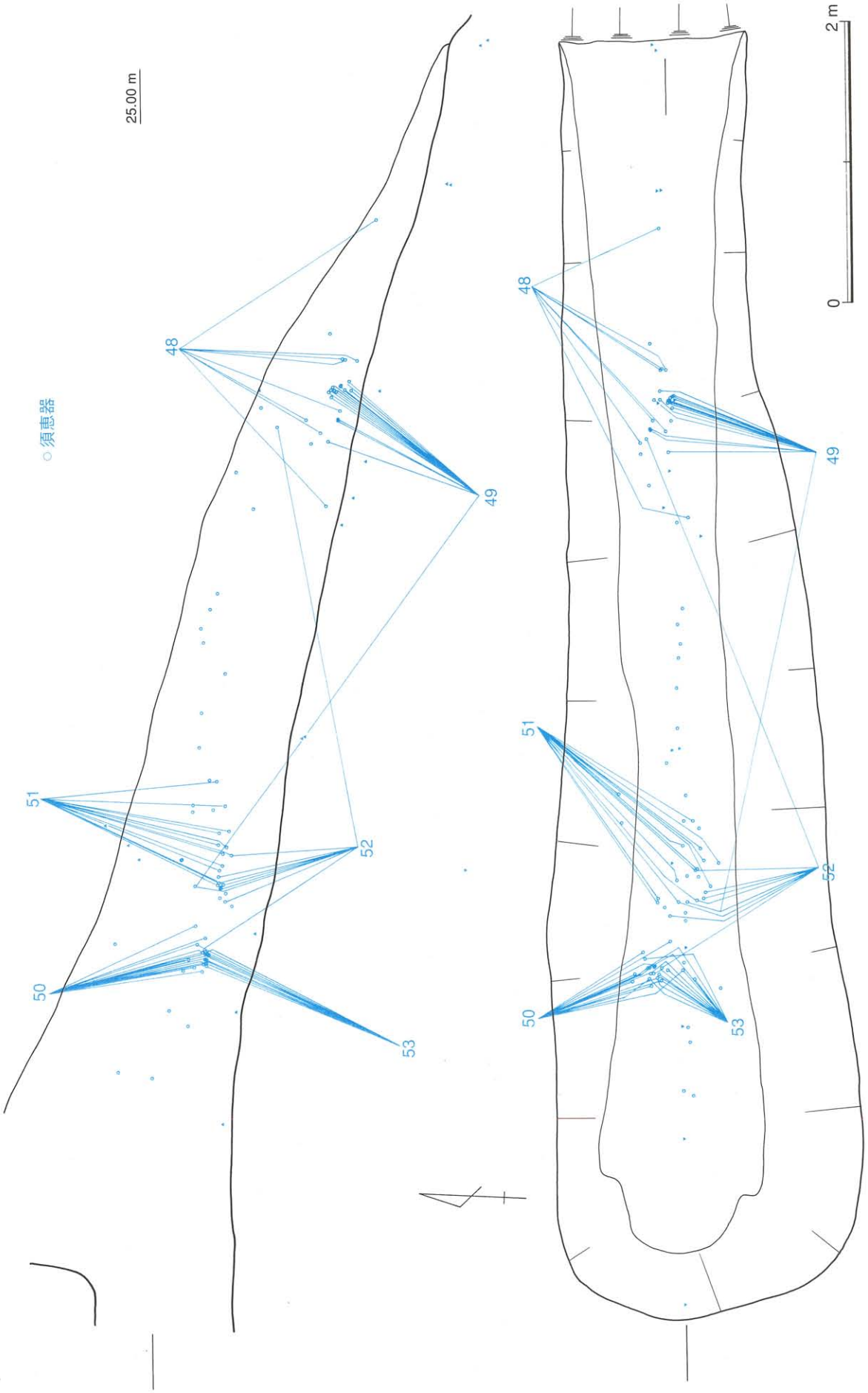
埋土堆積状況（第161図）　土層は、大きく見て、8層群に分けることができた。1層は礫を含まないやわらかい層であり、流土と考えられるものである。2層は、礫を殆ど含まない層で、全体的に暗褐色を呈し、上層の2a層はやや腐食している。最終埋葬後の埋土の上に堆積した土と考えられる。3層は、礫を若干含む層で、玄門部の閉塞石を覆っている土層である。最終埋葬に伴う埋土と考えられる。なお、3b層は最終埋葬時の掘削時の整地土と考えられる。4層は、礫を含み粘質で硬く締まる層であり、上層の4a層は、腐食が著しく黒色を呈すものである。第4次埋葬時の埋土と考えられる。5層は、礫を含まない粘質で硬く締まる層で、第3次埋葬時に伴う埋土と考えられる。6層は、礫を含む層で、第2次埋葬に伴う埋土と考えられる。7層は、大きめの地山礫を多く含み、硬く締まる層で初葬時の埋土と考えられる。8層は、基本的に玄室内への流入土、及び崩落土である。

以上の土層観察より最低5回以上墓道の掘削が行われたものと解釈される。



第161図　4区17号横穴墓遺構実測図（S＝1：60）

第 162 図　4 区 17 号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図（S＝1：30）



第163図　4区17号横穴墓墓道遺物出土状況実測図（S＝1：40）

遺物出土状況（第162、163図）　墓道では、第３次（６層上面）及び第４次（５層上面）埋葬面から須恵器蓋坏が出土し、黒色土（４a層）から須恵器甕片が散布された状況で出土している。

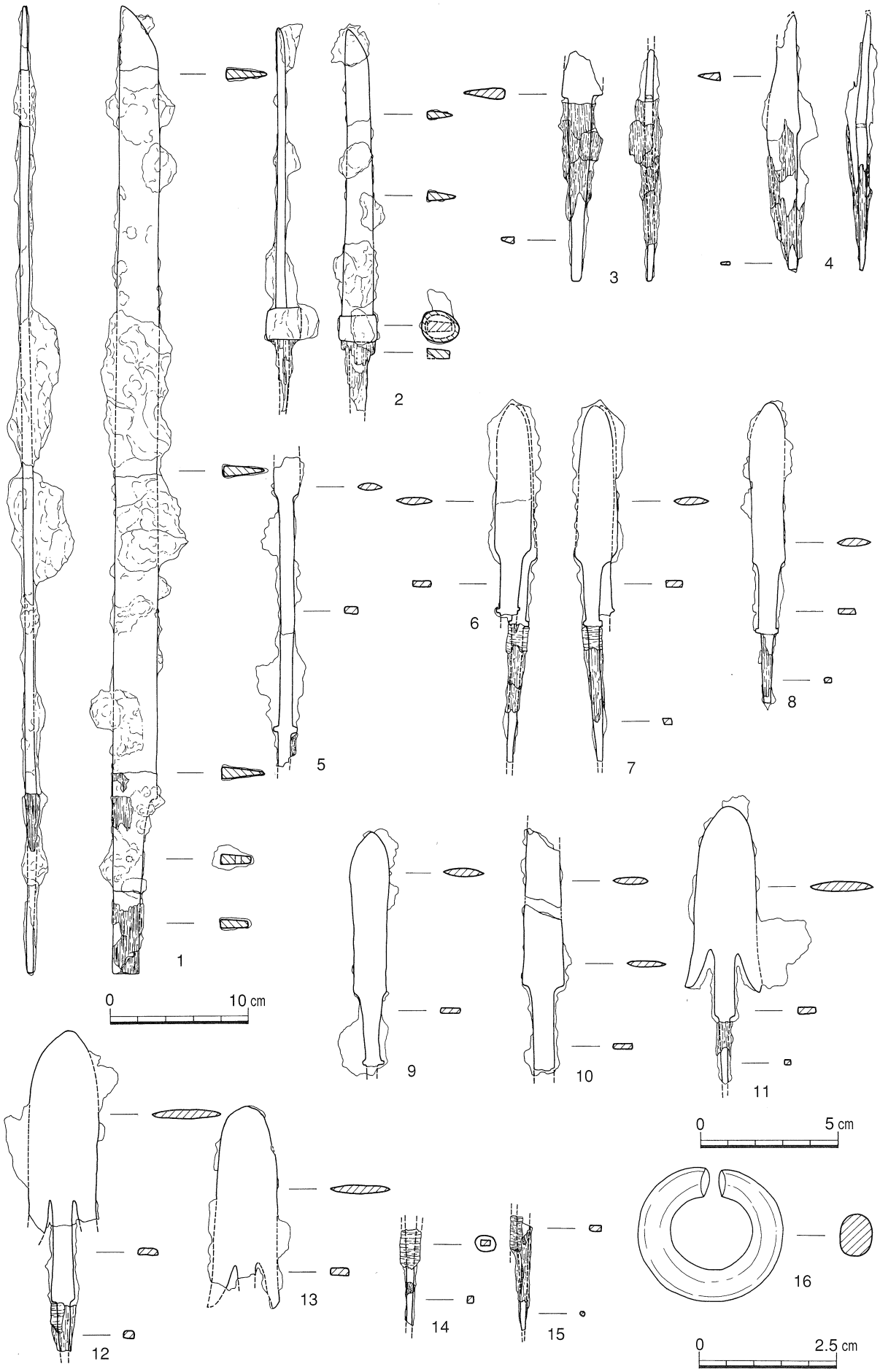
玄室内から出土の遺物は、平面的に大きく２群に分けて捉えることができる。１つは、左壁側のもので、前壁コーナー付近に自然石２つと須恵器、鉄鏃、刀子が出土し、やや中ごろには直刀２本と人骨が出土している。大刀は、１は切先を前壁側に、２は奥壁側に向けており、向きはそれぞれ異なるものである。須恵器は蓋坏以外の器種が多い一群である。もう１つは、主軸に沿った位置のもので、多数の須恵器と耳環、鉄鏃、人骨が出土している。須恵器は、蓋坏が殆どであるが奥壁付近にそれ以外の器種が出土する。完形で出土するものが殆どであるが、38だけは、上半と下半に分かれて出土している。

出土遺物（第164～167図）　墓道出土の須恵器蓋坏は、削りのある（48、49）と削りのない（50～53）に大きく分けることが可能である。前者は第３次埋葬面から、後者は第４次埋葬面から出土している。大谷分類と対比すれば前者がＡ４又はＡ５型に、後者がＡ７型になるものと考えられる。

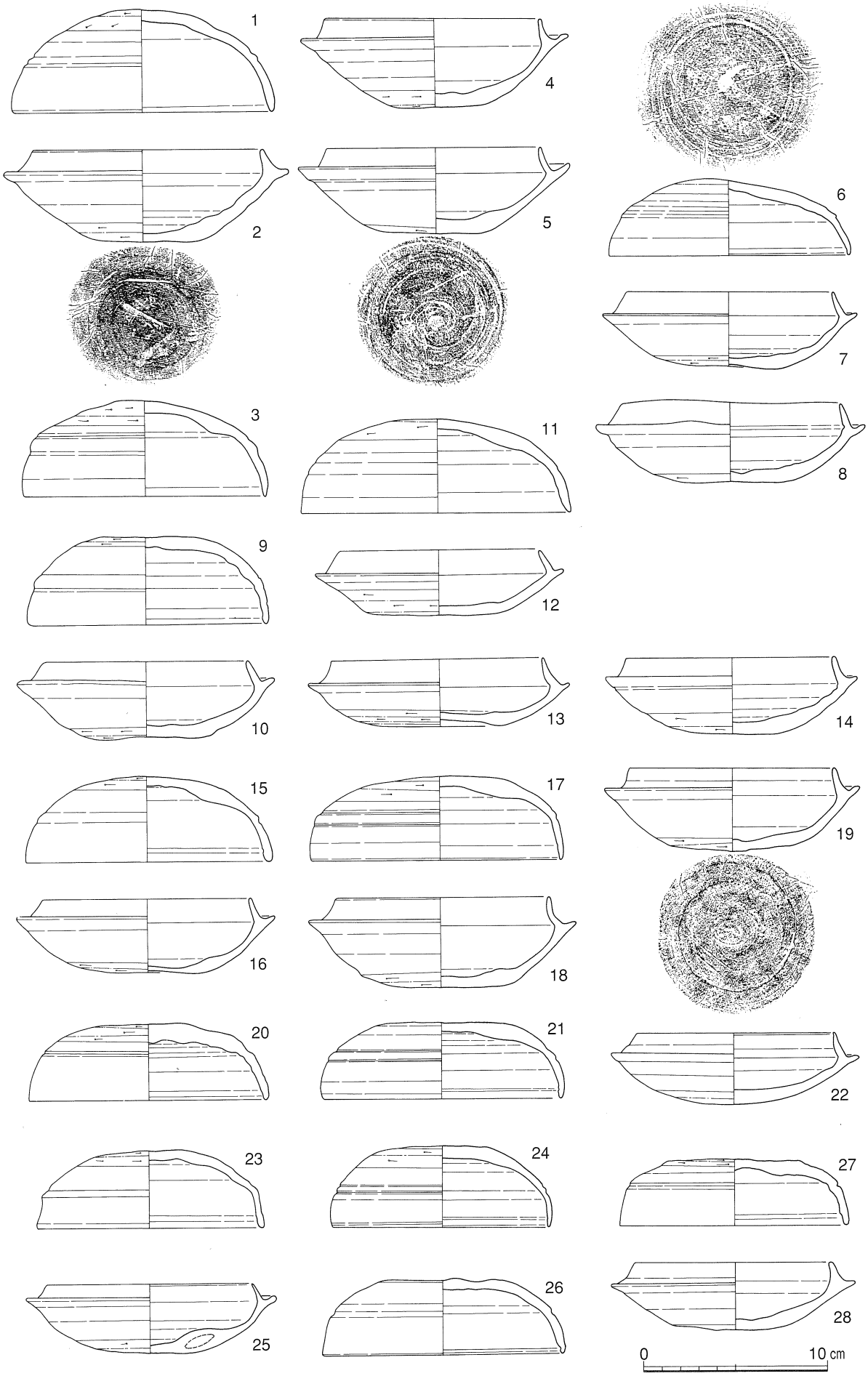
玄室内出土の須恵器蓋坏は、胎土と調整から大きく２つに分類した。１類（第165図１～28）は、天井及び底部の削りがあるもので、２類は（29～37）で削りを施さないものである。さらに１類は、削りの精粗で２分でき、丁寧な１Ａ類（１～22）、粗い１Ｂ類（23～28）になる。また、２類もその径の大小から２分でき、蓋の径が11㎝後半以上の２Ａ類（29～33）と径が11㎝前半の２Ｂ（34～37）に分けられる。以上のものの前後関係は、１Ａ類が古く、１Ｂ類、２Ａ類、２Ｂ類の順で新しいものになると考えられる。

それぞれの類型の出土状況を見ると、１Ａ類は、玄室内の前壁左側と主軸沿いで出土している。また、主軸沿いのものは、縦に並んだ状況で出土している。１Ｂ類は、右壁から１点と中央部から出土する。そして２Ａ類は主軸沿いの奥側を主とし、１点前側で出土し、２Ｂ類は前側でのみ出土している。以上のことから、玄室内の埋葬位置、及び順序を考えることは困難ではあるが、側壁に平行して埋葬が行われたものと考えられる。

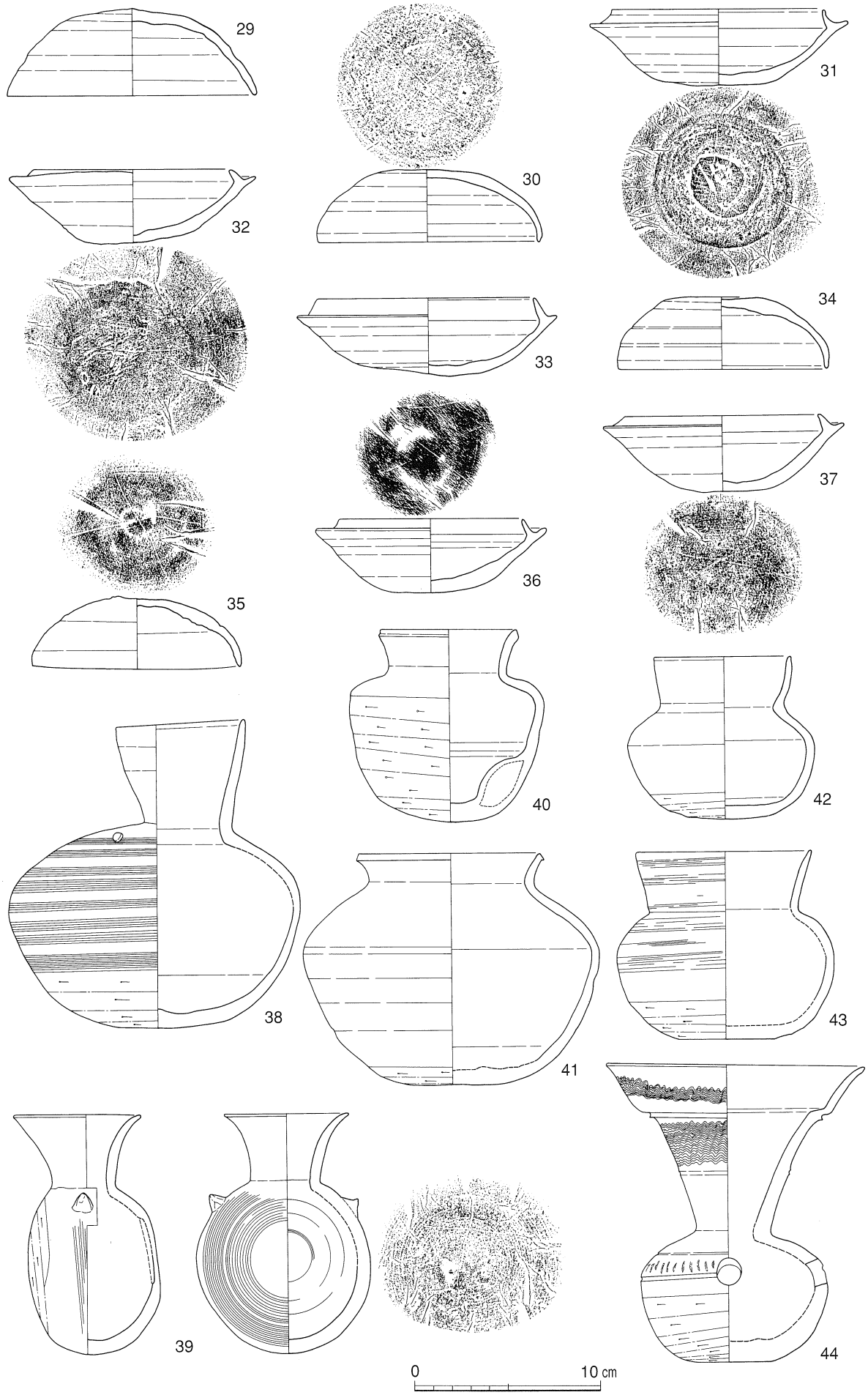
時　　期　玄室内から出土している須恵器より築造は、大谷４期と考えられ、埋葬は５期の中で終了しているものと推定される。また、須恵器からは最低４回以上の埋葬が考えられる。



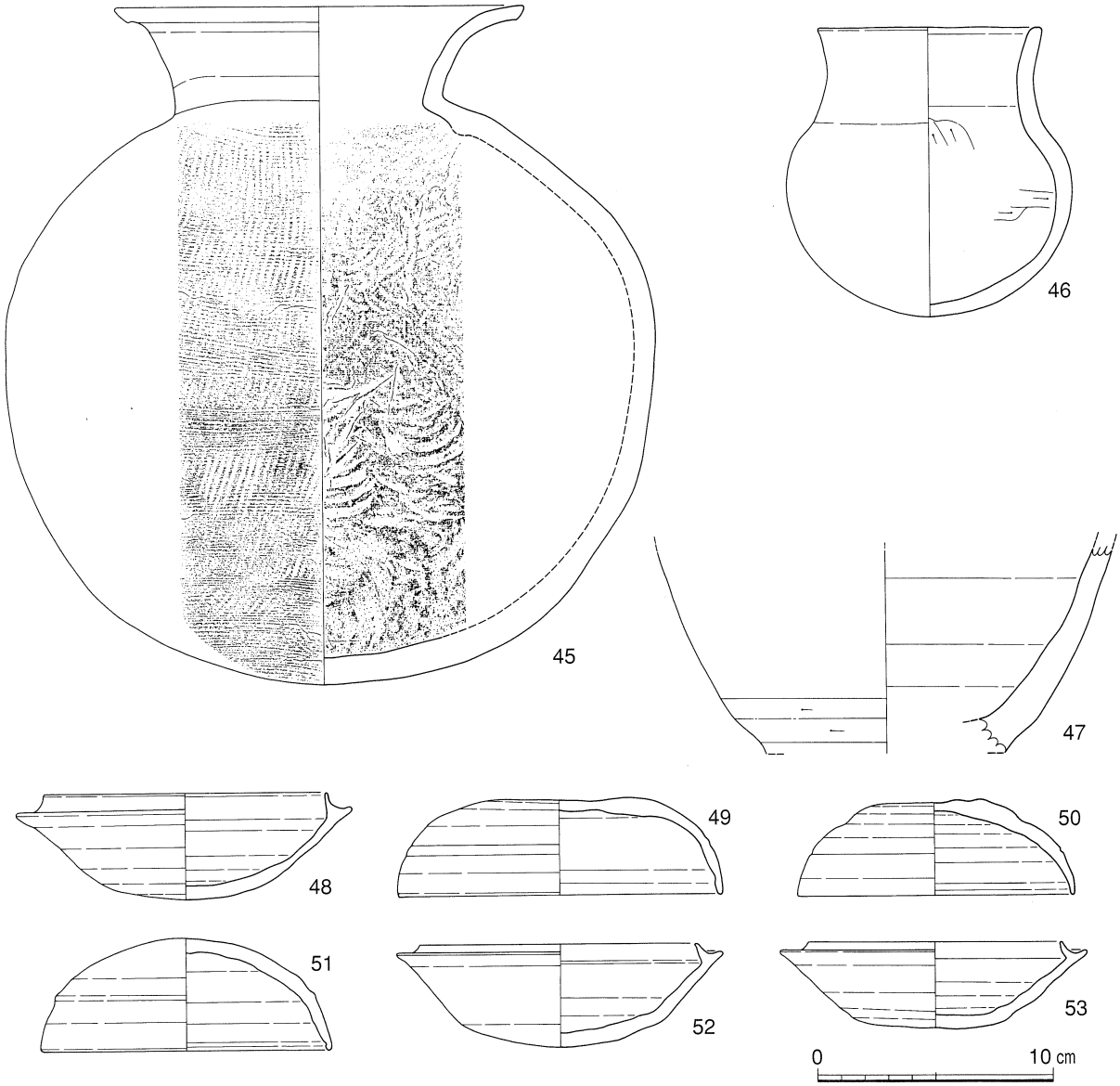
第164図　4区17号横穴墓出土金属器実測図（S＝1：4、1：2、1：1）



第165図　4区17号横穴墓出土土器実測図(1)（S＝1：3）



第166図　4区17号横穴墓出土土器実測図(2)（S＝1：3）



第167図　4区17号横穴墓出土土器実測図(3)（S＝1：3）

(4)古　道（第86、92、102、106図）

4区では、4．5．6号横穴墓の存在する斜面と丘陵の南北方向の尾根にかけて古道が検出されている。斜面のものは、平面的な検出を行っていないため全体は不明であるが、横穴墓調査時の縦断土層によって確認している。それぞれ、4号横穴墓縦断土層では1基、5号横穴墓縦断土層では4基、6号横穴墓縦断土層では3基確認している。これらは全て、中央部分が版築状に非常に硬く叩き締められたもので、地山と誤認するほどのものであった。時期的には、4・5号横穴墓の埋葬時期に平行して築造している可能性が土層より考えられ、大谷4期頃（6世紀後葉）には、機能していたものと考えられ、また、5号横穴墓の埋葬終了後の埋土上面にも築造されていることから、7世紀末以降も機能しているものと考えられる。以上のように、何回も改修されながら本斜面には南北方向に古道が存在していたものと考えられる。また、最終的には、8m以上の平坦面が存在していることになる。

尾根の南側には、幅8m以上の平坦面が存在し、削平されたものと考えられ、所々に幅1m程溝状に凹み、砂利が敷かれたものが認められた。また、6号横穴墓付近には床面幅30㎝の溝状の遺構が何条か存在し、砂利が敷かれていた。これらは古道と考えられ、時期の明確な遺物は、出土しなかった

が、おそらく、斜面で検出された盛土による古道と有機的に結び付いた一連のものと考えられる。

(5)土　壙

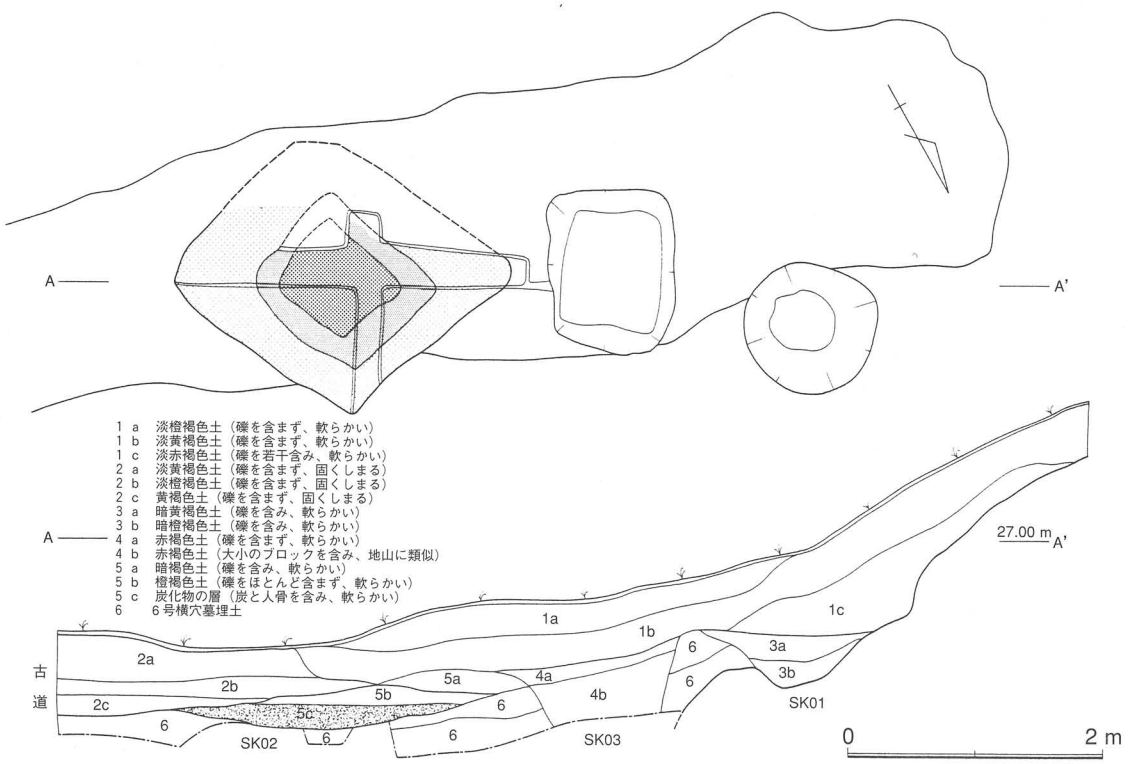
6号横穴墓の前庭部埋土からは、土壙が3基検出された。検出順にＳＫ０１、０２、０３、とした。それぞれの前後関係は、縦断する土層（第168図）から、ＳＫ０２⇒０１・０３の順で穿たれたものと考えることができた。

［ＳＫ01］（第168図）

3基の中で、最も西側で検出した土壙で、平面形は円形に近い形を呈し、上端で径108㎝、下端で径42㎝、深さ39㎝を測る。北側は地山を、南側は5号横穴墓の埋土を一部切って掘られている。遺物等は出土しておらず、性格については不明である。時期は土層の切り合い関係からＳＫ０３に近い時期と考えられる。

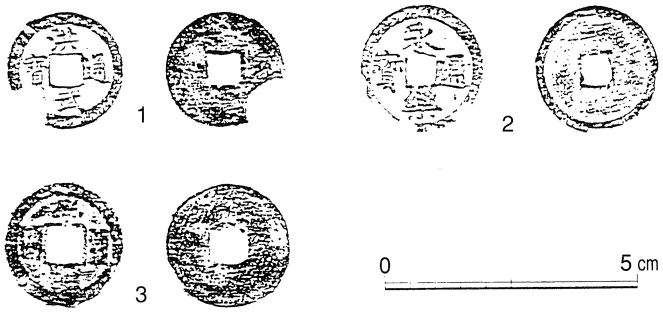
［ＳＫ02－火葬墓］（第170図）

遺　　構　トレンチ調査によって一部検出し、遺物を取り上げているものである。また、埋土中に堀こまれたもので、明確に堀り形を確認できなかった。3基の中で、最も東側で検出した土壙で、深さ10㎝程浅いものである。プランは、調査時に確認した状況では、長径185㎝、短径170㎝の方形と考えられる。また、平面的に中央部で52×57㎝程の黒色の部分が認められ、この範囲から火葬骨、古銭6枚、鉄釘が出土した。更にその周囲にそって幅25㎝程の暗褐色の部分が認められ、ここからは、土師器・鉄釘が出土した。そして、その外側には、やや褐色の部分があり、これを合わせた部分が遺構の範囲と推定した。



第168図　4区土壙（SK01・02・03）実測図（Ｓ＝1：60）

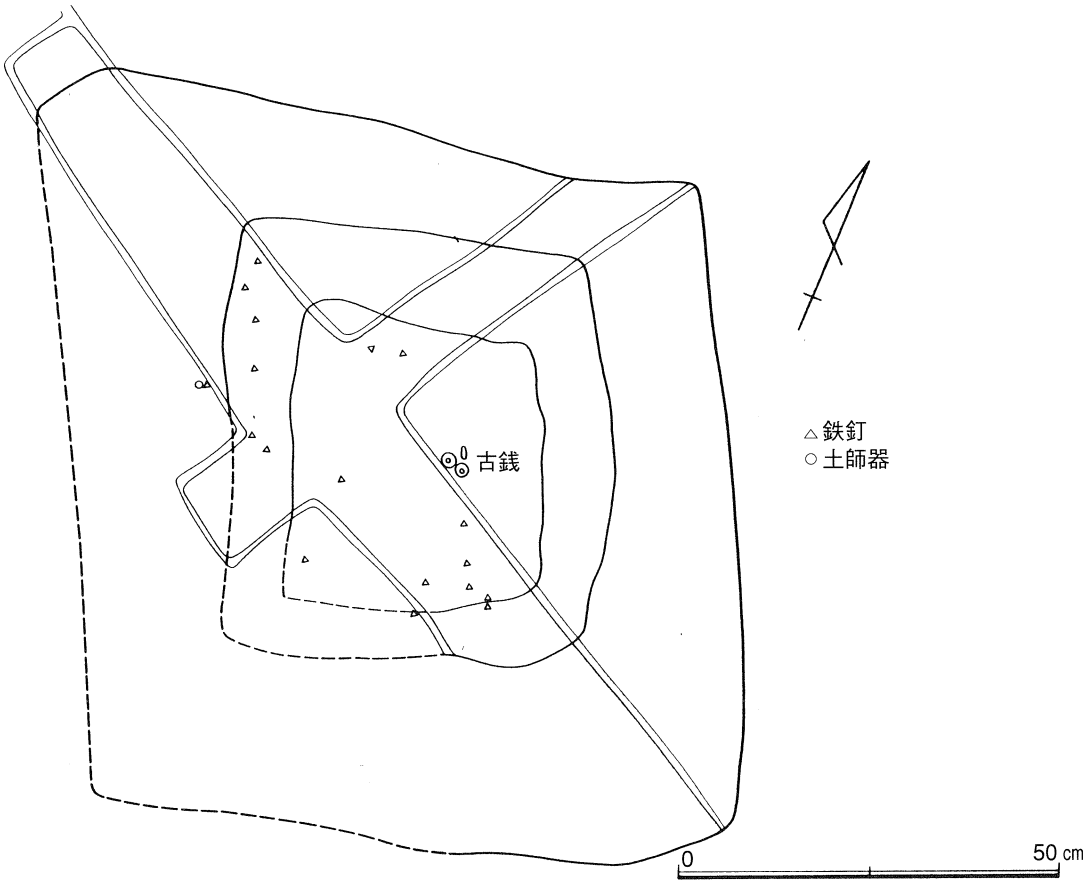
出土状況及び、土層から埋葬状況を復元してみると、やや、地表面を掘りくぼめた後に黒色、暗褐色の部分の範囲に棺を置いたものと考えられる。そして、炭化材と粉末状の炭等が多く見られることから、この場で燃やされた後に5層で土盛りされたものと考えられる。なお、5層は、厚さ25㎝程であるが、上部は、古道によって削平されていることから、本来はより厚く盛られていたものと推定される。



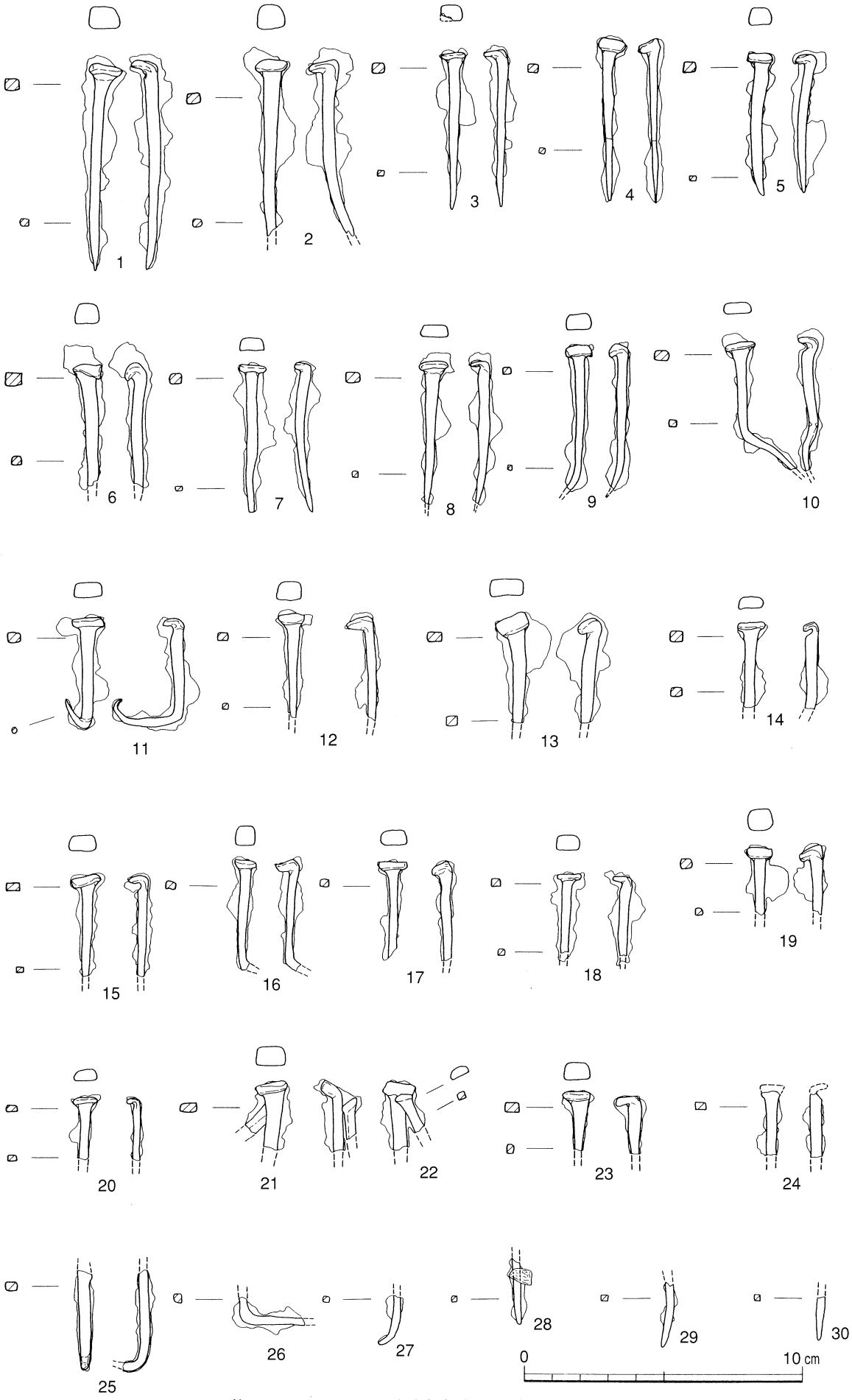
第169図　4区SK02出土古銭（S＝2：3）

遺　　物　出土遺物の古銭（第169図）は12枚あり、錆びで固まったものがあり詳細が分からないものもあるが、分かるものでは、「永楽通幣」「洪武通幣」「寛永通幣」が含まれる。鉄釘（第171図）は頭部で数えると24点出土している。全長6㎝前後を測り、頭部は方形で折り曲げられているものである。木質等の付着は見られなかった。

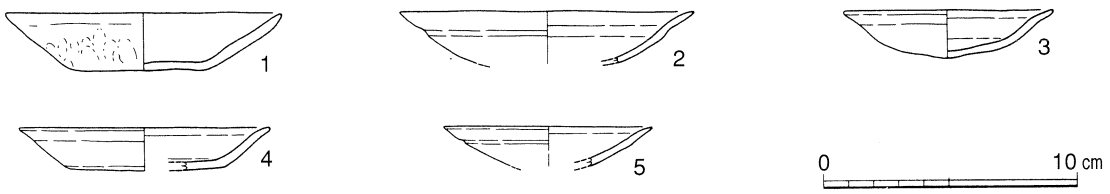
時　　期　古銭、土師器等の様相から16世紀頃と考えられる。



第170図　4区SK02遺物出土状況実測図（S＝1：10）



第171図　4区SK02出土鉄釘実測図（S＝1：2）

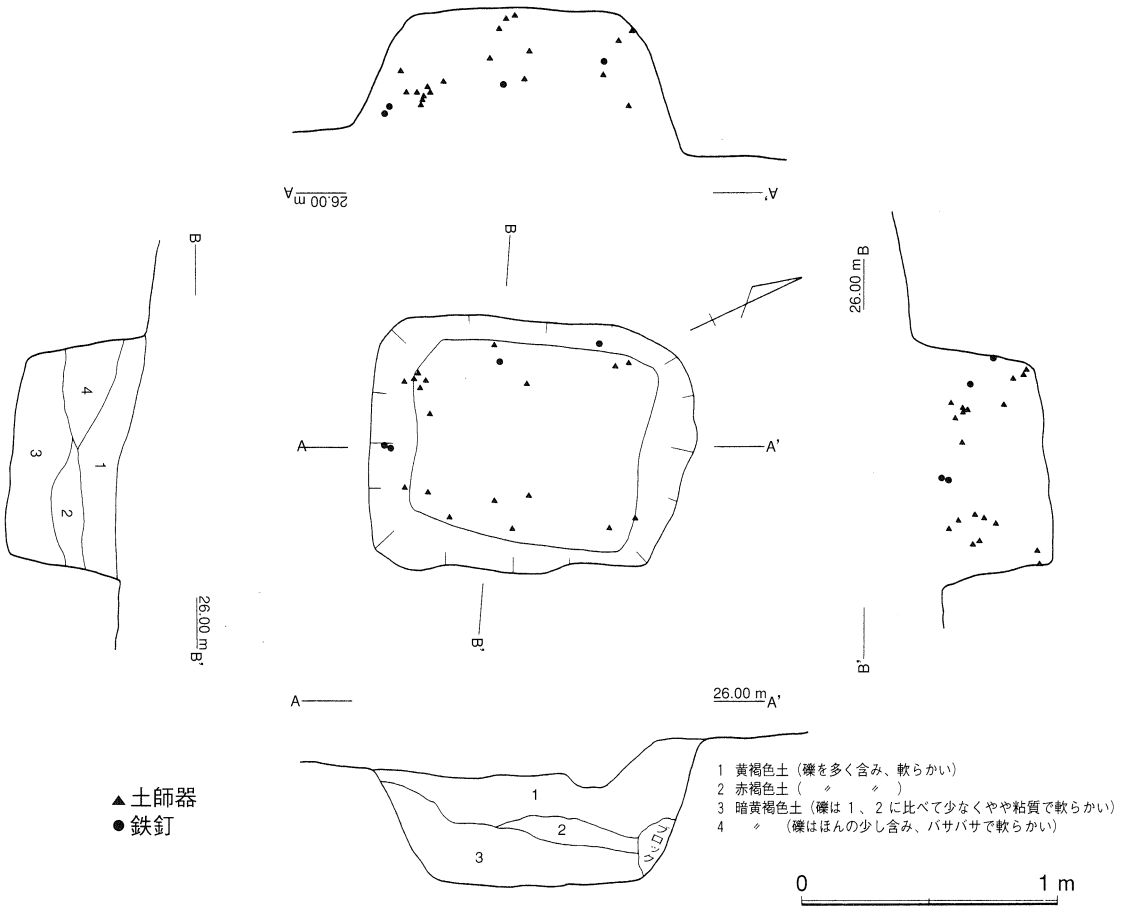


第172図　4区SK02・03出土土器実測図（S＝1：3）

［ＳＫ03－土葬墓］（第173図）

遺　　構　6号横穴墓の前庭部の右壁を一部削りとって掘られているものである。プランは長方形を呈すもので、長径129㎝、短径99㎝を測り、正方形に近いものである。深さは、43㎝であり、底面は平坦なものである。覆土は、上層から黄褐色土、赤褐色土、暗黄褐色土の順に堆積している。それぞれの層位から鉄釘、土師器が出土している。なお、鉄釘の出土状況から土壙の堀形と同規模の木製の棺桶が納められていたものと推定される。また、覆土の大部分はは墓壙内の棺が腐朽した後に堆積したものと考えられる。よって、出土した土師器は、本来棺上に存在していたものが落ちこんだものと考えられる。

遺　　物　鉄釘（第174図）は19点出土し、全て木質が付着していた。おそらく木製の棺桶に使用されていたものと考えられる。また、木質の付着状況により２つに分類でき、A類（１～８）は鉄釘を正面から見たときに釘先部分で木理が横方向に走り、側面では釘頭部分に横方向に走るものである。B類（９～18）は、A類と逆のもので、正面では釘頭部分で木理が横方向に走り、側面では釘先部分

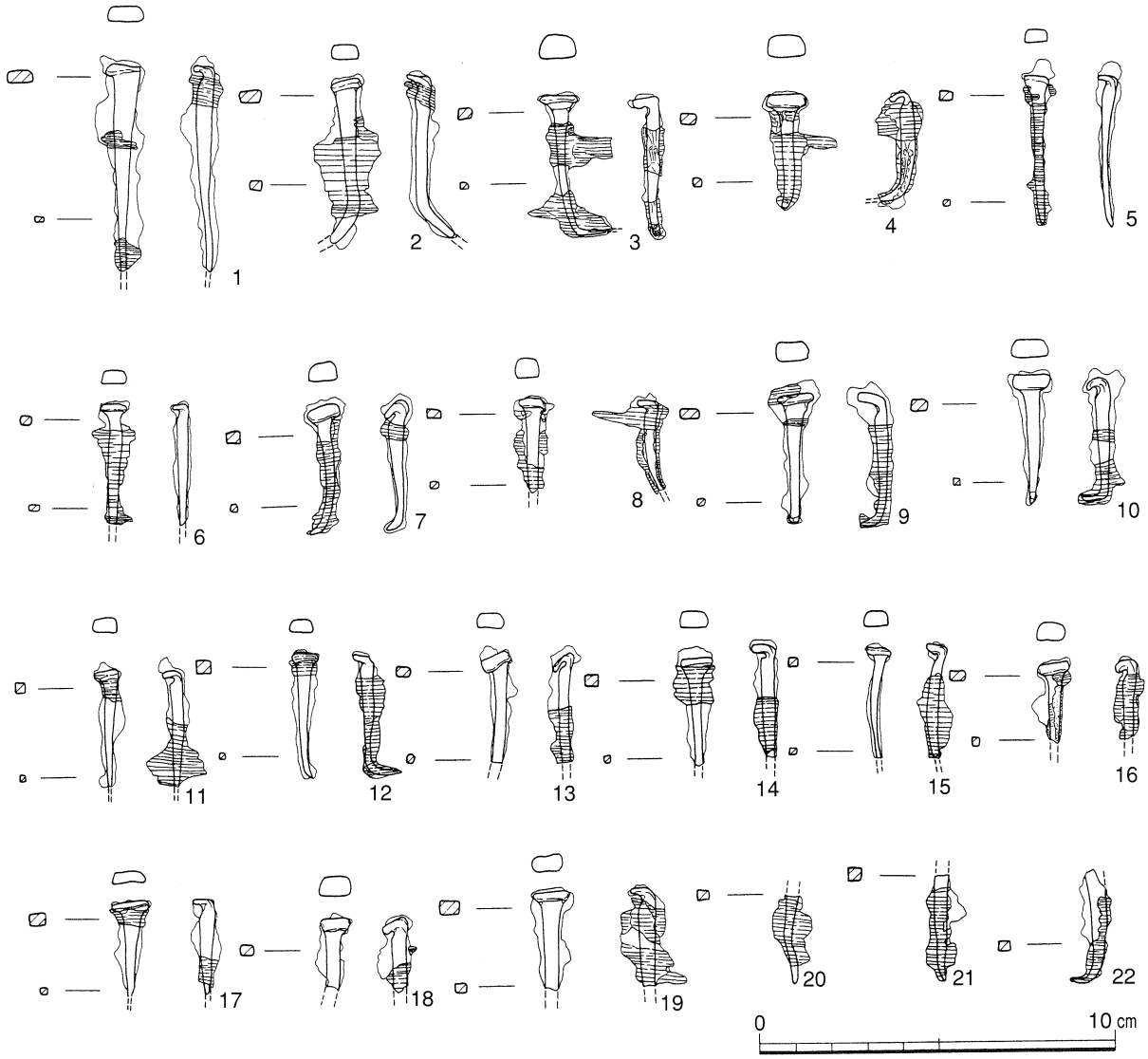


第173図　4区SK03遺構・遺物出土状況実測図（S＝1：30）

で横方向に走るものである。それぞれの数は、A類 8 点、B類10点、不明 4 点である。なお、棺に使用された板材の厚さは、釘頭付近の付着した木質から1.2㎝以上と推定される。

土師器（第172図）は 2 点出土し、4 は径10.0㎝の皿で、底面が平坦なものである。5 は径8.2㎝の皿でで、底面が丸く納められたものである。ＳＫ02出土のものと良く似たものである。

時　　期　出土した土師器から16世紀頃のものとして考えられる。



第174図　4区SK03出土鉄釘実測図（S＝1：2）

(6)小　結

以上、述べてきたように本調査区からは、6 世紀後半～ 7 世紀代の横穴墓群及びそれに伴うものと推定される墳丘、16世紀頃の火葬・土葬墓、そして、6 世紀後半～ 7 世紀後半以降にも使用された古道が検出された。それぞれの遺構、出土遺物について、以下、調査の成果と問題点について簡単ではあるが整理したい。

古墳・横穴墓　横穴墓の特徴は、以下の通りである。

- 基本的に 2 ～ 3 穴程にまとまって支群を形成している。
- 造墓時期を見ると大谷 3 期（1 穴）、大谷 4 期（11穴）大谷 5 期（1 穴）、不明（1 穴）であり、基本的に 4 期に造墓されているものが 8 割を占める。
- 玄室内の天井形態は、丸天井のものだけであり、家形に加工したものは認められない。
- 閉塞石は、割石のみで構成され、切石のものは使用していない。
- 基本的に羨道を持たない単純な形態のものである。（ただし、5 号横穴墓は、「意宇型」である。）
- 横穴墓の埋葬は、6 期まで認められる。（ただし、5 号横穴墓は、8 期まで）

以上が本横穴墓群の特徴であるが、他の調査区で検出した横穴墓群の様相と異なるものである。特に 5 期に築造されたものが 1 例のみであり、基本的に 4 期に築造された支群として考えてよいものであった。

古　　道　斜面では、版築状の盛土を施し、尾根では、掘削により平坦面または、溝を作り出しているものを検出している。同様な遺構は、1 区の尾根でも確認しており、一連のものであることは間違いないものと考える。それぞれは、時期によって改修され規模等が変化してきていると考えられる。調査では、時期ごとの古道の実態を捉えることはできなかったが、斜面側の盛土で作られた古道は、土層断面から、築造は 6 世紀後半と考えられる。そして、最低 4 回の盛土による改修がおこなわれ、最も大規模なものは、7 世紀後半以降におこなわれたものと考えられる。

古道は、1 区のものも含め、南北方向に走り、調査区外にも続くものであるが、その実態については、未調査のため不明な点が多い。ただし、幅 8 m 程に拡張されたものが一時期、機能していた可能性と何回かにわたる改修の存在から、この遺跡の南北に走る古道は、かなり頻繁に利用されるものであったと考えられ、重要な役割を担う道路であったと推定される。

第36表　４区ＳＤ０１、ＳＴ０１土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	甕	－	－	－		二重口縁	外面・内面とも風化のため調整不明	良好		
2	甕	－	－	－	9.2		外面・内面とも風化のため調整不明	良好		
3	鼓形器台 弥生土器	－	－	－		貝殻による沈線10条	外面・なで 内面・よこなで	良好		

第37表　４区４号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	12.5	4.0			２条沈線	外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
2	坏蓋	12.4	3.5			２条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
3	坏蓋	12.9	4.1			２条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
4	坏蓋	12.7	－			２条沈線	外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
5	坏蓋	13.3	4.0			２条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ５）	
6	坏蓋	12.8	4.0			２条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ５）	
7	坏蓋	12.1	4.1			２条沈線	外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ５）	
8	坏蓋	10.6	3.3				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ７）	天井部にへら記号×
9	坏身	9.5	3.5	11.6			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ７）	底部にへら記号×
10	坏蓋	12.5	2.8			輪状つまみ	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ｂ２）	
11	坏身	10.8	4.0	13.3			外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
12	坏身	10.2	3.9	13.2			外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	底部欠
13	坏身	11.1	4.1	13.3			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ５）	口縁部が歪んでいる
14	坏身	10.2	4.4	12.9			外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
15	坏身	12.7	3.7	15.7			外面・やや荒いへら削り、かな 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
16	坏身	11.2	3.6	13.8			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ５）	
17	坏身	11.3	4.2	13.7			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ５）	底部欠
18	坏身	11.0	4.0	13.2			外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
19	坏身	10.5	4.0	13.3			外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
20	坏身	11.0	3.5	13.0			外面・やや荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
21	坏身	10.0	4.8	12.8			外面・荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	やや良好	（Ａ４）	
22	坏身	11.0	3.6	13.2			外面・荒いへら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	底部が膨らむ
23	短頸壺	11.2	11.5	15.0		口縁部に沈線	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良		
24	提瓶	11.2	23.1	20.4 16.8		肩部に耳たぶ状把手１対	口縁部外面・内面とも回転なで、背部・かきめ、腹部・かきめ、たた	良好		

第38表　4区4号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	刃　幅	頸　部	刃部厚	頸　厚	備　考
－1	鉄鏃	3.8(残)	－	－	0.4	－	0.3	木質一部残存

第39表　4区5号横穴墓出土土器観察表（前庭部）

（単位：cm）

番号	器　種	法量				形態上の特徴	調　整	色調焼成	分類	備　考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	12.0	4.2			外面・2条沈線 内面・端部に浅い沈線	外面、回転へら削り、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A5）	
2	坏蓋	12.0	4.7			内面・端部に浅い沈線	外面、回転へら削り、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
3	坏身	11.1	4.5	13.8			外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A5）	
4	坏身	10.8	4.5	13.6			外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
5	坏蓋	12.9	3.9				外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
6	坏身	11.5	4.0	14.2			外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
7	坏蓋	13.4	3.6			外面・1条沈線 内面・端部に浅い沈線1条	外面・へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	天井部にへら記号
8	坏蓋	11.5	4.5				外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
9	坏身	9.8	4.1	12.3			外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
10	坏蓋	11.0	4.2				外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
11	長頸瓶	8.7	19.3	14.5	4.0		外面、回転なで、回転へら削り 内面、回転なで	良好	（4型）	
12	脚付椀	11.4	7.7		7.2		外面、回転なで、回転へら削り 内面、回転なで、静止なで	良好		
13	小壺	－	3.0	6.8	－		外面、回転なで、回転へら削り 内面、回転なで、静止なで	良好		
14	長頸瓶	10.5	26.0	18.0	12.0	頸部、3条の沈線、高台 胴部、4条の沈線	外面、回転なで、回転へら削り 内面、回転なで	良好		
15	直口壺	8.9	13.1	12.5	7.9		外面、回転なで、かきめ、回転へら削り、内面、回転なで、静止なで	良好		
16	甕	20.2	－	－	－	刷毛目	外面、横なで 内面、横なで、削り	良好		
17	甕	11.6	－	－	－	口縁部に朱が塗ってある。	外面、なで 内面、削り	良好		
18	甕	－	－	－	－		外面、横なで 内面、横なで	良好		

第40表　4区5号横穴墓出土土器観察表（玄室）

（単位：cm）

番号	器　種	法量				形態上の特徴	調　整	色調焼成	分類	備　考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	12.3	4.0			2条沈線	外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
2	坏身	11.5	3.4	13.0			外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
3	坏蓋	12.3	3.7			2条沈線	外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
4	坏蓋	10.8	3.7	13.1			外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	かなり変形している
5	坏蓋	12.0	3.9			外面・2条沈線 内面・端部に浅い沈線1条	外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
6	坏身	10.7	3.9	13.5			外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	
7	坏蓋	12.5	3.9			外面・1条沈線 内面・端部に浅い沈線1条	外面、へら切り後なで、回転なで 内面、回転なで	良好	（A7）	
8	坏蓋	12.8	4.5			2条沈線	外面、へら切り後なで、静止なで 内面、回転なで、静止なで	良好	（A7）	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
9	坏身	10.0	4.0	12.4			外面、へら切り後なで、へらきり内面、回転なで、静止なで	良好	(A 8)	
10	平瓶	6.4	16.1	13.6		頚部に浅い沈線1条	外面、回転なで、回転へら削り内面、回転なで	良好	(C 3)	口縁部から肩部に自然釉
11	坏蓋	13.4	3.7	15.9		輪状つまみ	外面、回転なで、へら切り後なで外面、回転なで、静止なで	良好	(B 1)	
12	坏蓋	14.4	4.1	16.9		輪状つまみ	外面、静止糸切り、回転へら削り内面、回転なで、静止なで	良好	(B 3)	
13	坏身	16.5	5.5			高台付	外面、静止糸切り、回転なで内面、回転なで、静止なで	良好	(B 3)	

第41表　4区5号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頚厚	備考
1	刀子	10.1(残)	3.7	1.3	0.8	0.4	0.35	木質一部残存

第42表　4区5号横穴墓出土耳環観察表

(単位：mm)

番号	器種	a	b	c	d	e	備考
−2	耳環	20	22	11	5	6	

第43表　4区6号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	13.1	4.5			2条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A 4)	
2	坏身	11.3	4.0	14.1			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A 4)	
3	坏蓋	13.4	4.3			2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 4)	
4	坏身	11.2	3.9	14.4			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A 4)	
5	坏身	11.5	4.0	14.1			外面・中心部を残す削り回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 4)	
6	坏蓋	12.8	4.5			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
7	坏身	11.1	4.2	13.6			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
8	坏蓋	13.2	3.8				外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
9	坏身	10.6	4.4	13.6			外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
10	坏蓋	13.0	4.6			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
11	坏身	10.4	4.1	13.5			外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
12	坏蓋	13.0	4.1			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
13	坏身	11.0	4.0	13.6			外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
14	坏蓋	13.2	4.5			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
15	坏蓋	12.6	4.8			浅い2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
16	坏蓋	13.0	4.0			2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
17	坏蓋	12.7	4.3			浅い2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	
18	坏身	11.1	3.3				外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A 5)	

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
19	坏身	10.6	3.8	13.5			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
20	坏蓋	12.6	4.4			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
21	坏蓋	12.0	3.7			2条沈線	外面・風化により調整不明 内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	
22	坏蓋	—	—			2条沈線	外面・やや荒い削り 内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	口縁端部欠
23	坏蓋	—	—			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	口縁端部欠
24	坏身	10.5	4.2	12.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	
25	坏身	11.2	3.9	13.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	
26	坏身	10.5	3.3	12.8			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	
27	坏身	10.8	3.9	12.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	
28	坏蓋	11.2	3.8				外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	やや不良	(A5)	
29	瓹	12.0	15.3	9.5		頸部・櫛状工具による波状文、沈線 胴部・櫛状工具による刺突文、沈線	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(A5)	
30	瓹	10.4	14.3	8.5		頸部・櫛状工具による波状文、沈線 胴部・櫛状工具による刺突文、沈線	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好	(A5)	
31	直口壺	6.5	9.6	9.3			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
32	直口壺	9.0	13.0	11.2			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
33	長頸壺	6.7	17.9	11.6		頸部～肩部・かきめ	外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	良好		
34	広口壺	9.5	14.1	14.3		口縁部～胴部・かきめ 肩部に把手がつく	外面・回転へら削り 内面・回転なで	良好		
35	坏身	10.0	3.5	12.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで	良好	(A5)	
36	坏身	10.4	—	13.0			外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(A4)	底部欠
37	坏身	11.5	4.4	14.2			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
38	坏身	11.2	4.2	14.1			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	

第44表　4区6号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
−1	大刀	77.8	66.3	3.1	1.5	0.5	0.4	柄の目釘、木質一部残存
−2	環状製品		—	—	0.6	—	0.6	鉛製？
−3	鉈	1.4	—	—	2.0	—	2.0	
−4	大刀	3.7(残)	3.7(残)	4.0	—	1.0	—	大刀の破片
−5	刀子	5.2(残)	—	—	1.1	—	0.4	茎部のみ 木質一部残存

第45表　4区6号横穴墓出土耳環観察表

(単位：mm)

番号	器種	a	b	c	d	e	備考
−6	金環	18.7	20.7	11.3	4.8	6.2	金箔がところどころ見える。

第46表　4区7号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	坏蓋	13.0	4.3			2条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
2	坏身	11.0	4.4	13.7			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
3	坏蓋	13.1	4.5			2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
4	坏身	11.6	4.2	14.4			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
5	直口壷	11.2	14.0	5.5			外面・回転へら削り、回転なで、かきめ、内面・回転なで、静止なで	良好		
6	坏蓋	12.4	3.9			1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
7	坏身	10.2	3.6	13.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
8	坏蓋	12.2	4.1			1条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで　内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
9	坏身	10.2	3.6	12.8			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
10	坏蓋	12.5	3.8			1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
11	坏身	10.0	3.1	12.8			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
12	坏身	10.0	3.5	12.6			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
13	坏身	10.5	3.4	13.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	

第47表　4区7号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
－1	鉄鏃	15.7	7.2	3.0	0.7	0.4	0.3	矢柄の木質と樹皮巻若干残存
－2	鉄鏃	8.3(残)	2.8(残)	2.0	0.6	0.3	0.3	鏃身先端欠
－3	鉄鏃	5.3(残)	－	－	0.4	－	0.3	茎部付近 木質一部残存
－4	刀子	10.7(残)	8.3	1.1	0.8	0.4	0.3	木質と樹皮巻 一部残存

第48表　4区8号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	坏蓋	13.8	4.8			外面・2条沈線 内面・端部に沈線1条	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	（A4）	
2	坏身	12.0	4.5				外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
3	坏蓋	13.7	4.7			外面・2条沈線 口縁端部・1条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
4	坏身	10.7	4.3	13.4			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
5	坏蓋	13.3	4.3			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
6	坏身	12.0	4.8	14.7			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
7	坏蓋	13.2	4.5			2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
8	坏身	12.2	4.2	13.4			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
9	坏蓋	14.8（歪み）	5.0			外面・1条沈線 口縁端部内面・1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
10	坏身	11.0	4.1	13.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
11	坏蓋	12.0	3.5			外面・1条沈線 内面・端部1条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
12	坏身	10.5	3.6	13.2			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
13	甕	12.3	15.8	9.6		頸部1条沈線、上部に波状文、胴部に2条沈線、櫛状工具による刺突文	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
14	坏身	—	—	—			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良		
15	高坏	15.0	—	—			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好		
16	小皿	8.4	1.9			口縁部二段なで	外面・端部横なで、底部なで 内面・横なで	良好		土師器
17	小皿	8.9	1.9			口縁部二段なで	外面・端部横なで、底部なで 内面・横なで	良好		土師器
18	小皿	8.9	2.1			口縁部二段なで	外面・端部横なで、底部なで 内面・横なで	良好		土師器
19	小皿	8.6	2.0			口縁部二段なで	外面・端部横なで、底部なで 内面・横なで	良好		土師器
20	小皿	8.2	2.2			口縁部二段なで	外面・端部・横なで、底部・なで 内面・なで	良好		土師器
21	小皿	8.2	2.0			口縁部二段なで	外面・端部・横なで、底部・なで 内面・なで	良好		土師器
22	小皿	8.2	1.9			口縁部二段なで	外面・端部・横なで、底部・なで 内面・なで	良好		土師器
23	小皿	8.4	1.8			口縁部二段なで	外面・端部・横なで、底部・なで 内面・なで	良好		土師器
24	小皿	8.3	2.1			口縁部二段なで	外面・端部・横なで、底部・なで 内面・なで	良好		土師器
25	小皿	8.8	1.9			口縁部二段なで	外面・端部・横なで、底部・なで 内面・なで	良好		土師器

第49表　4区8号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
−5	不明鉄器	3.4(残)	—	—	1.5(最大)	—	0.2	
−6	不明鉄器	3.0(残)	—	—	1.5(最大)	—	0.2	
−7(A)	環状製品	1.7	—	—	0.3	—	0.6	
−7(B)	環状製品	1.8	—	—	0.4	—	0.6	
−8	鉄鏃	8.5(残)	6.2	2.1	0.5	0.3	0.25	木質残存

第50表　4区8号横穴墓出土耳環観察表

(単位：mm)

番号	器種	a	b	c	d	e	備考
−9	耳環	27.3	29.5	18.2	5.4	5.5	

第51表　4区9号横穴墓出土土器観察表(玄室)

(単位：cm)

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	12.2	3.4			外面・2条沈線 内面・端部に1条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
2	坏蓋	12.3	3.7			外面・2条沈線 内面・端部に1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
3	坏身	11.6	4.0	14.4			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	板状工具によるなで
4	坏身	11.2	4.3	14.3			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
5	坏身	10.5	4.0	13.9			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
6	坏身	11.3	3.9	14.4			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
7	坏身	11.2	3.9	14.2			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	
8	坏身	10.8	3.9	13.7			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
9	坏蓋	13.5	4.0				外面・へら切り後なで回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
10	坏身	11.1	3.9	13.9			外面・へら切り後なで、回転なで、 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
11	坏蓋	13.5	4.3			沈線1条	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
12	坏身	11.2	4.4	13.5			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
13	坏蓋	13.0	4.0			沈線2条	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
14	坏身	11.1	4.1	13.7			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
15	坏蓋	12.3	4.3			沈線1条	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
16	坏身	10.9	4.5	13.6			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
17	坏蓋	12.6	4.4			沈線1条	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
18	坏身	11.0	4.1	13.4			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
19	坏蓋	12.2	4.8			外面・沈線1条 内面・端部に沈線1条	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
20	坏身	11.3	4.5	14.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
21	坏蓋	13.0	4.0			外面・沈線1条 内面・端部沈線1条	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
22	坏身	11.5	4.2	14.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
23	高坏	10.1	11.4		7.6	杯部・沈線2条、櫛状工具による刺突文、透・2段3方切れ込みのみ	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
24	提瓶	15.0	6.0	24.3		把手は輪状、左右一対 2段口縁	外面・頸部・回転なで、胴部・かきめ、内面、胴部、たたき	良好	(B1)	
25	直口壺	9.8	13.2	12.8			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好		
26	脚付直口壺	9.2	14.8	12.0	10.2		外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで	やや不良		
27	坏身	12.6	3.6	14.6			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	

第52表　4区9号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
−1	鉄鏃	7.4(残)	5.7	1.5	0.8	0.3	0.2	鏃身部のみ
−2	鉄鏃	5.8(残)	5.2	1.2	0.6	0.3	0.3	鏃身部のみ
−3	鉄鏃	3.6(残)	3.6(残)	1.2	−	0.25	−	鏃身先端付近
−4	鉄鏃	3.7(残)	−	−	0.4	−	0.4	茎部先端
−5	刀子	5.8(残)	1.5(残)	0.9	1.0	0.4	0.4	茎部付近 木質残存
−6	刀子	7.4(残)	2.5(残)	0.8	1.1	0.4	0.3	木質一部残存

第53表　４区１０号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 口径	法量 器高	法量 胴最大径	法量 脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	坏蓋	13.2	3.8			外面・２条沈線 内面・端部に沈線１条	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
2	坏身	11.3	3.5	14.0			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
3	坏蓋	12.8	3.6			外面・２条沈線 内面・端部に沈線１条	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
4	坏身	12.0	4.0	14.3			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
5	坏蓋	13.4	3.4			肩部・沈線１条	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
6	壺	－	－	－		頸部・１条、稜１条	外面・回転なで 内面・回転なで	良好		

第54表　４区10号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
－１	鉄鏃	3.8(残)	3.0	2.3	0.5	0.4	0.3	鏃身部先端欠 茎部欠
－２	鉄鏃	10.5(残)	6.5	2.5	0.7	0.3	0.4	
－３	鉄鏃	7.0(残)	2.9	1.2	0.5	0.3	0.3	

第55表　４区11号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量 口径	法量 器高	法量 胴最大径	法量 脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	坏蓋	13.6	4.3				外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
2	坏身	11.1	4.5	14.0			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
3	坏蓋	13.4	4.4			外面・沈線１条 内面・端部沈線１条	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
4	坏身	10.9	4.2	14.0			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ａ４）	
5	壺	11.6	17.0	9.8		頸部・波状文、沈線２条 胴部・刺突文、沈線２条	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
6	直口壺	8.5	13.2	12.5			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
7	直口壺	9.8	11.5	11.8			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
8	有蓋高坏	11.7	10.0	10.0			外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（Ｅ２）	

第56表　４区11号横穴墓出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器種	全長	頭部長（刃部）	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
－１	刀子	8.8(残)	5.6	0.9	0.6	0.3	0.2	茎部先端欠 木質が残る
－２	刀子	4.2(残)	4.2	0.7	－	0.25	－	非常に細い
－３	鉄鏃	11.8(残)	7.2	2.7	0.4	0.4	0.4	Ｄ区埋土出土
－４	鉄鏃	13.5	6.3	2.6	0.3	0.3	0.3	完形
－５	鉄鏃	13.8	7.0	2.4	0.8	0.4	0.4	完形

第57表　4区11号横穴墓出土玉類観察表

（単位：mm）

番号	器種	材質	色調	長径	短径	孔径	備考
－6	丸玉	土製	淡褐色	7.9	4.5	1.4	
－7	丸玉	土製	淡褐色	7.5	5.0	1.1	
－8	丸玉	土製	淡褐色	8.0	5.3	1.6	
－9	丸玉	土製	淡褐色	7.5	5.2	1.6	
－10	丸玉	土製	淡褐色	7.5	5.5	1.6	
－11	丸玉	土製	淡褐色	7.5	5.1	1.2	
－12	丸玉	土製	淡褐色	7.8	5.1	1.4	
－13	丸玉	土製	淡褐色	7.2	5.0	1.1	
－14	丸玉	土製	淡褐色	7.9	5.0	1.7	
－15	丸玉	土製	淡褐色	7.7	5.3	1.5	
－16	丸玉	土製	淡褐色	8.2	5.3	1.5	
－17	丸玉	土製	淡褐色	7.9	5.4	1.4	
－18	丸玉	土製	淡褐色	7.2	5.1	1.8	
－19	丸玉	土製	淡褐色	7.7	5.3	1.5	
－20	丸玉	土製	淡褐色	7.7	5.0	1.3	
－21	丸玉	土製	淡褐色	7.3	5.4	1.5	
－22	丸玉	土製	淡褐色	7.9	6.0	1.5	
－23	丸玉	土製	淡褐色	7.9	4.7	1.5	
－24	丸玉	土製	淡褐色	7.8	6.6	1.4	
－25	丸玉	瑪瑙	淡橙色	10.4	7.4	1.2～3.2	片面穿孔

第58表　4区12号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	14.2	4.8			1条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	（A4）	
2	坏身	12.2	4.5	14.8			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	（A4）	
3	坏蓋	14.6	5.0			1条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	（A4）	
4	坏身	12.4	4.8	15.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	（A4）	
5	坏蓋	14.6	5.0			1条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	不良	（A4）	
6	坏身	12.3	5.0				外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
7	坏蓋	13.1	4.9			外面・沈線2条 内面・端部沈線1条	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
8	坏身	11.0	4.3	14.3			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
9	坏蓋	12.5	4.1			外面・沈線2条 内面・端部沈線1条	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	へら記号×
10	坏身	10.5	3.2	13.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	へら記号×
11	坏蓋	13.0	4.4			1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	へら記号×

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
12	坏身	10.5	3.5	13.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	へら記号×
13	坏蓋	12.8	4.1			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	へら記号×
14	坏身	11.3	4.2	14.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
15	坏身	11.2	4.1	13.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
16	坏身	11.3	4.2	13.9			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	底部・板状工具によるなで
17	坏蓋	12.5	4.1			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	内外ともへら記号／
18	坏蓋	13.0	4.1			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	へら記号×
19	坏蓋	12.5	4.0			2条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
20	坏身	10.6	3.2	13.6			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
21	坏蓋	13.4	3.9			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
22	坏身	12.4	4.0	14.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
23	坏蓋	13.0	4.9			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
24	坏身	11.1	3.7	13.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
25	坏蓋	12.8	3.8			1条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
26	坏身	10.1	3.3	13.1			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
27	坏蓋	12.5	3.6			1条沈線	外面・周辺削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
28	坏身	10.6	3.9	12.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
29	坏蓋	12.4	4.0			2条沈線	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
30	坏身	11.1	4.0	13.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
31	坏蓋	13.0	4.1			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
32	坏蓋	12.7	4.5			2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
33	坏身	10.4	3.6	13.1			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
34	坏蓋	12.4	3.7			2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
35	坏身	10.0	3.6	12.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	へら記号×
36	坏蓋	12.4	4.2			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	へら記号‖
37	坏身	10.2	3.6	12.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
38	坏蓋	12.2	4.1			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
39	坏身	10.0	3.6	12.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
40	坏蓋	13.0	4.2			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
41	坏身	11.0	3.6	13.6			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
42	坏蓋	13.4	5.0			2条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	へら記号×
43	坏身	10.3	4.0	13.8			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
44	坏蓋	12.5	4.7			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
45	坏蓋	13.2	4.2			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
46	坏身	11.5	4.4	14.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
47	坏蓋	13.5	4.0			2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
48	坏身	11.6	5.1	14.1			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
49	坏身	10.4	4.0	13.3			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	歪みあり
50	坏蓋	13.8	4.6			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
51	坏身	12.1	4.2	14.4			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
52	坏身	11.6	4.2	13.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
53	高坏	15.1	12.4		11.3	杯外部に2条沈線、透しは1段3方(三角)、脚に2条ち	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A3)	
54	高坏	15.4	12.5		10.0	杯外部に2条沈線、透しは1段3方(三角)、脚に2条ち	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A3)	
55	高坏	14.8	12.6		10.8	杯外部に2条沈線、透しは1段3方(三角)、脚に2条沈線	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A3)	
56	有蓋高坏	12.2	12.6	14.3	11.8	透しは上下2段(上・3方、下・4方)	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
57	有蓋高坏	12.3	13.2	14.3		透しは上下2段(上・3方、下・4方)	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		
58	直口壺	10.0	12.2				外面・回転なで、かきめ 内面・回転なで、静止なで	やや不良		底部にへら記号×
59	甕	12.8	17.8	10.5		頸部・櫛状工具による波状文、1条沈線、肩部・2条沈線、刺突文	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	
60	甕	11.7	13.4	8.4		頸部・櫛状工具による波状文、1条沈線、肩部・2条沈線、刺突文	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
61	短頸壺	7.4	6.2	8.6			外面・回転なで、へら切り、内面・回転なで、静止なで、工具なで	良好		ミニチュア
62	直口壺	9.5	12.6	11.8			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好		

第59表　4区12号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
−1	刀子	16.2	10.8	0.9	1.1	0.3	0.3	鋒及び柄の木質残存、刀部の根元が幅広
−2	刀子	8.7(残)	5.0	1.0	1.1	0.3	0.4	茎部に若干木質残存
−3	鉄鏃	17.6	3.4	1.1	0.4	0.3	0.3	矢柄の木質残存
−4	鉄鏃	14.4	2.9	0.9	0.4	0.3	0.3	矢柄の木質と樹皮巻残存
−5	鉄鏃	12.5(残)	1.4	0.9	0.4	0.3	0.3	矢柄の木質と樹皮巻残存
−6	鉄鏃	12.8(残)	2.5	1.0	0.4	0.2	0.3	茎下端部欠
−7	鉄鏃	14.6(残)	2.0	1.0	0.5	0.2	0.3	茎下端部欠 矢柄の木質残存
−8	鉄鏃	12.3(残)	3.1(残)	1.0	0.5	0.3	0.3	茎下端部欠 矢柄の木質残存
−9	鉄鏃	7.4(残)	−	−	0.4	−	0.4	茎部のみ
−10	鉄鏃	5.3(残)	−	−	0.4	−	0.2	茎部のみ 矢柄の木質残存
−11	鉄鏃	13.3	7.2	3.0	0.4	0.3	0.3	矢柄の木質一部残存
−12	鉄鏃	10.3	4.6	2.2	0.6	0.4	0.3	矢柄の木質樹皮巻残存
−13	鉄鏃	8.8(残)	3.5	2.1	0.5	0.4	0.3	矢柄の木質残存

第60表　4区14号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
1	坏蓋	12.6	4.3			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
2	坏身	10.4	3.8	13.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	やや不良	(A4)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
3	坏身	10.5	4.0	13.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A4)	
4	坏蓋	13.3	4.7			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
5	坏身	11.6	4.7	14.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A4)	
6	坏蓋	13.3	4.7			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
7	坏身	11.3	4.4	14.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A4)	
8	直口壷	10.3	13.6	13.5			外面・回転なで、回転なで 内面・回転なで	良好		
9	坏蓋	12.5	4.5			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
10	坏身	10.6	4.0	13.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	

第61表　4区14号横穴墓出土耳環観察表

(単位：mm)

番号	器種	a	b	c	d	e	備考
−3	耳環	28.0	−	−	0.5	0.5	やや隅丸方形

第62表　4区15号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	12.7	4.7			外面・2条沈線 内面・端部に1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
2	坏蓋	12.5	4.5			外面・2条沈線 内面・端部に浅い1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
3	坏蓋	12.0	4.5			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
4	坏身	10.8	3.4	13.5			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
5	坏蓋	12.7	4.0			1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
6	坏身	10.5	4.3	13.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
7	坏蓋	14.0	4.4			外面・1条沈線 内面・端部に1条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
8	坏身	11.6	4.9	14.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
9	坏身	12.3	4.6				外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
10	坏身	11.3	4.2	14.0			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
11	坏身	12.4	4.0	15.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
12	坏蓋	13.3	4.1			外面・2条沈線 内面・端部に1条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	やや不良	(A5)	
13	坏身	11.5	4.0	14.3			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
14	坏蓋	13.4	4.3			外面・2条沈線 内面・端部に1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	(A5)	
15	坏身	12.0	4.7	14.9			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	やや良好	(A5)	
16	坏蓋	13.2	4.4			外面・2条沈線 内面・端部に1条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
17	坏身	11.4	4.2	14.4			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
18	坏蓋	13.4	4.2			外面・2条沈線 内面・端部に浅い1条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	やや不良	(A5)	
19	坏身	11.5	3.8	13.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
20	坏身	10.7	4.4	13.9			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
21	坏身	10.9	4.0	14.1			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
22	坏蓋	12.8	4.1			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
23	坏蓋	13.5	4.7			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
24	坏身	10.6	4.2	13.0			外面・周辺削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	底部外面にへら記号×
25	甕	10.4	13.0	8.7		頸部・櫛状工具による波状文、胴部櫛状工具による刺突文、2条沈線	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで	良好	(A5)	
26	坏身	11.0	4.0	13.8			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	

第63表　4区15号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
−1	刀子	9.4	5.3	1.2	0.8	0.3	0.3	木質残存
−2	環状製品	−	−	−	0.3	−	0.2	断面が隅丸方形状に近い。径は徐々に細くなる

第64表　4区15号横穴墓出土玉類観察表

(単位：mm)

番号	器種	材質	色調	長径	短径	孔径	備考
−3	勾玉	不明	淡白色	15.2	9.5	2.1	先端部一部欠

第65表　4区15号横穴墓出土耳環観察表

(単位：mm)

番号	器種	a	b	c	d	e	備考
−4	耳環	26.7	29.6	15.5	7.0	7.3	
−5	耳環	27.0	30.0	15.6	7.0	7.3	

第66表　4区16号横穴墓出土土器観察表

(単位：cm)

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	13.6	5.0			2条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
2	坏身	12.5	4.1	15.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
3	坏身	11.4	4.7	14.1			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	底部板状工具によるなで
4	坏蓋	13.8	3.9			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
5	坏蓋	13.8	4.9			1条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	底部にへら記号×
6	坏身	10.8	3.8	13.8			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
7	坏蓋	12.5	3.7			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
8	坏蓋	12.0	4.4			2条沈線	外面・周辺削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
9	坏蓋	12.0	4.1			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
10	坏身	10.6	3.8	13.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
11	坏身	10.3	3.7	13.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
12	坏身	10.2	3.7	13.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
13	坏蓋	13.8	4.8			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
14	坏身	12.0	4.3	15.0			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
15	坏身	11.2	4.3	14.3			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
16	坏身	11.4	4.6	14.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
17	坏蓋	12.8	3.9			2条沈線	外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
18	坏蓋	13.6	4.5			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
19	坏蓋	13.0	8.0			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
20	坏蓋	13.4	4.7			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
21	坏身	11.0	4.5	14.1			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
22	坏蓋	12.9	5.2			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
23	坏蓋	13.0	4.3			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
24	坏蓋	12.2	4.6			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
25	坏蓋	12.4	4.5			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
26	坏身	10.8	4.0	13.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
27	坏身	10.6	4.5	13.5			外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
28	坏身	10.8	4.2	13.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
29	坏蓋	12.2	4.0			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
30	坏身	10.5	3.6	12.9			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
31	坏蓋	12.2	4.0			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	天井部にへら記号／
32	坏身	10.2	3.6	13.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
33	坏蓋	12.4	3.9			2条沈線	外面・中心部を残す削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
34	坏身	11.0	3.7	13.2			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
35	坏身	11.4	3.7	13.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
36	坏身	10.8	3.5	13.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
37	坏蓋	12.2	4.3			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
38	坏蓋	12.8	4.8			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
39	坏身	10.6	3.8	13.4			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A6)	底部に板状工具によるなで
40	坏蓋	12.0	3.9			1条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 両面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
41	坏身	10.3	4.4	12.8			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	底部に板状工具によるなで
42	直口壺	11.0	12.2	13.3			外面・回転へら削り、回転なで、肩部かきめ、内面・回転なで、静止な	良好		
43	直口壺	11.5	12.5	13.4			外面・頸部から胴部かきめ、回転へら削り、内面・回転なで、静止なで	良好		
44	直口壺	10.3	11.4	12.9			外面・頸部から胴部かきめ、回転へら削り、内面・回転なで、静止なで	良好		
45	直口壺	8.6	12.6	12.2			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
46	直口壺	8.0	12.3	11.2			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
47	甕	12.5	13.2	9.3		頸部・稜、櫛状工具による波状文、沈線1条、胴部、刺突文、沈線2条	外面・回転なで、回転へら削り、胴部かきめ、内面・回転なで	良好	(A5)	

番号	器種	法量				形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
48	甕	11.8	15.1	9.3		頸部・稜、櫛状工具による波状文、沈線1条、胴部、刺突文、沈線2条	外面・回転なで、回転へら削り、胴部かきめ、内面・回転なで	良好	(A5)	
49	提瓶	7.8	12.3	13.0 10.6		肩部にボタン状の把手	腹部・たたきのちかきめ、背部・たたきのちかきめ、口縁部、回転なで	良好	(Cウ)	
50	高坏	10.2	12.4		10.6	杯部・稜線2、基部に刺突文、透は2段3方(上切れ込み、下三角)	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A3)	
51	高坏	14.6	14.7		11.8	杯部・稜3、脚部、沈線1、透は1段3方、(三角)	外面・回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A3)	
52	甕	16.0	19.7	19.0			外面・はけめ、なで 内面・へら削り、はけめ	良好		土師器
53	坏蓋	13.0	3.5			1条沈線	外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	天井部にへら記号×
54	坏身	11.0	7.0	14.0			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
55	坏身	10.6		13.8			外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(A4)	口縁部のみ
56	坏蓋	13.1	4.5				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	

第67表　4区16号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
−1	大刀	43.2	29.3	3.2	2.6	0.6	0.6	目釘2本、柄の木質残存、茎・胴部はやや直線的で細くなる
−2	刀子	9.7(残)	6.8	1.0	0.7	0.2	0.2	茎尻は一文字 木質一部残存
−3	刀子	7.3(残)	2.3	1.2	0.9	0.3	0.3	木質残存
−4	刀子	4.1(残)	−	−	0.8	−	0.3	茎部の破片 木質残存
−5	鉄鏃	7.9	3.4	1.8	0.6	0.3	0.2	茎部が折れている
−6	鉄鏃	7.8(残)	5.6(残)	1.4	0.7	0.3	0.4	木質残存
−7	鉄鏃	6.5(残)	4.3	1.2	0.7	0.3	0.2	刀部先端一部欠、茎部欠
−8	鉄鏃	7.5(残)	2.1	0.8	0.4	0.2	0.2	茎部欠
−9	鉄鏃	6.5(残)	1.8	1.0	0.5	0.2	0.3	鏃身先端欠
−10	鉄鏃	3.7(残)	3.7(残)	0.9	−	0.3	−	鏃身部の破片
−11	鉄鏃	2.7(残)	2.0(残)	1.0	0.5	0.2	0.2	鏃身と箆被部の一部
−12	鉄鏃	6.7(残)	−	−	0.4	−	0.3	箆被部の一部
−13	鉄鏃	4.8(残)	−	−	0.4	−	0.3	箆被部の一部
−14	鉄鏃	5.2(残)	−	−	0.5	−	0.3	茎部 樹皮巻残存
−15	鉄鏃	4.0(残)	−	−	0.5	−	0.3	茎部 樹皮巻残存
−16	鉄鏃	4.4(残)	−	−	0.4	−	0.3	茎部 樹皮巻残存
−17	鉄鏃	4.0(残)	−	−	0.5	−	0.3	茎部 木質一部残存
−18	鉄鏃	1.3(残)	−	−	0.3	−	0.2	茎部先端付近 木質一部残存

第68表　4区16号横穴墓出土玉類観察表

(単位：mm)

番号	器種	材質	色調	長径	短径	孔径	備考
−19	勾玉	瑪瑙	淡橙色	32.2	19.5	1.4〜2.3	片面穿孔

第69表　4区16号横穴墓出土耳環観察表

（単位：mm）

番号	器　種	a	b	c	d	e	備　　考
−20	金環	24.6	27.7	14.8	6.7	6.8	錆多いが金箔が見える
−21	金環	24.0	26.9	14.4	5.9	7.8	金箔が見える
−22	金環	25.0	28.0	14.5	6.3	6.7	錆多いが金箔が見える

第70表　4区17号横穴墓出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	法量				形態上の特徴	調　　整	色調 焼成	分　類	備　　考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	坏蓋	14.5	5.6			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
2	坏身	12.5	5.1	15.5			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	底部にへら記号‖
3	坏蓋	13.2	5.2			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
4	坏身	11.7	4.8	14.5			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	やや不良	（A4）	
5	坏身	11.6	4.7	14.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	不良	（A4）	底部にへら記号/
6	坏身	13.1	4.2			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	天井部にへら記号×
7	坏身	11.4	4.2	14.0			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
8	坏身	12.2	4.5	14.7			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
9	坏蓋	13.0	4.8			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
10	坏身	11.0	4.2	14.2			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
11	坏蓋	14.8	5.1			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
12	坏身	11.0	4.0	13.6			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
13	坏身	11.6	3.7	14.3			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
14	坏身	11.2	4.1	13.7			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで静止なで	良好	（A4）	
15	坏蓋	13.4	4.7			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
16	坏身	11.5	4.0	14.2			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
17	坏蓋	13.6	4.6			2条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
18	坏身	11.6	4.9	14.7			外面・周辺削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
19	坏身	11.2	4.5				外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	底部板状工具によるなで
20	坏蓋	13.1	4.2			2条沈線	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
21	坏蓋	13.1	4.2			外面・2条沈線 内面・端部に浅い沈線1条	外面・周辺削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A6）	
22	坏蓋	10.8	3.9	13.5			外面・丁寧な回転へら削り、回転なで、内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
23	坏蓋	12.5	4.2			外面・2条沈線 内面・端部に浅い沈線1条	外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A4）	
24	坏蓋	11.8	4.4			外面・2条沈線 内面・端部に浅い沈線1条	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A5）	
25	坏身	11.3	3.8	13.6			外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A5）	
26	坏蓋	13.2	4.1			外面・2条沈線 内面・端部に浅い沈線1条	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A5）	
27	坏蓋	12.4	3.7			1条沈線	外面・荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	（A5）	
28	坏身	11.5	4.2	13.4			外面・周辺削り、回転なで、内面・回転なで	良好	（A5）	

番号	器種	法量 口径	器高	胴最大径	脚径	形態上の特徴	調整	色調 焼成	分類	備考
29	坏蓋	15.5	5.6				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
30	坏蓋	11.9	3.9				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	天井部にへら記号×
31	坏身	11.6	4.1	14.1			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	底部に板状工具によるなで
32	坏身	11.0	4.2	13.4			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	底部にへら記号×
33	坏身	11.8	4.2	14.1			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
34	坏蓋	11.3	3.8			1条沈線	外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A8)	
35	坏蓋	11.2	3.9				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	天井部にへら記号×
36	坏身	10.0	4.0	12.5			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	底部内面にへら記号×
37	坏身	10.5	4.0	13.2			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	底部にへら記号×
38	平瓶	7.5	16.6	15.8		肩部にボタン状の把手一対	外面・頸部・回転なで胴部かきめ、回転へら削り、内面・回転なで	良好	(C2)	
39	提瓶	7.0	12.9	9.5 7.1		肩部に鍵状の把手一対	腹部・回転へら削り、背部・かきめ	良好	(B3)	ミニチュア
40	広口壺	7.3	10.4	10.5			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
41	広口壺	9.7	12.6	16.1			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
42	直口壺	7.4	8.7	10.1			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
43	直口壺	9.4	10.2	11.8			外面・回転なで、回転へら削り 内面・回転なで、静止なで	良好		
44	甕	14.0	16.2	10.0		口縁部・波状文、頸部・波状文、沈線1条、胴部・刺突文、沈線2条	外面・回転なで 内面・回転なで	良好	(A5)	
45	小甕	17.6	29.0	27.5			口縁部・回転なで、胴外面・格子状のたたきのちかきめ、内部・同心円状たたき	良好		
46	壺	9.6	12.3	12.3			外面・風化により調整不明 内面・胴部へら削り、頸部横なで	良好		土師器
47	長頸壺	—	—	—	10		外面・回転なで、回転へら削り内面・回転なで、へら状工具による回転なで	良好		胴部のみ
48	坏身	12.1	4.6	14.4			外面・やや荒い削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A4)	
49	坏蓋	13.8	4.2			2条沈線	外面・周辺削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A5)	
50	坏蓋	11.8	4.0				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
51	坏蓋	12.4	4.8				外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
52	坏身	12.0	4.3	14.0			外面・へら切り後なで、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	
53	坏身	10.9	3.7	13.2			外面・回転へら削り、回転なで 内面・回転なで、静止なで	良好	(A7)	

第71表　4区17号横穴墓出土鉄器観察表

(単位：cm)

番号	器種	全長	頭部長(刃部)	刃幅	頸部	刃部厚	頸厚	備考
−1	大刀	71.8	57.2	3.3	2.7	0.6	0.6	さやと柄の木質一部残存、片関でやや深く切れ込み、茎尻にかけてやや幅をせばめる、一文字尻
−2	直刀	28.0	20.5	2.3	1.6	0.6	0.7	柄の木質一部残存、卵形の鋲、一文字尻
−3	刀子	8.3(残)	1.7	1.5	0.5	0.3	0.2	茎部と刀身部 木質一部残存
−4	刀子	9.2(残)	4.2	0.8	0.2	0.3	0.2	木質一部残存
−5	鉄鏃	11.3(残)	1.4	0.9	0.5	0.3	0.2	木質一部残存
−6	鉄鏃	7.6(残)	5.5	1.3	0.7	0.3	0.2	2個体が結合、木質・樹皮巻残存
−7	鉄鏃	13.0(残)	5.8	1.3	0.6	0.2	0.3	木質・樹皮巻残存
−8	鉄鏃	10.8	5.8	1.2	0.7	0.3	0.2	完形

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	刃　幅	頸　部	刃部厚	頸　厚	備　考
−9	鉄鏃	8.5(残)	6.0	1.4	0.7	0.3	0.2	茎部欠
−10	鉄鏃	8.9(残)	5.8(残)	1.4	0.7	0.2	0.2	鏃身部先端部欠 茎部欠
−11	鉄鏃	10.0(残)	6.8	2.2	0.7	0.4	0.2	矢柄の木質残存
−12	鉄鏃	11.6(残)	7.3(残)	2.5	0.7	0.4	0.2	矢柄の木質・樹皮巻残存
−13	鉄鏃	7.3(残)	7.3(残)	2.2	0.7	0.4	0.3	鏃身部のみ
−14	鉄鏃	3.5(残)	−	−	0.4	−	0.2	矢柄の木質・樹皮巻残存
−15	鉄鏃	4.0(残)	−	−	0.4	−	0.2	矢柄の木質・樹皮巻残存

第72表　４区17号横穴墓出土耳環観察表

（単位：mm）

番号	器　種	a	b	c	d	e	備　考
−16	金環	24.4	26.8	14.8	5.6	8.1	全体的に錆、一部金箔が見える

第73表　４区ＳＫ０２出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	頭部幅	頸　部	頭部厚	頸　厚	備　考
−1	鉄釘	7.4	−	−	0.5	−	0.4	完形で骨片の付着あり
−2	鉄釘	6.4(残)	−	−	0.5	−	0.4	先端欠
−3	鉄釘	5.6	−	−	0.5	−	0.4	完形
−4	鉄釘	5.9	−	−	0.4	−	0.3	錆多く、頭部は良くわからない
−5	鉄釘	5.1	−	−	0.5	−	0.4	完形
−6	鉄釘	4.5(残)	−	−	0.6	−	0.5	先端欠
−7	鉄釘	5.4	−	−	0.5	−	0.4	
−8	鉄釘	5.1(残)	−	−	0.5	−	0.4	先端欠
−9	鉄釘	5.3(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠
−10	鉄釘	5.5(残)	−	−	0.5	−	0.4	先端欠
−11	鉄釘	6.4	−	−	0.5	−	0.4	Ｌ字形に折れ曲がる
−12	鉄釘	3.7(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠
−13	鉄釘	3.9(残)	−	−	0.5	−	0.4	錆多く頭部はよくわからない
−14	鉄釘	3.1(残)	−	−	0.5	−	0.4	先端欠
−15	鉄釘	3.7(残)	−	−	0.5	−	0.4	先端欠
−16	鉄釘	4.2(残)	−	−	0.4	−	0.3	木質らしきもの付着
−17	鉄釘	3.6(残)	−	−	0.3	−	0.3	先端欠
−18	鉄釘	2.8(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠
−19	鉄釘	2.5(残)	−	−	0.4	−	0.1	先端欠
−20	鉄釘	2.3(残)	−	−	0.4	−	0.2	先端欠
−21	鉄釘	2.5(残)	−	−	0.6	−	0.3	22と付着、先端欠

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	刃　幅	頸　部	刃部厚	頸　厚	備　考
−22	鉄釘	1.5(残)	−	−	0.3	−	0.3	先端欠
−23	鉄釘	2.1(残)	−	−	0.5	−	0.4	先端欠
−24	鉄釘	2.3(残)	−	−	0.4	−	0.3	頭部・先端欠
−25	鉄釘	4.0(残)	−	−	0.4	−	0.3	頭部・先端欠 先端折れ曲がる
−26	鉄釘	3.0(残)	−	−	0.3	−	0.3	頭部・先端欠 先端折れ曲がる
−27	鉄釘	1.6(残)	−	−	0.2	−	0.2	頭部欠 先端部木炭付着
−28	鉄釘	2.4(残)	−	−	0.2	−	0.2	先端のみ
−29	鉄釘	2.2(残)	−	−	0.2	−	0.2	先端のみ
−30	鉄釘	1.5(残)	−	−	0.2	−	0.2	先端のみ

第74表　４区ＳＫ０２、ＳＫ０３出土土器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	法量				形態上の特徴	調　整	色調 焼成	分　類	備　考
		口径	器高	胴最大径	脚径					
1	皿 土師器	11.0	2.3		4.8		外面・体部よこなで、底部なで 内面・体部よこなで、底部なで	良好		体部に指頭圧痕
2	皿 土師器	11.6					外面・回転なで 内面・回転なで	良好		
3	皿 土師器	8.4	1.9				外面・内面とも風化により調整不明	良好		
4	皿 土師器	10.0	1.7		6.0		外面・内面とも風化により調整不明	良好		
5	皿 土師器	8.2	−		−		外面・回転なで 内面・回転なで	良好		

第75表　４区ＳＫ０３出土鉄器観察表

（単位：cm）

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	頭部幅	頸　部	頭部厚	頸　厚	備　考
−1	鉄釘	5.8(残)	−	−	0.7	−	0.4	先端欠 木質が付着
−2	鉄釘	4.7(残)	−	−	0.6	−	0.4	先端欠 木質が付着
−3	鉄釘	5.0(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠 木質が付着
−4	鉄釘	3.1(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠 木質が付着
−5	鉄釘	4.2	−	−	0.4	−	0.3	完形 木質が全面付着
−6	鉄釘	3.4(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠 同一面に木質が付着
−7	鉄釘	3.9	−	−	0.4	−	0.3	完形、部位により木質の付着面が異なる
−8	鉄釘	2.6(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠、部位により木質の付着面が異なる
−9	鉄釘	4.0	−	−	0.5	−	0.3	完形、部位により木質の付着面が異なる
−10	鉄釘	3.9	−	−	0.5	−	0.4	完形、木質は同一面に付着
−11	鉄釘	3.3(残)	−	−	0.3	−	0.4	先端欠、部位により木質の付着面が異なる
−12	鉄釘	4.0	−	−	0.4	−	0.4	完形、部位により木質の付着面が異なる
−13	鉄釘	3.4(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠、同一面に木質が付着
−14	鉄釘	3.1(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠、部位により木質の付着面が異なる
−15	鉄釘	3.1(残)	−	−	0.3	−	0.3	先端欠、同一面に木質が付着

番号	器　種	全　長	頭部長（刃部）	刃　幅	頸　部	刃部厚	頚　厚	備　　考
−16	鉄釘	2.3(残)	−	−	0.4	−	0.3	先端欠、部位により木質の付着面が異なる
−17	鉄釘	2.6(残)	−	−	0.5	−	0.4	先端欠、部位により木質の付着面が異なる
−18	鉄釘	2.0(残)	−	−	0.4	−	0.3	頭部分付近 木質は側面に付着
−19	鉄釘	2.7(残)	−	−	0.6	−	0.4	先端欠 木質は側面に付着
−20	鉄釘	2.5(残)	−	−	0.4	−	0.3	頭部欠 木質は同一面に付着
−21	鉄釘	2.9(残)	−	−	0.5	−	0.5	頭部欠 木質は同一面に付着
−22	鉄釘	3.5(残)	−	−	0.4	−	0.3	頭部欠 木質は同一面に付着

第４節　５区の調査

概　　要　本調査区は、標高35mを最高点とする周辺で最も高い尾根である。調査当初の地形測量の結果から、東西に主軸をとり、西側に後円部を作りだした全長50m程の前方後円墳の存在する可能性が考えられ、そのことから、調査区をその周辺部も合わせて設定したものである。

調査は、前方後円墳と推定した高まりの東西方向に中軸を設定し、それを基準に、５mごとにメッシュを組み、小地区を設定し、出土遺物で現位置を留めないものは、その小地区で取り上げていった。また、そのメッシュに沿って、土層観察用のベルトを任意に残しながら人力によって調査をおこなった。

以上の方法で調査をおこなった結果、前方後円墳と考えたものは、２基の古墳であることが判明し、そして、総数で10基の古墳を検出した。また、その周辺の尾根及び斜面から、建物跡、横穴墓、土壙を検出した。なお、古墳は、墳丘上に主体部を持たないものが、殆どであり、それらは、横穴墓の後背墳丘として推定されるものであった。

以下、遺構ごとに詳細を述べたいが、特に古墳については、検出順に番号を付けており、立地とは無関係な点が多く記述に不都合な面が多いことから、番号順に記述を行わず、原則として、東側に立地するものから順に記述している。

(1)古　墳

［１号墳］（第175、176、179図）

調査区の北西端で検出し、標高31mに位置している。ちょうど尾根が北東側に延びていく部分にあたり、ここから先は、やや傾斜が付くところである。また、調査前には、平坦面として認識していたものである。なお、調査によって、墳丘の盛土を確認したことから、古墳として考えたものである。

墳丘は、土層観察によって盛土を25㎝程施したものと考えられるが、ほとんど流失によって失われたものと考えられる。特に南西側は、盛土は認められなかった。

北側で確認した盛土は、旧表土上に地山礫を含む土を盛ったもので、墳丘中心部分から３mのところで、無くなっており、その部分の地山は、平坦に加工されている。この平坦面は幅１m程で、ここが墳裾と考えられるものであり、弧状を呈し、北側部分だけで確認している。平坦面の形状から墳形は、円形を呈しているものと判断した。また、南側では溝を検出したが、これは、後述する７号墳の周溝である。

また、西側には幅約145㎝の溝が北東から南西の方向に走り、周溝状を呈している。これは、床面から砂利状のものが出土しており、かつ、北側の平坦面を切るように認められることから、この古墳に伴う可能性は低く、古道の可能性が考えられる。

なお、墳丘頂部を精査したが、主体部は検出しなかった。土砂の流出のために失われた可能性が考えられる。

以上の検討結果から、改変が著しく現状を留めていない部分が多いが、古墳の規模は、一辺６m程の円墳と推定され、高さは0.6m以上をを測るものであった思われる。そして、地山部分をテラス状に整形した後に盛土によって墳丘を築成したものと推定される。

第175図　5区調査前測量図（S＝1：200）

［2 号墳］

調査区の東側に存在し、標高33mに立地している。調査前（第175図）は、北東側と南東側に平坦面が見られ、古墳の存在を想定されるものであった。また、西側の 3 号墳の高まりと同一のものとして、全長50m程の前方後円墳の前方部として認識していたものである。調査は、メッシュに沿って土層観察用のベルトを残しながら表土の除去を最初に行った。その後、主軸沿いで任意にサブトレンチを入れ、地山まで確認する作業をおこなった。この段階において、東側と西側で、溝を検出し、また盛土の一部を確認した。よって、全長50mの前方後円墳の可能性は否定されたが、全長21m程の盛土をもつ前方後円または、前方後方形の墳丘の存在が明らかになった。また、須恵器甕片が多数出土し、1 区 2 号墳と類似した状況であったことから、横穴墓に伴う可能性が高まった。そこで、南側の斜面（6 区）も表土の除去を行い墓道の一部を検出した。

以上の調査結果をふまえ、土層観察用のベルトを主軸沿いの縦断土層（A－A’）と前方部（C－C’）、後方部（G－G’）、くびれ部（D－D’）に対応する部分の横断土層を残して、墳丘部分の調査をおこなった。また、出土する須恵器甕片については、その破片ごとに、出土位置を記録しながら取り上げることにした。以下その詳細について述べたい。

周　　溝　東側と西側で検出し、東側のものは、丘陵尾根を切断した大規模な区画をおこなったもので、西側のものは、浅いテラスに近いものである。

西側の切断面は、上端幅7.5m、底面幅 3 m、長さ11mで、深さ1.5m程掘削したものと考えられる。覆土（第177図）は 4 層に分層でき、下層の 2 層には、多数の須恵器甕片が出土している。

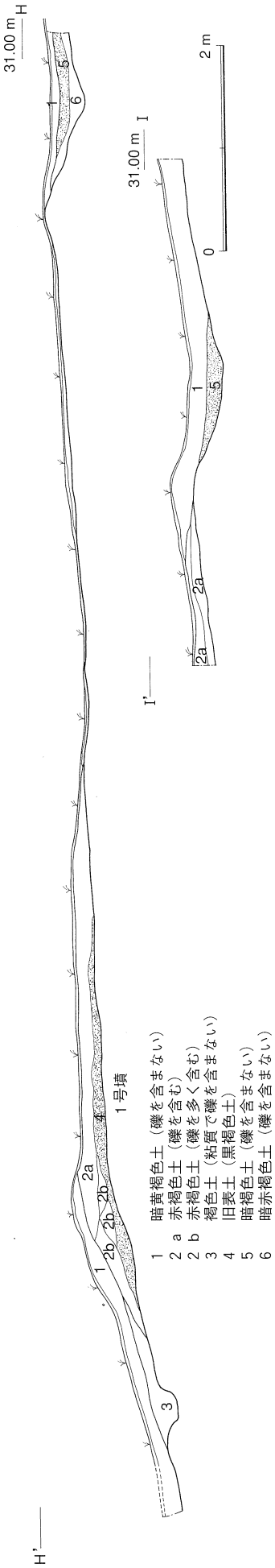
東側の溝は、幅1.5m、深さ0.3m程のもので、長さ 4 m程まで確認している。覆土（2 層）からは、多数の須恵器甕片が出土している。

墳丘盛土（第177図）　墳丘は、基本的に地山を削り出し、さらにその削った土を盛り上げることで築成している。盛土の状況については、各土層ごとに説明したい。

（縦断土層A－A’）

地山上の旧表土は、後方部からくびれ部付近の頂部にかけて見られ、この部分は、地山を成形すること無しにその上面に盛土を施している可能性が考えられる。ただし、後方部の端部付近の傾斜が急になる地点では、旧表土が見られないことから、この部分は地山を削り、凡その形を作りだし、溝を掘っていることが分かる。

旧表土の見られない、くびれ部から前方部付近は、褐色の砂質土（17



第176図　5区1号墳墳丘土層実測図（S＝1：60）

層）が見られ、この部分は、墳丘築成以前に存在した 6 号墳の周溝にあたり、その覆土と考えられるものである。くびれ部及び前方部は、ある程度地山を平坦に加工したものと考えられる。

盛土は、後方部から前方部にかけて全面に及ぶものであるが、縦断土層からその盛土の順番が分かる。まず、後方部付近に赤褐色の土（12層）を盛る。この土層の中には、暗褐色の単位が所々見られ、赤褐色土とモザイク状になるものである。この土は、後方部だけに特徴的に見られる土層である。そして、それを覆うように淡赤褐色土（13層）が盛られている。後方部に土が盛られた後に、前方部からくびれ部にかけて黄褐色土（7 層）が盛られる。この段階で前方部の端部は殆ど作られ、また前方部中央部は、凹む形状になる。さらに、橙褐色土（5 層）が同様に盛られ、その後に、凹みの中に充填するように黄褐色土（3 層）が盛られ、墳丘は、完成している。

以上縦断土層から推定するに、後方部－後方部端部－くびれ部－前方部の順に墳丘は築成されていったものと推測される。

（後方部横断土層Ｇ－Ｇ’）

縦断土層でも確認したように頂部に旧表土が見られる。また、東側と西側のちょうど傾斜が急になる部分では見られず、この部分は地山を加工されていることが分かる。特に東側では、テラス状に平坦面を作りだし、やや溝状に凹み暗褐色（2 層）の堆積土が存在する。また、この 2 層からは、多数の須恵器甕片が出土している。一方、西側部分は、旧表土の消失部分から地山は急斜面となり、そのまま 6 区 7 号横穴墓の前庭部に繋がるものである。

さて、墳丘盛土は、まず西側の端部付近に黒色土（15層）を盛った後、淡赤褐色土（14層）を盛り、東側の地表面とほぼ水平にしている。その後、12層によって全体を覆い完成させている。なお、東側旧表土下にて凹みを検出し、旧表土に類似した覆土（18層）を検出している。これは、弥生後期の土壙墓と推定されるもので、旧表土付近で石と弥生土器（甕）が出土している。

（くびれ部横断土層Ｆ－Ｆ’）

縦断土層で確認していない旧表土を東端と西端で検出している。この上面のレベルは、ほぼ水平であることから、この高さまで地山を加工したものと考えられる。また、東端では、地山を加工し、テラス状に平坦面を作り出し、土の堆積（2 層）が認められる。この 2 層からは多数の須恵器甕片が出土している。なお、西側部分でも若干平坦になる部分が存在し、この部分で旧表土が無くなることから、墳端と考えた。

墳丘盛土は、西側に橙褐色土（8 層）を盛り水平に整えた後、後方部端部から続く黄褐色土（7 層）を盛り、さらに赤褐色土（5 層）で覆い完成させている。なお、東端で確認された16層及び17層は、6 号墳と 8 号墳の溝にそれぞれ対応し、その溝内の堆積土と判断される。

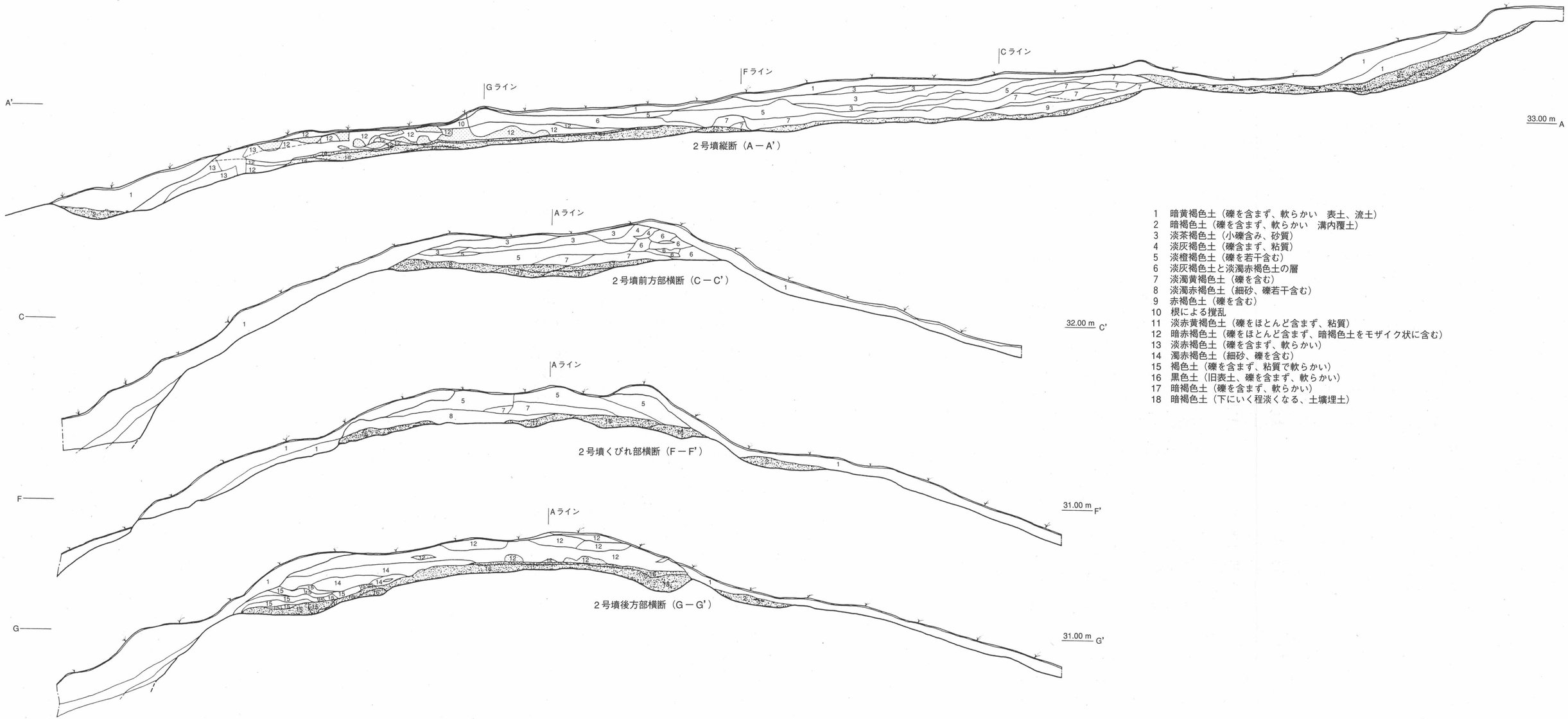
（前方部横断土層Ｃ－Ｃ’）

地山を頂部で平坦に加工し、東側は削っている。東側では傾斜が緩やかになる部分が存在し、そこが墳端であると考えた。なお、西側では平坦な部分は検出していない。

墳丘盛土は、黄褐色土（7 層）を西側を主として施し、ほぼ水平にし、端部付近をほぼ作った後、東端部分に土塁状に褐色土（6 層）を盛り、そこに、橙褐色土（5 層）を充填し、さらに、東端部に土塁状に褐色土（3 層）を盛り、黄褐色土を充填して完成させている。

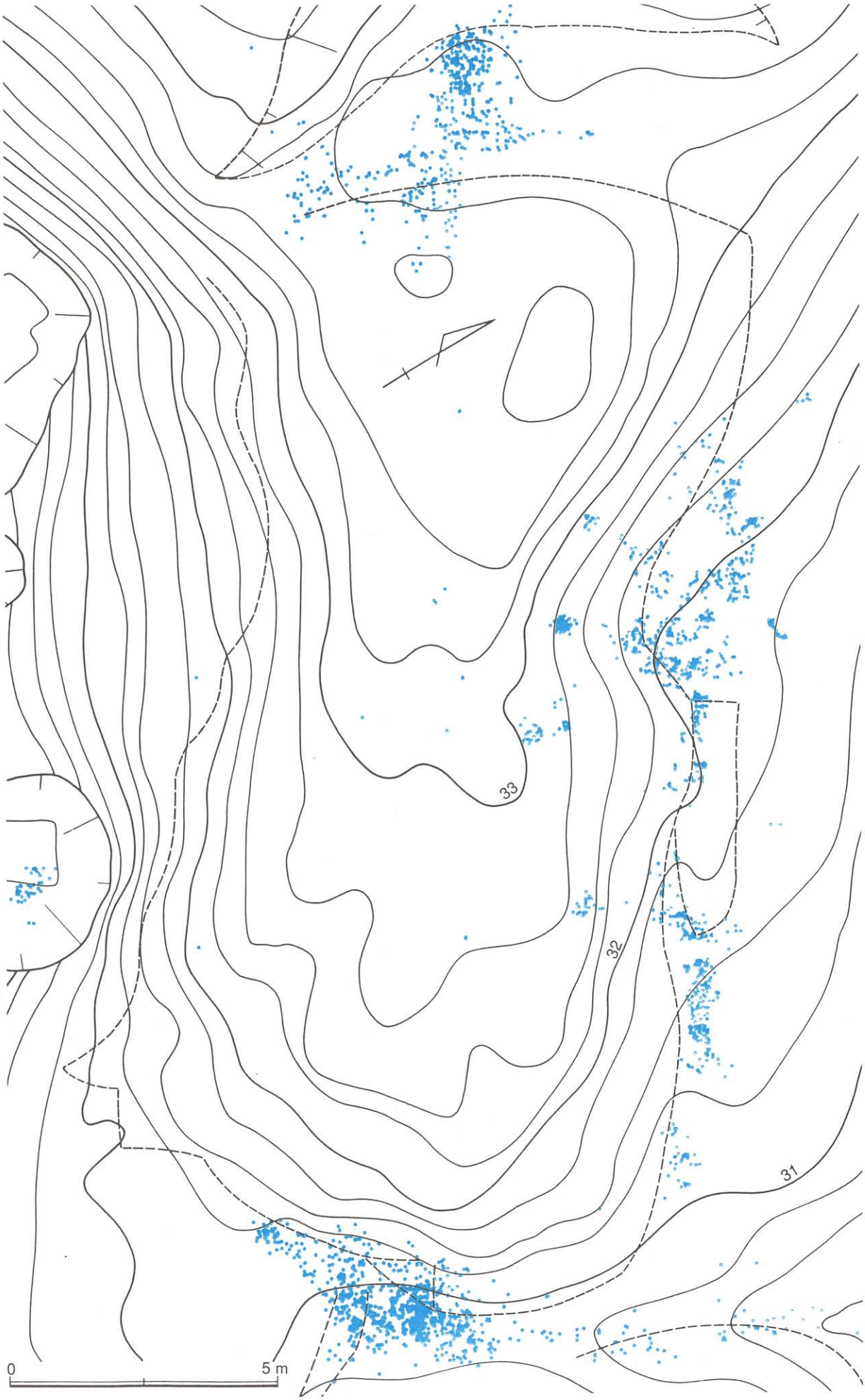
（墳丘築成過程）

以上の各土層の観察結果をもとに墳丘の築成過程を復元すると、以下の通りである。



1　暗黄褐色土（礫を含まず、軟らかい　表土、流土）
2　暗褐色土（礫を含まず、軟らかい　溝内覆土）
3　淡茶褐色土（小礫含み、砂質）
4　淡灰褐色土（礫含まず、粘質）
5　淡橙褐色土（礫を若干含む）
6　淡灰褐色土と淡濁赤褐色土の層
7　淡濁黄褐色土（礫を含む）
8　淡濁赤褐色土（細砂、礫若干含む）
9　赤褐色土（礫を含む）
10　根による撹乱
11　淡赤黄褐色土（礫をほとんど含まず、粘質）
12　暗赤褐色土（礫をほとんど含まず、暗褐色土をモザイク状に含む）
13　淡赤褐色土（礫を含まず、軟らかい）
14　濁赤褐色土（細砂、礫を含む）
15　褐色土（礫を含まず、粘質で軟らかい）
16　黒色土（旧表土、礫を含まず、軟らかい）
17　暗褐色土（礫を含まず、軟らかい）
18　暗褐色土（下にいく程淡くなる、土壙埋土）

第177図　5区2号墳墳丘土層実測図（S＝1：60）



第178図　5区2号墳遺物出土状況実測図（S＝1：100）

1、地山を加工し、形を整える。(ただし、後方部頂部は殆ど自然地形を利用する。)
2、後方部に盛土(15層、14層、12層の順に)を施し、完成させる。
3、くびれ部〜前方部にかけて盛土(8層、7層)を施す。(この段階で前方部端部はほぼ完成し、この部分は、土塁状の高まりを呈している。)
4、前方部東端に7層を盛る。(この段階で土塁状の高まりが前方部東端にできる。)
5、過程の3、4でできた土塁状の高まりの中の凹みに盛土(3層)を若干充填する。(この段階で、くびれ部は完成し、前方部の南側は凹みが残る。)
6、最後に前方部東端に土塁状に盛土(4層)し、凹みに盛土(3層)を充填し、前方部を完成させる。

墳丘規模(第179図) 土層観察等で得られた結果から、本古墳は、尾根の高い部分に前方部を造りだす前方後方墳で、長軸をN−53°−Eにとるものと考えられる。規模については、以下の通りである。

全長21m 後方部−長径12m、短径12m、高さ1.6m くびれ部−幅8m、高さ1.4m
前方部−長さ9m、端部幅8m

遺物出土状況(第178図) 墳丘の周辺からは、多数の須恵器甕片が出土している。特に顕著な部分は、前方部溝、後方部溝、北側の墳裾部分の3か所である。なお、調査当初に位置を記録しないで取り上げたものが存在し、そのために、空白の見られる部分が存在する。基本的に、ドットの見られる部分は、途切れることなく墳丘裾に沿って出土し、西側の斜面部分からは出土していない。また、調査時には、その分布から前方後方墳を想定させるものであり、当古墳の墳形を前方後方墳とした理由の一つでもある。

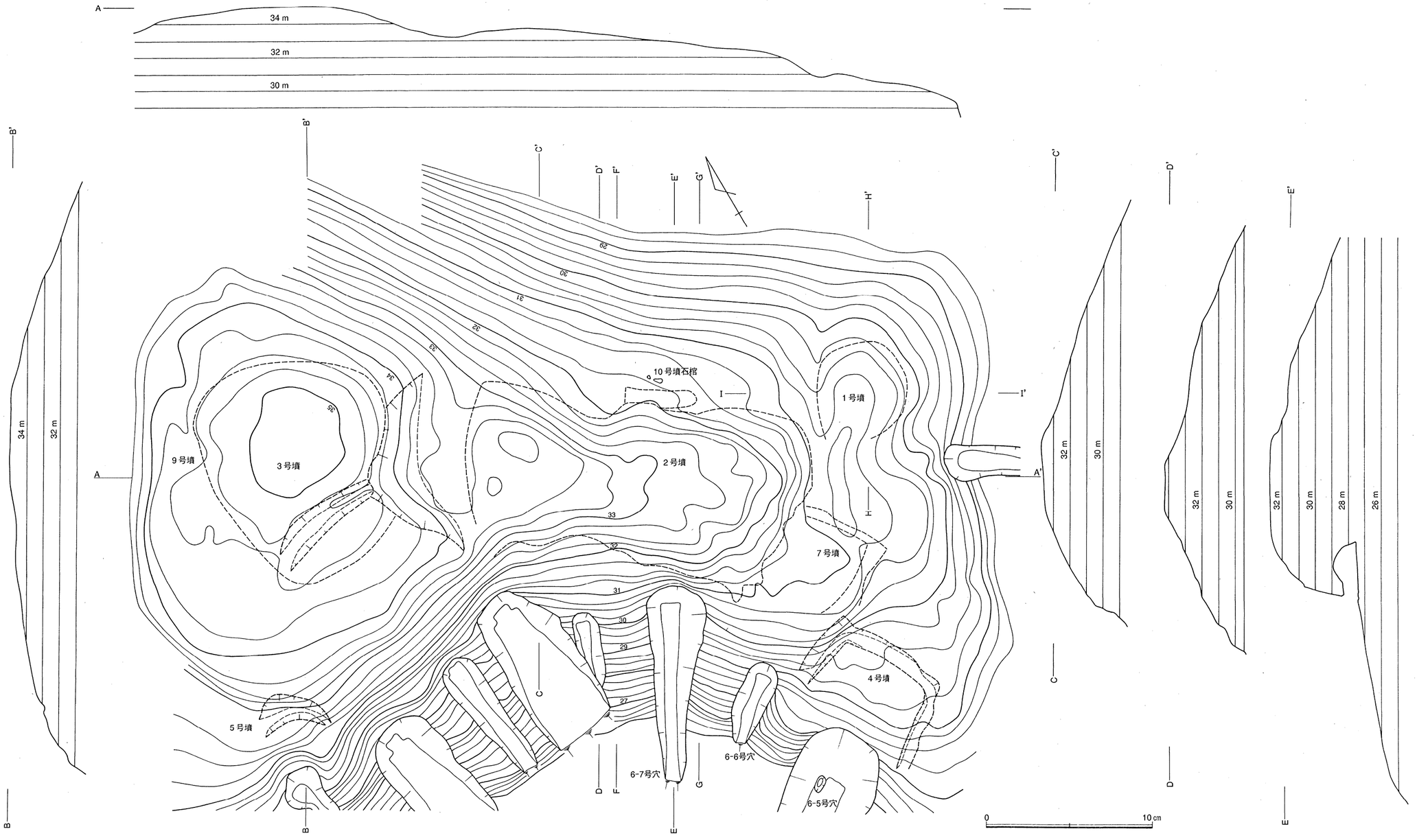
主体部 墳丘調査時に、主体部と考えられるものは、一切検出しなかった。後方部の墳丘が流失したために失われている可能性が考えられるが、以下の点から横穴墓を主体部として考えている。

1、墳丘の立地が尾根頂部より横穴墓の存在する斜面(6区)に偏ること。
2、墳丘裾から甕片が散布されている状況が、横穴墓の前庭部・墓道との様相と類似していること。
3、墳丘裾出土の甕片と横穴墓出土の甕片が接合関係にあること。
4、後方部直下に6区7号横穴墓が存在し、後方部中央に向かって掘削されていること。

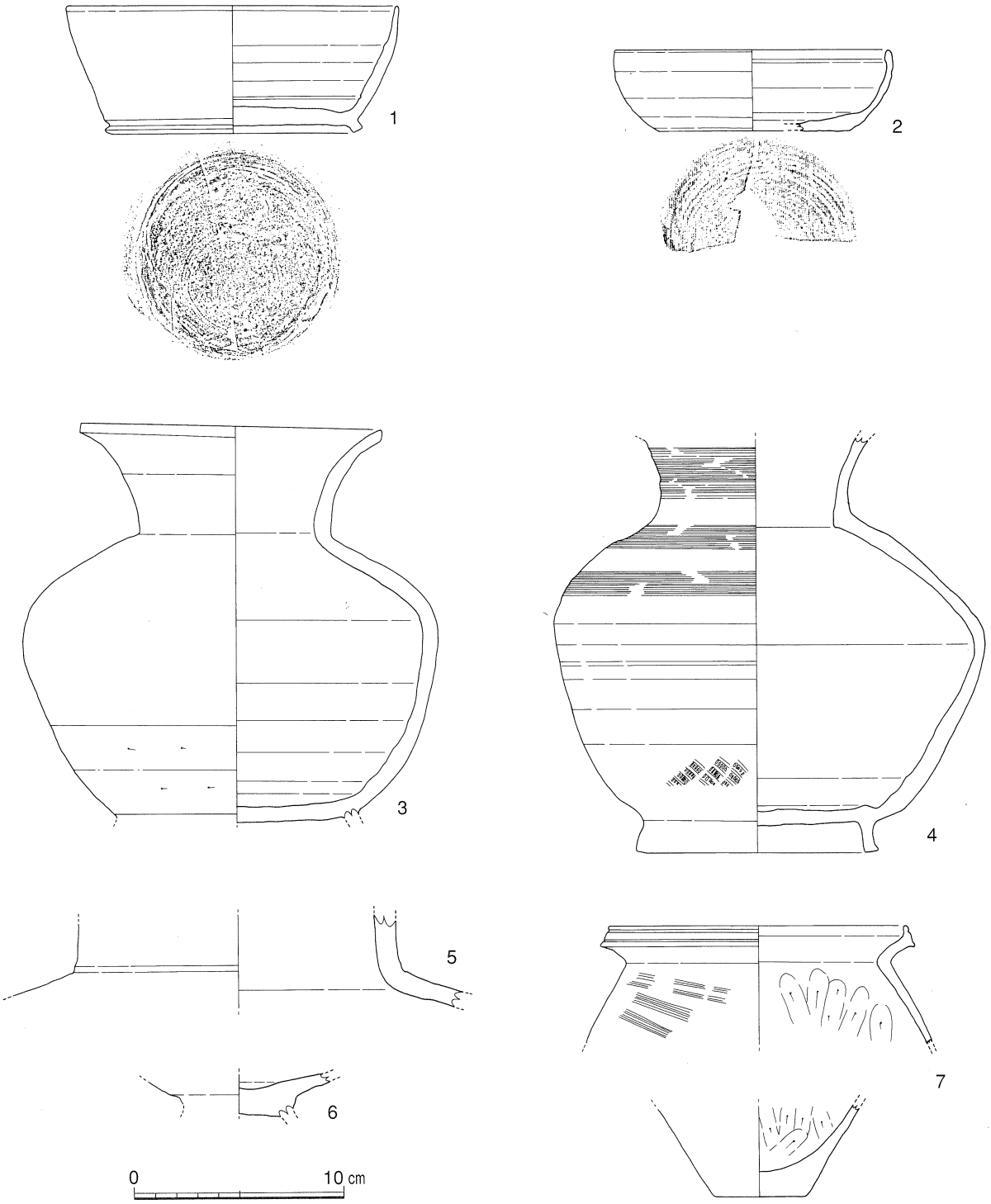
以上の4点及び、類似した墳丘が1区と4区でも検出していることから、本古墳は、6区7号横穴墓を主体部とするものに、ほぼ間違えないものと考えられる。

出土遺物(第180図) 墳丘裾から出土した遺物には、須恵器甕(第8節を参照)の外に須恵器では坏類(1、2)と壺類(3、4)、土師器では、甕(5)、坏(6)が存在する。時期的には、1、2は、8世紀代、3、4は7世紀代、6は、12世紀代であり、時期幅をもつものである。また、遺物の中には、周辺の遺構で出土するものと同時期のものも存在し、その遺物が混在している可能性が考えられる。よって、墳丘に伴う遺物としては、3、4のみが可能性が高い。

時期 墳丘裾から出土する須恵器は7世紀代であり、主体部と考えられる6区7号横穴墓は、6世紀後半である。時期が前後している点が、問題であるが、墳丘出土の甕には、時期が前後するものが含まれている可能性が高く、その破砕散布の時期が何回か存在する可能性がある。よって、古墳の時期としては、問題とすべき点もあるが、6世紀後半代が考えられる。



第179図　5区調査後測量図（2号墳検出時）（S＝1：200）



第180図　5区2号墳出土土器実測図（S＝1：3）

［4 号墳］（第181、182図）

調査区の南端にあたる尾根の標高30m付近で検出した古墳である。立地は、やや緩やかに降る尾根頂部の主軸より南西斜面側（6 区）に寄っているものである。周溝のみを検出したもので、盛土、主体部等は確認しなかった。

周溝は、古墳の北東辺、北西辺、南東辺の各 3 辺をコ字形に廻るもので、斜面側（6 区）では検出していない。規模は、上端で幅7.4m、床面で幅5.6mを測り、深いところで地山を0.5m程掘り込んだものである。また、壁面及び底面には、丸刃の工具によるものと推定される加工の痕が認められた。

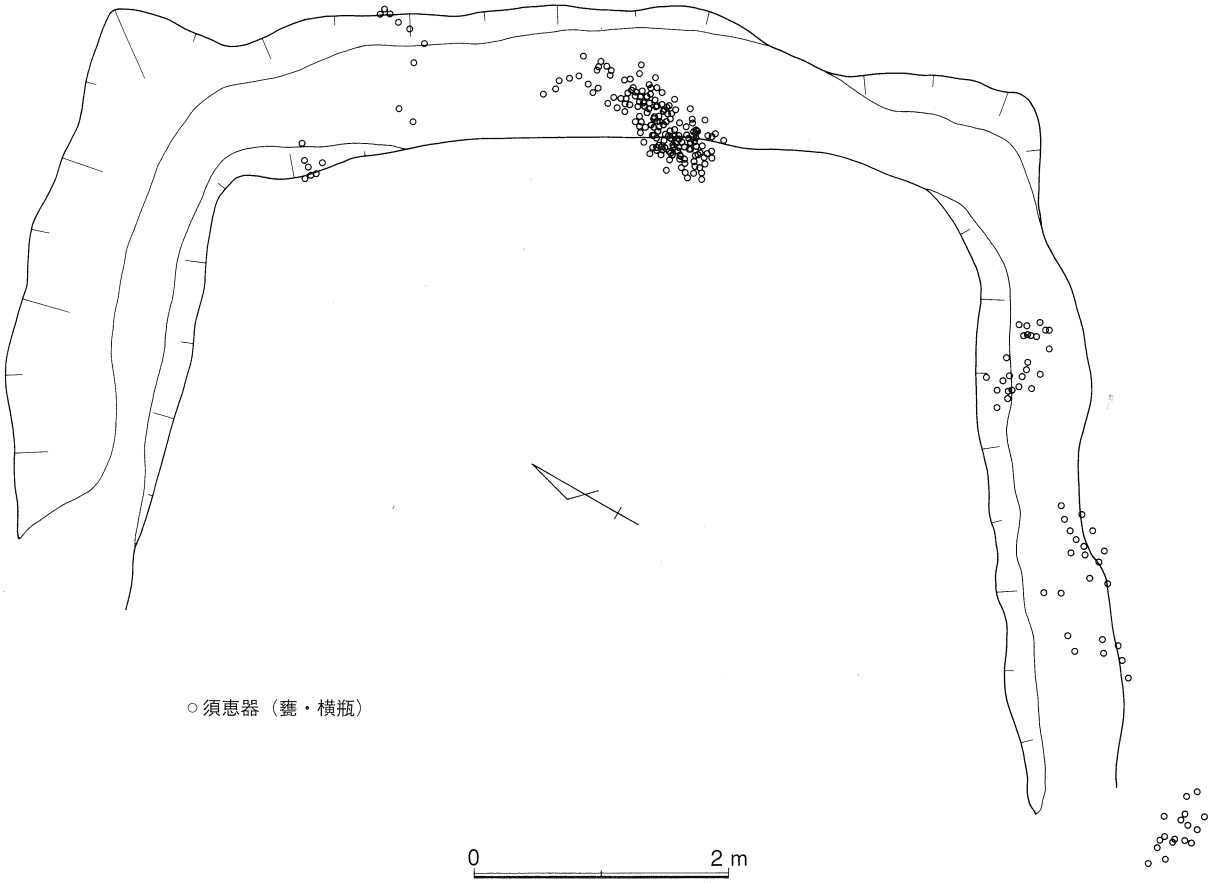
周溝内には、暗褐色の砂質土が堆積し、そこから須恵器の甕と横瓶の破片が出土している。破片は、散布された状態で出土し、溝の周辺からも一部出土している。

コ字形の周溝で区画された墳丘部分は、表土下10㎝程で地山に達しており、盛土の存在は認められなかった。本来、盛土が施されたものが、流失している可能性も考えられるが、現状では不明である。

墳丘の規模は、現況で、北東辺で 6 m、北西辺で3.5m、南東辺で 5 mを測る。ただし、北西辺は、本来もう少し長かったものと考えられる。以上のことから本古墳は、長径 6 m×短径 5 mの方形の墳丘の古墳と考えることができる。

主体部は、墳丘部分からは検出しなかった。主体部は、土砂の流失で失われている可能性も考えられるが、2 号墳と同様の横穴墓を主体部とするものとして考えた。その理由として、墳丘が斜面側に片寄った位置に築かれている点、周溝から須恵器片が出土している点、下方斜面に墳丘中軸にほぼ沿って 6 区 5 号横穴墓が存在する点が挙げられる。

以上の検討結果から、本古墳は横穴墓を主体部とする所謂「後背墳丘」として考えることができ、築造時期も 6 区 5 号横穴墓と同一の 7 世紀前半と推定される。



第181図　5区4号墳遺物出土状況実測図（S＝1：60）

第182図　5区調査後測量図（2号墳墳丘盛土除去後）（S＝1：200）